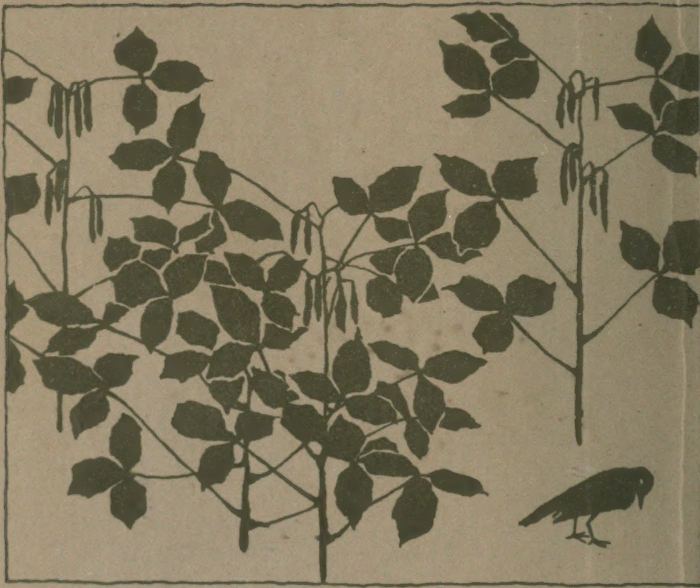




明治四十五年七月十一日印刷
明治四十五年七月十四日發行

益軒十訓上卷

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎
印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店
大賣捌所　東京市神田區裏神保町一番地　三省堂書店
同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

ロ

ワ

益軒十訓上卷索引 終

チ

ス

セ

シ

サ

益軒十訓上卷索引

（語句は凡て發音に從ひ五十音順に排列す）

寶永八年―此年正德と改元

一自信とは、自ら道を信ずることあつくして、其守ること堅固なるを云ふ。たとひ世の人こぞりて我を譽むるとも、我に善なくんば、喜ぶべからず。世の人こぞりて毀るとも、我にあやまり無くんば、憂ふべからず。故に、淮南子に、自ら信ずる者は、誹譽を以て遷るべからずといへり。いにしへの聖賢も、小人の誹をまぬかれ給はず。今の人、衆人の誹をおそれ憂ふべからず。然れども、小人の忌憚ることなき者は、又世人のそしりをかへりみず。是君子の自ら信ずるとは、同日の談にあらず。

寶永八辛卯年初春日

筑前州　益軒　貝原篤信撰

信則人任―論語堯曰篇に、寛なれば則ち衆を得、信なれば則ち民任す、敏なれば則ち功有り、公なれば則ち説ぶ

王つひに敵のために殺されぬ。是民に信を失へるなり。

一孔子曰、信則人任。信實にして、言に僞なければ、一たび約したること、其首尾たがはず。故に人たのもしく思ひて、打任せて疑はず。是人任するなり。もし信ならざれば、約ちがひて、其いへる事、朝夕にかはりて、たのもしげなし。何ぞ任せんや。

一凡君の、臣にまじはり、國人にまじはり、朋友の相まじはる、吏人の民に對する、皆信あるべし。信なければ、人の交の道たえて行はれず。たのみ無ければなり。

一道を信ずる志は、專一にして厚かるべし。厚からざれば、彼方此方に志うつりて、道を守ること堅固ならず。得る事あれども、必失ふ。然れば、信なければ、初道を好むといへども、終をたもちがたく、巧言にまよひて、邪道におち入りやすし。誠之者、人之道也。誠之之道は、道を信ずること篤きにあり。道を信ずること篤ければ、行之果す。果すとは行ひとぐるなり。行之果せば、守之固しとは、道を守ること堅固にして、失はざるなり。道を信ずること篤からざれは、道行はれず。利欲にひかれ、外物にうつりて、道を守ること堅固ならず。道を信ぜずして、守ること堅固ならずば、萬の才能ありとも、見るに足らず。是學者の、重んずべき所なり。

子路無宿諾—論語顔淵篇に、子曰く、片言以て獄を折むべき者は其れ由か、子路宿諾無し

魏の文侯—本文の事、劉向の説苑に出づ、魏は今の河南開封府の地也

一子路無宿諾とは、一たび行はんと心にうけごひたる事を、延引せず、すみやかに行はれしとなり。是信ある所なり。

一信は心に誠あるなり。心に誠あれば、言行の上にあらはる。言は行をかへりみていひ、行は言をかへりみて行ふ。是言行共に信あるなり。もし身に行はざる事を口にいひ、口に言ふ事を身に行はざるは、是言行共に信なきなり。言ふ事は易く、行ふ事はかたし。故に言をばひかへ、行をば過すべし。是信を行ふ道なり。

一むかし魏の文侯と云ひし君、明日猟に出でんと下知せらる。然るに明日雨ふる。されども前言をたがへじとて、路まで出で、やがて帰られける。是信を民に失はじとなり。周の幽王は、無道の君なり。褒姒と云ふ美女を愛す。此女笑ふ事を好まず。或時隣國に變ありとて、烽火をあぐ。烽火は、相圖の火をあげて、兵を招きよせんがため也。褒姒、烽火を見て大にわらふ。是より褒姒を笑はせんとて、烽火をあぐ。兵ども、變ありと思ひて集れども、其事なし。それより後は、しば〳〵烽火すれども、相圖の火にあらざる事を知りて、兵あつまらず。或時他方より敵せめ來りしに、兵をまねかんため、烽火をしきりに擧ぐれども、兵ども、褒姒が爲の烽火なりと思ひて集らず。幽

人而無信云云—論語爲政篇、前註、三三二頁參照

害あり。誠を以て感ずれば、人も亦信じて、したがひやすし。

一朱子曰、人の誠ならざる所、多くは言の上にありと。信をまもるに、言語の上に心を用ひて、實を以てすべし。

一朋友に交るには、もとより愛敬を用ふべし。然れども、信なければ、愛敬も僞より出て、誠の愛敬にあらず。顏色をやはらげ、容貌をうやうやしくするも、僞りかざれるは、愛敬とすべからず。

一子曰、人而無信不知其可也。人の心信實なるは、萬事の基にして、人にまじはるの道なり。若信なければ、萬事すべて僞なれば、人にまじはりて、如何ぞ善なるべき。たとへば大車の荷車に輗なければ、牛の首に車をかくる事ならず。小車の乘車に軏なければ、車を馬にかくる事ならず。車と牛馬とは別の物なれど、輗と軏とあれば、是を以て牛馬に車をかけて引かしむべし。若此ものなくんば、何を以てか車をやるべきや。人にまじはるに信ならざるも、亦かくの如し。人と我とは、二物なり。信實を以て交はれば、互に感通して、道行はる。若信なくして人と交はらば、我人にまことなく、人我を信ぜず。彼と我と感通せず。何を以てか道行はれんや。

ろべき理由あらばの意

主忠信—前註、一三七頁參照

といへるは、天道の實理、自然に行はるゝを云ふ。聖人の誠も、亦同じ。つとめずして、自ら實なるなり。又曰、誠レ之者人之道也といへるは、人の力を用ひて、つとめなすを誠レ之と云ふ。是即忠信なり。つとめずして自然なるは誠なり。つとめて實なるは忠信なり。誠は理なり。忠信は心なり。賢人以下は、天道聖人の如くならざれども、つとめて此誠を行ふは、是人の力を用ひて行ふ理なれば、人の道なりといへり。誠にあらざれば、天道人道共にたゝず。故に孔子も、主二忠信一とのたまふ。忠信は人の誠、誠レ之者人の道といへる、是なり。程子も、人道は唯忠信にあり。誠ならざれば物なしといへり。又古語に、五常百行非レ誠非也。其實なければ、此名なし。忠信は、即人の誠なり。程子も、盡レ己之謂レ忠、以レ實之謂レ信といへり。心をつくして殘さざるを忠とし、言と行とに實を用ひて、いつはらざるを信と云ふ。心にある誠を忠とし、言行にあらはれたる誠を信と云ふ。

一人を諫むるに、誠あまりあつて、言たらざれば、感通しやすくして、人に益あり。人の心に怒起らずして、我に禍なし。人をいさむる言は、婉順なるべし。若誠足らずして、言切直に過ぎぬるは、人いかりて、我が諫をうけず、人に益なくして、我に

尾生―史記蘇秦傳、莊子盜跖篇等に出づ、所謂尾生之信なり

大人者云々―孟子離婁下

なるべき理だにあらば―苟も其約の遂行せら

しくうけ合ひて、後日に其義にあたらざれば、約を守りがたくして、前言いつはりとなり、信をうしなふ。一たび言ひかはし約束したる事をちがへて、其首尾あはず、いつはりとなるは、是恥づべき事甚し。人にあらずと思ふべし。若あやまりて、義にあはざる事をうけあはゞ、其不義と不信との輕重を考へて、宜にしたがふべし。いにしへ、尾生と云ふ者、人と約して、其所にまつに、大水出來れども、約したる所を去らで、つひにおぼれ死す。是小信にかゝはりて、身を失ふ。愚と云ふべし。又身をすてても、信を守るべき事あり。時宜によるべし。孟子曰、大人者、言不レ必信、惟義所レ在。大人は大徳ある人なり。言に信を期せず、唯義をかんがへ行ひて、自ら信を失はずとなり。

一初にうけ合はざるは、しばらく人の心に喜ばずといへども、信に害なし。心よわく又氣かろ〴〵しくして、たやすくうけあひ、後に其約違ひぬれば、甚信に害あり。されど人の爲に謀つて忠あるは、人にまじはる道なれば、なるべき理だにあらば、うけ合ひて心を盡すべし。是忠厚の道なり。

一誠は實理なり。こゝを以て、眞實无妄之謂レ誠と、程子もいへり。中庸に誠者天之道也

有子曰云々―論語に出づ、前註、一七九頁參照

請ごへば―うけがへばに同じ、承諾すれば、引受くれば等の意

て、法をたてば、後まで其法を行はしめて、背かしむる事なかれ。そむく者は必つみに行ふべし。如レ此なれば、いつまでも、法立ちてやぶれず。一たび下知を出して、後まで變ぜざるは、是信なり。もし後まで立ちがたき法ならば、初によく議論して、法を立つべからず。是始を愼むなり。若下知して後變ぜば、是上に信なくして、民信ぜず。君に權なくして、法たゝず。

一有子曰、信近二於義一、言可レ復也。いふ意は、人に約して、其言をたがへじと思はゞ、初約せんとする時、其人のいへること、義か不義かをかへりみるべし。義にかなはゞ、約すべし。義にそむかば、約すべからず。かくの如くすれば、其約違はずして、言ふむべし。言をふむとは、約したる言をふまへて、首尾ちがはざるなり。是信を失はざる道なり。老子曰、輕二諾者一、必寡レ信。いふ意は、かろ〴〵しく請ごへば、後に其事なしがたくて、約にたがふ事あり。故に信すくなしと也。はじめ約せんとする時、つつしみ思案して、後をはかるべし。故に古人は然諾を愼むとて、人の云ひかけたる事を、かろ〴〵しくうけあはずして、約をおもくす。其事義にあたりて行ふべく、又後日に其約ちがふまじき事ならば、うけごひて約し、必約を變ずべからず。若かろ〴〵

ん、曰く、食を去る、古より皆死あり、民信なくんば立たず

思ひつかずばーなつき服せずばの意

尙書に云々ー前註四九頁參照

信なくて、士卒萬民上にしたがはず、思ひつかずば、兵糧たくさんにして、莫大の軍勢ありとも、用にたつべからず。是子貢にこたへ給へる意なるべし。又司馬溫公の曰、信者人君の大寶なり。國は民に保ち、民は信にたもつ。信にあらざれば、民をつかふ事なく、民にあらざれば、國を守る事なし。故に古の王者は、四海を欺かずと云へり。夫國は民を以てたもつ。民したがはざれば、國ありても保ちがたし。民は信を以てたもつ。上より民を欺きいつはりて、信なければ、民上を信ぜずして、思ひつかず。民の心をたもちがたし。

一賞罰は、必信にすと云ふは、功ある人をば、必恩賞をあたへ、罪ある者をば、必刑罰に行はんと、兼ねて人に示すは法なり。賞罰は人君の權なり。是なければ、善すゝまず、惡こりず。君の權威を失へるなり。功あれども賞せず、罪あれども罰せざれば、是民に信なきなり。如此なれば、法やぶれて、民信ぜず。善をするに怠りてつとめず、惡をする事をおそれずして、罰ををかす者多し。かく法たゝざれば、國あやふし。又尙書に、令出ては、これ行はしめ、背かしめざれといへり。いふ意は、法を出さば、初よく思案し、僉議して、後までやぶれなき法を立つべし。一たび下知を出し

子貢孔子に云々ー論語顔淵篇に、子貢政ヲ問ふ、子曰く食を足し兵を足し民之を信ず、子貢曰く、必ず已むを得ずして斯の三者を去らば何れか先にせん、曰く、兵を去る、子貢曰く、必ず已むを得ずして斯の二者を去らば何れか先にせ

ず。むかし子貢、孔子に國の政をとふ。孔子曰、食を足し、兵を足し、民信レ之。此意は、國をさむるに、第一には、食のやしなひ無ければ、民命つゞかず。第二、武のそなへなければ、國土の守なく、敵にあなどり攻められて、民をやすんじ、國を守る事あたはず。第三、上の心に信なければ、民たる者、上を信ぜず。下知法度を出しても、信なければ、法やぶれて行はれず。民上を信ぜざれば、上につかふるに、眞實の道なし。凡此食と兵と信と、三の者は、一もなくてかなはず。子貢又問うて曰、必やむことを得ずして、此三の内、一をすてば、何をか先にすつべきや。孔子こたへて曰、兵をすつべし。如何となれば、食と信と有レ之、兵粮たくさんにて、士卒萬民上に思ひつかば、兵なくとも、國を守ること堅固なるべし。子貢又問へり。食と信との二ツの内、やむことを得ずして、一をすてば、何をか先にすつべき。答へて曰、食をすつべし。食なければ民死す。然れども、信なくて生きんよりは、城を枕にして、うゑ死し、討死したらんこそ、本意なるべけれ。古より、死は人の常なれば、うゑて死すとも力およばず。人もし信を失へば、人道たゝず。かひなき命を生たりとも、人となるの理亡びなば、恥づべきの甚しきなれば、道ありて死したるには、遥かに劣るべし。もし

元亨利貞―易に出づ、前註四一六頁參照

義禮智の外に、信なきことを知るべし。信は、天道にていはゞ誠なり。眞實無妄を誠と云ふ。天道に春夏秋冬の四時あり。其内に土用あり。四時に元亨利貞の四德あり。四德の實にして、萬世までたがはざるは誠なり。人に仁義禮智ありて、其内に信あるも、亦かくの如し。元亨利貞、四時のめぐりの序ちがはざるは、卽誠なり。天道の、春生じ、夏長じ、秋をさめ、冬かくすこと、年々同じく、日月のめぐり、四時の溫熱涼寒、人物のかたちも性も、萬古より今に至りてかはらず。桃花は年々紅に、李花は年々白きも、皆是天道の誠たがはざるなり。天道にありては誠と云ひ、人に生れつきては信と云ふ。天にあり、人にある、理は一なり。

一 仁義禮智の四德は、春夏秋冬の四時になずらへ、信は土用になずらふ。信なければ四德たゝず。一年の功も、春夏秋冬にてそなはりぬれど、土用によりて、四時行るゝが如し。木火金水も、土にあらざれば生せず、天道誠なければ、元亨利貞の四德たゝず。人道も、信なければ、仁義禮智の四德行はれず。誠ならざれば物なしといへるは、是なり。

一 信は身を修るのみならず、人を治め、國をたもつの要なり。信なければ、人したがは

一に曰く象形、二に曰く指事、三に曰く會意、四に曰く假借、五に曰く諧聲、六に曰く轉注といへり、文字を造る本也

なり。いふ意は、人の言に誠あらざるは、人にあらず。故に人の言は、必信あるべしと云ふ意なり。五常においては、心にまことあるを云ふ。口に僞をいはざるも、其内にあり。仁義禮智の、いつはりなき眞實なるを、信と云ふ。信なければ、仁義禮智にあらず。仁義禮智四德の外に、又信あるにあらず。親によくつかふるは孝なれど、名聞のためにつとめ、又親の寵愛をねがひて務むるは、孝にあらず。君によく仕ふるは忠なれど、君の寵をねがひ、官祿をむさぼりて、奉公をつとむるは、忠にあらず。是皆まことの道にあらず。忠孝にかぎらず、萬事皆かくの如し。中庸に、不レ誠無レ物といへり。物なしとは、僞りて實なきなり。親につかへ、君につかふるに、誠なくして、右にいへる如くなれば、忠孝にあらず。是物なきなり。萬の事、皆誠なければ物なし。凡名と利とを求めてする事は、たとひ天下に聞ゆるほどの善なりとも、其心眞實ならざれば私とす。善にあらず。是物なきなり。四德に誠なければ、仁義禮智にあらず、いつはりなり。是物なきなり。人の、天より生れつきたる性は、唯仁義禮智の四德なり。此四德にて、人道行はる。此故に、孟子は、たゞ仁義禮智を說きて、信を說き給はず。程子曰、四端不レ言レ信者既有ニ誠心一爲ニ四端一則信在ニ其中一矣。これを以て、仁

士は知己の者のために死す―史記刺客傳中の豫讓の語に曰く、士は己を知る者の爲に死し、女は己を說ぶ（悅ぶ）者の爲に容づくる

六書―周禮に、六書は

人を知らざれば、朝夕膝をならべて、白頭にいたるまで、久しく交りても知らず。人を知ると、知らざると、其大にかはれる事、かくの如し。故に士は知己の者のために死すといへる事、豈然らずや。

一人各長ずる所あり、短なる所あり。長ずる所とは、得たる所なり。短なる所とは、得ざる所なり。知者といへども、其得ざる所は、愚者の得たる所には及ばず。もし得ざる所を以て知者をそしらば、堯舜も今日の凡夫におとるべし。人を知らずと云ふべし。君子の人を用ふるは、良醫の藥を用ふるが如し。各其性をよく知りて用ふること、其病に應ず。又大匠の材を用ふるが如し。ゆがめるを渠とし、直なるを柱として、材すたらず。人を用ふるに、各得たる所を知りて用ふれば、天下に棄れる人なし。皆用をなせり。

〇信

一信は說文曰、誠也从人从言會意。徐曰、於文人言爲信、言而不信非爲人也。信の字、人偏に言の字を書くは、六書においては、會意に屬す。偏旁の意を以て作りし字

其人にあらざる—適當にして然るべき人物にあらざるの意

眸子を見る—前註二六一頁參照

と我がなすべき所なり。人に知らせん爲にあらず。たとへば飯をくらつて、我が腹にみちて、飢を助くれば、人の知らんことを求めざるが如し。人を知らざれば、人の善惡邪正をわきまへず。是わが不明なり。故に患ふべし。もし人を知らざれば、其人にあらざるを友として、身をうしなひ、邪人を用ひて、家をやぶり、人をそこなふ。或は善人をすてゝ用ひず。凡小人は、わが身を人の知らざるを患ひて、我が人を知らざるを患へず。すべてさかさまに工夫をなせり。

一孟子の眸子を見るも知レ人の術なり。眸子とは、人の目のひとみなり。ひとみは人の惡をおほひがたし。人の胸中正しければ眸子明なり。胸中正しからざれば、眸子くらし。人の言の邪正を聞き、又、人の眸子を見れば、其人の心中の邪正かくれなし。言は猶も僞を以てよくすべし。眸子はかくす事かたければ、是人を知るの術なり。人の知愚、邪正、貪廉、才不才、壽夭、貴賤も、皆眼目にあらはる。眼は是五藏精萃のあつまる所、心性の先あらはるゝ所なればなり。

一人を知れば、はじめて一たび會面しても、其人の賢を知りて、交深くなる。或は數千里をへだてゝも、其情を通はす。數千年の久しきといへど、其人を思ひしたふ。

不知言云々―論語堯曰篇

子曰云々―論語中數個所に出づ、前註、二六五頁參照

にあはざれば用ひず。かくの如くなれば、人を知る事かたくして、人を用ふる事、理にあたらず。官職其人にあらずして、民治まらず。

一論語曰、不知言無以知人。是人を知るの法なり。人の邪正は、言にあらはる。言は心の聲なりと、古人もいへり。言の、理にかなふと叶はざるとによりて、其人の邪正を知るべし。もし言の是非を辨へずば、人の邪正は知りがたし。然れば人を知らんとならば、言を聞きて、其言の理にあたると、當らざるとを察むべし。

一人の心ふかくかくれて、外より見えがたければ、其内心を知りがたし。外にあらはる言語容貌を以て、其心を信ずべからず。言語よく、容貌うるはしく、君子に似たりといへども、内心は奸曲なる者あり。言ふつゝかに、容いやしけれども、内に忠信才智ある者あり。外くらくして、内明なる人あり。外明にして、内くらき人あり。火は外明かにして内くらし。水は外くらくして、内明なり。人の性も、亦かくの如くなるあり。言と貌を以て、人をとるべからずと、古人もいへり。

一子曰、不患人之不己知、患不知人也。君子の道は外に求めず、唯わが身に求む。故に人の我が善を知らざるは、人の不明なり。我が患にあらず。わが善を行ふは、も

口のきゝたる—口先の巧なるをいふ

れば、身の禍となり、家のやぶれとなる。畏れざるべけんや。知は人を知るより難きはなしと、古人いへり。人の心ほど、知りがたきものなし。よく其心を察して知るべし。口のきゝたると、容のよきとを以て、人をとるべからず。其心の賢否と、其行の善惡とを以て、人を進退すべし。又一言一行を以て、輕く人の賢否をさだむべからず。小人に欺かれて、其人を信じて、すゝめ用ひ、君子を見知らずして、うたがひ退くるは、まよへるなり。愚なりと云ふべし。よく辨へざれば、必あやまりて、善惡所をかふるものなり。

一人を知るの道は、明と公とにあり。學んで道理を知るは明なり。心明ならざれば、人の是非を辨へがたし。又心に愛憎喜怒の私なきは公なり。心公に私なくして、人の善惡是非を分つこと正し。愛憎喜怒の私あれば、まよひて人を知ること正しからず。善人を惡人とし、惡人を善人とす。又心かるくして、一旦の善惡を以て、にはかに人を是非すべからず。歳月をまつべし。言語の才ありて、利口なるを以て、人をとるべからず。必心と口とちがふ者多し。心公ならず、私心を以て、人を用ひすつれば、我が氣に入り、あひ口なる者をば、惡人をもよき人と思ひて用ひ、善人をも氣

公に封ぜらる

樊遲問知—論語顏淵篇

あひ口ふあひ口—我が氣分好惡に合ふと合はざるとの意

けば、聞かざることなし。天下の心を以て慮れば、知らざる事なしと。是わが智慧を用ひずして、ひろく諸人の智を用ふるなり。知者の、我が知を用ひずして、人の智を用ふる事、かくの如し。これまづ我が心の智慧正しくして、胸中に善惡をはかる權度ありて、ひろく見、ひろく聞きて、人のいふ所の善惡是非をえらびて用ふるなり。

一智の要は、知レ人にあり。尚書に、知レ人則哲、能官レ人といへり。哲とは心の明なるを云ふ。人を知るは、其心明なるなり。能官レ人とは、人を知れば、臣下の才德をはかりて、その長じたる所を取て、各其才の宜しき官をさづくるゆゑに、過なくして、其職よくをさまる。樊遲問レ知、子曰、知レ人。是人を知るは、心の明なる所、即知なり。明は知の體なり。知レ人は知の用なり。用をいへば、體其内にあり。故に人を知るを以て、知を說き給ふ。愚者は人を不レ知して、交る所、用ふる所、其人にあらず、たゞ人の毀譽にしたがひ、わが喜怒にまかせ、あひ口、ふあひ口により、又親しき疎きによりて、人を進退すれば、人を用ふる道理にあたらず。人を知らざれば、善惡邪正君子小人、皆所を失ふ。人を知ると知らざるとは、わが身の禍福安危と、國家の治亂存亡にかゝれり。心を用ひて、能く人を知るべし。人を知らずして、惡しき人を用ふ

詢ふと見ゆ、朱註に謅の字音初と云へり

一天命を知るとは、人の吉凶禍福死生は、皆定まれる天命あり。生れつきたる分限あり。分外のさいはひを、人にへつらひ求めても、神にへつらひ祈りても、必得べからざる事を知るを云ふ。然るに、小人は天命を知らず。わざはひあれば、手立を以てのがれんとし、利をねがひては、人にへつらひて、富貴福祿を得んとす。こゝを以て、義理をすて、利欲にしたがひて恥ぢず。又いのるまじき理を知らで、神にへつらひて、福を求め、禍をのがれんとす。君子は義理をたつとんで、天命を知る故に、義にそむける事は、大なる利を得るといへど行はず。害ありといへども避けず。天命の求むべからざるを知りて、義に害なしといへども求めず。しかるに、若みだりに利を求め、害をのがれんとして、其益なきことをせば、天命を知らずして、愚なりと云ふべし。何ぞ君子とすべけんや。

魏徵―字は玄成、唐の太宗の時諫議大夫に拜して重用せられ後鄭國

一魏徵曰、兼聽則明、偏信則暗。いふ意は、ひろく人に問ひて、諸人の言をきけば、一偏の言にまよはずして、聞損ずることなく、其きく事、いつはりまぎれ無くして、明なり。唯一人の言を信ずれば、其人のいふ所、多くは一偏の私ありて、我が心をまよはす。管子曰、天下の目を以て見れば、見ざる事なし。天下の耳を以てき

詢于芻蕘｜芻蕘は草刈、木樵也、博く下問をなし微賤の者とても措かざる義、詩經の大雅に、先民言有り芻蕘に

なりがたし。

一孔子の舜の大智なることを稱し給へり。舜は大智なりし故に、わが智を用ひ給はず、天下の人の智をあつめて、我が智とし給ふ。是大智なり。此故に、人に問ふことを好み給ひて、淺く近き言を聞きても、其言の善惡を察して、惡しきをば匿して、人にかたり給はず、善をばあげ用ひて、其人の言なる由あらはし給ふ。かくありし故に、人善を舜に告げ申すことを好めり。さありて、人のいふ言の中にてえらびて、其中の過不及なき、道理の至極せるを取りて用ひ給ふ。是舜の大智なる所なり。古人は、詢于芻蕘とて、わが智を自滿せずして、草かり木こりなどの、いやしく愚なる者にも、知るべき事は問ひて、其言を用ふ。是諸人の知をあつめて、廣くとりて、我が知とするなり。聖賢は言ふに及ばず、いにしへの英雄、漢の高祖、唐の太宗などの如くなる英明の君は、人の諫を好んで、これにしたがひ、殊更、張良、陳平、王珪、魏徴などが如き、智力のすぐれたる者を用ひて、其言を取用ひ給へる故、天下を草創し、太平を開きて、大なる功業をなし給へり。昏弱の君は、人の諫をきかず、或は諫臣を殺せるも多し。かゝる人は、必國家を失へり。

失ひしためしも多し。かなしむべく、おそるべし。孔子曰、佞人は殆しと。豈まことならずや。

學而不思則罔—論語爲政篇

一熟思審處は、智者のする事にして、後悔なき道なり。かねて其事あるべきと知りたる事は、先其事を行ふべきやうを思ひはかりて、きはめ置くべし。事にのぞみて、とやせんかくやせんと計るは、おそくして、事に及ばず。すべて思慮は、かねてより定むべし。又かねて計らざる不慮に出來たる事も、亦多し。此時にのぞみても、つくづくと思ひ、審にはかるべし。或は智ある人、其事を知れる人に問ふべし。あわてゝ、わが心ひとつにて、にはかに其事を決定すれば、必過多し。後悔すとも益なし。いそがはしく決定すれば、必あやまる。古人の言に、凡事唯怕レ待、待者詳處之謂也と云へるが如し。待とは、急に決定せずして、つまびらかに思案して行ふなり。

一子曰、學而不レ思、則罔。まなぶとは書をよみ、人に問ふなり。學びたるのみにて、我が心に、其道理を求めて、思案せざれば、道理を自ら得がたし。故にくらし。思の工夫は、學ぶに相對して、おもき事なり。人の、博學にして道を知らざるは、思の工夫なければなり。思は、致知の工夫において、尤益あり。思ふに非ざれば、自得する事

古語曰云々—韓非子に出づ

浸潤之譖云—論語顏淵篇に出づ子張の明を問へるに對し孔子の答へたる言也

一言を聞きて信ぜざるは、聞く事あきらかならざればなりと、易にいへり。人の善言と、諫をきゝながら、其言を信ぜず、唯あだなる事のやうに思ふは、其心くらければなり。明なれば、よく其言の道理あることを知りて信ず。故に人の善言を聞きて信ぜざるは、不明なる故なり。古語曰、惟善人よく盡言を受く、其聞きて能改レ之をいふなりと。又、才辨ありて、言たくみなる者のことばをば、理もなきことをも、たふとび信ず。其言たくみならず、其かたちいやしければ、其言に至理あれども、信ぜず。是きく人の不明なるなり。

一論語に、浸潤之譖、膚受之愬、不レ行焉、可レ謂レ明也已矣。人を譖する者は、にはかにせず、漸くにすること、たとへば水の物をうるほすに、急にうるほさず、つけ置きて、自然に漸くうるほすが如し。かやうにすれば、必心にそみて、まよひやすし。こゝを以て、にはかに人をそしらず、やうやく譖すれば、人信じやすし。又にはかに人をおびやかして、卽時にわざはひ出來るやうにおどせば、人亦おどろきて、信じやすし。此二者は、讒人のたくみなる所なり。故に人まよひやすし。かやうの讒を聞きて信ぜざるは、心の明なり。心の明は、卽智なり。古來かやうの讒を信じて、賢人を

を知らず、至道有りと雖も學ばざれば其善きを知らず

巧言亂德―論語衛靈公篇

一知ある人は、いかに言をたくみにし、利口を以て、是非善惡をみだし、或は邪說をすすむれども、其心明なる故、其言の是非をよく分別して、信せず。知なき人は、是非をわきまへずして、人の言の巧なるにまよひやすし。

一古語に、毀譽亂於善惡といへり。人のほめそしりは、よく善惡を言ひみだす。凡人は、人を知らずして、妄にほめそしり、或は我がひいきなる者は、惡人をも善人と云ひ、我が心に合はざる者をば、善人をも惡人と云ふ。愚なる人は、かゝる讒言にまよひ、其言を信じて、善惡を聞きあやまり、人のほめそしりを明かに察せざれば、讒人のためにたぶらかされて、其はかりごとに落つることあり。あさましき事なり。古來英武の人といへども、知者にあらざれば、此あやまり多し。おそるべきことなり。孔子曰、巧言亂德。ことはたくみなれば、必迷ひやすくして、德をみだる。よく心を用ひて、聞誤ることなかれ。

一衆人は、目前に、すでに見え來れることにさへくらし。況や後來のことを知らんや。かねて事に先だちて、よく後來の事の、理非と成行を知るを先見の明と云ふ。是知者の知る所、たふとぶべし。

美味あれども云々ー禮記學記に、嘉肴有りと雖も食はざれば其旨き

發生の本とす。是一年の功の初を生すなり。故に冬は一年のをはりを成して、又一年のはじめを生す。人の身も、あしたよりゆふべに至りて、動働けども、夜にいたりて寢いりしづまる。是一日のをはりを成すなり。又夜中ねぶらざれば、明日力なし。夜中に、よく寢いり息めば、明日の働に力あり。是明日の初を生ずるなり。智(一)四德の初を生じ、終を成すも、亦かくの如し。禮はさかんにあらはる。智はかくれて見えず。禮と智とは、うらおもてなり。夏は萬物さかんに、陽氣あらはる。冬は萬物ひそまりて、陽氣かくる。冬と夏とは、うらおもてなるが如し。

一學は自得を貴ぶ。自得とは、わが心に、ひとり道を知り、其味を得たるなり。わが物になるを云ふ。我が心に得ずしては、道を知れりと云ひがたし。古來、文學ひろく、經義に通じて、道理を口に說くといへど、心に道を知らざる人多し。是自得せざるなり。眞知にあらず。たとへばすぐれたる美味あれども、わが口に食はざれば、其味のうまき事を知らず。學んで道を知らざるも、亦かくの如し。たゞ眞つみ、つとめ久しくして、後自得すべし。つとめなくして、にはかに自得せんとせば、是を頓悟と云ふ。わが儒の道の自得にあらず。

註、九〇頁参照

春は生じ云云―前註、一五五頁参照

古より今までのことなり、古今のことを云）道と事と、其間にありて、きはまり無しといへり。今案ずるに、道と事とは、天地人の道と事なり。人となる者は、凡天地の内、古今の間の事を知らずんばあるべからず。故にひろく天下古今の事に通ずべし。是智の功用にして、智者の工夫なり。

一仁の、物をあはれみ、義の、悪をはぢ悪み、禮の、つゝしみ敬ふは、皆なせるわざあり。唯智のみ、心の明なるのみにて、しづかにして、何のしわざもなし。されども仁義禮も、智の明なるを以て、是非を知りわかつにあらざれは、其道行はれず。仁義禮これによりて行はれ、是によりて成就す。故に智は、四德の始をなし、終をなす。四德の末にあるは、終を成すなり。仁義禮を行ひ出すは、初を生すなり。たとへば一年の内、春は生じ、夏は長じ、秋はをさむ。此三時は、皆氣動きてなす事あり。唯冬は、四時の末にありて、しづかにして、何のしわざもなし。陽氣のかくれひそまれるのみ。されど一年の功、こゝにいたりて成就す。是冬は、一年の功の終を成すなり。又天地の元氣、冬の間しづまり息まざれば、來春大に發生して、功用をなしがたし。冬の内、天地の氣をさまりて、内にふくみ集るを以て、來春の陽氣、是より出づる故、

ゆ、鞀は鼓と同じくして小さく柄を持ちて搖れば旁耳還りて自ら擊つと玉篇にいへり

良知—孟子に出づ、前註七八頁參照

淮南子—前

よく知る故、良知と云ふ。是仁義禮智の智と同じ。天性なり。學んで知るも、亦是良知あるが故なり。むまれつきたる知無くんば、何ぞ學んでも知ることを得んや。學問の道は、智をひらく工夫なり。學問の要二あり。いまだ知らざる所を知る、一なり。すでに知る所をかたく守りて行ふ、一なり。知るにあらざれば行ひがたく、行ふにあらざれば、實なくして、知らざるに同じく、無用の事となる。

一不知の人は、義理を辨へざるのみにあらず、又利害損得をも知らずして、我が身の禍となる事をかへりみず、利をむさぼり、僻事をなして、家を利し、身を立てんとして、却て身を亡し、家を破るにいたる。かなしむべし。是我が身の惡を止めずして、天のせめを待つといふべし。我が身を利せんとて、惡しき事を行ひ、人を苦めて、我が身一人をたのしむ。是皆我が身の害となる事を知らず。愚なるのいたりなり。智者は心明かにして、人の憂苦みをよく知る。愚者は、心昧くして、我が身の外、人の憂苦みを知らず。いたりて愚なれば、我が身の外、父母兄弟の憂くるしみをだに知らで、不孝不弟を行ふ。

一淮南子に、四方上下を宇と云ふ。（是天地の間のことなり）往古來今を宙と云ふ。（是上

日月の云々―論語子張篇に、子貢曰く、君子の過や日月の食の如し、過つや人皆之を見、更むるや人皆之を仰ぐ

諫の鼓、誹謗の木―前註、一八六頁參照

戒愼之鞀―淮南子主術訓に、武王戒愼の鞀を立つと見

たる。日月の蝕すれども、やがてもとの如くになれば、光明少しも缺けざるが如し。凡人の諫を好んでき〻用ひ、我が過を改むるは、善これより大なるはなし。天下の美德なり。知と云ふべし。古より、たかき賤しき、諫を好んで用ふる人は、國家をおこし、身をおこす。諫をふせぐは、惡これより大なるは無し。天下の惡德なり。愚と云ふべし。古より、諫をふせぐものは、貴も賤も、多くはほろぶ。古來其證據明なり。夫明鏡といへども、其うらを照らさず。君子といへども、自ら見るに昧し。故に賢人君子は、つとめて人の諫をもとむ。堯に諫の鼓あり。いさめんとする人は、此鼓をうつ。舜に誹謗の木あり。木をけづりて、路頭に立て置きて、其身の行と、政の惡しきことを誹らしむ。湯王には、司過の士ありて、湯王に過あれば、必諫むる事をつかさどる。武王には、戒愼之鞀ありて、武王を戒め諫めんとする者は、其鞀を動して鳴す。漢より以後、君を諫むる官あり。歴代の聖人すら、其身の過を知らん事をおそれて、人に求め給ふこと、かくの如し。いはんや末世の凡夫をや。

一 生れつきて知るは良知なり。二三歳の小兒も、親を愛する事を知らざるはなく、年すこし長じては、兄を敬ふことを知らざるはなし。是まなばずして、人々生れつきて、

人聖人にあらず云々—左傳に出づ、前出

知人は誠にかたし。唯知ある人、よく人を知る故に、これを知と云ふ。自ら我が身の善悪を知るは、人を知るより難し。如何となれば、我が身には私ありて、自ら是とし易し。其心あきらかに、我が身に私せずして、公なる心なくては、我が身は知りがたし。こゝを以て自知を明と云ふ。是知人よりは、自ら知るは猶明なり。こゝを以て明と云ふ。夫わが子を見るには私ある故に、人、子の悪しきを知らず。他人の子を見ること明なるは、私なければなり。人を知ることは、我を知るよりやすきは、私せざればなり。我を見ることは、人を見るよりくらきは、私あればなり。智を明かにせんとならば、學んで理をきはめ又私を去りて、本心をくらますべからず。愚人はくらくして、我が身を知らず、我に才徳なきをも知らで、我が身にほこる。又我に大なる過悪あれども知らず。此故に、人の諫をふせぎて用ひず、却て怒り恨む。それ人聖人にあらず。誰か過なからん。然るに我が身に過なしと思へるは、智なきなり。又過を知れども、おほひかくして改めず。是を、過を恥ぢて非をなすと云ふ。皆是愚者のしわざなり。智ある人は、我が身を知れること明なる故に、我が身の過を知り、又人の諫をよろこびて聴用ひ、諫むる人を貴び、我が過をあらたむるに憚らず。故に過なきにい

神は非禮をうけず―鬼神論、本朝俚諺等に見ゆ、古諺也

のむぞが如し。無禮と云つべし。神は非禮をうけず。無禮にして近づきいのるとも、利生あるべからず。神もし靈あらば、かへりて咎あるべし。又祈るべき道理なくて、我が利欲を以て、へつらひ求めて、福をいのるとも、神は正直公明にて、私なければ、かゝるひがくしき祈をうけ、賽錢奉財などにめでて、私を行ひ、利生あるべからず。此理甚明かにして、さとりやすし。然れども、愚者は此理を知らずして、神にちかづき、けがし諂ひて、さいはひを祈るは、迷の甚しきなり。人道の行ふべき事をつとめ、神をうやまひて、近づき諂はざるは、是知者のまどはざるなり。故に知といふべしとのたまへり。神にいのるは、誠に正理なり。君父などのために、いのるべき理ありて、誠と敬をつくして、天にいのり、正神にいのるは、其さいはひあり。又わが過をあらため、罪を悔いて、神のとがめを詫事するも、是亦いのる理あり。かやうの、いのるべき理なくして、如何にいのるとも、さいはひを得がたし。其ためし、古今甚多し。其理を知るべし。

一韓非子曰、知如レ目也、能見二百歩之外一、而不レ能三自見二其睫一。故に知の難きは、人を見るにあらず、自ら見るにあり。又古人の語に、知レ人謂二之知一、自知謂二之明一といへり。

附子は烏頭（ウヅと讀む、トリカブトの根塊）の周圍に附く子、砒霜は砒石の俗稱也、砒素と硫黃と鐵とより成り土塊狀をなす
雍也―論語の篇名

いやしめり。儒者の學は、理をきはめ、知を致して、道を知るを以て務とするを云ふ。書を讀んで道を知らざるは、儒者の學にはあらず。

一智に大小あり。是亦知らずんばあるべからず。たとひ微細なる末の事には疎けれども、身を修め、人を治むる道に明なる人あり。是を小事にくらくして、大體に明なりと云ふ。君子の大智なり。貴ぶべし。又小事にかしこく、技藝にさとけれども、學問道理くらくして、身を修め、人を治むるに疎き人あり。是小人の小智なり。萬事に賢きやうに見えて、眞智なきなり。是を小事に明かにして、大體にくらしと云ふ。微細なる用にはかなへども、貴ぶに足らず。

一樊遲問ㇾ知、子曰、務㆓民之義㆒、敬㆓鬼神㆒而遠ㇾ之、可ㇾ謂ㇾ知矣（雍也）。是知者のまよはざる事を以てこたへ給ふ。知者は心明かに、事理の是非を知る故に、凡孝弟忠信などの、人道の行ふべき事を專つとめて、目に見えぬ鬼神の事にまよはず、祭るまじき淫祀をまつり諂ふは云ふに足らず、祭るべき正神なりとも、唯敬ひたふとぶべし。近づきけがして、諂ひもとむべからず。近なるゝは、神をけがして敬はざるなり。たとへば主君貴人などに、此方より馴々しく親み近づきて、祿をこひ、財を賜はらんことを

博く學び云云—中庸に博く之を學び、審に之を問ひ、愼んで之を思ひ、明に之を辨へ、篤く之を行ふ云々、前に詳說あり、八二頁本文參照

附子砒霜—

て、我が心に道理をもとめ、是を以て、心をひらき、智を明かにすべし。師友に求むるの道は、我が身をへりくだりて、自ら是とせず。好んで人に問ひて、ひろく聞くべし。我が智に自滿して、ほこる事なかれ。我にほこれば、必我が智を失ふ。凡聞見をひろくすると、我が心に思案すると、是智をもとむるの道なり。

一中庸の、博く學び、審に問ひ、愼んで思ひ、明かに辨ふるは、皆是知をもとむる道なり。かくの如く、知を明かにして後、篤く行ふ。古人も、此學もし眞に知れば、行ふ事も其中にありといへり。よく此道を知れば、必よく行ふ。行はざるは知らざる故なり。附子、砒霜には毒ありと知りては、食はず。水火をば、人を害する事をよく知れる故に、おそれて、水におぼれ、火にやけず。病を治する事を知れば、良藥の苦きをも服し、熱きをこらへて、もぐさにて身を燒く。是よく知れる故なり。又博學多識なれど、道理を窮むる學問をせざれば、道を知らざる人、古來多し。經書の文句を說きわけたるまでにて、聖賢の敎の道理を知らざるをば、訓詁の學と名づく。又故事出處を覺え、ひろく古今の事に通じて、道を知らざるをば、記誦の學と云ふ。詩文章を巧につくりて、道理にうときをば、詞章の學と云ふ。此三は、共に儒者の學にあらず。古人

四徳五常―四徳は仁義禮智也、是に信を加へて五常といふ

ば、姑息するを仁とし、科あるをゆるすの類、是智なければ、仁行はれず。宜しくするは義なり。智なければ、其宜しき程を知らず。うやまふは禮なり。智なければ、其よき程を知らで、うやまひ過し、或はうやまひ足らざるは、非禮なり。かやうの類、皆是智なければ、仁義禮共に行はれざるなり。

一智の字、又知の字となして通用す。故に四書には、多くは知の字を用ふ。唯四徳五常には、智の字を用ふべし。

一人の身に、一の大寶あり。これを名づけて智と云ふ。心の光明なるは、萬の善惡是非邪正をわきまへ知るのかゞみなり。若人の身に智なければ、天地に日月なく、人に耳目なく、暗夜に燈なきが如く、又家に主なく、軍に大將なきが如し。いかに生れつきたる力量あり、忠信あれども、心くらく智なければ、行ふべき道を知らずして、みだりに行へば、道にかなはず、ひが事多し。萬につきて、善き惡しきを辨へざれば、我が身ひとつをだに修むる事あたはず。況や民をなつけ、土地を治めん事は、いと難き事なるべし。故に人身の大寶は知なり。其大寶をもとむるの道あり。よき師友を求めて、其教をうけて、よきすぢの學問し、書を讀み、ひろく見、多く聞き、よく思慮し

智者云々―論語子罕篇

知及仁守―論語衛靈公篇に、知之に及び仁之を守る能はざれば之を得ると雖ども必ず之を失ふ云々

一智なければ、心に善あれども、行ふべき道を知らずして、みだりに行へば、あやまりて僻事のみ多し。父母に能く事へんと思へど、孝の道を知らざれば、不孝に歸す。君に仕ふるに、心に忠あれども、智なければ、忠を行ふすべを知らで、不忠にいたる。萬の事、皆しかり。すべて智なくしては、道を行ふことあたはず。人の惡をなすは、皆不知より出づ。智あれば、善の好むべく、惡の嫌ふべき事をよく知りて、道自ら行はる。故に學をするには、智を求むるを、第一のつとめとすべし。

一論語に、智者不レ惑、仁者不レ憂、勇者不レ懼。又、知及、仁守るといへり。中庸には、知仁勇を三德とす。皆知を先として說き給ふ。大學には、格物致知を先として、萬の道理をきはめ知りて、わが智を開く事をつとめしむ。君子の學、つとめ行ふを貴ぶといへど、先知らざれば行ふ事あたはず。如何となれば、智なくして心くらく、善惡是非をわきまへざれば、道を行ふべきすべを知らず。たとへば、盲の杖をうしなひて、ひとり道を行くが如し。足健なれど、道を見ざれば、迷ひて行きがたし。智なければ、才力あれども、毎事道理を知らず、あやまり多くして、道行はれず。仁義禮も、智にあらざれば、道理明ならずして、行ひがたし。人を愛するは仁なれども、理くらけれ

五行—水、火、木、金、土

て、すてずして固く守るを云ふ。道理を知りて、又よく其道理を守りて失はざるなり。知りても守らざれば、眞に知れるにあらず。智は五行においては、水に屬す。水は清く明かにして、かゞみとすべし。智の明なるに似たり。又萬物は、皆水のうるほひ通して生ずる如く、萬事智にあらざれば、道理通ぜずして行はれず。朱子四書の註の中、仁義禮には明解あり。智の字に註なし。故に朱子の後、智の字を說く者多しといへども、其說分明ならず。大學或問曰、知則心之神明、妙㆓衆理㆒而宰㆓萬物㆒者也。心の神明とは、人の心虛靈にして不㆑昧を云ふ。妙㆓衆理㆒とは、もろ〳〵の理を發明して知るを云ふ。宰㆓萬物㆒とは、萬物をつかさどりて、善惡を裁判するを云ふ。是致知の知を說きて、四德の智を說き給へるにはあらずといへども、知の體用をよく說けること分明なり。此外に、智の註を求むべからず。愚ひそかに、朱子の兩說に本づきて、知を說きて曰、智者心之明、事之別也。心の明とは、くらからざるを云ふ。燈火明かにして、物をてらすが如し。是智の體なり。事の別とは、事にのぞみて、是非をわかつを云ふ。是智の用なり。其事にのぞみて、是非をわかつは何ぞや。内に明あるを以てなり。此說、いまだ當否を知らず。しばらくこゝに記して、識者の是正をまつのみ。

五常訓卷之五

智之實云々 —孟子離婁下

○智

一知は、增韻に心有レ所レ知也といへり。知は心の明なり。和訓にはさとるとよむ。是非をてらす心の光なり。心明かにして、人倫事物の道理に通じ、是非善惡をわきまへ知りて、まよはざる德なり。仁義禮も、智によりて、其理明かにして行はる。智なければ、道理くらくして、善心あれども、行ふすべを知らず。あやまりて、ひが事のみ多し。周子は、通ずるを知と云ふといへり。萬理に通ずるなり。朱子は、智は分別是非の理と云へり。分別とは、わかちわかつ也。心中に善惡をわかち辨ふるを云ふ。是非とは、事にのぞみては、是を是とし、非を非とするを云ふ。智は性なれば、あながちに外に向ひて說くべからずといへども、用につきて說かざれば、智の體も明ならず。孟子は、智之實知二斯二者一弗レ去是也と說き給ふ。智の眞切なる所は、孝弟の道を知

下に偪る—禮記雜記に君子は上に僭せず下に偪らず

君子は無所爭—論語八佾篇

は儉約に過ぎて禮を失ふ。今の人、儉約なれば、吝嗇にして、なすべき禮法をも行はず。是を下に偪ると云ふ。下にせまるとは、わが身上より下なる人の行をするを云ふ。奢れば法制にそむきて、禮を失ふ。是を上を僭すと云ふ。上を僭すとは、わが身上の分に過ぎて、上なる人のふるまひをするを云ふ。故に禮は過不及なき工夫をなすべし。

一禮は謙遜をたつとぶ。謙はへりくだる也。ほこると裏表なり。ほこるは我が才力權位功名にほこるの類なり。謙は自滿せざるを云ふ。我が身に才德權位功業あれどもほこらず。是天下の美德なり。遜はゆづるなり。善事を君父にゆづり、人にゆづりて、自ら居らざるを云ふ。

一禮記に、禮至れば不ㇾ爭といへり。爭は君子の道にあらず。禮あれば爭なし。如何となれば、禮は讓をたつとぶ。讓は爭のうらなり。夫子も、君子は無ㇾ所ㇾ爭とのたまへり。爭ふとは、人に對して、わが才能、威勢、智力、權位、財利をあらそふの類なり。我に有る力を以てあらそふは、たとへば鳥獸の、牙を以てし、爪を以てし、角を以て爭ふが如し。人倫の法にあらず。是皆小人のわざなり。禮讓の道にあらず。且又禍をとるの道なり。

本立てば末は是より出づる理なり。末のみ修りて、本なきは、誠なくして、禮の道たたず。喪の禮は、ことさら眞實ならでは行はれざるものなれば、既に禮の本を說きて、又其內より、喪の禮の本をかゝげ出して說き給ふ。

一禮器云、先王の禮を立つる、本あり、文あり。忠信は禮の本なり。義理は禮の文なり。本無ければ立たず。文なければ行はれず。いふ心は、禮に本あり。忠信を本とす。忠信はまことなり。禮に文あり。義理を文とす。義理とは、外に行ふ處のあらはれたるしわざの、すぢめよきを云ふ。本なければ禮の道立たず。萬の事、皆誠より出づ。誠なければ物なし。されど又外のわざ、理にかなはざれば、文無くして、禮の道行はれず。必本末二ながらそなはりて、禮の道至し。されど先本をつとむるを要とすべし。忠信を本として、禮文行はるゝは、たとへば味甘き物は、五味の和をうけ、色白きものは、五色の采をうくるが如し。忠信ある人は禮を學ぶべし。質よき故に、外の禮文そなはりやすし。

一禮は中を得るをたつとぶ。中とは過不及なきを云ふ。管仲晏子此兩人、皆才力すぐれたりしかども、聖人の道を知らず。管仲は、身上よりおごりて、禮をうしなひ、晏子

禮器—禮記中の一篇

五味—辛、酸、鹹、苦、甘

五色—青、黄、赤、白、黒

子曰く、大なる哉問ふことや、禮は其奢らんとよりは寧ろ倹せよ、喪は其易からんとよりは寧ろ戚せよと見え、集註に林放は魯人、世の禮を爲す者事ら繁文を事とす、而も其本の是に在らざるを疑ふ、故に以て問ふといへり

皆これより出づるが如し。本をうしなひて、末のみをつとむれば、其實を失ふ。故に其つとむる事しげくして、其なすわざ小なり。しかるに、時の人のまよへるを悟り、禮の本に志あるを大なる問なりとて、先ほめ給ふ。さて答へてのたまふ意は、萬の禮は、中を得るを貴ぶ。中は過不及なきなり。是禮の當然にて、至極せる道理なり。されども中に行ふ事ならずば、其本をつとむべし。萬の事かざりのみにて、外の儀文華美にしておごらんよりは、唯ねがはくは倹を行ふべし。倹とは其心眞實にして、かざり僞無きを云ふ。是禮の本なり。如此倹にして眞實にかざり無ければ、本たちて、末おのづから生ず。又禮の内にて、取わき父母兄弟などの死せる時、喪に居るは、尤せつなる時にて、つゝしんで心を用ふべき事なり。喪に居るに、其死をいたみ哀むは、喪の禮の本なり。しかるに外の飾さかんにして、作法はそなはれども、心に哀の誠なきは、是本なきなり。かく有らんより、唯いたみ哀あつくして、外の法はおろそかならんこそ優るべけれ。凡禮は、先心の誠實なるを本とすれば、本なくして、末のみ修らんより、しかじ、本立ちて末おろそかなるには。是本末そなはらずして、偏なれども、外のかざりのみ多くして、内心に本とすべき誠なきには、遙かにまされり。

林放云々―論語八佾篇に、林放禮の本を問ふ

しく、次第亂れざれば、人と我と和合す。君臣、父子、夫婦、兄弟の間、其禮正しければ、おのづから和順なり。若禮なくして、臣下の疎きが親しきを越え、賤しきが貴きを越え、庶子が嫡子を越え、妾は妻を越えて、次第亂るれば、必うらみそむきて、和合せず。朋友の交も、禮正しければ、和睦して、あらそひ無くうらみ無し。又喧嘩口論などすることも、皆無禮よりおこる。若禮儀正しくば、和順行はれて、鬪何ぞおこらんや。故に人の鬪諍を止むるの道も、禮を正しくするにあり。

一朱子曰、禮は卽理の節文なり。いふ意は、萬の行、道理にかなひて、過不及なく、程よきを云ふ。飲食の一事をいはゞ、うゑかわく時に飲み食ふは理なり。されども、飲み食ふべき理なりとて、みだりに多く飲み食へば、放逸にして、みだりがはしく、又必病を生ず。飲み食ふべき理にあたりて、過不及なく、よき程なるが、理の節文なり。萬の事、是を以て知るべし。

一林放と云ひし人、世上の禮を行ふ者、かざり多く、ことわざしげくして、末をもはら務むるを、禮の本意にあらじと思ひて、禮の本を孔子に問ふ。凡萬の事、まづ其本を得れば、其末おのづから出來るものなり。たとへば樹木の根本堅固なれば、千枝萬葉

周子—周茂叔をいふ、前註、四一四頁參照

前よくみづから防がんにはしかじと云へるが如し。又人家に、火災出來たる時、力をつくして防がんよりは、兼て火用心きびしければ、火災なきが如し。

一禮記に、子曰、敬ひて禮にあたらざる、これを野と云ふ。敬ふは誠によけれど、禮にかなはざれば、これ野きなり。敬によき程の法あり。過不及ありて、其法にかなはざるは、是禮にあたらざるなり。況やおごりて理にかなはざるは、ことに禮にそむけり。野きより、其害甚し。

一飲食と、男女と、財寶とは、人の大欲の生ずる處なり。故におよそ人の過惡の出來るは、多くは此三よりおこる。心の好むに打任せては危し。道理にそむき、わざはひ生ずる本なり。此三をこのむは人情にして、無くんばあるべからず。されど禮を以て節せざれば、これを用ふる理を失ひて、必大慾生じ、惡にながる。故に禮なければ、人道不レ立して、禽獸の行に同じ。

一周子、陰陽は理あつて後に和ぐといへり。二氣の流行正しければ、四時の和行はる。人の道も亦同じ。禮正しく、次第みだれざれば、各其理を得て、和順行はる。故曰、禮者天地之序也、樂者天地之和也。禮は先にして、樂は後なり。人倫の交、先禮法正

飲食の人は云々—孟子告子上

など、多く飲むを云ふ。此二は、とりわき戒むべし。凡禮のはじめは、飲食にはじまると、禮記にいへり。禮なければ、飲食を放にして、見ぐるしく、禽獸の行に近し。こゝを以て、飲食の節をつゝしむは、禮の始なり。孟子にも、飲食の人は、則人これをいやしむ。其小を養ひて、以て大を失ふが爲なりといへり。

一禮は未發にいましむ。人の情慾の、いまだ起らざる先に、早く戒むれば、邪惡にいたらず。故に禮の敎は、目に見えぬ所に、大に益ありて、日々に善にうつり、罪に遠ざかりて、みづから知らず。是禮のたふとぶべき所なり。法は旣に惡事いで來て、後に禁ず。其しるし目に見えて、其益少しなり。男女の別ありて、禮法正しければ、淫亂にいたらず。凡淫亂は、必初に禮法なきよりおこる。若き子弟のともがら、早く禮を敎へ、內外の別きびしければ、かゝる惡事におもむかず。朋友の交、禮ありて敬へば、諍鬪に至らず。凡鬪諍は、必無禮よりおこる。君は臣をつかふに禮あれば、そむき離るゝにいたらず。禮の、人に益あること、かくの如し。故に禮の敎は本なり。法のいましめは末なり。たとへば無病の時、身をつゝしめば、病おこらず。病おこりて、藥をのみ、灸をするは、末なり。邵子の詩に、病後能く藥を服せんより、病

衣服を先にせり―孝經に。子曰く先王の法服に非ざれば敢て服せず先王の法言に非ざれば敢て道はず先王の德行に非ざれば敢て行はず

云ふ。禮の本なり。

一衣服は身の表なり。人にまじはるに、先かたちを見る。次に言を聞き、次に行を見る。故に孝經孟子などに、衣服と言語と德行をつらぬるに、衣服を先にせり。衣服は、かたちをおほふ表の飾なれば、えらぶべし。わが位に應じ、年に應じ、處に應じ、時に應ずべし。紫萠葱紅などの間色は、禁じて著るべからず。又大なる繪がた、大なる縞、目にたつ染物おり物などは、ひなびていやし。好むべからず。わが年よりくすみ過ぎたるは、おいらかにして目にたゝず。みやびやかにして、若きも老たるも、身によく相應して似あへり。凡衣服のもやうにても、人の心の邪正は、おしはからるゝものなれば、えらぶべし。

一飲食は、身を養ふものなり。然るに、飲食を恣にして、かへりて、身をそこなふは、禮なければなり。飲食のつゝしみは、禮を以て慾を制するにあり。飲食の禮多し。中について、放飯流歠をいましむべし。放飯とは、ほしいまゝに、飯を多くくらふなり。飯にかぎらず、一切の食を多くくらふは、放にして非禮なり。ことに飯を多くくらふは、見ぐるしく、腸胃をそこなふ。流歠とは、ながるゝが如くに、あつもの、酒

五行—水、火、木、金、土、書經洪範に出づ

大風大雨云云—論語郷黨篇に、迅雷風烈に必ず變ずと見え、註に必ず變ずるは天の怒を敬する所以也

少儀—禮記の一篇

卽是天地の禮なり。聖人これに法とりて、禮を作り給へり。禮は序を以て主とすればなり。序あれば、上下、貴賤、親疎、長幼の位正しくして亂れず。樂の本源をいはば、天地の間、陰陽五行の氣、古今四時にめぐり行はれて、しばらく止まず。其氣和合して、萬物化生す。是卽天地の樂なり。聖人これに法とりて、樂を作り給ふ。樂は和を主とす。和げば、人我一同にしてそむかず。道理にしたがひて萬事行はる。是禮樂の根源なり。凡聖人のをしへは、皆是天地の道を本とし、これを法として示し給ふ。天理の外に、別の敎なし。こゝを以て、程子も、儒者は天に本づくといへり。聖人の道は、卽天地の道なり。聖人の敎は、卽天地の敎なり。

一君子は天地をおそれうやまふ。故に大風、大雨、迅雷などの時は、容をあらためて、夜はおきて衣服を著て坐す。是天のいかりを敬ふ禮なり。是亦天につかうまつるの道の一端なり。

一少儀曰、虛を執れども盈をとるが如く、虛に入れども人あるが如くにす。いふ意は、内に物なき器をとるにも、盈ちてこぼれやすき器をとるが如く、おそれつゝしむべし。人の居らざる家に入るにも、人あるが如くつゝしむべし。是は敬の心常にあるを

禮の用は云云—論語學而篇に、有子曰く、禮の用は和を貴しと爲す、先王の道斯を美と爲す、小大之に由る、行はれざる所有り、和を知つて禮を以て之を節せずんば亦行ふ可からざる也

なり。是古の教の法なり。後代には、禮樂の教傳らず。されど、心のつゝしみと樂とは、今とても、しばらく忘るべからず。つゝしみ樂の二は、互にならび行はれて、相そむかざるべし。禮勝てば、かた過ぎて、人と我との間和せず。樂勝てば、和か過ぎて、禮儀をうしなひて、悪しき方にながる。禮樂二ながらそなはりて、よき程の中道行はる。故に論語に、禮の用は和を貴しとすと云ふ。又曰、有レ所レ不レ行、禮以節すと云ふ。是禮樂の二を以て、身ををさめ、事を行ふ、よき程の道あるを云ふ。

一聖人禮樂を作りて、人に教へたまふは、本なき事を作り出したまふにあらず。凡禮は天地の序なり。序とは次第あるを云ふ。陰陽の氣、時節にしたがひて次第あるは、天地の禮なり。樂は天地の和なり。和とは、陰陽の氣、時にしたがひて和同するを云ふ。是天地の樂なり。聖人天地の序と和とに本づきて、禮樂を作り給ふ。故に禮記に曰、天高く地下く、萬物散殊、而禮制行矣。流而不レ息、合同化而樂興焉。是は禮樂の根源をいへり。禮の本源をいはゞ、天高く地ひきくして、各其位あり。日月星辰より、風雨霜雪、草木禽獸等の萬物にいたるまで、各其形色をあらはし、各其分限かはり、各時節の序あり。是天地萬物の上に、自然に、各高下、次第、品節わかれたり。

八音—金、石、絲、竹、匏、土、革、木

る故、事功尤はかゆくものなり。つとめて止まず、君子の人にまさるゆゑんなり。おこたりて務めず、衆人の君子に及ばざるゆゑんなり。士のみならず、農工商も同じ。よくつとめて、怠らざるは、必家をおこす。或人うたがふ、君子如此に、つとに起き、夜半にいねて、おこたらずんば、おそらくは精力つかれて、養生の道にあらじと云ふ。答へて曰、しからず。禮記曰、君子莊敬なれば日につよく、安肆なれば日におこたる。いふ意は、行正しく、つゝしみありて勤むれば、精力日々につよくなる。是血氣めぐりて、陽氣發生する故、病生ぜず。身を安く、わがまゝにして、つとめざれば、日々に怠りて、弱くなる。是血氣ふさがりて滯り、元氣めぐらずして、養生の道にたがへばなり。

一禮記云、禮樂不可斯須去身。君子の道、禮樂の二を以て、身ををさめ、人を敎ふ。禮は心の恭敬を本として、萬事身の行の上に節文あるを云ふ。樂とは心の和樂を本として、昔聖人の作りたまへる歌舞八音の音樂の文あるを云ふ。音樂は心の和をみちびくそなへなり。後代の淫樂の心をとらかすとは、大に同じからず。禮を以て身をつつしみ修め、樂を以て心をやはらげ樂む。此二の事、しばらくも身を離るべからずと

所謂四勿なり、前註、四五七頁參照

坐する時云云ー以下の諸條禮記曲禮にもとづく、ながし目に見るは淫視の義、かたし立は跛の義にてかた足立ちの略也

はず。身に非禮のうごきをなさず。飲食を愼み、節にして過さず。皆是禮の制する所なり。

一口の過なきより、身の過なきは難く、身の過なきより、心の過なき事は難し。三のもの、ともに禮を以て正さずんばあるべからず。

一威儀を正しくすとは、身の形儀をつゝしむなり。是禮のおもんずる處なり。外の形儀みだりなれば、内心も共に不敬になる。敬は心にあるのみならず、内外ともに正しくすべし。坐する時、立時、行時、臥時、皆禮ありて怠るべからず。耳をかたぶけて、人の密事をきく事なかれ。ながしめに人を見る事なかれ。甚勞するにあらずんば、我が家にありても、怠りてみだりに臥す事なかれ。立にかたし立すべからず。坐して兩足をのぶべからず。かたぬぐ事なかれ。人の密事をうかゞはず。たはぶれの顏色をすべからず。

一朝は早くおきて、事をつとむべし。古語に、一日の計は朝にありといへり。朝よりおこたれば、一日のつとめ捗ゆかず。故に朝おくる事の遲速を見て、其人の家の、興ると衰ふるとを知るべしと、古人もいへり。夜も學問家業をつとむべし。夜氣は靜な

禮儀三百、威儀三千―前註、四九四頁參照

耳に云々―

はみだりなる服食を用ふれば、身に相應せず。又男女の色も、心に任せぬれば、淫亂にいたるゆゑに、夫婦の別、男女の間を正しくす。君臣、父子、凡人倫の交も、其理にかなひて、よき程に愛しうやまふ法あり。これ皆禮なり。禮なければ、君臣、上下尊卑、貴賤、長幼、男女のわかちなく、師弟子、朋友、賓客のまじはり薄し。郊祭の禮なければ、死を送り神に仕ふるの道なし。故に禮は、聖人、人情に本づきて、教を立て給ふ。人の身、禮あれば安く、禮なければ危し。人の身に、さしあたり用ふべき事、是より急なるは無し。故に古語に、禮は人之急なりといへる、誠なるかな。人たる者、禮を行はずんばあるべからず。

一禮儀三百、威儀三千とて、およそ人の行ふべき大禮三百條、小禮三千條あり。是は其大槩をあげていへり。必三百三千に限るべからず。皆是つゝしみ敬ふ心より出で、天理の程よき所にして、人事のしかるべき作法なり。つゝしみ敬ふ心は、禮の本なり。三百三千の品は、禮の文なり。文とは外のあやなり。本なければ禮たゝず。文なければ禮行はれず。故に禮は本をおもんず。文も亦そなはらずんばあるべからず。

一君子は、耳に非禮の音樂淫聲をきかず。目に非禮なる見物を見ず。口に非禮の事をい

誶語―誶の字、原本にセムルと傍註せり

東家の云々―東家は隣家の意也

敬とは、心に道に違はん事をおそれて、恣ならざるを云ふ。是心をたもち、身ををさめ、事を行ふ則なり。是禮の本なり。古より、聖人賢人の心法は、敬を以て要とし給ふ。凡身の行儀作法なく、道を失ひ、禍おこるも、皆敬まざるによれり。古語にも、敬めば禍にかつといへり。つゝしめば禍なし。白樂天が言に、福與禍在乎愼與不愼といへり。

一凡禮あるを以て人とす。若禮なければ、人の法すたり、鳥獸に同じくなりで、人道たゝず。禮なきの至をいはゞ、父にあうて怒り詈り、母に帚をとらせて、立ちて誶語し、君の過惡をそしりあらはし、兄と財をあらそひ奪ひ、東家のかきを越えて、處女をひくの類、皆是禽獸の行なり。人倫の法にあらず。

一禮の初は、聖人の、心になき事を作り出して、をしへ給ふにあらず。生れつきたる人情に本づきて、過不及なきよき程なる理ををしへ給ふなり。人の身に、飢渇内に生じ、寒暑外にふるゝ故、飲食衣服せざる事あたはず。飲食をよき程にし、衣服を正しくするは禮なり。うゑかつえするとて、みだりに多く飲みくひ、人に讓なく、爭ひ食ふは、禽獸の行なり。わが身に應ぜざる衣服を著るは、上をかし、下にせまり、或

三千三百―中庸に、禮儀三千、威儀三百、其人を待ちて行はると有るにもとづく

なり。是即禮なり。こゝを以て聖人の說き給へる禮の字は、理の字にあたれり。されども理といはずして禮といへるに、子細あり。理といへば形と事にあらはれたる迹なくして、虛なり。故に、取守しがたし。禮は理の品節文章とて、人のわざに品々あり、よき程ありて、其理あらはれ見え、形をなして實なり。故に取守るべし。是を以ての故に、禮といひて、理といひ給はず。釋名曰、禮は體也、言得事之體也。此意は、體とはかたち也。禮は心に本づけども、あらはるゝ所は、事の上に見えたる形を云ふ。人の行儀作法の正しく、三千三百のわざにあらはれて、法の正しきが禮なり。是皆かたちありて、目に見ゆる所なれば、體なりと云ふ。事にあらはれずして、形なくんば禮にあらず。しかれども又形の上にかゝはりて、心上に誠敬なくば、文のみにて本なし、禮にあらず。唯敬を本として、外に行ふに文あるは禮なり。

一 人に血氣あり。身に耳目口體の欲あり。心に、喜怒哀樂の情あり。もし禮を以てこれを節せざれば、人欲にしたがひ、天理をうしなひて、人事亂れ、人道すたる。こゝを以て、聖人禮を以て敎とし、彼の血氣よりおこる情欲をふせぎたまふ。

一 曲禮曰、毋不敬。凡人事の視聽言動より出づる處、萬事敬しまざる事なかるべし。

賤しげなるをいふ

人の行ふわざの、行儀にあらはれたる作法なり。視聽言動の四ツの身のわざも、萬事の制行も、よきほどなる自然の法あり。是人事の儀則なり。中庸には、親レ親之殺、尊レ賢之等、禮所レ生也といへり。云ふ意は、親類をしたしむは仁なり。其内に、父子、兄弟、諸父、從兄弟などの品あり。其親疎尊卑の次第同じからざる、是親レ親之殺也。賢を尊ぶは義なり。人に大賢あり、小賢あり、才能ある人あり、舊識恩德ある人あり。其内に、大小高下の品あり。是尊レ賢之等也。親類の品に應じてしたしみ、大賢小賢の品によりて敬ふは、是卽禮の生ずる所なり。しかれば禮は仁義を行ふに、各其品にしたがひて、程よきをいへり。

一威儀をつゝしみ、衣冠を正しくし、視ること、聽くこと、言ふこと、動くことの四事につきて、各過不及なく、よき程の法あり。又親につかへ、君につかふるに、各さだまれる法あり。兄弟、夫婦に對し、賓客にまじはり、臣下に對し、民をつかひ、先祖鬼神をまつるも法あり。是禮は、皆天理のよき程なる節文にして、人事の定まれる作法なり。仁義皆理なりといへども、とりわき禮を理といへるに子細あり。理とは行ふべきすぢめなり。萬事を行ふに、皆定まりたる作法あり。是人の行ふべきすぢめ

ふつゝかなる—無骨に

○禮

一禮は心につゝしみありて、人をうやまふを本とし、萬事を行ふに、則にしたがひて、正しく理あるを文とす。則とは作法なり。孝經に、禮敬而已矣。云ふ意は、禮は敬を專らとす。而已とは、此外には無しと云ふ詞なり。朱子曰、禮の本は在于敬人。人をうやまふは、心のつゝしみより起る。人を敬ふも、其人をあはれむ心より出づる故、朱子も、禮は仁のあらはれたる也といへり。禮記曰、禮は理也。周子曰、理曰禮。理はすぢめなり。すぢめとは、萬事を行ふに、各正しき則ありて、其則にちがはざるは、卽理なり。理にしたがへば、萬事正しくしてをさまる。理にしたがはざれば、萬事邪にして、みだれて行はれず。朱子曰、禮は天理の節文、人事の儀則なり。天理は自然に定りて、かくの如くなるべき道理なり。節文は、過不及なきよき程なるを云ふ。節は過ぎざるなり。文は不及なきなり。うやまひ過すは節にあらず。うやまひ足らざるは文にあらず。かざり過ぐるは節にあらず。賤しくしてふつゝかなるは文にあらず。是皆理にしたがひて禮にあらず。萬事の節文、皆かくの如し。人事の儀則とは、

子曰云々―論語衛靈公篇、孫は遜に通ず、へり下るの義也

如し。然れども、義を專らにして、わが身に私せず、人のため宜しくすれば、利を求めざれども、自ら我が爲よからずと云ふ事なし。故に易にも、利者義之和也と云ふ。大學に、國は利を以て利とせず、義を以て利とすといへり。利欲を恣にして、我が身ひとつを利せんとすれば、必人に害ありて、我が身の禍となる。古語にも福は禍のかくるゝ所といへり。愚者は、此理にくらくして、唯われ一人の爲よからん事を計れども、是即わが身の害となる。眼前の利をはかりて、後來のわざはひを知らず。

一子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之、君子哉。云ふ意は君子の事を行ふは、義を以てした地とすべし。義は事を制する本なれば也。萬の事を行ふに、まづ義か不義かをかへり見るべし。義にあらずんば、行ふべからず。義に合はゞ行ふべし。是義を以てしたぢとする也。其上は、禮を以てすべ、よく行ひ、孫を以てへりくだりて、人にたかぶらず、信を以て、始終眞實に行ふべし。是君子の行なり。されども義なければ、其事の主なし。故に禮孫信の三そなはりても、非義なれば見るに足らず。尙書に、以義制事といへるも、此意なり。

萬鍾—莫大の量、左傳の註に六斛四斗を鍾と曰ふと見え、漢書食貨志の註に鍾は十斛といへり

たとひ我が老父母ありとも、其所を退き去て、身をのがるべき義にあらず。身をすて、敵をふせぎて、友を助くべし。是危きを見て、命を致すなり。此時もし、われ父母ありと言ひて逃去らば、義にあらず。いまだ事も無き常の時に、かねて朋友に我が身を許し與ふるは、義にあらず、不孝といふべし。時にあたりて危きを見て、命をすつるは義なり、不孝にあらず。凡義をすてゝ行はざれば、死ぬべき節義にあたりても、身をのがれ、かひなき命生きて、恥を世々につたふ。斯あらんよりは、義を行ひて、死して榮名を世にのこさんこそ、亡きあとまでの面目ならめ。見得思義とは、財と祿とを得るに、みだりに利をむさぼりて、得まじき物をとるは、義にあらず。此物、わが得べき義か、得べからざる義かと、みづから思案して、義にあたらば得べし。義に害あらば得べからず。もし得べからざる義ならば、萬鍾の祿は云ふに及ばず、一介といへども人に取るべからず。もし取るべき義にあらば、舜の、堯の天下を得たまふも、不義なりとすべからず。得べからざる義にあたりても、わが得る方に心ひかれて、得ても義に害なしと思ふは、私欲にひかれて、是非の心迷ひくらきなり。

一義は天理の公なり。利は人欲の私なり。二の者は、各別の事にて、雪と墨との

り。早きを惡しゝとするは莫なり。早く行きてよき時は早く、しづかに行きてよき時はしづかなるは、義とともにしたがふ也。人に物を與へんと定むるは適なり。與へまじきと定むるは莫なり。與ふべき時は與へ、與ふまじき時は與へず。是義とともにしたがふなり。萬のこと、皆是を以ておして知るべし。義は事の主なり。萬事の善惡一定せず、唯義にまかせて行ふべし。是善なり。

禮運―禮記の一篇

一禮運曰、何をか人義と云ふ。父慈、子孝、兄良、弟弟、夫義、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、十者これを人義と云ふ。仁は人を愛する德なり。人を愛する中について、各其人によりて、相宜しき道あり。是義なり。父は子をいつくしみ、子はおやに孝を行ひ、兄は弟によく、弟は兄にしたがひ、夫は婦に義あり、婦は夫にしたがひ、君は臣に仁あり、臣は君に忠ある、此十の者は、人の義なり。義は各其人に相應して宜しきなり。是人倫の道にして、宜しく行ふべき道なり。故に人義と云ふ。

見危致命―論語子張篇

一見レ危致レ命、見レ得思レ義。論語子張之語也。人の危難なるを見ては、我が命ををしまず。君父のために身をすつるは、言ふに及ばず、朋友といへども、時宜によるべし。或は朋友と相ともなひて、道を行く時、不意に敵する者ありて、朋友を殺さんとす。

（論語憲問篇）

中にあり。わが身のため便よく、或はたからを得、祿を得る事ありとも、得べきか得べからざるか、唯義のある處を思ふべし。利をむさぼりて、義を忘るべからず。義と利とは、善と惡と、君子と小人とのわかるゝ處なり。義とは天理の公なり。利は人欲の私なり。專わが身の爲よきやうにするは利なり。我が身を利せんとすれば、必人に害あり。是惡なり。人に害あれば、必我が禍となる。人を利するは、是義なり。義あれば、道理と和する故、利を求めずして、自ら利は其内にあり。されども利を得んため義を行ふは、私意なり。君子のする所にあらず。

（君子之云々—論語里仁篇）

一子曰、君子之於天下也、無適也、無莫也、義之與比。君子は天下一切のことにおいて、專らに主としてすべき事も無く、又すべからざる事もなし。是萬の事、善惡一定せず、唯時の宜しき道にしたがふべし。一事を以ていはゞ、世に出でて必仕ふるを專らにせず、是無適なり。仕へまじき時は仕へずして、世をのがるべし。又必仕へざるを以てむねとせず。是無莫なり。仕ふべき時は仕へて、道を行ふべし。然れば、仕ふるも仕へざるも、唯義とともにしたがふべし。仕へて宜しき時は仕へ、仕ふまじき時は仕へず。是義にしたがふなり。たとへば道を行くに、早きがよしといふは適な

君子勇有りて義無ければ亂をなし、小人勇有りて義無ければ盜をなす

義を見てせざるは勇なき也—論語爲政篇

改むるに憚る—論語學而篇に、過ちては則ち改むるに憚ること勿れ

見利思義—

とに貴ぶべし。もし義なくして勇を用ふれば、かへりて道にそむき、物を害す。たとへば刀を以て敵をきり、惡人を殺すは義なり。刀を以て罪なき人をきるは、暴惡と狂亂となり。

一見レ善則遷、有レ過則改。此二句、易の益の卦の文なり。我が行ふ處惡しからざれども、人のいふ事、人の行ふ處、わが行ふ處より、まさりて善なるを見ば、即我が行へる事をば捨てゝ、少しなりとも優れる方に遷るべし。是を、善を見て即うつると云ふ。いまだ善き事と知らずば、すべきやう無し。既にすべき義と知りて行はざるは、力も無きことなり。是義を見てせざるは勇なき也。過あれば則改むとは、我が行あやまりあらば、即時に早く改むべし。猶豫して、我がひが事をかざり、改むるに憚ることなかれ。義を見て遷るは、其工夫かろくして易し。過を改むるは、其工夫おもくして難し。十分に力を用ふべし。たとへばうす白き物を潔白にするは易し。黑き物を白くする事は難きが如し。此二は、即義にうつる道なり。是學問の道のつとむべき處、力行の要なり。

一見レ利思レ義。利は一切の我が身の便よき事なり。財祿にかぎらず。財祿を得るも、亦其

古之學者爲己—前註、八五頁參照

王伯—王覇に同じ、王者と覇者と也

子路問へり—論語陽貨篇に、子路曰く君子勇を尙ぶか、子曰く、君子義を以て上となす、

を得んと思ふ。是行ふ所は善にして、王道に似たれども、内心には、國土を得んと思へる利欲ありて、僞て仁義を行へるなり。是を覇道と云ふ。齊の桓公、晉の文公などの行へるわざなり。是亦義と利とのわかちなり。學者のなす所も、是に同じ。孔子曰、古之學者爲」己。是ひとへに、身ををさめん爲にせし學問にて、義なり。又曰、今之學者爲」人。是人にほめられ、名を得んためにする學問なれば、利なり。しかれば、王伯のわかちも、君子小人の分も、學問の實否も、皆義と利との二よりわかる。

一子路問へり、君子は勇をたふとぶやと。子路は勇をこのむ人なれば、かくは問へり。孔子こたへて曰、君子は義をたふとぶ。位ある君子、もし勇のみありて義なければ、其力にまかせて反逆をなし、亂をおこす。位なく賤しき小人、もし勇のみにして義なければ、其力あるをたのみて、盗賊をなす。凡勇は、氣に力ありて、人をおそれざるを云ふ。力を恃みて義無ければ、かくの如し。義は事の主なり。義を以て事を行へば、其事正し。義なくして事を行へば、其事皆邪なり。勇はまことに善をなすべき力なり。義を以て勇を行へば、其勇貴ぶべし。治世には、其力を以て善をなし、亂世には、其力を以て、武を行ひ、敵をうち、亂をしづむ。是皆義を以て勇を行ふ徳なり。まこ

人、朱熹と親交ありき著はす所南軒易説、南軒集等あり

胡五峯—宋代の人、名は宏、字は仁中、著はす所知言及び皇大紀あり、學者五峯先生と稱す

董子の言まことに至れるかな。張南軒の説も、亦道理分明なり。共に諸子にすぐれたり。君子の道は、萬事の行皆義理に志して、我が身のために計らず。是君子の心とする處、小人のことなる處なり。たとひ天下に公なる善事を行ふとも、心にわが爲にする私あらば、是義に非ず、利なり。小人の身に善行なくして、心ひとへに利をむさぼりて、義をすつるは、言ふに足らず。たとひ人ありて、身に行ふこと善なれど、其心に露ほども、わが利を計りねがふ所ありて行はゞ、郷里のほまれある人といへども、義にあらず。此所は、君子の心術の上にてくはしき論なり。小人の上の沙汰にはあらず。たとへば潔白なる物に、一點の墨を附くれば、白と云ひがたきが如し。天理人欲同レ行異レ情と、胡五峯いへり。天理は義なり。人欲は利なり。義も利も、身の行は善なれば、同じ事なれど、心底に公と私とのかはりあり。是同レ行異レ情なり。是亦義利の分ちなり。又王覇の辨もこゝにあり。いにしへの聖人、仁義を行ひて、民をなつけ給へば、國天下の民、自らよろこんで、まことに歸服す。是誠の道を以て、民ををさむる也。是を王道と云ふ。堯舜、禹湯、文武などの行ひ給ひし道是なり。又仁義の徳はなけれど、仁義の名をかりて、善を行ひ、民を服し、亂をしづめて、國天下

しとせずして來る亦將に以て吾國に利するあらんとするか、孟子對へて曰く、王何ぞ必ずしも利と曰はん亦仁義有るのみ
利者義之和也—易に出づ。
張南軒—張栻を謂ふ、字は敬夫、宋の廣漢の

我が身を利すれば、必人を害す。其はては、必我が身の禍となる。義を行へば利を求めずして、利自らあり。故に利を以て利とせず、義を以て利とす。されども利を得んために義を行ふは、眞の義にあらず。

一董仲舒曰、仁人正其義、不謀其利、明其道、不計其功。利とは義を行ふ自然のしるしなり。故に利者義之和也といへり。君に仕ふるを以ていはゞ、朝夕つゝしんで君によく仕ふれば、君もよろこびて、我を愛し給ふ。是義の和する處利なり。君子の、君につかへて義を行ふは、唯一すぢに君のためにして、私のためにせず、君の寵愛をねがふ心あるべからず。是義を正して利をはからざる也。君に仕ふるに限らず、萬のこと、皆かくの如し。すこしも我がためにする心あるは利なり。義にあらず。此利は、みだりに財祿をむさぼる如くなる利欲にはあらず。仁人の事なれば、利欲は云ふに及ばず。義を行ひて、自から來る自然のしるしを云ふ。其自然のしるしを得んと思ふは利なり。張南軒、義と利とを説いて曰、義は爲にする處なくして爲るなり。利は有所爲而爲之也。いふ意は、義は唯我がすべき道なればするなり。名聞利養か何ぞ、わが身の爲にするにはあらず。もし名聞利祿私愛のためにするは、義にあらず。是利なり。

わかち—區別の義

易において云々—前註四一五頁参照—

孟子の云々—梁惠王上に、孟子梁の惠王に見ゆ。王曰く叟千里を遠

ずして、生養をとげず。いましめざれば、惡人こりず、人を妨ぐる故、仁愛の道行はれず。惡人を戒むるも、人を助んとの心なれば、義も仁よりいづ。人を愛するは仁なり。善人を愛し、惡人を罰するは義なり。文道を以て、人民を愛しなつくるは仁なり。武道を以て、人をおどし、敵をうち、亂を鎭むるは義なり。文武の道も、即仁義よりいづ。凡此等の理を以て、おして仁義のわかちを知るべし。仁義はもと一理にしてわかれたり。一を缺くべからず。人道は唯仁義の二ツにあり。故に聖人易において、人の道をたてゝ、仁義と云ふとのたまへり。二ツの者そなはりて、人道たつ。人の禽獸にかはれるは、唯仁義あるによれり。人は萬物の靈と稱し、天地の性は、人を貴しとし、萬物にすぐれたれば、我が身ながらも貴きは、是仁義の性ある故なり。もし仁義をすてゝ行はずんば、何ぞ貴ぶに足らんや。

一孟子の、梁惠王に對して、利をおさへて、仁義を說き給ふは、仁なれば、心に私欲なくして、人を愛する故に、人をそこなひて、わが身を利することはせず。義なれば人に取ると、人に與ふると、必宜しきにかなふ故、取るまじき物を取りて、我が身ひとりを利する事をばせず。利は仁義のうら也。我が身に私して、人をかへり見ず、

分にかなふは、分殊なり。

一尙書に、以禮制心、以義制事といへり。禮は敬のみ。敬して心の私曲を制するなり。義を以て事を制すとは、萬事を行ふに、其事に宜しく制するなり。制すとは、たとへば長きを斷ちてよき程にし、多きをへらしてよき程にするが如し。物を裁判してよきやうにするを云ふ。是仁をたすくるなり。一年の功も、春夏生長するは仁なり。秋冬收藏するは義なり。收藏とは、草木零落し、生氣をさまりて、根にかへるを云ふ。仁ありて、義なければ、たとへば春夏の生長するばかりにて、秋冬の收藏なければ、萬物成就せざるが如し。子を育つる一事を以ていはゞ、子を愛するは仁なり。子の惡を戒むるは義なり。愛せざれば、恩なくして他人の如し。愛のみにて戒めざれば、其子不義にながれ、惡におち入りて、わざはひとなる故、姑息して愛するが、かへりてあたとなりて、眞の愛にあらず。君を愛するは仁なり。君に過あれば諫め、君のために身を忘るゝは義なり。君として下を愛するは仁なり。臣の惡をいましめ、臣下の才德の高下と、貴賤の位にしたがひて、各相應につかふは義なり。又人民を愛し養ふは仁なり。法をたて罪あるを刑して、いましむるは義なり。愛せざれば、人民安から

仁は人の心なり—前註四三三頁參照

つたなき—怯の訓也、卑怯未練の義に解すべし、拙きにはあらず

ざ、道理にかなふ故に、賢を尊ぶほど、大に宜しきことは無きなり。孟子も、仁は人の心なり、義は人の路なりとのたまへり。仁は人の心とする所、生理なり。義は人の行べき路とする所、道理なり。仁なければ、人心を失へるなり。義なければ、人道を失へるなり。凡義は、つねに居ては、理にしたがひ、欲にしたがはず。變に居ては、節を守りて、利に走らず。艱難に臨みては、君上のため身をすてゝ、忠を行ふ。義なければ、常に居ては、理の宜しきをすてゝ、唯利のためにし、變にのぞみては、恩をわすれ、德にそむき、利につき、害をのがれ、命ををしみ、死をおそれ、君父をすてて敵にくだり、つたなき振舞をしても恥ぢず。禽獸にひとしきわざなり。皆是義を失ふなり。

一 仁は、溫和慈愛なるを云ひ、義は斷制なれば、善惡を二ツにわかちて、善をこのみ惡をにくむを云ふ。ひろく衆を愛するは仁なり。小人を遠ざけ、君子に近づくは義なり。財を人に施すは仁なり。與ふべきか、與へまじきかをはかりて、與ふべきものに與ふるは義なり。こゝを以て、仁は理一なり、義は分殊なり。仁はひろく人を愛す。是理一なり。義は人を愛するに、親疎貴賤貧富をわかちて、其宜しきにしたがひて、各其

墨子が兼愛ー前註、一二八頁参照

を義と云ふ。人を愛するは仁なりとて、親も他人も一やうに愛するは、宜にあらず。是墨子が兼愛なり。宜とは其物其事に相應するを云ふ。たとへば、夏はかたびらを著、冬はわた入の小袖を著るが如し。宜しきに品多し。人の位により、わが位により、時により、處により、年の老幼により、其外萬事萬物に附て相應あり。是宜なり。宜にかなふは、卽義なり。朱子又義者斷制裁割之道理といへり。斷制裁割は、たちわかつの意。是仁の溫和慈愛に對していへり。事物にのぞめば、其善惡をたちわかつこと、たとへば利刀を以て物を二ッにさくが如し、仁は春夏の氣の、のどけく、やはらかにして、萬物を生長せしむるが如し。義は秋冬の氣の、ひやゝかに、はげしくして、物を枯し凋むるが如し。中庸に、義者宜也、尊ㇾ賢爲ㇾ大とは、上に仁者人也、親ㇾ親爲ㇾ大といへるに對せり。仁はあまねく人を愛する理なり。義は愛すべき人を、各其品にしたがひて愛し、又敬ふべき人を敬ふ理なり。其中につきて、賢人を尊ぶは、尤義の大なるなり。如何となれば、多くの人の内にて、人をえらびわきまへて、賢人を尊ぶは、其人に相應したる事なり。是宜なり。賢をたつとびて、大賢は師とし、小賢は友とすれば、其敎いさめをうけ、我が智ひらけ、萬の道理明かになり、わが身のわ

五常訓巻之四

○義

一中庸曰、義者宜也、尊賢爲大。朱子章句云、宜者分別事理、各有所宜也。周子も、宜曰義。釋名曰、義者宜也、裁制事物、使合宜也。諸説皆宜しきを以て義とす。宜しきとは、萬事萬物の品にしたがひ、其理をわきまへて、相應するを云ふ。朱子は、義者心之制、事之宜といへり。制とは、たちわかつ意、裁判するなり。心の制とは、心中に善惡をわかつ所の理あるを云ふ。義の心にあるは、利刀の如し。物來れば、刀を以てたてば二となる。善惡を決斷する事、かくの如し。是心の制なり。義の體とす。事之宜とは、諸事に相應して、其理の宜しきにしたがふを云ふ。是義の用とす。事之宜は、心の制ありて、善惡をたちわかちて後の事なり。人を愛するは仁なり。父母、兄弟、妻子、親戚、朋友賓客の親疎貴賤の品にしたがひ、其相應に愛するは宜なり。是

ふべけれど、仁の理、いたりて大なれば、我が愚にして、一たびに、たやすく理のきこゆる程說きがたければ、如何にもして、此書を見る人に、古人のいたれる敎をさとらしめんために、愚忠をつくして、かへすぐ〵いふのみ。

德と謂ひ、其親を敬せずして他人を敬する者之を悖禮と謂ふ

朝に道をきいて—論語里仁篇

西銘—前頁に出でたる張載の著書

り。天災にあひて、難儀に及ぶといへども、つゝしみて天命を畏れしたがひ、天を怨みざるは、人の子としては、申生が繼母の讒にあひて、父獻公より殺されしかど、父母をうらみざるが如し。天よりうけたる所の五常の性を、全くたもち行ひて缺かざるは、たとへば曾子の、父母にうけたる身體を毀ひ傷らざるが如し。天より我を富貴にし給ふは、父母の我を愛するが如し。天恩をよろこんで忘るべからず。天より我を貧賤にして憂あらしむるは、天の我を惡み給ふにはあらず、我が身に艱難を見せしめて、我が德行を成就せしめん爲なれば、天を怨むべからず。親に事ふる孝子は、其身生ける間は、親にそむかず、したがひ事ふ。死ぬれば心安んじて、親に恥づる事なきが如く、天につかふる人も、生ける間は、天道に從ひてつかへ奉るが、人となれる道なり。死ぬれば心安くして、天に恥づる所なかるべし。是いはゆる、朝に道をきいて、夕に死すとも可なりの意也。凡西銘の意は、はじめより半まで、人は天の子にして、天地萬物、皆我が一體なることを說けり。半より後は、天地につかへて仁を行ふ道をいへり。尤よく見て、其理を自得すべし。

一同じ事を、重てしば〳〵いふ事、老のくりことのやうにて、見きく人、厭ひきらひ給

張子―張載をいふ、宋の關中の人、兵を談じ釋老を讀み後二程子を見るに及び盡く異學を捨てゝ儒學に歸す、關西の士景仰して横渠先生と稱せり

悖德―孝經に、其親を愛せずして他人を愛する者之を悖

一　張子の西銘の意は、仁人の天につかうまつる道をいへり。天を父と稱し、地を母と稱し、人は其恵によりて生る。天地の氣をとりて、我が身體とし、天地の理をうけて、我が本性とす。故に人は天地の子なり。天下にあらゆる民は、われと同じく天地の子なれば、皆我が兄弟なれば、尤愛すべきこと、云ふに及ばず。鳥獸草木などの萬物は、わが類にはあらざれども、同じく天地の氣をうけたれば、我がともがらなり。是又あはれむべし。妄にそこなふべからず。大君は我が嫡兄なり。大臣は嫡兄の家相なり。老人をうやまふは、わが兄を敬ふなり。幼きを慈むは、わが弟を愛するなり。凡天下の病者、かたわ、子なき老人、父なきみなし子、やもめなどの、貧窮にしてたよりなき者は、皆我が兄弟の内にて、不幸なる人なり。とりわき憐むべし。人たる者は天の子にして、天下の人は、皆わが兄弟なる事かくの如し。故におよそ人となる者は、天地につかへて、おそれつゝしみ、天地の道にしたがひ行はずんばあるべからず。人の子として、親に孝するが如くなるべし。天理にそむくは、子として父母にそむく、悖德の子の如し。仁を害するは、天のため賊子なり。賊子とは、親の仇敵となる子を云ふ。天につかふる道をつくして、天心にかなへる人は、子として舜の如き大孝の人な

人皆有不忍人之心―孟子公孫丑上
笑止がり―氣の毒に思ふこと
克伐怨欲―論語憲問篇に、克伐怨欲行はれず以て仁と爲す可し、子曰く以て難しと爲す可し仁は則ち吾知らざる也
仁遠乎哉―論語述而篇

かぎらず、鳥獸草木まで、そこなひ苦むるに怺へがたきは、即仁心なり。しかるに唯人に忍びざるの心ありと宣へるは、萬物皆わが一體にして愛すべけれど、中について、人においては同胞なれば、其あはれみ尤せつなる故に、とりわき人に忍びざるの心ありとのたまふ。人の憂苦を見ながら、何とも思はで忍ぶは、心つよき人といふべし。其心つよきといふは、即人に忍ぶる心なり。是不仁の別名なり。

一仁者は人我のへだてなし。我が身を立つるを半とし、人を立つるを半とす。他人すら隔つ可からず。いはんや一家の親戚をや。況や父母兄弟をや。此心をもて人倫にまじはらば、人我の私少なくなりて、克伐怨欲の、人を害し、我を利せんとする心、やうやく薄く成りて、仁愛の道行はれなん。人もし此心において、人我の偏執ふかく、唯己を利して、人を惠むに心なきは、たとひ無學の人といふとも、其むまれつきたる天性の良智にも、かほどの理は知りぬべければ、など其本心にそむきて、斯るさがなき事わざをばしぬるや。況や學者は、猶其つみ、殊更おもきことにこそあれ。

一子曰、仁遠乎哉、我欲仁斯仁至矣。仁は人の心なり。なんぞ遠きにあらんや。我に有る故に、このんで求むれば、即得やすし。是仁至るなり。

不仁者は云ふ—孟子離婁上に、不仁者與に言ふ可けんや其危きに安んじ其菑を利とし其亡ぶる所以の者を樂む、不仁にして與に言ふ可くんば則ち何ぞ國を亡ぼし家を敗ること之れ有らん

だ義理にくらきのみならんや。我が身の禍福損得をもわきまへず。かなしむべし。不仁の至なり。

一孟子曰、不仁者はともに言ふべからず。いふ心は、不仁者は、道理を教へいさめがたしとなり。又曰、其危きことをやすんじ、其亡ぶるゆゑんをたのしむ。いふ意は、不仁者は、我が身の危ふき事をおそれずして、やすんじ、其身ほろぶることを行ひて、たのしみとす。愚なりと云ふべし。

一孟子曰、人皆有不忍人之心。忍ぶとはこらゆるを云ふ。かんにんする也。人たる者、必皆人に對して、堪忍ならざる心あり。いふ意は、人のうれひ苦める事を見ては、わが心かなしみて、怺へがたくして笑止がり、うれひかなしむ。是人に忍びざるの心なり。即仁心なり。此心人皆これあり。孺子の井に入んとするを見て、おどろきかなしむ心是なり。此心をおしひろめ行ふは、仁をする道なり。人のきらひいやがる事を、此方よりしかけて、何とも思はずして堪忍し、科なき人をしへたげ苦めて、何とも思はずして堪忍する、是皆人に忍ぶるの心なり。とにかくに、心つよくして、人の憂をかなしまざるを云ふ。是人の本心にあらず。憂苦を見て、忍びがたきは、人に

積善の家云云―易文言傳

天道好還―以道佐人主章に、其事好還とあるをいへるならん

おそるべし。善には進みがたし。故につとむべし。

一およそ人、精力をつひやす者、時にあたりては、其損を知らざれども、時ありて盡きぬ。精力をやしなふものは、時にあたりては、其益を見ざれども、時ありてさかんなり。人の善惡を行ふも、亦かくの如し。德をつみ、行をかさぬれば、當時は其福を知らざれども、時ありて世に用ひらる。義をすて理にそむくは、當時は其禍を知らざれども、時ありて亡ぶ。易に、積善の家には必餘慶あり、積不善の家には、必餘殃ありといへるは、此意なり。善は積みかさねて後來るゆゑ、善を行ふ志はおこたるべからず。小善なりとも行ふべし。惡はつもれば必わざはひとなる。故に小惡なりとも行ふべからず。おそるべし。

一尙書曰、天道は善にさいはひし、淫にわざはひす。又曰、善をなせばこれに百の祥をくだし、不善をなせばこれに百の殃をくだす。又老子曰、天道好レ還。是皆天道の、善をこのみ惡をにくみ給ひて、善人にさいはひし、惡人にわざはひして、善惡の報をかへし給ふ理をいへり。此理、古今和漢其證多ければ、必うたがふべからず。愚者は此理を知らで、天道をおそれず、唯眼前の利をむさぼりて、後のわざはひを知らず。豈た

南天竺國香至王の子にして梁の大通二年（我紀元一一八八年）逝く、支那禪宗の第一祖にして唐の代宗の時圓覺大師と謚す

ことを以て、佛事さかんに過ぐるは天の譴あり。又佛意にもかなはずと云ふ事を知るべし。又報にあはんため、福を求めて善を行ふは、是利欲の心よりいでたり。陰德にあらず。惡を行ふよりまされりといへども、誠の善にあらず。同じく力を用ふる事なるに、誠の心より善を行ふべし。いつはりを以てするも、苦勞は同じことにて、いたづら事なり。

一人は貴き賤しき、唯つねに仁心を存して、日々に、人に利益あることを行ふべし。忿をこらへ、慾をおさへて、日々善行をなすべし。いかりと慾をこらへざれば、善を行ひがたし。唯いかりをおさへ、慾をこらゆる人、善をよく行ふ。わが身を利して、人に損ある事を行ふべからず。我が力にしたがひて、人を救ふべし。仁心をだにたもちなば、日々に善行多かるべし。少しは財をつひやし、少しは心をつかひ、少しは隙をつひやしても、人の利益になる事を行ふべし。人のために益ある事をせずして、我が身に利ある事のみするは、小人の心なり。日々善にならへば、善心日々にさかんになる。日々惡にならへば、惡心日々にさかんになる。善にならへば、日々に樂み、惡にならへば日々に苦む。善惡共にならひによれり。されども惡にはおもむき易し。故に

羅泌—宋代の人、字は長源、學問該博を以て世に聞ゆ
達磨—菩提達磨の畧稱

り。常に心を用ひて、天意にしたがひ、民をあはれみ、困苦をすくひ、政をおこし、仁をほどこさば、其功大にして、天道のむくいも亦限りなかるべし。富貴の人、多くは陰德の行ふべきことを知らず、勢に乘じて、下の苦をかへり見ず、人のつひえを厭はず、わが身ひとつの榮花をきはむれば、陰德なくして、天地のいかり、人民のうらみ積て、後はわざはひ出來、子孫にもむくふものなり。天道は、まことに畏るべきかな。又陰德をば行はずして、鬼神にへつらひ祈りて、福をもとめ、禍をのがれんとして、無益のことをなし、民をくるしめて、財をつひやす。是をたのんで、禍を免れんとせば、天地神明の御心にそむきて、かへりて禍あり。佛家にて、是を業福と云ふ。佛道においても、甚きらふ所なり。佛道よりいはゞ、佛は慈悲を專らにすといへば、かゝる民の苦となることは、佛意にかなふべからず。故に羅泌が路史と云ふ書に、佛事さかんなれば、天譴を招くといへり。いふ意は、佛事結構すぎて、過分の財をつひやして止まざれば、民のわざはひとなりて、必天のせめありといへり。古も其ためし多し。梁の武帝、伽藍を多く建て、佛事を盛にせられし事を達磨に問はれしに、無功德とこたふ。武帝は、つひに臣下のために臺城におしこめられ、餓死せらる。かゝる

かたわ—片羽の義なれば、かたはの假名を宜しとす

ことわり—條理を明かにするをいふ

惡人をしりぞけ、才能を取あげ、人の害をのぞき、人の利をおこし、ひろく民をすくひ助くべし。位なくとも、人をあはれむ心は同じかるべし。人の財をつひやさず。人に苦勞をなさしめず。人の財を借りては、我が身を儉約にして、必早く返して、人をくるしめず。老人病人をいたはり、かたわなる人をあはれみ、人の才能をねたまず、ほめすゝめ、妄に人をそしらず。人に善をすゝめ、惡をいましめ、人を敎へてうまず。下部をあはれみ、風雨寒暑に人を苦めず。人のしへたげられたるをことわり、人の恨憤をとき、力あらば道橋を修理して、往來のなやみ無からしめ、又は禽獸蟲魚をみだりに殺さず。草木をも時ならざれば妄にきらず。凡かやうの事を陰徳と云ふ。是人をあはれみ、物をめぐみて、天道につかへ奉る道なり。陰徳を行ひ、久しきをつめば、必其むくいを求めざれども、後日に必天道のめぐみありて、しば〱禍をのがれ、福壽をまし、其家をさかんにして、子孫に福あり。是亦天道の善にさいはひし給ふ常理にして、古今和漢のしるし多き事、あげて數へがたし。うたがふ可からず。貧賤の人すら、陰徳を行へば、其報かくの如し。いはんや、一郡一鄕を領し、或は司位高き人は、下をやすんじ、民を養ふを以て職分とすること、是天より命じ給ふ所な

殖すは能く施し賑すを貴ぶ、否らざれば則ち守錢虜のみと、盡く其有する所を散じて以て昆弟故舊に頒つ

陰德—前註一三五頁參照

鰥寡孤獨—前出、三九頁參照

陰德は耳のなるが如し。我のみ知りて、人知らずといへり。又古語に、陰德ある者は、必陽報ありといへり。いふ意は、陰德ある者は、かげにて善を行へども、必天道に通じて、あらはに天のむくいありて、福を得るとなり。

一陰德は、富貴なる人のみ行ふべきにあらず。貧賤の人といへど、其志あれば、行はれずと云ふ事なし。如何となれば、金銀米錢を多く妄に人にあたへ、無益の事をなして、財を多くつひやすを、陰德と云ふにあらず。たゞ我が分限にしたがひ、力の及ぶほど、施しめぐむべし。仁愛に心を用ふれば、誰も成りやすし。せめて我が身の奢と欲とに、財と心を用ふる十分が一の力を費さば、其救ひ施す事ひろかるべし。仁愛ふかくして、久しく陰德をつみ行へる人は、其惠をうくる人の喜ぶのみにあらず、天地神明の御心にかなひ、よろこび給ふ理なれば、必天道のむくいあつく、目に見えぬ鬼神のまもりありて、たび〱禍をのがれ、子孫もながく榮えたのしむこと、其理明かにして、古今和漢、ためし少なからず。何の福か是に如かん、何の祈禱祭祀か是に如かんや。人をすくふ道は多し。うゑこゞえする人を助け、鰥寡孤獨のより所なき者を惠み、乞丐の人にほどこし、人の困窮をたすけ、もし位あらば、善人をすゝめ、

守錢虜―後漢書に、馬援、牛馬羊數千頭穀數萬斛あり、歎じて曰く凡そ貨財を

救ふべし。一人も餓死せしむる事なかれ。民の妻子下人を賣らしめ、父母兄弟離散し、貧窮飢寒にいたらしむる事、わが身にかへり見るべし。心をいたましむる至極なり。あはれむべし。凡吝嗇にしては、仁義禮智共に行はれず。殊に仁の道缺くるものなり。又吝嗇ならねども、不仁なる人は、人をめぐむ事をこのまず、無用の事には、財を多く費すもの也。

一道橋の、通りがたき危き所は、力あらば修理して、道行く人を、心やすく自由に通らしむべし。又途中に、人の足をそこなふべき杙荊などあらば、のぞくべし。其外かやうの心づかひをすべし。是陰德にして、仁愛の道なり。

一人もし富貴にして、いたづらに財を貯へ、人に施さざらんは、富貴なる益もなく、思出も無きことなるべし。古人これを守錢虜と云ふ。親戚、朋友、又わが家に出入する者、采地の農人、わが門にくる乞丐など、貧窮にくるしめる者あらば、我が力に隨ひて救ふべし。是富貴なるかひありて、樂とすべき事なり。

一人の世にをるは、陰德をつみ行ふべし。陰德は、かげのめぐみと訓む。慈愛を心の內にひそかにたもちて、人を救ひ助くるを云ふ。世俗にこれを慈悲と云ふ。古人の曰、

多く藏むれば云々―老子名譽身章に、名と身と孰れか親しき身と貨と孰か多る(まさる)、得と亡と孰れか最病しき、故に甚だ愛すれば必ず大いに費え多く藏むれば必ず厚く亡ふ

易に云々―前出、二六五頁參照

の費をなさずとも、身ひとつを過し、且父母、妻子、從者をやしなふ事も、足りやすかるべし。其餘の財は、さほど多く積重ねずともありなん。多く藏むれば、必厚くうしなふと、古人のいへる如く、財を多く積重ぬれば、かへりて禍出でくる理あり。天の惡み給ふ所なればなり。彼の世をわたりかねて、うれひ苦める人に、わが力にしたがひて、施したすけば、あに心よからざらんや。是われに天地より生れつきし所の仁を行ひて、天地につかうまつる道なれば、わが職分をつとむるなり。

一天地の、我に財祿を多くあたへて、富貴にし給ふは、必我一人のために、厚くめぐみ給ふにはあらず。我が力を以て、貧なる者に財をほどこし惠ませんために、我におほく財祿をあたへ給ふ理なれば、人に施さざるは、天の御心にそむく理なれば、おそるべし。我が財を惜むべからず。もし天心にそむき、財多くして人に施さざれば、わざはひ出來るものなり。易に天道はみつるを缺くといへり。又物みつれば缺くともいへり。古語にも、あつまれば散ずとも云ふ。財おほくて、人の貧窮をめぐまざれば、みちて缺くるの禍あり。おそるべし。又我が采地の民は、我が養ふべきものなれば、年凶にして、饑饉に及ばゞ、わが身の俸養を儉約にし、費さずして、力にしたがつて

ようすが—手段、方法の意

かなしむ—本節二個のかなしむの語、共に、哀憐す、可哀相に思ふの義に解すべし

義にそむく。眞の仁にあらず。今の人聖學をまなばず、聖道を知らずして、みだりに聖人の法を議すべからず。

一此世にむまれては、高きもいやしきも、皆同じく天地の子にして、同じ人なるに、なかにつきて、不幸なる人は、家まどしく、財なくして、つねに衣食ともしく、朝夕うれひ苦めり。且年あしく、衣食ともしく、やしなひ足らずして、世をわたるようすがなき人多し。わが身幸にして、かゝる苦なく、かれは不幸にして、かゝる憂にしづめり。彼の貧民、たとひ疏遠の人なりとも、其本をたづぬれば、同じく皆わが兄弟のわびしき人なれば、豈かなしまざらんや。我がともがら、幸に天地の徳により、主君の恵をうけ、父祖の恩によりて、たとひ富貴ならねど、世わたる事、さほど苦まざる身ならば、其分にしたがひて、彼の我にしたしき人、我が知れる人の、世をわたりかねて、憂にしづめる人を救はざらんや。もしこれをかなしと思はず、救ふ志なくば、我ながら不仁にして、天地の御心にそむきぬる事、おそるべきと思ひ、自ら其身を責むべし。我が身のやしなひは、如何なる富貴の人といへど、日に一升の穀をくひ、年に一襲の衣を著るに過ぎず。されば我が身の俸養は、さほど豐かに厚からずして、多く

四時の狩ー爾雅釋天に春の獵を蒐と爲し、夏の獵を苗と爲し、秋の獵を獮と爲し、冬の獵を狩と爲す

をならはしめ、軍法を敎へんがため、四時の狩をして鳥獸をころせしは理なり。君子の道は、唯理にしたがふのみ。理にしたがはざれば、親をすてゝ他人を愛し、人を愛せずして鳥獸を愛し、近きをすてゝ遠きを親むは、理にそむきて仁にあらず。君子の人物を愛するは、理一にして、分殊なり。君子の心は、すべて人倫を愛し、萬物を愛せずと云ふ事なし。是理一なり。理一とは、すべて萬物を愛する理は一なり。愛せずと云ふ事なきなり。理一は是仁なり。人を愛する内にも、親、兄弟、妻子、親戚、朋友、臣僕の品あり。是分殊なり。分殊とは、愛する内に、其親しきうとき、高きいやしき、大と小との分によりて、其愛する品に、厚薄のかはりあるを云ふ。分殊は是義なり。禽獸は愛すべしといへども、時により、事により、殺すべき義あり。是又分殊なり。されども是を用ふるに、時あり禮ありて、みだりに殺さず。草木をきるにも、時ありて妄に伐らず。古は春夏に草木をきらず。成長する時なればなり。山林に入りて木をきるにも、鳥獸をころすにも、時あり。獸の子をとらず、鳥の卵をとらず、胎あるも殺さず、巢をくつがへさず。皆是天道にしたがひ、物をあはれむ仁なり。殺すべくして殺すは、義にして、仁其中にあり。殺すべくして殺さゞるは、仁に似て

殺しきるべき道理なれば、是非に及ばず。又俸養のため、人の利益となり、民用を助くれば、やむことを得ずして、これを用ふ。是義なり。然らずして、人間に妨なくば、其生育をとげしむべし。是物を愛するの仁なり。不仁なる人は、わが身の外は、すべて心をかよはさずして、情なく、物のあはれを知らず、物を苦めいたましめ、命を断つ事をこのむ。あさまし。

一儒者の道、鳥けだものを殺すは、不仁なりと云ふ人あれど、それは道を知らざる人の言なり。君子は故なければ、鳥獣をころさず。故なくして妄にころすは、儒者の道にあらず、末世の人のわざなり。是を儒者の道と云ふべからず。ころすべき理あれば、人をも殺して、義にあたる。いはやん鳥けだものをや。殺すまじき理あれば、草木をも伐らず、禽獣はさらなり。曾子曰、樹木時を以てきり、禽獣時を以てころす。孔子曰、一樹をきり、一獣をころすも、其時を以てせざれば不孝なり。是みだりに木をきり、物をころすは、天地の物をそこなふなり。不孝と云ふべし。いにしへの人、田はたけに作れる五穀をそこなふ鳥獣を殺して、民のために害をのぞき、是を用ひて、宗廟社稷の神をまつり、老をやしなひ、賓客にそなふるため、民の隙を用ひて、武事

一幹を伐りの意、からは幹、莖の義也

からをきり

ぶるが如し。其亡ぶるは、民を見ること土芥の如しといへるも、仁不仁の異なるなり。

一鳥獸蟲魚を、すべて物と云ふ。物を生す事をこのみ、殺す事をきらふは、人の本心なり。されども、口腹の欲を以て、物をころす事を好むは、本心を失へるなり。命ををしみ、死をおそるゝ事、物も人と同じ。ころさるゝ時、いたみくるしむ事、物も人と同じ。子を愛する事も、物も人と同じ。たゞ物は、智なく力なく物いはず。是人とかはれり。こゝを以て、人に殺されて食はる。肉食をこのむ者は、小鳥は、一食におほきこと十にいたる。はまぐり小えび小魚の類は、一食に數十百にいたる。或は生ながら、やき煮てくらひ、或は生ながら、きりわりて食ふ。不仁なりと云ひつべし。仁に志あらん人は、物のかなしみをかへり見て、あはれむべし。ころす事を好むべからず。

一禽獸蟲魚は知なし。草木は情なしといへども。人と同じく、天地の氣をうけて生ず。禽獸蟲魚の命ををしみ、草木の其生をとげんとする理は、人と同じ。如何ぞみだりにこれを殺し、からをきり、根をたつべき。されど五穀をさまたげ、人に害あるをば、

虞書——書經の一篇也

一仁を知らんとならば、孔孟程朱の仁を說き給へる言を、數年の間、心をひそめて、求め味ふべし。急迫にすべからず。誠積み力久しくば、自然に其理を知るべし。若然らずば、聰明博學の人といへども、仁をば知りがたかるべし。

一虞書に好ㇾ生之德と云ひ、安ㇾ民則惠といへるも、皆仁なれども、未だ仁の名なし。仁の字、聖經に見ゆることは、尙書の仲虺之誥にはじめて出づ。曰、克寬に克仁にといへり。其次に伊尹の語に、民罔ニ常懷一懷ニ于有一仁といへり。孔子に至りて、專らに仁の一字を以て敎とし給ふ。孟子も亦孔子の敎を發明して、專ら仁を說き、又仁義を說き給へり。凡仁を專らとして敎へ、仁義をそなへて說き給へるは、是孔孟の家法なり。

一いにしへ國家の長久せしは、其君仁なればなり。亡びしは、其君不仁なればなり。桀紂以下、歷代不仁の君ほろびざるは無し。堯舜湯武は申すに及ばず、漢の高祖文帝、後漢の光武、唐の太宗、其餘歷代の賢君は、皆仁愛ありし故、國家長久せり。凡國家の興亡、身の安危皆仁と不仁とによれり。貴きも賤しきも、仁の道豈つとめざるべけんや。禹湯は、己が身をせむ。故にさかえたまふ。桀紂は人をせむ。故に亡びたり。己をせむるは仁なり。人をせむるは不仁なり。左傳に、國のおこるは、民を見る事や

元亨利貞―易の傳に、元亨利貞は之を四德といふ、元とは萬物の始、亨とは萬物の長、利とは萬物の遂、貞とは萬物の成なり云々

火のはじめて云々―孟子の語にもとづく、前註一二六頁參照

知らぬ人なるべし。

一程子曰、四德之元、猶㆓五常之仁㆒、偏言則一事、專言則包㆓四者㆒。いふ意は、天の元亨利貞の四德は、元を以て兼ねたり。元は天の物を生ずる理なり。これを以て、亨利貞をつらぬけり。春の生氣を以て、夏秋冬をつらぬくが如し。五常の仁も、亦かくの如し。仁を以て、義禮智をつらぬけり。天の四德も、人の四德も、ひとつ〳〵ならべ、平かにしていへば、各一事なり。專にとは、すべて云ふなり。すべていへば、元を以て亨利貞をかね、仁を以て義禮智をかぬ。

一天地の、萬物を生ずるめぐみの心を、わが身に體認して心とし、其善心の、はじめておこる所を養ひそだて、これを害する所の私欲を去りて、火のはじめてもえ出づるを吹きおこすが如く、泉のはじめて流れ出づるを導きて流すがごとくにせば、一念の惻隱をおしひろめて、萬民をすくふべし。一念の羞惡をおしひろめて、萬民を正すべし。是をおしひろめ充つれば、四海をさむ。おしひろめざれば、まぢかき父母に事ふるに足らず。

一程子の言に、聖賢の仁をいへる處をあつめて見ば、仁を知り得んといへり。今の學者、

仁は人なり―前出四三三頁參照、

子思は孔子の孫にして中庸の著者也

孺子の云々―前出、四一九頁參照

つねに止まざるなり。又曰、滿腔子是惻隱之心。言ふ意は、人の胸中にみち〳〵たる者は、惻隱の心なり。中にみち〳〵てある故に、物にふるれば、卽仁心おこる。子思孟子の、仁は人なりとのたまふも、此意なり。人の身に、仁の理みち〳〵てこれあるゆゑ、仁は人なりといへり。たとへば人の身には、生氣みち〳〵てある故、針にて刺しても、いたむが如し。人の心に、仁愛の理みち〳〵てあるゆゑ、孺子の井に入らんとするを見て、たちまち惻隱の心生ずるは、此故なり。是れを眞心と云ふ。人の本心なり。人欲の私より出づる心は、眞心にあらず、本心をとり失へる也。程子又曰天地生物之理可ㇾ觀、而不ㇾ可ㇾ言、識ㇾ之者便知ㇾ道也。天地の物を生ずる理は、眼前にみちて見ゆる處なれば、見るべしといへど、其理は、ことばに述べがたし。若これを知れる人あらば、卽道を知れる人ならんとなり。右の數說は、程子の、よく仁を知れることばなり。仁を知らずしては、如ㇾ此言ひがたかるべし。學者心をつけて、此等の說をしづかに玩味して、天地生物の理を自得すべし。もし此理を自得せば、仁を知れる人なるべし。しからば、其の樂、手のまひ足のふむ事を知らざるべし。此理を知らずんば、四書六經の文字訓詁を詳かに知り、其上博學多識にして、古今に通ずとも、道を

は、仁心の、外物の欲にひかれて取失へるをさめて、求め得べしとなり。學問の要は、わが仁心の放れだるを求め得るより外にこれなし。放心を求むるの工夫は、敬にあり。敬とは、おそれつゝしみて、此心をまもり保つ工夫なり。内にある仁心をば、外におしひろめ行ふべし。外物にひかれて、仁心を放ち失へるをば、をさめて内に入るべし。

一程子曰、觀二天地生レ物氣象一。是天地の生理のやまざる處、眼前に見えたるをいへり。其氣象は、即溫和慈愛なり。人にありては仁なり。又曰、萬物之生意最可レ觀。言ふ意は、萬物皆生意あり、是仁なり。中につきて、物のはじめて生ずるは、生意さかんにして、見えやすし。竹の子など、はじめ生ずる時。日夜に長ずる事さかんなるを以て見るべし。枝葉しげれる時は、生意見えがたし。仁の理、はじめて惻隱にあらはるゝ時は、此心尤さかんにして見えやすし。ひろく政をおこし、仁をほどこす時にいたりては、其理廣大にして、かへつて見えがたし。又曰、觀二鷄雛一此可レ觀レ仁。鷄のひよこの初て生じて、動きやまざるも、生意のはじめてさかんなる時、此理見よければなり。又曰、切レ脈最可レ觀レ仁。此意は、人の脈の、常に發して止まざるは、生意の

の心也の語の續きに曰く、義は人の路也、其路を舍てゝ由らず、其心を放ちて求むるを知らず、哀なるかな、人鷄犬の放るる有るや則ち之を求むるを知り、放心有りては求むるを知らず、學問の道他無し、其放心を求むるのみ

りて人に由らんや。顏淵曰く請ふ其目を問ふ子曰く非禮視る勿れ、非禮聽く勿れ、非禮言ふ勿れ、非禮動く勿れ云々

學問之道云云—仁は人

に私欲なくして、禮を以て物を見、物を聞き、禮を以て口にいひ、體にうごくべし。非禮とは、上にいへる、己が身より出づる私欲なり。淫聲邪色などの、外物の非禮にはあらず。非禮勿視とは、身に禮なくして、私欲を以て物を見る事をいましむべしと也。外の邪なる色見ざるは云ふに及ばず。非禮して勿聽とは、身に禮なくして、私欲を以て物を聞く事をいましむべしとなり。外の淫聲を聞かざるは云ふに及ばず。非禮していはず、非禮して動かず。此四の者は、身の私欲にかちて、天理にかへる工夫の條目にて、卽仁をするの事なり。克己は人欲にかつなり。復禮は天理を存するなり。人欲にかちて、又天理にかへる、二の工夫なり。一を缺くべからず。人欲にかちたるのみにて、天理を存せざるは、異學の事なり。此問答は、孔顏傳授の心法なり。いるがせに思ふべからず。學者のつとめ行ふべき所なり。

一身の私にかちて、道理に立ちかへるは、仁の體なり。人を愛し、物を利益するは、仁の用なり。體ありて後、用行はる。故にまづ我が身の私にかち、禮にかへるべし。人欲去らず、天理行れずしては、仁愛の道、人に施しがたし。

一孟子は、仁人心也と說き、學問之道無他、求其放心而已矣と說き給ふ。求放心と

五常訓卷之三

○仁之下

顔淵仁を問ひ給ふ—論語顔淵篇に顔淵仁を問ふ、子曰く己に克つて禮に復るを仁と爲す一日己に克つて禮に復れば天下仁に歸す仁を爲すは己に由

一孔子の弟子顔淵、仁を問ひ給ふ。孔子答へて曰、克己復禮爲仁。己とは身の私欲也。禮とは、身の行ふこと理にかなひて、ほどよきを云ふ。仁を害するものは身の私欲なり。身の私欲にかちて、身の行ふ所理にかなひて、ほどよきに立ちかへりぬれば、本心の徳に害なくして、全くなる。全しとは、きずなきを云ふ。是仁をなす工夫なり。凡私欲は、おのが身より出づるものなる故に、己が身にかつは、即私欲にかつなり。禮は元來吾が身に生れつきたる理なれど、私欲に奪はれて、取失へるを、もとの如く取返して、立歸るべしとなり。顔子、又、克己復禮べき條目を問へり。孔子こたへ給ふ意は、凡人の身に、耳目口體あり。目は見、耳はきゝ、口はいひ、體はうごく。人のわざ多しといへども、此四の事の外にこれなし。此四の事につきて、其心

論語子罕篇に、子罕に利と命と仁とを言ふと見え、程氏之に註して曰く、命の理は微、仁の理は大、皆夫子の罕に言ふ所也

李延平―宋代の人名は侗、字は愿中、學者延平先生と稱す、朱子の師也

いへど、其理のふかき事は、聞き得る人少なければ、稀に說き給へり。又一事の善も仁心より出づといへども、仁の全體は、至て大にして、少しもきずなきを以て名づくる理なれば、仁を以て人に許し給ふ事まれなり。顏子の亞聖も、三月仁にたがはずとのたまひ、三月の後は、仁あることをゆるし給はず。仲弓、子路、冉求、子貢、公西華などは、皆孔門の歷々の高弟なり。されど皆仁をばゆるし給はず。陳文子令尹子文は、其行高しといへども、夫子各其長ずる所をば許して、仁をゆるし給はず。是仁は至て精粹にして、廣大なる道理なればなり。李延平曰、當理而無私心則仁矣。いふ意は、行ふわざ道理にかなひて、心中に私なきは、仁なりとなり。行ふ所理にかなへども、心に私あるは、仁にあらず。心に私なきとても、行ふ所理にあたらざれば、仁にあらず。内外共にきずなき人は、孔門の賢者といへども得がたければ、孔子の、かる〴〵しく仁を人にゆるし給はざるゆゑ、是なるべし。伯夷叔齊をば、仁を求めて仁を得たりとの給ひ、微子箕子比干をば、殷に三仁ありとのたまひて、皆仁をゆるし給ふは、其心私なく、其行理にかなへるゆゑなり。

明道―程明道をいふ、メイダウと讀むが普通也、名は顥、字は伯淳、宋の大儒也

孔子云々―

なり。智は仁の分別なり。是四德は、皆仁にこもれり。たとへば春は生氣の初なり。夏は生氣の長ずるなり。秋は生氣のをさまるなり。冬は生氣のかくるゝなり。是春を以て夏秋冬を兼ぬ。仁の義禮智を兼ぬるも、亦かくの如し。故に明道の曰、義禮智皆仁也と。されど仁義禮智のわかてるは何ぞや。仁の內、自ら此四德あり。これをわかてば、仁の理いよ〱明なり。四にわかつは、仁の理を明かにせんが爲なり。四時をわかてば、一年の元氣の運行明白にして、知りやすきが如し。

一四德四端、いづれも四の者をならべ說くといへども、其はじめ、まづ仁心なければ、必義禮智なし。惻隱の心なくては、生理ほろび、心かたくなに愚にして、羞惡辭讓是非の端もおこらず。たとへば石の頑にして、生氣もなく、心もなきが如し。俗語に、物のあはれを知らざるは、木石の如しといへるが如し。又身のなえしびれたる所は、刀にてつき、火にてやけども痛をおぼえざるが如し。仁は生理なり、あはれみなり。あはれみ無くて、物のあはれを知らざる人は、義理もなく、禮もなく、知慧もなきものなり。是惻隱なければ四端なし。惻隱の四端を兼ねたる所なり。

一仁は人の性にして、人々に皆そなはれり。孔子、仁を行ふの道をば常に說き給ふと

禮記に云々――前註、四四八頁参照

勇ある所なり。こゝを以て、程子も、人必有二仁義之心一、而後有二仁義之氣一といへり。志は氣の帥とて、心だにつよければ、氣はそれに連れられてつよし。仁義の氣あれば、即勇武行はる。

一天によく事ふる道を仁とし、よく事ふる人を仁人と云ふ。親によく事ふる道を孝とし、よく事ふる人を孝子と云ふ。仁人の天によく事ふるは仁なり。孝子の親によく事ふるは孝なり。禮記に、仁人の親に事ふるは、天に事ふるが如く、天に事ふるは、親に事ふるが如し。是故に、孝子は身を成すといへり。親に事ふるには、愛をおもくし、天に事ふるには、敬をおもくす。愛敬を盡して、天に事へ、親に事ふるは、其身の徳行の成就する道なれば、これを身を成すと云ふ。天は地を統ぶ。地は天の内にあり。故に天道をいへば、地道は其内にあり。天に事ふれば、地に事ふるも、其内にあり。

一孔子の教は、唯仁の一字を專らとし給ふは、仁は四徳を統べ、萬善百行の本とする理なればなり。しかれば人道は唯ひとへに仁を以て本とせり。仁義禮智は人の性の條目なれど、皆仁より出づる所にして、仁わかれて四となれり。是を以て、五常は仁を本とす。仁を以て、義禮智を兼ぬ。仁は仁の本體なり。禮は仁の節文なり。義は仁の斷制

巧言令色鮮矣仁—論語學而篇及陽貨篇に重出

仁者必有勇—論語憲問篇に、仁者必ず勇有り、勇者必ずしも仁有らず

志士仁人云云—論語衛靈公篇

らず鈍きを云ふ。心剛毅にして物慾にかゞめられず、容貌質朴にしてかざりなく、言たくみならざるは、其氣象を以て云ふ。仁とは云ひがたし。されど外をつとめずして、内に實あれば、其質、仁の理にちかし。巧言は、言をよくして、仁者の言に似たり。令色は、顔色をよくして、仁者の容貌に似たり。顔色言語は、見事に聞事なれど、かざりて外をつとめ、内に實なければ、仁にあらず。此二章を以て、仁の理を知るべし。又曰、仁者必有勇とは、仁者は心私にわづらはざる故、義を見ては必行ふ。内にかへりみるに疚しからず。故に事にのぞみて、うれへずおそれず、節義をかたく守りて、身に私せず。此故に、仁者は必勇あり。血氣の勇者は、けなげにて身をすつれども、仁義なければ道理に當らず、捨てかひなし。勢により、節にのぞみては、身に私して、道理にそむき、節義をうしなふ。故に必仁あらず、其勇もたのみなし。子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁。仁に志ある人、仁ある人は、義の死すべき時節に、わが身に私せず、命生きん事をもとめて、わが心の道理を害せず。身をころしても道理にかなへば、其心やすし。こゝを以て、身をすてゝ仁の德をなすとなり。不義にして命生きても、わが心の道理を失へば、生けるかひなし。是仁者の

べし。親を親み、民を仁し、物を愛するは、輕重の次第あり。親を親むは尤あつく、民を仁する是につぎ、物を愛するは民を仁するより輕し。此三は、すべていへば皆仁なり。其厚薄の次第、みだるべからず。是自然の理にして、しひて次第をわかつにはあらず。

一仁は義禮智信を兼ねて其中にあれども、五の者をならべ云ふ時は、各一理ありて、仁を相助くべし。仁の理、義を得ざれば宜しく行はれず、禮を得ざれば節分なくして立たず、智を得ざれば善惡を明かに知らず、信を得ざれば僞りありて守りがたし。四の者皆そなはりて、仁の道行はる。然れば義禮智信は、もと仁より出でて、仁をたすくる理なり。

一仁は天地にありては、物を生ずるの心なり。人にありては溫和にして、人を愛し、物を利する心なり。仁はたゞ愛の理を以て云ふべし。天の道、人の道、皆此愛を以て本とせり。愛をすてゝ仁をいふは非なり。

一子曰、剛毅木訥者近仁。又曰、巧言令色、鮮矣仁。剛毅は、心こはく強くして、柔弱ならざるなり。木は容貌質朴にして、かざり無きを云ふ。訥は言のたくみな

剛毅木訥者近仁—論語子路篇

人は萬物の靈―書經泰誓に出づ

親を親みて云々―孟子盡心上

は、人倫の本をあつくするなり。次に兄弟、夫婦、朋友なり。君臣の義は、又父子の親みと同じく、尤おもし。親を愛するを本とするは、是わが生れつきたる仁愛の先おこる處、自然の道なり。しひて次第を立つるにはあらず。人倫を愛して、其次には鳥獸蟲魚草木まで愛するは、是又天地のあはれみ給へる御心にしたがひて、我もあはれむ也。天地の萬物をうみ給へる内に、取わき人倫を尤あつくし給ふは、人は萬物の靈なれば、禽獸草木に同じからず。天地の性、人を貴しとす。こゝを以て、天地の御心をうけて、まづ專人倫をあつくあはれみ、次には鳥獸草木をも愛すべし。君子の道は、唯一すぢに天地の御心にしたがひて、背かざるにあり。是天に事へて孝を行ふなり。是を仁と云ふ。もし人倫を愛せずして不仁なるは、天地の不孝の子なり。孟子に、親を親みて民を仁し、民を仁して物を愛すといへり。君子の仁愛を行ふ、其次第かくの如くなるは、其品にしたがひて、心を用ふるに厚薄あり。是自然の理にしたがへり。まづ父母兄弟を親み、次に親戚を親むは、皆是親レ親也。次に民を仁す。民とは萬民なり。其内にも、貴賤親疎の次第あり。次に物を愛す。物とは禽獸草木を云ふ。とりけだもの草木を愛するも、各次第あり。先鳥獸を愛し、次に草木に及ぶ

鰥寡孤獨—前出、三九頁参照

墨子といひし人云々—前註、一二八頁参照

高き人なり。鰥寡孤獨、病者、かたわ、乞食、貧人あるは、皆わが兄弟の內にて、不幸なる人なり。有位をうやまひ、不幸なるをあはれむは、皆是わが兄弟をあつく親むの道にして、卽是天地につかうまつる道なり。たとへば人の子として、親に孝を行ふ道は、親の命にそむかず、親のうめる我が兄弟にむつまじく、又親の親める親戚朋友、親の愛するしもべまで、其程にしたがひて、情ふかきを以て孝とす。如何に親のひざもとにて、あけくれ事ふるとも、親のうめる所のわが兄弟に情なくば、親の心にそむきて、至て不孝といふべし。天地のうめる處は、人と萬物なり。天地のうめる人と物をあはれむを以て、天地につかへ奉る道とす。天下に人多けれど、五倫の外にこれなし。君子の道は、五倫にまじはりて、情ふかく、惠あつきを、人の道とするは、人倫は、皆天地の子なり。人倫をあつくするは、卽天地につかへ奉る道なり。人倫を愛するとて、わけも無く一やうに人を愛するは、道理にそむけり。墨子と云ひし人、仁を學びそこなひて、天下の人を一やうに兼愛する道を立てたり。是ひが事なり。人を愛するに、親しき疎きと、貴賤とによりて、自然の品あり。品なければ、親をも路人をも、一に見るなり。人倫の中に、とりわき親につかへ、孝を行ふを專一とする

に事ふるが如し、是故に孝子は身を成す……恩を知らざるは云々－大智度論に恩を知らざるの人畜生より甚しとあり、水滸傳に、古人云ふ恩を知りて報いざるは人たるに非ずと見えたり

れつゝしみて、天に事へ奉るべき事にこそあれ。是卽仁の心にして、人の道也。人となるもの、天地の恩を知らずんばあるべからず。恩を知るを以て人とす。恩を知らざるは禽獸と同じ。恩を知ると知らざるは、人と禽獸とのわかるゝ所なり。俗語に、恩を知らざるは木石に同じと云へるが如し。されど木石は、天地と人の妨とならず。わが輩の、おろかに私多き者は、かへりて妨となり、木石にだにおとれるわざ多し。身をかへりみるべき事にこそあれ。かへす〳〵天地の中に生れたる人、天地の恩を知らで、つかへ奉らざるは、如何ぞや。

一仁は、天地の、物を生ずるを以て心とし給へる理を、わが身にうけて心とする徳なり。故に仁は、萬善を統べて其中にあれど、唯ひとへに、人をあはれみ、物をめぐむを以て仁とす。天地の、人物をうみ育てめぐみ給へる御心にしたがひて、天地のうみ出し慈み給ふ人と萬物を、我よりも又天の御心をうけて、あはれみ惠む。是すなはち仁の心にして、天地につかへ奉る道なりと知るべし。此仁心より、百行萬善は行はれ出づるなり。天地を父母として、わが身は天地の子なり。天下の民は、我と同じく、天地の子なるゆゑに、卽是わが兄弟なり。其内に、王公大人あり。是わが兄弟の内にて、位

父母に事ふる心を以て云々—禮記に出でたる孔子の言に仁人の親に事ふるや天

にこそ侍べれ。況や少しばかりにても、古の聖賢のふみを讀みたる人、此理をわきまへざらんは、いとはかなくこそ聞ゆめれ。されば我も人も、天地の恵によりて生れ、天地の内に身をよせ、天地の養をうけ、天地の心をうけながら、天地の心にそむき、天地の道を知らず、天地の財をつひやし、天地の物をそこなひて、日々に天地に背けるわざをのみ行ひ、天地につかへ奉ることを知らで、一生の間、夢見るが如く、酒に醉へるが如く、まよひて悟らず、此身終りて、草木禽獸と同じく朽ちなん事は、人と生れたるかひなし。いたりて不仁にして、又愚なりと云ふべし。人の子として、親に事へずして、親の用にたゝず、かへりて親にそむき、不孝にして親を苦むるが如し。されば親によく事ふるを孝とし、親に背くを不孝とす。天地によく事ふるを仁とし、天地に背くを不仁とす。仁と孝とは一理なり。天地の恩と父母の恩とは同じ。父母に事ふる心を以て、天地に事ふるは仁なり。天地に事ふる心を以て、父母に事ふるは孝なり。又天理にそむきて人欲を行ふは、我が父母に不孝にして、他人の父母を親むが如し。かへす〴〵、たゞ人はあだなる世の迷を悟りて、大恩をうけて人と生れし身をよせたる處の、いたりて貴き天地の道に朝暮したがひ、身を終るまで天道を畏

性にしたがふを云々ー前註、四二三頁参照

五品を云ふ。倫は輩なり、類なり。天下の萬民かぎりなしといへど、其類をわかてば、此五に出でず。五倫を愛するは、萬民を愛するなり。萬民は天地の子にて、愛し給ふ所なれば、われ是を愛するは、卽天地の御心にしたがひて、天地につかへ奉る道なり。仁の性にしたがへば、五倫を愛する道自ら行はる。中庸に、性にしたがふを道と云ふ、是なり。仁は性なり。五倫を愛するは道なり。天地より生れつきたる仁の性にしたがひて、五倫の道を行ふが、天地につかへ奉る孝にて、人の道なり。是卽仁なり。人の道とする所、さらに此外に有るべからず。次に禽獸草木を愛するも、亦仁の内の事なり。天地は萬物の父母なれば、人倫を愛し、次に萬物を愛するも、亦天地につかふる道なり。

一およそ人は、かりそめの一飯の恩、一物の惠をうけてだに、其心に銘じて忘れざるべき理なるに、かほど極りなき天地の大恩をうけながら、それを悟らずして、はかなき世の習ひに迷ひて、天道にそむき、人道を行はず、其大恩の萬一をも報ぜずして、身をはりなん事、いと口をし。たとひ不幸にして、聖賢の書を讀まずとも、天をいたゞき、地をふみ、其中にむまれながら、かほどの事は、其是非をわきまふべきこと

父母のむくいがたき―父母の恩のと補ひて解すべし

仁を說き給ふ。誠に切實にして、近き敎なり。

一 人は父母より生ずといへど、其根本をたづぬれば、皆天地の恩によりて生る。むまれて後、一生の間も、亦天地の恵によりて身をたつる事、猶親の氣をうけて、むまれて後も、親の養によりて、人となるが如し。是誠にきはまりなき大恩ならずや。此故に、天地を以て大父母とす。天をば父と稱し、地をば母と稱す。人は天地の子なり。まことに天地の恩のきはまり無き事、海山を以ても譬へがたし。天地の恩のむくいがたき事、子として父母のむくいがたきと同じ。人は萬物の靈なれば、などか天地の恩の大なる事を知らで過ぎぬべきや。故に人の道は、唯天地の恩を知りてつかへ奉るにあり。天地につかへ奉る道は、べちにあらず。天地にしたがひて背かざるにあり。天地に從ふとは如何にぞや。我が心に生れつきたる仁の德は、是天地より我にさづけ給へる也。こゝを以て、仁を行ふは、卽天地の御心にしたがひて背かざるなり。たとへば主君よりさづけ給へる官職を、よく務むるを以て、君につかふる忠義とするが如し。仁を行ひて、天地のうみて子とし愛し給へる人倫を愛するが、天地につかへ奉る道なり。人倫は五あり、五倫と云ふ。五倫は、わが父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の

るゝは仁也。私ありて、人我をへだて、愛の理行はれざるは、不仁なり。人我の私を去りて、公にする工夫は、恕なり。恕は私を去り、公にして愛の理行はる。是仁なり。公を即仁とは云ふべからず。恕すれば人我のへだてなくして、公なり。公なれば愛行はる。是仁なり。恕は仁を行ふ工夫なり。愛は仁のほどこし也。たとへば仁は河水の流れ行て、とゞこほらざるが如し。私は土石の河水をふさぐが如し。不仁は河水の、土石にへだてられて、ふさがりて流れざるが如し。恕を以て人我の私を去るは、たとへば川に土石のふさがれるを、鋤鍬などを以て、掘り通すが如し。ほり通せば、水とゞこほらずして流れゆく。公は土石のふさがり無きが如し。愛は水の流れゆきて、よく物をうるほすが如し。私あれば不仁なり。恕すれば公なり。公なれば愛行はれて、仁の道たつ。此たとへを以て、仁恕愛公私の別を知るべし。

樊遲問仁―
論語顏淵篇

一樊遲問仁、子曰愛人。仁は愛をつかさどる。故に仁を行ふの道は、人を愛するにあり。此、人の字は、五倫をさして見るべし。人を愛するは、即人倫を愛する也。人の道は仁を行ふにあり。仁を行ふの道は人を愛するにあり。人を愛せんとならば、まづ心の私を去り、人我のへだて無くして、あはれみの心をおしひろむるにあり。愛人を以て

子貢の云々—論語衛靈公篇に出づ、前註、一二九頁參照

くして公なれば仁なり。仁なれば愛す。子貢の、孔子に、一言にして身をはるまで行ふべき者ありやと問はれしに、孔子曰、其恕乎、おのれが欲せざる所を、人に施すことなかれと答へ給へり。一言とは一字也。恕の一字は、仁にいたる道なり。是一生の間、守り行ふべき道なり。

一恕を行ふには、公私の二をわきまふべし。公とは私なきを云ふ。我が身を愛する心を以て人を愛し、我人のへだてなく、われひとりを立てんと思ふ私なきは公なり。是仁者の心なり。私とは、公ならざるを云ふ。我と人とのへだてありて、たゞ我が身ひとつを利せんと思ふは私なり。又わが親しみ愛する人をひいきして、ひとへに利益せんとするも私なり。皆是小人の心なり。凡天下萬事の善惡のおこる處は、皆公と私との二より出づ。又君子小人のわかちも、こゝにあり。私あれば、まぢかき恩をうけたるわが親と君をわすれ、たゞ我が身の利欲をのみ務む。いはんや他人をや。私なければ、身をすてゝも、君父のために忠孝をつくす。いはんや利欲などにひかれて、君父をおろそかにすべけんや。

一仁恕公私の別をいはゞ、人我をへだてず、私なきは、公なり。公にして、愛の理行は

よく近く取りて云々―論語雍也篇に、能く近く取りて譬ふ仁の方と謂ふ可きのみ

孔子の、よく近く取りてたとふるを仁の方といふとのたまふも、此意也。我が心に近く取りてたとへくらぶれば、人の心も同じ心なれば、我が心にたがはず。我が心を以て、人の心をおしはかりて、人に施すは則恕なり。是また己をおす恕なり。恕に此二義ありと知るべし。いづれも己を推すといふ義也。

一仁は徳の名なり。恕は仁を行ふ工夫なり。徳の名にはあらず。工夫とは、つとめのしわざを云ふ。世俗に、思案するを工夫といへど、左にはあらず。思案も其内の一なり。仁に至らんとならば、恕を行ふにあり。仁は愛の理也。恕は人我の私を去て、愛を人に施す工夫なり。仁はたとへば筆なり。愛はたとへば筆より書出す文字也。恕は筆を手にとりて、物かくが如し。仁は體なり。愛は用也。恕は仁を行ふつとめ也。恕なれば私なく公にして、仁の理行はれて、愛のほどこし廣し。恕なければ、仁心あれども愛の理行はれず。故に仁愛を行はんとならば、恕をもつぱら務むべし。夫つとめずして愛の理行はるゝは、仁者の事也。賢人以下は、人我の私あるゆゑ、恕を以て私を去りて、仁を行ふべし。故に恕はつとめて仁にいたる道なり。熟するは仁なり。生しきは恕なり。自然にかなふは仁なり。つとめて理にかなふは恕なり。私な

推して物に及ぼすは恕也

四端の善―孟子に出づ前註、一二五頁參照

つゆ―少しもの意

云ふ事なかるべし。子を愛するを以ていはゞ、我が子をあはれむ心をおしひろめて、人の子をあはれむ。是己を推すと云ふ。我が子のみ愛して、人の子を愛せざるは、人我の私なり。凡わが心に四端の善あるをば、皆外におしひろめ行ひて、十分に至らしむべし。内にありても、外におしひろめて行はざれば、用をなさず。是は内にある仁を、外におし出して、ひろめ行ふなり。是己をおす恕なり。又一には、仁を人に施すの道、我が心を以て人の心をおしはかるに、人も我も同じ心なれば、我が好む事は、人も亦必好むものなり。我が心にきらふ事は、人も亦必きらふもの也。かくの如く、我が心を以て人の心にくらぶるは、つゆ違ふ事なし。不仁無禮を、人の我に施すは、我がきらふ所也。是を以て人の心をおしはかるに、人もまた不仁無禮をきらふ故に、人に不仁無禮を施さず。是恕なり。民を治むる道を以ていはゞ、わが身もし下にありて、困窮し饑ゑ寒え、妻を賣り子を賣りて、親子はなれ、兄弟妻子離散するにいたらば、我が甚きらふ事なるべし。其心を以て、民の心をおしはかるに、我がきらふ如く、民も亦きらふべき事を知りて、民の饑ゑず寒えず、困窮せず、妻子を賣らざるやうに、あはれみて施すべし。是を己が欲せざる所を人に施す事なかれといふ。又

仁者は云々―前註、二六一頁参照

我が好む事を云々―此句亦孔子の言にもとづく、前註二四三頁参照

己を推す―程氏の言に己を以て物に及ぼすは仁也、己を

ずんばあるべからず。如何となれば、仁は天地よりうけて、人となれる理なればなり。

一孔子曰、仁者は己たゝんと欲して人をたつ。己達せんと欲して人を達すと。此意は、仁者は心に私なくして公なる故、人我の隔なし。我が身をたてんと思へば、人をも共にたつ。我が身を達せんと思へば、人をも共に達す。人と我との隔なし。人を思ふこと我が身と同じ。是仁者萬物を以て一體とするの心なり。もしわが身を専らに愛して、人を愛せざるは、人我の私にへだてられて、公の心なし。是不仁なり。仁に至らんと欲せば、近くわが身の上にて、人の心をたとへ、我が好む事を人に施し、我がきらふ事は人もきらふものなれば、わが心にて人の心をおしはかりて、人に施さず。是己を推す恕の道にして、仁にいたる工夫なり。

一賢者以下は、私なき事あたはず。私あれば、人我のへだてありて、仁にいたらず。仁にいたらんと思はゞ、人我をへだつる私の心を去るべし。私を去りて仁にいたる工夫あり。推レ己を恕と云ふ。己を推すに二すぢあり。一には、わが心に人をあはれむ惻隱の一念生ぜば、其心を外におしひろめて、人に及ぼして、人において愛せずと

ー書經泰誓に、惟れ天地は萬物の父母惟れ人は萬物の靈天地の大德を云々ー前註、一二七頁參照

どりなし。物を生ずるを以てつかさどりとす。程子の曰、天は唯是以ㇾ生爲ㇾ道。朱子曰、天地以ㇾ生ㇾ物爲ㇾ心。人は天地の物を生じ給ふ心をうけて心とす。是仁なり。故に仁の理の根本は天より出づ。天の生理、人の仁、同じ理なり。

一尙書に、人は萬物の靈といへり。靈とは、たましひとよむ。人は萬物にすぐれて明なるたましひあるを云ふ。天地は萬物の父母なれば、萬物は天地の子なり。されど萬物の內、人は陰陽の正しく委しき氣をうけて生る。故に鳥けだもの蟲魚、凡萬物にすぐれて、とりわき天地の大德を生れつきたり。こゝを以て萬物の靈といへり。又孝經に、天地の性、人を貴しとすとのたまへり。天地の內、性をうけたる物、人ばかり貴きはなし。如何となれば、天地の德をたがへずして、そのまゝ心に生れつきたればなり。されば人は、すなはち天地の萬物をうみ給ふ生理を以て、心とせり。此心を名づけて仁と云ふ。およそ人たるものは、いにしへ今、此仁あらずといふ事なし。是人たる者の心也。故に孟子にも、仁は人の心なりといへり。若人此仁を失はゞ、形は人なりといへど、心は禽獸に近かるべし。然れば、人と生れたるしるしなく、萬物の靈とするに足らず、又貴しとすべからず。故に人となる者は、仁を心にたもち、身に行は

博愛謂仁—原道に、博く愛する之を仁と謂ひ、行うて之を宜うする之を義と謂ひ、是に由て之ゆく之を道と謂ひ、己に足つて外に待つ無き之を徳と謂ふ

は、其心長閑くやはらかなるを云ふ。慈愛とは、人と萬物を慈みあはれむを云ふ。溫和は仁の氣象を云ひ、慈愛は仁の道理を云ふ。たとへていはゞ、春の景色長閑なるは溫和なり。春の陽氣よく草木萬物を發生するは慈愛なり。朱子の此二說にて、仁の字義大むねそなはれり。

一韓退之の、博愛謂仁と說けるは、仁の天下萬民に行きわたりたる大用なり。物として愛せざる事なきなり。仁者はまことに博く愛すれども、それは末なり、根本にあらず。程朱は仁の根源より說きて、全體をすべたり。韓子の言、全く理なきにはあらず。されど仁は性なれば、其本より說きて、大用を兼ぬべし。

一四書六經の內に、唯仁の一字をいへるは、義禮智をかねたり。仁義の二字を說きて、禮智をいはざるは、仁は禮を兼ね、義は智を兼ねたり。百行萬善は、皆五常より出づ。五常は又仁の一字を以て兼ねたり。此故に、孔孟は、もはら仁をもとむる工夫を以てをしへ給ふ。其說は論語孟子の書に見えたり。

一程子曰、醫書に手足のなえしびるゝを名づけて不仁とす。此ことば尤よく名づけかたどれり。仁者は天地萬物を以て一體とす。己に非ずと云ふことなし云々。人の身、病

朱子曰云々―論語學而篇に、孝弟は其れ仁を爲すの本かとある仁の字に註したる言也

るゆゑ、動きて人にまじはれば、專愛する事をつかさどれり。義の宜をつかさどり、禮の敬をつかさどるが如し。天地の萬物を生ずる心は、卽是天地の物を愛するの理なり。其理を人にうけて性とするは、卽仁なれば、仁は人物を愛するを主とせり。朱子曰、仁心之德、愛之理。心の德とは、德は得る也。天地の人物を生じ給ふ心を、我が心に得て、わが物となれる道理を德と云ふ。義禮智も、皆心の德なれど、仁は義禮智を兼ねたれば、仁において、專ら心の德と云ふ。たとへば一家の中、兄弟四人あれども、嫡子一人を以て、其弟を兼ぬるが如し。愛の理とは、心の德の、いまだ外にあらはれざる內に、自ら物をあはれむ理をふくめるを云ふ。仁に愛の理あるは、飴の甘きが如く、醋のすきが如し。其內の味なり。たとへば俗語に、ひらかねど扇は風のつほみかなといへるが如し。すべていへば、仁は心の德也。わかちていへば、愛の理也。心之德、愛之理の六字、朱子はじめて發明せる所、後の學者に功あり。是周子の德愛を曰仁に本づけり。或曰、愛之理は發用を指せりと。此說非也。朱子曰、愛之理者、是乃指其體性而言。此說の證とすべし。愛は用なれども、愛の理は內にふくめるを以ていへば、あらはれたる用に非ず。朱子又曰、仁は溫和慈愛の道理。溫和と

惻隱の心―孟子に出づ、前註、一二五、四二〇頁參照

故に愛を仁と云ふ。夫仁は性なり。性は心に生れつきたる、理なり、體なり。愛は情なり。情とは、性の外物に感じて、動きあらはれたる心を云ふ。用なり。愛は仁の性の用にあらはれたるなり。體は見えがたければ、あらはれたる用を以て說けり。愛を以て仁を說くは、是用につきて體を示すなり。程子は天地の生意を以て、仁を說けり。生意とは、天地の理生々して物を生ずる意を云ふ。其生意の、人に生れつきたるを仁と云ふ。天にありては生と云ひ、又元と云ふ。人にうけては仁と云ふ。天にあり、人にありて、其名は變れども、其理は一なり。此心に生れつきたる生理內にありて、いまだ外にあらはれざるを仁とす。既にあらはれては情となりて、物にほどこすを愛と云ふ。愛のはじめておこれる、其きざしの端を惻隱の心と云ふ。仁と愛と一理なれど、性情體用の別あり。用を指して體とすべからず。情を指して性とすべからず。然れば仁と愛と、體用のわかちあり。たとへば仁は扇なり、體なり。愛は扇を以て人をあふぐが如し。あふがずんば扇も用なし。あはれみなくんば、仁なんぞ用あらんや。すべて言へば、愛するも仁なり。たとへばあふぐも扇なるが如し。性情體用も皆仁なり。體用をわかちて見、又合せて見るべし。程子又曰、仁主ニ於愛一。是仁は愛の理をふくめ

人ばかり―人ぐらゐ、人程の意

周子―宋代の大儒周茂叔をいふ前註四一四頁参照

るは、たとへば生ずるは種なりといひ、又、あつきは火なりといはんが如し。人の心に必仁あること、種の必生じ、火の必熱きが如し。禽獣も、同じく天地の恵によりて生ずれども、仁をば生れつかず。此故に、仁は禽獣也とは云ひ難し。萬物の内、人ばかり仁なるはなし。こゝを以て、人たるものは必仁あり。仁なくんば人とすべからず。故に仁は人也といへり。天地の、人を生み給へる道理を、人の身に得て、心の徳とするゆゑに、自ら物をあはれむ道理あり。是即仁なり。又仁は人の身に生れつきたる心なれば、仁人心也といへり。然れば、仁は天地の心をうけて心として、あはれみの理を其内にふくめり。故に人にまじはりては、あはれみの心自ら止む事なし。されども其中につきて、まづ父母を愛し、次に兄弟一族を愛するが、仁愛の内にていと大なる理なり。故に親をしたしむを大なりとすといへり。親とは親類なり。先親類をしたしみて後、他人を愛す。是仁を行ふ次第なり。人なりと説き、人の心也と説ける字訓、尤親切にして、仁の理によくかなへるなるべし。周子は徳愛を仁と云ふといへり。愛はあはれむ也。仁は心の徳にて、人をあはれむを云ふ。徳愛を以て仁を説くは、是仁の大用を説けり。仁の用をなすは、あはれみを人に施すにあり。

五常訓巻之二

○仁之上

> 學びがてらに―學習の傍の意
>
> 孟子も云々―仁也者人也は盡心上に出で、仁人心也は告子上に出づ

一人の禽獸にことなるは、仁あるを以てなり。五常五倫百行萬善、皆仁よりいづ。故に仁の理至て尊く、至て大なり。我がともがら凡愚の知りがたき事なれば、たやすく言はんこと、いとかたはらいたくこそ聞ゆべけれ。されど學びがてらに古人の說をあつめ、不幸にして書を讀まざる人のために、いさゝか試に其大義の萬一をいはん。たゞ誤おほからん事をおそるゝのみ。中庸に曰、仁者人也、親レ親爲レ大。孟子も亦曰、仁也者人也。又曰、仁人心也と。言ふ意は、天地の惠大にして、よく萬物を生じ給ふ。其理を生理と云ふ。生理とて、天理の生々て、よく物を生ずるを云ふ。此生理を人の身に生れつきたる故に、人の身に、惠の心胸中にみち〱て、よく物をあはれむ。是を以て、人の身卽是仁なり。故に仁者人也と說きたまへり。仁は人也といへ

して魯に至り、魯一變して道に至らん

孔子曰云々―論語公冶長篇に子曰く道行はれずんば桴に乘りて海に浮ばんと見え、子罕篇に子九夷に居らんと欲す云々と見えたり

み、中土に及ばず。今太平の化久しく、萬民其德に浴せり。唯つとめて、古の聖の道をまなび、五常の德ををさめ、五倫の道を行ひて、國家の恩德をあふぎ、其化にしたがはざらめやは。

一許愼が說文に、四夷を說きて曰く、南方は蠻と云ふ、蟲に从ふ。北方を狄と云ふ、犬にしたがふ。西方を羌と云ふ、羊に从ふ。たゞ東夷は大にしたがふ。大は人也。東夷の風俗は仁也。仁者は壽し。君子不死の國あり。孔子曰、道不レ行欲レ之二九夷一乘レ桴浮二於海一有レ以也といへり。是南蠻、西戎、北狄は、皆文字も蟲と獸に从ふ。唯東夷のみ人にしたがへり。日本は東夷なり。九夷の內也。孔子も中國にて道行はれざる故、九夷に居らんとのたまふ。是我が國の、他國にまさりて、人の道ある國なれば也。又日本を不死の國と云ふも故あり。日本の人は、もろこし又其餘の國より長命なればなり。

一五常の和訓、仁はいつくしみ、義はよろし、禮はうやまふ、智はさとる、信はまこととよむ。

聖人及十哲—聖人は孔子、十哲は其門下の顏淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓、宰我、子貢、冉有、季路、子游、子夏

教へなければ云々—前註、三二四頁參照

一たび變ぜば—論語雍也篇に、子曰く齊一變

其教をおもんじ、時々の祭を行ひ、其廟にまうでて、拜禮をなし給ふ。わが日の本にも、むかしは都の大學寮に、聖人及十哲の像を安置し、釋奠とて聖人をまつり給ふ禮ありき。又太宰府及諸州にも、孔廟學校ありて、祭禮をなせり。しかれば天下の人、貴き賤しき、あまねく其教にしたがひて、師とすべきこと言ふに及ばず。されど世界の內、聖人の教を知らで、隨はざる國もあり。それは孟子のいはゆる、教なければ禽獸に近きなり。是夷狄の、中華に及ばざる所なり。

一わが日の本は、天地の內において、南北の中央にあること、中華と同じければ、日月のめぐれる道正しく、四時そなはり、寒暑陰陽の時にたがはざること、四夷の諸國にくらぶるに、すぐれたる善國なり。五穀ゆたかに、衣食器財乏しからず。まことに豐秋津洲といへるも、品物の多くしてゆたかなる事、外國にまさればなり。其風氣正しき故に、風俗和順にして、慈愛ふかく、節義を守りて勇武なり。禮法正しく、威嚴行はれ、仁義に近し。一たび變ぜば、道にいたりやすかるべし。此故に、中土の書にも、此國を名づけて君子國と云ふこと、又むべなるかな。わが國の人は、日の本の、外國にまさりて善きことを知らず。うらむべし。わが國に足らざる所は、唯學問の一事の

經濟の才と謂ふは邦を經り世を濟ふの才を謂ふ也

六經—前註一九頁參照

なしがたし。いはんや大道をや。故に人たるもの、貴き賤しき、賢し愚なる、ともに聖人の道をたふとびて、明師をもとめ、良友にちかづき、其教にしたがひ、其道をまなばざらんや。

一人の心は、たゞ仁義禮智信の性なり。人の道は、唯君臣、父子、夫婦、長幼、朋友の人倫の行なり。五常の外に心なく、五倫の外に道なしと知るべし。これを知るは知なり。是を行ふは行なり。此外にさらに心と道とを求むべからず。如何となれば、天の心、天の道にそむけばなり。人となるものは、天地の内に生れ、天地の惠をうけて、身ををはるものなれば、とにかくに天地の道をたふとび、したがひ行ふべし。

一もろこしは天地の中央にありて、風氣の正しき國なれば、古よりさばかりの聖人賢人世に多く出でて、天下ををさめ、道を行ひ、人倫の法を立て、天地の道をつぎ行ひ給ふ。中について、孔子は六經を作り、堯舜以來、古の聖人の道を述べ、人倫の教を立て、天下萬世にのこし給ふ。是天下萬世の、師とし尊びて行ふべき則なり。故にもろこしも、外國も、其教をうけてしたがへり。しかれば、其教の、いたりて尊きこと、いへばおろかなりや。思ひやるべし。こゝを以て、古の帝王も、孔子を師とし尊び、

辭に、乾は易を以て知り坤は簡を以て能くす云々

經濟—經世濟民、經邦濟世等の義にて今日の所謂經濟にはあらず。類書纂要に曰く、人才を稱して

を越えて行くが如し。危くして行ひがたし。聖人の道を行ふは、たとへば白晝に大道を行くが如し。明かにして行ひやすし。

一孔子の時は、猶も天下に道理明かに、邪說なかりしかば、仁の一字を說き給ひて、義禮智の條目をそなへ說き給ふに及ばず。孟子の時は、世に異說おこり、道理まぎれやすく、人心まよひて明なりがたし。若仁の一字のみを說き給はゞ、無星の秤、無寸の尺の如くにて、天下の人さとり得がたからん事をおそれて、仁義を說き、四德を說き、性善を說きたまふ。凡聖賢のをしへは、時によりて宜にしたがへり。たとへば良醫の、時の運氣により、地の風土にしたがひて、治療をほどこすが如し。

一我が儒の道は、經濟の道とて、世ををさめ、人をすくふ大道なり。其學は、有用の學とて、まづわが身ををさめて、人ををさめ、人倫の道を行ひ、天下國家のため、天地萬物のため、用をなす學問なり。無用の空言にはあらず。こゝを以て、道理は人の心に生れつきて、知りやすく行ひやすしといへども、其道の功用の、いたりて大なること、言ふに及ばず。かく大なる道なれば、などか其師なく、教なく、學ばずして、其道明なるべきや。世間のいやしき小藝小技すら、師なく學び無くしては、其わざを

豺獺—やまいぬとかはをそ也、禮記月令に孟春の月、獺、魚を祭ると見え、漢書に豺獺未だ祭らずの句見ゆ

常に異なる—普通とかはりたる、異常なるの意

通事—通譯通辨と云ふに同じ

易簡—易繋

き給へるも、五常の性あればなり。人の性善なる故、人もし學問し、道を知りて行はば、堯舜の聖にもいたるべしとなり。この故に、程子曰、孟子有㆑功㆓萬世㆒者、性善の一言なり。

一孔子の教は、常に異なる道にあらず。即天地の道也。天地の道を則として、人に示しをしへ給ふ故に、古人の言に、孔子は天の通事なりといへり。天地の道は、易簡とて、むつかしからずして知りやすく、事多からずして行ひやすし。天地の御心は、唯萬物をめぐみ養ひ給ふより外に、心なければなり。人にありては仁也。是人の道也。仁の道も亦人をあはれみ養ふより外になければ、人の道も亦知りやすく行ひやすし。仁をわかちて五常となる。五常の性は、人の心に生れつきたる理なれば、外に求めずして我に求む。凡外にある物は、求むれども得がたし。我にある物は、求むれば必得やすし。聖人、其人の心に、各生れつきて具足せる道を以て、をしへ給へば、いかに愚なる賤の男賤の女も、知りやすく行ひやすし。知りがたきは、よく學びざればなり。行ひがたきは、人欲にほださるればなり。是道の知りがたく行ひがたき故なり。人欲にしたがひ、邪曲を行ふは、たとへば闇の夜に、道もなき荊棘の中をわけ行き、溝渠

慈烏—格物論に、烏は鴉の別名なり小にして多く群り腹下白き者を鴉烏と名づけ其母に反哺する者を慈烏と名づく云々、又禽經に、慈烏は孝鳥也長ずる時は其母に反哺す云々

くんば、學んで此道を得ずと云ふことなし。如何となれば、人の性本善なり。學問の道は、外に求めずして我に求むる故、得ざることなし。

一五常の性は、唯人のみこれあるにあらず。禽獸にも、亦其一性はこれあり。虎狼にも父子の道あり。慈烏の巣立して、母に餌をふくめかへす、猫の他の子に乳をのませてそだつる、是皆仁の一端を得たり。犬の主人をしたひ、蜂蟻に君臣の法あるは義なり。豺獺の祭をして本にむくい、鴻雁の兄弟の行列をみだらざるは禮なり。鴛鴦の雌雄相愛すると、雎鳩の雌雄別あるは智なり。鴻雁の去來するに、春秋の期をたがへず、雞の鳴く時節をたがへざるは信なり。是皆むまれつきたる一偏の性のよき所なり。もし人として此性を失はゞ、禽獸にしかずと云ひつべし。

一孝弟、忠順、愛敬などは、皆仁義禮智の性より行ひ出せる道理にして、其理は五常の性の内にあり。性の條目にはあらず。人の性は唯仁なり。わかてば五常となる。

一人たるもの、必五常の性を生れつきたれば、事物にふれて、必四端おこる。たとへば物の中にありて、其はしの少し外に見ゆるが如し。性は見えがたしといへども、外にあらはるゝ四端を以て、内に實に此性あることの證とすべし。孟子の、性は善也と説

桃は紅に――天地自然の面目をいへる也、東坡の詩に、柳は綠花は紅眞面目といひ、禪林類聚に烏は黑く鷺は白し松は直く棘は曲れりといへる類

して、四時をつらぬくが如し。これによりて、仁の一字は四德をかねたり。孔子の、もはら仁の一字を說き給へるは、此故なるべし。

一天の道、萬古よりこのかた、常に行はれて止まず。春夏秋冬の序、日月のめぐり、寒暑溫涼のおしうつる、皆其時たがはず。萬物の生ずる、年々に、各其形色をあらためず。桃は紅に、李は白くして、萬世までもかはらず。是卽天道の誠なり。人の性に仁義禮智の四德ありて、其中におのづから信あるは、天道の元亨利貞の内に誠あるが如し。天地の運行、人物の性、萬世にいたりてかはらず。是卽天道の誠なり。

一凡人たるもの、必此四德あるは、たとへば身に頭身手足の四體あるが如し。此四德ありながら、道を行ふ事ならずといふは、たとへば手足はありながら、物をとり地をふむ事ならずと云ふが如し。是を自暴自棄と云ふ。自暴とは、みづからそこなふと訓む。我が身に此天性あることを知らで、禮義をそしりて行はず。是天性を自らそこなふなり。剛惡の人なり。自棄とは、みづからすつると訓む。仁義の道を善きとは思ひながら、行ふ事ならずとて行はぬ、是我にある天性を、自らすつるなり。柔惡の人なり。此二種の人は、わが天性を自らやぶりすつる故に、道に入りがたし。もし自暴自棄の惡な

取わき—取わけに同じく、特にの意也

は春とす。春は元氣初て行はれて、萬物生ず。是天道の、萬物を生ずる徳の初なり。人にうけては仁とす。亨はとほるとよむ。生理の通るなり。時においては夏とす。夏は萬物さかんに長ず。人にうけては禮とす。利は遂ぐるなり。生理のとぐるなり。時においては秋とす。秋は萬物の生理收りて、草木みのる。是利なり。人にうけては義となる。貞は正しとよむ。生理の正しく成れるなり。時においては冬とす。冬は萬物の生理成就し、堅固に正しくなる。其生氣根にかへりかくれをさまりて、一年の功成る。人にうけては智とす。此四時の行はるゝ序は、萬世に年は經とも、かはらざる天道の常理也。人は天の元亨利貞の四徳をうけて、仁義禮智の性として、心にそなはれり。天の四徳は、天の萬物を生ずる生理なり。人の四徳は、人の五倫をあはれむ生理なり。人の四徳、其源をたづぬれば、本は天の四徳より出でて、其理同じく、其本一にして、天人合一なり。

一天の生理四時に行はる。其中につきて、取わき元を始として、亨利貞を統ぶ。此故に、春生の元氣を以て、四時をつらぬく。其次第は、四にわかるれども、理は一なり。人の心の生理も、仁を始として、義禮智をつらぬくこと、天の元氣の、春を始と

ことわざ―事業の訓、仕事の義にて諺の意にはあらず

元亨利貞―易の傳に出づ、前註四一六頁參照

すなはち天地の道にて、きはめて大なること、諸藝にくらべがたきをや。いかでか古の聖人の法をまなばずして、わが心ひとつにて其道行はるべき。然れば、人となる者は、必いにしへの聖賢を師とし、其教をたふとび、其書をよみ、學問して、人の道を知らずんばあるべからず。おろかなる人は、學問は人のつとめの外の事のやうに思ひ、學ばずしても苦しからざる事とのみ思へり。人となりて、人の道をまなばずして知らざるは、農人の田つくることを知らざるが如し。古より、もろこしにて、さばかり明かにさとれる賢人君子、世に多かりしかど、我意をたてず、わが才智にほこらず、皆聖人の教を尊びしたがひ、幼きより、老にいたりて、道をまなびて止めず。是其智明かにして、聖人の教を學ばずんばあるべからざる事を、よく知れる故なり。いはんや今の時、末世の凡人、いかに其才力人にすぐれたりとて、古の賢者には及ぶべからず。然れば聖人を師として學ぶべきこと、言ふに及ばず。

一 元亨利貞の四徳は、天道の物を生じ給ふ生理の、春夏秋冬の四時に行はるゝ次第にて、其始終なり。天道の行はるゝ序、其時を以ていへば春夏秋冬とし、其理を以ていへば元亨利貞とし、其氣は生長收藏とす。元ははじめとよむ。生理の始なり。時において

道と謂ふ、道を修むる之を教と謂ふ

食を飽くまで食ひ云々―孟子に出づ前註、三二四頁參照

朝に道を聞きては云々―論語里仁篇

さゝやかなる―小さき瑣細なるの意

の性にしたがへばなり。天下の道理は、五常の外に出でず。

一およそ人となるものは、萬物にすぐれ、五常の性を生れつき、道あるものなれども、食を飽くまでくらひ、衣を暖かに著、家をかまへて、身を安くしたるまでにて、道の教なければ、形は人なりといへども、其心、其行は、禽獸に近きこそうらめしけれ。古の聖人、是をうれひ給ひて、學校をたて、師をたてゝ、人たるの道を教へ學ばしめ給ふ。されば事の急ならざるやうにて、いたりて大切なる事は、學問よりおもきは無し。如何となれば、道はしばらくも離るべからず。人學問なく、道を知らざれば、人の道たゝず。人と斯く生れつきたるかひなし。人生ふたゝび得がたし。道を學ばずして、空しく過すべからず。こゝを以て、朝に道を聞きては、夕に死すとも可なりと、聖人ものたまへり。學問は、まづ此道に志をたて、明なる師をえらびて、其教をうけ、よき友にまじはりて、其助を借るべし。志を立つることは我にありといへども、道を學ぶことは師友の力を用ゆべし。たとへばいとさゝやかなる藝能、又民のつとむる賤しきことわざといへども、師なく、法なく、教なくて、唯わが心ひとつに任せたらんには、いかに才力ありても、其わざをよくしがたし。いはんや人の道は、

たすと清音に讀むべし腐らすの義也、持下すと解し得ざるにもあらず

性にしたがふを云々―中庸に、天の命之を性と謂ふ、性に率ふ之を

一仁義の道は、我が心の外に求めず。幼稚なる童も、其親を愛することを知らざるは無し。其長ずるに及んでは、其兄を敬ふことを知らざるは無し。親を愛するは仁なり。兄を敬ふは義なり。こゝを以て、仁義はわが心に、もとより生れつきたる事を知るべし。且親を愛し、兄を敬ふは、誰も知りやすく行ひやすし。甚高くして、知りがたく行ひがたき事にはあらず。此二にもとづきて、其心をおしひろめ、萬事に行ひ及ぼさば、仁義行れて、人道立ちぬべし。

一人の性とする所、唯仁義禮智信の五字なり。天下の道理、此外に出でずして、ことごとく此内にあり。是萬善の出づる所の根源なり。五常の性にしたがひて、五倫の道を行ふ。聖賢の教ふる所、學者のまなぶ所、此外にこれなし。

一五常の性にしたがひて、私欲の煩なく、唯其自然に打任すれば、人倫にまじはりて、其性の善あらはれ、人倫の道行はる。中庸に、性にしたがふを道と云ふ、是なり。此性にしたがひ行へば、親には孝し、君には忠し、夫婦正しく、兄弟むつまじく、朋友に信あり、萬の善、皆これより出づ。國家を治め、天下を平かにするも、皆是五常の性にしたがひて、行ひ出せるなり。こゝを以て人道たつ。聖人の聖人たるも、亦五常

四端の善心の云々——これ亦孟子公孫丑上に見え前註の文の續き也、一二五頁参照

齊の宣王は云々——此事孟子梁惠王上に出づ、所謂牽牛の章也

くだす——く

善と悪とは、此心をおしひろむると、おしひろめざるとに有り。心には此善端ありといへど、おしひろめ行はざれば、生れつきたる天性をそこなひすてゝ、行はざるなり。是いはゆる自暴自棄なり。おしひろむれば、天下四海をも治むるに足れり。若おしひろめずして、打捨つれば、至て近きわが父母につかへて、孝をなす事も成りがたし。況や萬民を治むるをや。堯舜の仁、湯武の義は、至て大なれども、此善心をおしひろめ給へるなり。桀紂が悪は、此心をおしひろめざるなり。然れば四端をおしひろむると、おしひろめざるとは、善悪と、君子小人と、國家の治亂との分るゝ所なり。

一天地の恵をうけて、わが身に生れつきたる四徳なれば、人の人となれる道理、こゝにあり。然るに此道理を知らず、且人欲にくらまされ、是をすてゝ行はず、天地の徳にそむき、人の道を失ふこと、悲むべし。此四徳を失へば、人と斯く生れたるしるし無く、鳥けだものに同じくして、草木の、天地の恵のまゝに生長し、枯しぼみて人の養となり、妨とならざるには、遥に劣れるぞあさましき。人は萬物の靈とて、天地の内にて、いと貴きものなれど、天地の性にそむき、人の道をうしなはゞ、禽獸に近くて、貴ぶに足らず。是自ら我が身を賤しくもちくだすなり。豈賤しむべき事ならずや。

なる小兒が云々ー孟子公孫丑上に今人乍ち孺子の將に井に入らんとするを見て皆怵惕惻隱の心有り、交を孺子の父母に内(い)るゝ所以に非ず、譽を鄉黨朋友に要(もと)むる所以に非ず、其聲を惡んで然るに非ざる也云々

みて、救はざるは無し。是其子の父母に親あるにあらず、人の子を救ひたるとて、譽を求むるにあらず。又見捨てたりと、人にいはるゝ悪名をおそるゝにもあらず。唯天性にむまれつきたる仁愛のまことの心より出づるなり。これによりて見れば、人皆此善心むまれつきて、心にそなはれる事を知るべし。君子の道を行ふ工夫は、わが心の内にある四端の善心の、少し萌したるを養ひそだてゝ、外におしひろめ、十分に行ふにあり。たとへば火のはじめてもえ出でたるを打消さずして、ふきおこし熾ならしむれば、ひろき原、大なる山をも燒くが如し。昔もろこしの齊の宣王は、一牛を殺すを情なく思ひ、助けられしは、誠に惻隱の心、善心の發なり。されども、わが國の多くの人民の飢寒をすくはず。是牛を愛する仁心はありながら、其仁心をおしひろめて、萬民に及ぼす工夫なくして、民を飢寒せしむ。火のはじめてもえ出でたるを打消したるが如し、物を燒くことあたはず。およそ人の善を行はずして、不善をするは、皆其善心あるをおしひろめざるなり。善をするは、皆善心の内にあるを、外におしひろむるなり。親に事ふるに、親を愛する一念あるは善なり。これをおしひろむれば、大孝にいたる。もし是をすてゝ、おしひろめざれば、不孝となる。自餘も皆此類なり。故に

人の性は善—孟子性善の説、同書告子上篇に詳也

せちなる—適切なるの意

只今三四歲

が身に取るを辭退して受けざるは辭なり。人にゆづりて與ふるは讓なり。飲食するを以ていはゞ、飲食を辭して、まづ人にゆづり與ふるを云ふ。是禮の端なり。もし讓らずして、爭ひうばはゞ、是禽獸のわざにして、禮にあらず。是非とは、事の善なるをば善と知りて是とし、不善なるをば不善と知りて非とす。是智の端なり。もし是非をわきまへずんば、智なきなり。此四端は、人となれる者は必あり。此四端あるを以て、仁義禮智内にあることを知るべし。又如何なる愚なる人も、親を愛し、君をたふとび、兄を敬ひ、弟をあはれみ、善をほめ、惡を惡まざる者なし。是仁義あればなり。飢寒する人を見ては、あはれむ心おこるは、仁あればなり。又小人といへども、我がいつはりあらはれ、不義を人に知らるれば、赤面し、汗をながす。是義あればなり。凡かやうの類、物にふれて、善心おこること多し。みづから心見て知るべし。皆是仁義禮智の四德を生れつきたるにあらずや。こゝを以て、孟子は、人の性は善なりとのたまふ。もし五常の德なくんば、何ぞ性は善なりといはんや。猶もせちなる事をいはゞ、孟子の書に見えしごとく、唯今三四歲なる小兒が、井のはたにあたりて、智なくして、たちまち井の内におち入らんとするを見ては、如何なる至愚極惡の人も、おどろき悲

てゝ云々ー四一五頁参照

四端ー孟子公孫丑上に出づ、前註一二五頁参照

立てゝ陰と陽といふ。人の道を立てゝ、仁と義といふ。

一仁義禮智の四德、古今天下の人の心に、皆生れつきてそなはれる事、何を以てか知るや。四端あるを以て知れり。四端とは、惻隱、羞惡、辭讓、是非を云ふ。是仁義禮智の四德、心の内にありて、物にふれて自ら心上におこりて、外にあらはるゝを云ふ。故に四端と名づく。端とは、物内にありて見えずといへども、其端少し外にあらはれ出づるを以て、其物の内にあることを知るが如し。仁義禮智の性、心の内にありて、いまだ起らざる時は、其有無見るべからずといへども、物に感じておこり、用となるにいたりて、仁は惻隱となり、義は羞惡となり、禮は恭敬となり、智は是非となる。もし内に、仁義禮智の四德なくんば、必此四端あらはるべからず。内にある故に、外に四端あらはる。是を以て、人心に四德ある證とすべし。惻隱は、いたみいたむと訓む。人のうれひ苦むを見ては、あはれみいたむを云ふ。是仁の心のあらはるゝ端なり。もし人の憂苦を見ながら、あはれむ心無くんば、仁無きなり。羞惡とは、はぢにくむと訓む。惡むとは嫌ふなり。わが不義なるを恥ぢ、人の不義なるを嫌ふ。是義の端なり。もし人の不義をきらはず、わが不義を恥ぢずんば、義なきなり。辭讓は、我

易に乾は元亨利貞と有りて其傳に元亨利貞は之を四徳といふ、元とは萬物の始、亨とは萬物の長、利とは萬物の遂、貞とは萬物の成也と見ゆ

天の道を立

り出でたり。天にあり、人にあり、其理は一なり。董子のいはゆる、道の大原は天に出でたりといふは是なり。

一仁義二理あるにあらず。仁の節あるは義なり。仁義の二を以て、禮智を兼ぬ。故に仁をいへば、義は其内にこもる。仁義をいへば、禮智は其内にこもる。仁は禮を兼ね、義は智を兼ぬ。春は夏を兼ね、秋は冬を兼ぬるが如し。夏は春氣の長ずるなり。冬は秋氣のかくるゝなり。仁義を以て禮智を兼ぬるは、禮は仁のあらはるゝなり。禮義三百、威儀三千は、皆仁の發せるなり。是仁禮一理なり。智は義のかくれたるなり。義の、善悪をたちわかつ事、利刀の、物を斷つが如くなるは、智の、是非することの明なるより出づ。是義智一理なることを見つべし。仁禮は陽に屬し、義智は陰に屬す。仁義の二つをいへば、春生じ夏長ずるは仁なり。秋收り冬藏るゝは義なり。四徳にわかちていへば、春は仁なり。夏は禮なり。秋は義なり。冬は智なり。

一人に仁義あるは、天に陰陽あるが如し。天に陰陽なければ、造化の理ほろびて、四の時行はれず、萬物生ぜずして、天地の道立たず。人に仁義なければ、心の徳ほろび、五倫の道行はれずして、人道立たず。禽獸と何ぞ異ならんや。故に易に曰、天の道を

大に用ひられしが後辭して著述を業とす漢代の醇儒也

土用―暦に十八日一期の稱にて四季各一度宛有り、但し本文中前なる土用の語は木火金水の氣に對し土の働きをいへりと覺ゆ、木火金水土は所謂五行也

元亨利貞―

は陰なり。陰陽を、又わかてば、春夏秋冬の四時となり、土用を加へて五氣となるが如し。一日の内をも、二にわかてば晝夜となり、又わかてば朝晝暮夜の四となるが如し。

一人の心にそなはれる仁義禮智の四德、其根本いづくにあり、いづくより享けたるや。曰く是其根本天にあり。天より出て人の心にむまれつきたり。其根本天にあり。天より出でたるとは如何ぞや。曰く易に天地の大德曰ㇾ生。大德とは大なるめぐみなり。生とは萬物をうみ生かすを云ふ。天地別に心なし。人と萬物をうみ生かす事を以て、心とし給ひ、これを以て、いにしへ今、かぎりなき人物を生じ給ふ。此心を生と云ふ。卽生理なり。又元と云ふ。是天地のめぐみ、物をあはれみ給ふ大德なり。其生理、一年の内、春夏秋冬にめぐり行はれて、元亨利貞の四德となる。天に此四德ありて、天道常に行はるゝが如く、人に仁義禮智ありて、人道行はる。人は天地の子にて、天地の、物をあはれみ給へる御心をうけて、心とす。是を名づけて仁と云ふ。仁は卽あはれみの心なり。此仁の理をわかてば、仁義禮智の四德となる。天の元氣の生理をわかちて、元亨利貞といふが如し。是人の仁義禮智の四德の根本は、天道の元亨利貞よ

者五、曰く仁、曰く禮、曰く信、曰く義、曰く智と有るをいへるならん
易において云々―易說卦に天の道を立てゝ陰と陽と曰ひ、地の道を立てゝ柔と剛と曰ひ、人の道を立てゝ仁と義と曰ふ
董仲舒―廣川の人、武帝に仕へて

給ふ。仁義の二にて、萬善行はれ、人道たつこと、天に陰陽ありて、天道行はるゝが如し。されども孔子の說き給ふ仁の外には出でず。唯仁の一理をわかちて、仁義といへるなり。たとへば一年の內、元氣の流行は一すぢなれど、動靜の分あるを以て、わかちて陰陽といへるが如し。又孟子はじめて仁義禮智の四德をつらねて說き給へり。是又仁義の外、禮智あるにあらず。禮は仁よりいで、智は義の內にあり。朱子の、禮は仁之著るゝなり。智者義之藏るゝなりといへるが如し。仁義をわかちて四德を說くは、陰陽をわかてば、春夏秋冬の四時となるに本づけり。前漢の董仲舒曰、仁義禮智信五常之道、王者所レ當ニ修飾一也といへり。是四德に信を加へて、五常と說ける始なり。四德の外、別に信あるにあらず。四德のまことありて僞無きは、卽信なり。信なければ仁義禮智にあらず。たとへば四時の內に土用ありて、木火金水の氣行はるゝが如し。木火金水も、土なければ生ぜず。是董仲舒のはじめて說き出せるにもあらず、上代よりすでに此說あればなり。

一人心の德は、本唯仁の一理なり、又分れて、仁義禮智となる。又信を加へて五常とす。たとへば一年は唯一氣のめぐりなり。二にわかてば陰陽となる。春夏は陽なり。秋冬

用にあらはれて云々—用にあらはれたる見え易きものを以て其字義をいはばの義

周子—周濂溪をいふ、名は敦頤、字は茂叔、宋の大儒也

韓子—韓退之をいふ、本文の語は原性に、性たる所以の

人道是によりて立つ。故に天下の道理是より出て、道の本根とす。故におよそ人たる者、此理を知らずんばあるべからず。五常の性は體なり。其理說きがたし。用にあらはれて、見えやすきを以て、其字義をいはば、愛を仁と云ふ。愛はあはれみなり。宜を義と云ふ。宜とは事物に相應するを云ふ。各其事につきて理に當るなり。理を禮と云ふ。理とは人をうやまひ、事に則ありて、正しくすぢめ有るを云ふ。通ずるを智と云ふ。道理に通じ、是非を知るを云ふ。守るを信と云ふ。僞なくして、道をかたく守りて、變ぜざるを云ふ。此字義は、周子の說なり。韓子曰、人之所レ性者五、曰仁義禮智信。是人の性に、此五の者そなはれる事をいへり。故に又五性とも云ふ。此五性をすべていへば仁なり。故に孔子は、唯仁の一字を以て教とし給ふ。是易に天地之大德曰レ生といへる意に本づけり。天地の萬物をうみ給ふあはれみの理、人の心に生れつきたるを仁と云ふ。仁は人心の全德なり。故に仁の一理を以て、義禮智信をかね、又萬の善をすべたり。春の氣を以て、夏秋冬を兼ぬるが如し。されども易においては、人の道をたてゝ仁と義といふと、仁義の二をつらねて說き給へり。是經書に、仁義をつらね說ける初なり。孟子に至りて、孔子の道をひろめて、仁義をもはら說き

五常訓

貝原益軒著

卷之一

○總論

一およそ人となれる者は、天の大德をうけて生れ、其心に生れつきたるものあり。名づけて性と云ふ。是卽天地の萬物を生じ給ふ大德の生理なる故に、性の字、心にしたがひ、生にしたがふ。此性の內、おのづから五の德あり。名づけて五常と云ふ。古今天下の人、たかきいやしき、さかしおろかなる、皆おしなべて、此五の德を生れつきて、心にそなはれる事、古今かはることなし。こゝを以て五の常と云ふ。常とはかはらざるを云ふ。此五常の性は、人の人となれる理にして、人の萬物にすぐれて貴く、禽獸にかはれる所こゝにあり。此五の性にしたがへば、五倫の道是より行はれて、

之梗槩。然洙泗之淵源、溯其流、濂洛之微言、撮其要。天人之精微、無不具備。至其日用行事切近工夫、亦無不深切著明。可謂言近而旨遠矣。正是終身用之、不能盡者也。其有補於世教、亦大矣。先生之齡已超八帙。愛物之志倍厚、而不倦著述之勞。繾綣之仁意、孰敢不嘉尚哉。夫著書以示人者、不善浮誇。讀書以自爲者、必貴切實。苟所謂樂春藻之繁華、而忘秋實之甘口者、非君子爲己之學也。吾恐覽斯編者、以其近而忽之。玆不自揣、敢申鄙懐、以爲之序云。

寶永庚寅冬至日

竹田定直拜書

五常訓序

聖門之學、以性爲本。五常其目也。五典其發也。循五常之性、而行五典之道、斯而已矣。若夫衆人、則不知性靈之爲貴。禽獸同群、草木與凋。豈不哀哉。益軒先生、自善其身、推以及人。其志在於愛斯人、以報答天地生育之洪恩。晩年所著尤多。專以導俗喩愚爲務。如俗訓童子訓等書、平易切實、未嘗用巧文麗辭爲工。且書以假字。令夫不識漢字者、亦能讀之、易通曉矣。頃又攟摭聖賢之遺言、發揮平日自得之緒餘、以作爲五常之義訓。亦從俗語以述之、用俗字而説之。雖庸劣昧愚之輩、讀之則庶乎知良心之根秉彝、而得復初之階梯。嗚呼性豈易言哉。如子貢之穎悟、尙所難聞也。如斯書、其言則俗間之假字、而其編則不過數策。似不可以盡聖學

のろひとこひ―呪詛し也、俚言集覧に、「日本紀」呪を訓めり又詛を訓めり

一凡婦人の心ざまの悪しき病は、和順ならざると、怒り恨むると、人を謗ると、物を妬むと、不智なるとにあり。凡此五の病は、婦人に十人に七八は必あり。是婦人の男子に及ばざる所なり。自かへりみ戒めて、改め去るべし。此五の病の内にて、殊更不智を重しとす。不智なる故に、五の病起る。婦女は陰性なり。陰は夜に屬して闇し。故に女子は男子にくらぶるに、智少なくして、目の前なる然るべき理をも知らず、又人の謗るべき事を辨へず、我が身、我が夫、我が子の禍となるべき事を知らず、罪もなき人を恨み怒り、或はのろひとこひ、人を悪みて、我が身ひとり立てんと思へど、人に悪まれうとまれて、皆我が身の仇となる事を知らず、いとはかなく淺まし。子を愛すといへど姑息し、義方の教を知らず、私愛深くして、かへりて子をそこなふ。斯く愚なるゆゑ、年既に長じて後は、よき道を以て教へ悟らしめ難し。唯其甚しきをおさへ戒むべし。事毎に道理を以て責め難し。故に女子は、殊に幼き時より早く能く道を教へ、悪しきわざを戒めならはしむべからず。

かざれるより、女子のため甚利益ある事を知らず、幼き時より嫁して後に至るまで、何の教もなくて、唯其生れつきに任せぬれば、身を愼み家を治る道を知らず、夫の家に行きて、おごり怠り、しうと夫に順はずして、人に疎まれ、夫婦和順ならず。或は不義淫行もありて、追出さるゝこと、世に多し。是親の教なきが故なり。古語に、人よく百萬錢を出して女を嫁せしむる事を知りて、十萬錢を出して子を教ふることを知らずと云へるがごとし。婚嫁の營に心を盡す十分が一の心遣を以て、女子を教へ戒めば、女子の、身を惡しくもてなし、禍に至らざるべきに、斯の如くなるは、子を愛する道を知らざるが故なり。

一婦人は、夫の家を以て家とするが故に、嫁するを歸ると云ふ。云ふ意は、我が家に歸るなり。夫の家を我が家として歸るゆゑ、一たび行きて歸らざるは、定まれる理なり。されど不德にしてしうと夫に背き、和順ならざれば、夫にすさめられ、しうとに惡まれ、父の家に追かへさるゝ禍あり。婦人の恥づべき事、是に過ぎたるはなし。もしくは、夫柔和にして、婦の不順をこらへて歸さゞれども、歸さるべきとがあり。されば人をゆるすべくして、人の爲にゆるさるゝは本意にあらず。

のりて｜罵りての意、前にも屢〻見えたり

なかれ。殊に夫の方の一類の事を、かりそめにも謗らしむべからず。下女の口を信じては、舅姑夫こじうとなどに和睦なくして、恨み背くに至る。愼んで讒を信ずべからず。甚恐るべし。又賤しき者を使ふには、我が思ふにかなはぬ事のみ多し。夫を怒りのりて止まざれば、せはしく腹立つ事多く、家の內靜ならず。惡しき事は、時々言ひ敎へて、誤を正すべし、怒りのるべからず。少しの過は、こらへて怒るべからず。心の內にはあはれみ深くして、外には行儀堅く、いましめて怠らざるやうに使ふべし。いるがせなれば、必行儀亂れ怠りがちにて、禮義を背き、とがを犯すに至る。與へ惠むべき事あらば、財を惜むべからず。但我が氣に入りたるとて、忠なきものに、みだりに財物を與ふべからず。

一およそ此十三ヶ條を、女子のいまだ嫁せざる前に、能く敎ふべし。又書きつけて與へ、をりく讀ましめ、忘るゝことなく、これを守らしむべし。凡世の人の女子を嫁せしむるに、必其家の分限に過ぎて、甚おごり、花美をなし、多くの財を費し用ひ、衣服器物などを、いくらも買ひとゝのへ、其餘の饗應贈答のつひえも亦夥し。これ世の習はしなり。されど女子をいましめ敎へて、其身を愼み治めしむること、衣服器物を

客をつとめて—佳節の當日はまづ夫の方の來客をもてなしあしらひての意

かたましく—奸也、心ねぢけてすなほならぬを云ふ

口がましく—口數多く出過ぎたるをいふ

人にほこるべからず。愚なる俗人、又賤しき下部、賤の女などに、衣服のはなやかなるを譽められたりとも益なし。よき人は、かへりて誹り賤むべきわざにこそあれ。十二日、我が里の親の方に私し、舅姑夫の方を次にすべからず。正月佳節などにも、まづ夫の方の客をつとめて、親の里には、次の日行きてまみゆべし。夫の方をすてて、佳節に我が親の里に行くべからず。しうと夫の免さざるに、父母兄弟の方に行くべからず。私に親の方へ贈物すべからず。又我が里のよき事をほこりて、譽め語るべからず。十三日、下女を使ふに、心を用ふべし。いふかひなきものは、ならはし惡しくて、智惠なく、心かたましく、其うへ物いふことさがなし。夫の事、舅姑の事、こじうとの事など、我が心に合はぬ事あれば、みだりに其主に誹り聞かせて、それをかへりて忠と思へり。婦人もし智惠なくして、それを信じては、必恨出來易し。固より、夫の家は皆他人なれば、恨み背き恩愛を捨つる事易し。愼んで、下女の言を信じ、大切なるしうと小じうとの親みを薄くすべからず。もし下女すぐれてかたましく、口がましくて惡しきものならば、早く追ひやるべし。かやうのものは、必家道を亂し、親戚の中をも言ひ妨ぐるものなり。恐るべし。又下女などの人を誹るを聞き用ふる事

なづさひ―狎れ親むをいふ、なじむといふ語に當れり

とみの用―とみは頓の字音也、急用をいふ

らうたく―優しく上品なるを云ふ

ず。妻おごりて財を費せば、其家かならず貧窮に苦めり。夫たるもの、是に打任せて、其是非を察せざるは、愚なりと云ふべし。十日、若き時は、夫の兄弟親戚朋友、或は下部などの若き男來らんに、なづさひて近づきまつはれ、打とけ物語すべからず。愼みて男女の隔を固くすべし。如何なるとみの用あるとも、若き男にふみなどかよはする事は、必あるべからず。下部を閨門の内に入るべからず。凡男女の隔、輕々しからず、身を堅く愼むべし。十一日、身のかざりも、衣服の染色模樣も、目に立たざるをよしとす。身と衣服との、穢れずしてきよげなるはよし。衣服と身のかざりに、すぐれてきよらを好み、人の目に立つ程なるはあしゝ。衣服の模樣は、其年よりはくすみておいらかなるが、尋常にしてらうたく見ゆ。すぐれてはなやかに、大なる模樣は、目にたちて賤し。我が家の分限に過ぎて、衣服にきよらを好み、身をかざるべからず。唯我が身にかなひ似合ひたる衣服を著るべし。心は身の主なり、尊ぶべし。衣服は身の外にあるものなり、輕し。衣服をかざりて人にほこるは、衣服より尊ぶべき其心を失へるなり。凡人は其心ざま、身の振舞をこそ、潔くせまほしけれ。身のかざりは外の事なれば、唯身に應じたる衣服をもちひて、あながちに飾りて外にかゝやかし、

が—風吹けばおきつ白波たつた山よはにや君がひとりこゆらん、

物ねんじして—物事のつらきを堪へ忍びての意

して、夫にさからひ背く事なかれ。是また婦女の敬順の道に背くのみならず、夫に疎まるゝわざなり。六曰、言を愼みて多くすべからず。假にも人をそしり、僞を言ふべからず。人の謗を聞くことあらば、心にをさめて、人に傳へ語るべからず。謗を言ひ傳ふるより、父子、兄弟、夫婦、一家の間も不和になり、家内治まらず。七曰、女は常に心遣ひして、其身をかたく愼み守るべし。夙におき夜半にいね、晝はいねずして家事に心を用ひ、怠なく勤めて、家を治め、織り、縫ひ、うみ、つむぎ、怠るべからず。又酒茶など多く好みて、癖とすべからず。淫聲を聞くことを好みて、淫樂を習ふべからず。是女子の心をとらかすもの也。たはぶれ遊を好むべからず。宮寺などすべて人の多く遊ぶ所に、四十歳より内は、妄に行くべからず。八曰、巫覡などのわざにまよひて、神佛を穢し近づき、みだりに祈り諂ふべからず。唯人間の勤をもはらになすべし。目に見えぬ鬼神の方に、心を迷はすべからず。九曰、人の妻となりては、其家を能く保つべし。妻の行悪しく放逸なれば、家を破る。財を用ふるに、儉約にして費をなすべからず。おごりを戒むべし。衣服、飲食、器物など、其分に隨ひて、あひ似合ひたるを用ふべし。みだりに飾をなし、分限に過ぎたるを好むべから

夫を以て天とす—左傳に、婦人室に在りては則ち父を天とし、出でては則ち夫を天とすと見え、又類書纂要にも、婦は夫を以て天と爲し子は父を以て天と爲す云々

あひよめ—夫の兄弟の妻をいふ

夜半にや君

うと、こじうとめは、夫の兄弟なれば、情深くすべし。又こじうと、こじうとめに謗られ悪まるれば、しうとの心に背きて、我が身の爲にもよからず。睦じく和睦すれば、しうとの心にかなふ。然ればこじうとの心も亦失ふべからず。又あひよめを親しみ睦じくすべし。ことさら夫のあに嫂はあつく敬ふべし。あによめをば我が姉と同じくすべし。座につくも、道を行くも、へり下り後れて行くべし。四曰、嫉妬の心、ゆめ〳〵おこすべからず。夫淫行あらば諫むべし、怒り恨むべからず。嫉妬甚しければ、其氣色言葉もおそろしく、すさまじくして、かへりて夫に疎まれ、すさめらるゝものなり。業平の妻の、夜半にや君がひとり行くらんと詠みしこそ、誠に女の道にかなひて、やさしく聞ゆめれ。およそ婦人の、心猛く怒多きは、しうと夫に疎まれ、家人に謗られて、家を亂し人をそこなふ。女の道に於て大に背けり。腹たつことあらば、おさへて忍ぶべし。色に顯すべからず。女は物ねんじして、心ののどかなるこそ、幸も見はつる理なれ。五曰、夫もし不義あり過あらば、我が色を和げ、聲を悦ばしめ、氣をへり下りて諫むべし。諫を聴かずして怒らば、先しばらく止めて、後に夫の心和ぎたる時、また諫むべし。夫不義なりとも、顔色を烈しくし、聲をいらゝげ、心氣をあらく

敢て夫の筐笥に藏せず、敢て湢浴せず

いぶりにして―この語意明かならず、思ふに威振の誤れる訓か、或は俗語にぶり〱してといふ類にて、和順ならず態度の素直ならぬをいへるならん

の方の務むべきわざを怠るべからず。若しうとの命あらば、愼み行ひて背くべからず。凡の事、舅姑に問ひて、其敎に任すべし。舅姑もし我を愛せずして、謗り惡むとも、怒り恨むる事なかれ。孝を盡して、誠を以て感ぜしむれば、彼もまた人心あれば、後は必心和ぎて、いつくしみある理なり。二曰、婦人は別に主君なし。夫を誠に主君と思ひて、敬ひ愼みて事ふべし。輕しめ侮るべからず。和ぎ順ひて、其心に違ふべからず。凡婦人の道は從ふにあり。夫に對するに、顏色言葉遣慇懃にへり下り、和順なるべし。いぶりにして不順なるべからず。おごりて無禮なるべからず。是女子第一のつとめなり。夫の敎いましめあらば、其命に背くべからず、疑はしき事は、夫に問ひて、其命を受くべし。夫問ふ事あらば、正しく答ふべし。其いらへおろそかにすべからず。答の正しからず、其理聞えざるは無禮なり。夫もし怒り責むる事あらば、おそれて從ふべし。怒り爭ひて、其心に逆ふべからず。それ婦人は夫を以て天とす。夫を侮ることは、かへす〲あるべからず。夫を侮り背きて、天より怒り責めらるゝに至るは、是婦人の不德の甚しきにて、大なる恥なり。故に女は常に夫を敬ひ畏れて、愼み事ふべし。夫に賤められ責めらるゝは、我が心より出でたる恥なり。三曰、こじ

たはれの心の云々―心和順なると淫逸にして節操を守る事無きとは全く別物なりとの義

夫の衣桁に云々―禮記内則に、男女椸枷を同じうせず、敢て夫の揮椸に縣けず

あやまちの出來るもとゐなり。和順を女德とすると、たはれの心の、やはらかにして守りなく、かろびたると、其すぢかはれること、云ふにおよばず。古人は、兄弟といへども、幼より男女席を同じくせず、夫の衣桁に妻の衣服を懸けず、衣服も同じ器にをさめず、衣裳をも通用せず、ゆあみする所もことなり。是夫婦すら、別を正しくするなり。況や夫婦ならざる男女は、云ふに及ばず。男女の分、内外の別を正しくするは、古の道なり。

一いにしへ、女子の嫁する時、其母中門まで送りて、戒めて曰く、汝が家に行きて、必愼み、必戒めて、夫の心に背くこと勿れと言へり。是古の女子の嫁する時、親の敎ふる禮法なり。女子の父母、能く此理を言聞せ戒むべし。女子も、また此理を心得て、守り行ふべし。

一又女子の嫁する時、兼てより父母の敎ふべき事十三ヶ條あり。一曰、我が家にありては、我が父母にもはら孝を行ふ理なり。されども夫の家に往きては、もはら舅姑を、我が二親よりも猶重んじて、厚く愛み敬ひ、孝行を盡すべし。親の方を重んじ、しうとの方を輕んずる事なかれ。しうとの方に、朝夕の見舞を缺くべからず。しうと

たはれたる行―淫逸にして亂りがはしき行の義
ざればみて―洒落にして戯れたる樣なるをいふ

す。殊に縫物するわざを能く習はしむべし。早く女のわざを敎へざれば、夫の家に行きて、わざを勤むる事ならず、人にそしられ笑はるゝものなり。父母となれるもの、心を用ふべし。

一凡女子は、家にありては父母に事へ、夫に嫁しては、しうと夫に親しくなれ近づきて事ふる者なれば、其身をきよくして、けがらはしくすべからず。是また女子のつとむべきわざなり。

一父母となる者、女子のいとけなきより、男女の別を正しくし、行儀をかたくいましめ敎ふべし。父母の敎なく、たはれたる行あれば、一生の身を徒にすて、名をけがし、父母兄弟に恥を與へ、見聞く人に爪はじきをせられん事こそ、口惜しく淺ましきわざなれ。萬いみじくとも、塵ばかりもかゝる事あらば、玉の盃のそこなきにも劣りなん。俗の諺に、萬能一心と云へるも、かゝる事なり。是を以て、女は心一つを貞しく潔くして、如何なる變にあひて、たとひ命を失ふとも、節義を堅く守るこそ、此生後の世までの面目ならめ。常に心遣ひをして、身を守る事堅きに過ぎたらん程はよかるべし。人に向ひ、やはらかにざればみて、かろらかなるは、必節義を失ひ

婦に長舌あるは云々―詩經大雅瞻仰篇に、婦に長舌有るは維れ厲の階、亂は天より降るに匪ず婦人より生ず

すさめられ―疎んじさげすまるゝをいふ

命を受けて用ふべし。然るに夫の財をひめて我が身に私し、人に與へば、其家の賊なれば、是を去るもむべなり。女は此七去の内、五を恐れ愼みて、其家を出でざらんこそ、女の道も立ち、身の幸ともなるべけれ。一たび嫁して、其家を出され、たとひ他の富貴なる夫に嫁すとも、女の道にたがひぬれば、本意にあらず、幸とはいひ難し。もし夫不徳にして、家貧賤なりとも、夫の幸なきは、婦の幸なきなれば、天命の定まれるにこそと思ひて、愁ふべからず。

一凡女子を愛し過して、恣に育てぬれば、夫の家に行きて、必おごりおこたりて、他人の氣に合はず、終にしうとに疎まれ、夫にすさめられ、夫婦不和になり、おひ出され、恥をさらすもの多し。女子の父母、我が教なき事を恥ぢずして、しうと夫の惡しきとのみ思ふこと愚なり。父母の教なかりし女子は、夫の家に行き、しうとの教正しければ、せわらしく堪へ難く思ひて、しうとを恨み誹り、中惡しくなる。親の家にて教なければ、斯の如し。

一女子には早く女功を教ふべし。女功とは、織り、縫ひ、うみ、つむぎ、すゝぎ、洗ひ又は食を調ふるわざをいふ。女人は外事なし。かやうの女功を勤むるを以てしわざと

んと云ひ、擊蒙要訣立志章に、人の容貌は醜を變じて姸と爲す可からず(中略)惟心志に有つては以て愚を變じて智と爲し不肖を變じて賢と爲すべし云々

よつぎをひろむる―子孫繼嗣の多からん爲に妾婢を養ふ事も有りと也

く、婦の道に背かずして、夫しうとの心にかなひなば、夫の家族同姓の子を養ひ、家を繼がしめて、婦を出すに及ばず。或は又妾に子あらば、妻に子なくとも去るに及ぶべからず。次に淫亂なるは、我が夫に背き、他の男に心をかよはすなり。婦女は萬の事いみじくとも、此穢行だにあらば、何事のよきも見るに足らず。是女の堅く心に戒め愼むべき事なり。妬めば夫を恨み妾を怒り、家の内亂れて治まらず。又高家には婢妾多くして、よつぎをひろむる道もあれば、ねためば子孫繁昌の妨となりて、家の大なる害なれば、是を去るもむべなり。多言は口がましきなり。詞多く、物いひさがなければ、父子兄弟親戚の間も、言ひ妨げ、不和と成りて、家亂るゝものなり。古き文にも、婦に長舌あるは是亂の階なりと云へり。女の口のきゝたるは、國家の亂るゝ基となると云ふ意なり。また尙書に、牝鷄の晨するは家の索也と云へり。鷄のめどりの時をうたふは、家のおとろふる禍となるが如く、女の男子の如く物いふ事を用ふるは、家の亂となる。およそ家の亂は、多くは婦人より起る。婦人の禍は必口より出づ、戒むべし。竊盜とは、物盜みする也。夫の財を盜みて自ら用ひ、或は我が父母兄弟、他人に與ふるなり。もし用ふべく與ふべき事あらば、しうと夫に問ひ、

七去ー孔子の言也、小學に出づ

容こそ云々ー徒然草に、品形こそ生れつきたらめ心はなどか賢きより賢きにもうつさばうつらざら

べき事なり。詩經の詩に、彼に在りても惡まるゝ事なく、此に在つてもいとはるゝ事なしと云へり。婦人の身を保つは、常に愼みて、斯の如くなるべし。

一婦人に七去とて、惡しき事七あり。一にても有れば、夫より逐ひ去らるゝ理なり。故に是を七去と云ふ。これ古の法なり。女子に敎へきかすべし。一には父母に隨はざるを去る。二に子なければ去る。三に淫なれば去る。四に嫉めば去る。五に惡疾あれば去る。六に多言なれば去る。七に竊盜すれば去る。此七の內、子なきは生れつきなり、惡疾はやまひなり。此二は、天命にて力に及ばざる事なれば、婦のとがにあらず。其餘の五は、皆我が心より出づるとがなれば、愼みて其惡を止め、善に移りて、夫に去られざるやうに用心すべし。凡人の容こそ生れつきたれば改め難かるべけれ、心は變ずる理あれば、我が心だに用ひなば、などか愚なるより賢きにも遷さばうつらざらん。然れば我が惡しき生れつきを知りて、力を用ひ惡しきを改めて、善きに移るべし。此五の內、まづ父母に順はざるとは、夫の家に在りて、舅姑に順はざるは、婦人第一の惡なり。然れば夫の去るはことわりなり。次に妻を娶るは子孫相續の爲なれば、子なければ去るもむべなり。されど其婦の心和かに行正しくて、嫉妬の心な

び以て衣服に共す

三從—儀禮喪服篇に、婦人三從の義有り、專制の道無し故に未だ嫁せざれば父に從ひ、既に嫁しては夫に從ひ、夫死しては子に從ふ

本など見せしむる事なかれ。又伊勢物語、源氏物語など、其詞は風雅なれども、かやうの淫俗の事を記せるふみを、早く見せしむべからず。又女子も、物を正しく書き、算數を習ふべし。物書き算を知らざれば、家の事を記し、財を計ること能はず。必是を教ふべし。

一婦人には三從の道あり。凡婦人は、柔和にして人に從ふを道とす。我が心に任せて行ふべからず。故に三從の道と云ふことあり。是亦女子に教ふべし。父の家に在りては父に從ひ、夫の家にゆきては夫に從ひ、夫死しては子に從ふを三從と云ふ。三のしたがふなり。幼より身を終るまで、我が儘に事を行ふべからず。必人に從ひてなすべし。父の家に在りても、夫の家に行きても、常に閨門の内に居て、外に出でず。嫁して後は、父の家に行くことも稀なるべし。況や他の家には、やむ事を得ざるにあらずんば、輕々しく行くべからず。唯使を遣はして、音問を通し、親みをなすべし。其つとむる所は、しうと夫につかへ、衣服をこしらへ、飲食を調へ、内を治めて、家をよく保つを以てわざとす。我が身にほこり、かしこだてにて外事にあづかること、ゆめ〳〵有るべからず。夫を淩ぎて物をいひ、事を恣に振舞ふべからず。是皆女の戒む

いふに同じ、やさしくしとやかなるを云ふ

をとこもじ——漢字をいふ、これに對して假名を女文字と云へり

十歳より云云——禮記內則に、女子十年出でず姆婉娩聽從を敎へ麻枲を執り絲繭を修め紝を織り紃を組む女事を學

て、專つとむべきわざを事とし、戯れ遊び笑ふ事を好まず、食物飲物いさぎよくして、しうと夫賓客に進むる、是皆婦功なり。此四は女人の職分なり、つとめずんばあるべからず。心を用ひてつとめなば、誰もなるべきわざなり。怠りすさみて、其職分を空しくすべからず。

一七歳より和字を習はしめ、又をとこもじをも習はしむべし。淫思なき古歌を多く讀ましめて、風雅の道を知らしむべし。是また男子の如く、初は數目有る句、短き事ども許多よみ覺えさせて後、孝經の首章、論語學而篇、曹大家が女誡など讀ましめ、孝順貞潔の道を敎ふべし。十歳より外に出ださず、閨門の內にのみ居て、おりぬひ、うみつむぐわざを習はしむべし。假にも淫佚なる事を聞かせ知らしむべからず。小唄淨瑠理三味線の類、淫聲を好めば、心をそこなふ。かやうの賤しきたはぶれたる事を以て、女子の心をなぐさむるはあしゝ。風雅なるよき事を習はしめて、心をなぐさむべし。此比の婦人は、淫聲を好んで女子に敎ふ。是甚風俗心術をそこなふ。幼き時惡しき事を見聞き習ひては、早く移り易し。女子に見せしむる草紙もえらぶべし。古の事しるせるふみの類は害なし。聖賢の正しき道を敎へずして、ざればみたる小唄淨瑠理

に正す男女正しきは天地の大義也
玄紞—國語に王后親ら玄紞を織ると見ゆ、玄紞は赤黒き冠の瑱（みみふさぎ）の紐也
女に四行—四行の事、曹昭が婦行を論じたる文に出で、本文と大同小異也
なよよか—なよやかと

一いにしへ天子より以下、男は外を治め、女は内を治む。王后以下、皆内政を勤め行ひて、婦人の職分あり。今の世のならひ、富貴の家の婦女は、内を治むるつとめうとく、織縫の業におろそかなり。いにしへ我が日の本にては、かけまくもかしこき天照大神も、自ら神衣を織りたまひ、齋服殿にまし〱ける。其御妹稚日女尊も亦しかり。是日本紀に記せり。もろこしにて、王后みづから玄紞を織り給ふ。公侯の夫人、位貴しといへども、皆自らきぬをおれり。今の士大夫の妻、安逸にほこりて女功を勤めざるは、古法にはあらず。

一女に四行あり。一に婦徳、二に婦言、三に婦容、四に婦功、此四は女の勤め行ふべきわざなり。婦徳とは心だてよきを云ふ。心貞しくいさぎよく、和順なるを徳とす。婦言とは言葉のよきを云ふ。僞れることを言はず、言を擇びていひ、にげなき悪言を出さず、言ふべき時言ひて、不用なる事を言はず、人其言ふ事をきらはざるなり。婦容とは形のよきを云ふ。あながちに飾を專にせざれども、女は容なよよかにてをゝしからず、粧のあてやかに、身持きれいにいさぎよく、衣服のあかづき穢なき、是婦容なり。婦功とは女のつとむべきわざなり。ぬひ物をし、うみつむぎをし、衣服を調へ

漢の班昭字は惠姬をいふ、彪の女、曹壽の妻にして漢書の著者班固の妹也，大家は女の尊稱

男は外を治め云々—易に、女は位を内に正し男は位を外

り。つゝしむとは恐れて恣ならざるを云ふ。つゝしみにあらざれば、和順の道も行ひ難し。およそ女の道は順を尊ぶ。順の行はるゝは、ひとへに愼むよりおこれり、詩經に、戰々とつゝしみ、兢々とおそれて、深き淵に臨むが如く、薄き氷を履むが如しと云へるは、恐れ愼むの心をかたどりて云へり。愼みて恐るゝ心持、斯の如くなるべし。

一女は人につかふるものなれば、父の家富貴なりとても、夫の家に行きては、其親の家に在りし時より、身をひきくして、舅姑にへりくだり、愼み仕へて、朝夕のつとめ怠るべからず。舅姑のために衣を縫ひ、食を調へ、我が家にては、夫に仕へて高ぶらず、自ら衣をたゝみ、席をはき、食を調へ、うみ、つむぎ、縫物し、子を育てゝけがれを洗ひ、婢多くとも、萬の事に自ら辛勞をこらへて勤むる、是婦人の職分なれば、我が位と身に應ぜぬほど、引きさがり勤むべし。斯のごとくすれば、しうと夫の心に叶ひ、家人の心を得て、能く家を保つ。又我が身に高ぶりて人をさし使ひ、勤むべき事に怠りて、身を安樂に置くは、しうとに憎まれ、下人に謗られて、人の心を失ひ、其家を能く治むる事なし。かゝる人は、婦人の職分を失ひ、後の幸なし。愼むべし。

人、博覽多識にして又忠誠の士なりしが後趙王倫の爲に害せらる
物言さがなく―物の言ひ方愼み無きをいふ
おぞましく―忌み嫌ふべくの意
かいひそめて―内氣にしとやかにして出過ぎざるをいふ
曹大家―後

知る事なしと云へり。性をかざるとは、生れつきの悪しきを改めて、よくせよとなり。かざるとは、僞り飾るとにはあらず。人の本性はもと善なれば、幼きより善道にならはゞ、などか善き道に移り、よき人とならざらんや。是を以て、いにしへ女子には、女德を專に敎へしなり。女の德は和順の二をまもるべし。和とは心を本として、かたち言葉もにこやかに、うらゝかなるを云ふ。順とは人に從ひて背かざるを云ふ。女德のなくて和順ならざるは、腹きたなく人をいかり罵りて、心猛く氣色けうとく、面はげしく眼おそろしく見いだし、人をながしめに見、言葉あらゝかに、物言さがなく口きゝて、人にさきだちてさかしらし、人を恨みかこち、我が身にほこり、人を謗り笑ひ、われ人にまさり顏なるは、すべておぞましく惡し。是皆女德に背けり。是を以て、女は唯和順にして貞信に、情深くかいひそめて、しづかなる心の趣ならんこそあらまほしけれ。

一 婦人は人に事ふるものなり。家に居ては父母に事へ、人に嫁しては舅姑夫に事ふるに、愼みて背かざるを道とす。もろこしの曹大家が言にも、敬順の道は婦人の禮なりと云へり。然れば女は敬順の二を常に守るべし。敬とはつゝしむなり、順はしたがふな

途の春秋に富み深窗の内に養はれて在る頃よりの意

嫫母―纂文に、嫫母は醜人也黄帝愛幸す

無鹽―新序雑事篇に、鍾離春は齊の婦人極醜無雙也號して無鹽女といふ云々

張華―字は茂先、晉の范陽方城の

に迷ひ、愛に溺れ、姑息して其悪しきことをゆるし、其性をそこなふべからず。年に随ひて、まづ早く女徳を教ふべし。女徳とは、女の心ざまの正しくして善なるを云ふ。凡女は、容より心の優れるこそめでたかるべけれ。女徳をえらばず、容を本としてかしづくは、いにしへ今の世の悪しきならはしなり。古の賢き人は、容の勝れてみにくきをも嫌はで、心ざまの勝れたるをこそ、后妃にもかしづき備へさせ給ひけれ。黄帝の妃嫫母、齊の宣王の夫人無鹽は、何れも其容極めてみにくかりしかど、女徳ありし故に、かしづき給ひ、君の助となられける。周の幽王の后褒姒、漢の成帝の趙飛燕、其妹趙婕妤、唐の玄宗の揚貴妃など、其容は勝れたれど、女徳なかりしかば、皆天下のわざはひとなり、其身をも保たず。諸葛孔明は、好んで醜婦を娶られしが、色欲の迷なくて、智も志も、いよ〱精明なりしとかや。是を以て、婦人は心だによからんには、容みにくゝとも、かしづきもてなすべき理なれば、心ざまをひとへに愼み守るべし。其上、容は生れつきたれば、いかに見苦しとても變じ難し。心は悪しきを改めて、よきにうつさば、などか移らざらん。いにしへ張華が女史の箴とて、女の戒になれる文を作りしにも、人皆其容をかざる事を知りて、其性をかざる事を

生先こもれる窗の内より―なほ前

和俗童子訓卷之五

○教㆓女子㆒法

一男子は外に出でて、師に從ひ、物を學び、朋友に交り、世上の禮法を見聞するものなれば、親の敎のみにあらず、外にて見聞する事多し。女子は常に内に居て、外に出でざれば、師友にしたがひて、道を學び、世上の禮義を見習ふべきやうなし。ひとへに親の敎を以て、身を立つるものなれば、父母の敎怠るべからず。親の敎なくて育てぬる女は、禮義を知らず、女の道にうとく、女德を愼まず、且女功のまなびなし。是皆父母の子を愛する道を知らざればなり。

一女子を育つるも、初は大やう男子と異なる事なし。女子は他家に行きて、他人に事ふるものなれば、ことさら不德にては、舅姑夫の心に叶ひ難し。幼くて生先こもれる窗の内より、能く敎ふべき事にこそ侍れ。不德なる事あらば、早く戒むべし。子を思ふ道

り。和字四十八字をいろはと云ふがごとし。學んで時に之を習ふとよめば、ての字、にの字、をの字は、皆てには也。やまと歌は、人の心を種としてと讀めば、はの字、をの字、ての字、皆てには也。又和語のてには、上下相對するならひあり。ぞける、こそけれ。にけり、てけれ。是上をぞと云へば、下はけると云ひ、花ぞ散りけると云ふべし。花ぞちりけりとは云ふべからず。上にてこそと云へば、下はけれと云ふべし。上にこそと云ひて、下にてけりと云ふべからず。にけり、てけれも、是を以て知るべし。又はし、ぞきと云ふは、上をはといへば、下はしと云ひ、上をぞと云へば、下はきといふ。たとへば、鐘の音はうし、鐘の音ぞうき、此類を云ふ。是皆てにはの習ひなり。かなづかひ開合と、てにはを知らで、和文和歌を書けば、ひが事多くして笑ふべし。

せる和名抄の義，和名抄は倭名類聚抄の略稱也，二十卷あり，天地歳時鬼神等四十部二百六十八門に分ちて名を記し文字の出處を記せるもの也

つけ字─送假名をいふ

用ふべからず。世俗是等の書を用ふるゆゑ誤多し。近年印行せし訓蒙圖彙、和爾雅、倭字通例書などを擇び用ふべし。今世俗の通用する漢名和名、誤甚多し。能く擇んで書くべし。

一國字を書くに、假名遣とてにはを知るべし。かなづかひとは、音を書くに開合あり。開合とは、字を唱ふるに、口のひらくと合ふとなり。和音五十字の內、あかさたな、はまやらわは、ひらく音なり。江肴豪陽唐庚淸靑の韻の字は、皆開くなり。おこそとの、ほもよろをは、合ふ音なり。東冬蕭宵蒸登尤侯幽の韻の字は、皆合へるなり。又和訓の詞の字のかなづかひは、いゐ、おを、えゑの三音は、各二字づつ同音なれど、字により所によりて、いの字を川ひゐの字を用ふるかはりあり。おをとえゑも亦同じ。又はひふへほと書きて、わゐうゑをとよむは、和訓の詞の字、中にあり下にある時の書きやう讀みやうなり。是も和音五十字にて通ずる理あり。是皆かなづかひの習ひ也。五十音に能く通ずれば、其相通を知るなり。又てにはとは漢字にも和語にもあり。漢字和語の本訓の外、つけ字をてにはと云ふ。てにはと云ふは、本訓の外つけ字に、ての字、にの字、はの字多き故に名づく。又てにをはとも云ふは、をの字も多ければな

一文字をかき、書を寫すには、筆畫をよく辨へ知りて、誤なかるべし。世俗の字を書くは、字畫に甚誤多し。心を用ひて筆畫を知るべし。字畫を知るには說文を宗とし、玉篇の首卷、字彙の末卷、及び續字彙の內、字體辨微、黃元立が字考を以て誤を辨ずべし。字學にも亦心を用ふべし。

一書狀を書くには、本邦の書札のならひあり。必書禮を學んで、其法に從ふべし。書禮を學びざれば、文字を知る人も、誤ること多し。

一唐流には、筆法のならひ猶もこれ有り。予嘗て諸書の內を考へ、からの筆法の諸說を集めて、一書を著せり。心畫軌範と名づく、一册あり。和流には筆法の傳授とて、字ごとに色々むつかしきならひあり。唐流には、すべての筆法のならひはあれど、和流の如く、かゝはりたる法はこれなし。

一世間通用の文字を知るべし。書跡よくしても、文字を知らざれば用をなさず。天地、人物、人事、制度、器財、本朝故實、鳥獸、蟲魚、草木等の名、およそ世間通用の文字を知るべし。世俗は、通用の文字を知るに、順和名抄、節用集、下學集などを用ふ。順和名抄は用ふべきこと多し、また誤多し、功過相半なり。節用集、下學集は誤多し。

説文—説文解字をいふ、三十卷、漢の許愼の撰にして六書により文字の起源意義を說明せるもの也

かゝはりたる—一方に拘泥せる義

順和名抄—源順の著は

内閣字府―内閣祕傳字府の略、三卷あり、黄鍪、黄鉞の合著に係り古來の書論及び書法を纂錄す

眞は行を生じ云々―此語東坡の志林に見ゆ

くればはたらかず。是小字中字大字を書く三法なり。

一字を學ぶには、必まづ眞書を大文字に書習ふべし。内閣字府の七十二筆を先うつすべし。次に行書を習ふべし。凡字を書習ふには、眞行草共に古人の能書を法とすべし。東坡が曰、眞は行を生じ、行は草を生ず。眞は人の立つが如く、行は人の行くが如く、草は人の走るが如し。いまだ不立して、能く行き能く走る者はあらじと云へり。是を以て見るに、眞は本なり、草は末なり。唐土には、まづ眞書より學ばしむる故に、字畫正しく誤なし。倭俗は眞字を學ばざる故に、文字を知らず、字畫に誤多し。眞書を學ばざれば、草書にも誤多し。本邦近代の先輩、さばかり能書の名を得たる人多けれど、眞書を不學ゆゑ、其筆跡、眞草共に多くは誤字あり、證とするに足らず。世俗文盲なる人、眞書を早く學べば、手腕すくむと云ふは誤なり。是書法を知らざる人の言ふ事なり。初學より眞書を能く書習ふべし。初學の時、眞草ともに小字のみ書きて、大字を書かざれば、手すくみてはたらかず。故に初て手習ふには、眞草ともに大に書くべし。其後には、次第に細字をも書習ふべし。手のすくむとはたらくとは、習字の大小にあり、眞草によらず。

力の強きをいひ轉じては單に習字の義にもいふ、書斷に王羲之晉帝の時北郊を祭るに祝版を更む工人之を削るに筆木に入ること三分とあるより出でたる語也
眞一行二草三―指の筆毫を距ること眞は一寸行は二寸草は三寸なるべしとの義

なければよしとせず。

一初は一流を專習ふべし。後には諸流のよきを取りて則とすべし。もはら一流を似すべからず。古人の一流に全く似たるをば、書奴と云ひていやしむ。

一筆ひたし過すべからず、又乾かすべからず。硯は時々あらひ、新水をかへ用ひ、ほこりを去るべし。墨をばやはらかにすり、筆をば強く執るべし。故に墨は病夫にすらせ、筆は壯夫に執らしむといふ。和流は是に異なり、筆をやはらかに執るなり。

一手習の後は、物を書くに硯池の水を染めず。新水を墨する所に入れて、墨をすり、時に臨みて染むべし。

一筆に墨を染むる事、大字を書くにも、三分に過ぐべからず。深くひたすは、筆よわくして力なし。細字は猶もみじかく染むべし。

一筆を執るに、眞書は軸を低く、草は高く取る。行は其間なり。眞一行二草三といふ。

一腕法三あり。枕腕あり、提腕あり、懸腕あり。枕腕は左の手を右の手の下に枕にさするなり。是小字を書く法なり。提腕は肘は机につけて、腕をあげて書くなり。是中字を書く法なり。懸腕は腕をあげて空中に書くなり。是大字を書く法なり。腕を下につ

横に二字―扁と旁とより成れる文字を云ふ

上下二字―冠を加へて成れる文字をいふ

入木―墨の木にしみ込む意にて筆

く、長字は短くすべし。横の筆畫は細きがよし。竪の筆畫はあらきがよし。横に二字合せて一とする字は、ひろくすべからず。上下二字合せて一とする字は、長くすべからず。疎は密に、密は疎なるべし。骨多きに宜し、肉多きに宜しからず。皆是筆法の習ひなり。

一 指を以て筆を動かす事勿れ。大字は肘をうごかし、小字は腕をうごかす。筆のはたらき自由なるべし。指は執る事を主どり、肘腕は動くことを主どる。指はうごかすべからず。

一 筆の執りやうは正しくして、筆さきの横にあたらざるやうに、筆鋒を正しく直にすべし。筆直に正しければ、筆鋒あらはれずしてよし。筆傾けば鋒あらはる。筆鋒の當る所を、あらはれざるやうに藏すべし。左の筆を起す所、殊にあらはれざるがよし。鳥の口嘴の如くとがれるは悪しゝ。又右のかどに肩をあらはすべからず。鋒は常に畫中にあらしむべし。これを藏鋒と云ふ。藏鋒をよしとす。

一 筆鋒は紙に強く當るべし。入木といふも此事なり。

一 手を習ふに、筆のはたらきの神彩を先とし、字の形を次とす。字の形よくとも、神彩

くつろぎ｜緩かにのびのびせるをいふ、すくみの反對也

は、筆をすぐにして、前後左右にかたよらざるを云ふ。斯の如くならざれば、筆鋒あらはれ、横あたりあり。緊とは、筆をきびしく堅く取りて、やはらかならざるを云ふ。上より抜き取られざるやうに執りてよし。斯の如くならざれば、筆に力なくして弱し。正緊の二は筆の形なり。此四法は、筆を執るならひなり。日本流の筆の執りやうは、是に異なり、單鉤に取りて筆鋒を先へ出し、やはらかにして、上より抜き取るをよしとす。

一　小兒の時より、大字を多く書習へば、手くつろぎはたらきてよし。小字を書きて、大字を書かざれば手すくみてはたらかず。字を習ふに、紙を惜まず、大に書くべし。大に書習へば、手はたらきて自由になり、又年長じて後、大字を書くに善し。もし小字のみを書習へば、手腕すくみて、長じて後、大字を書く事なり難し。手習ふには、悪しき筆にて書くべし。後に筆をえらばずして善し。もしよき筆にて書習へば、後悪しき筆にて書く時、筆跡悪しゝ。時々よき紙に書くべし。悪しき紙にのみ書習へば、よき紙に書く時、手すくみてはたらかず。

一　眞字を書く法、大なる字はつゞめて小ならしめ、小字はのべて大ならしめ、短字は長

一雙鈎とは筆の持ちやうなり。大指と食指中指の二指と對してはさむを云ふ。食指一をかけてはさむをば單鈎と云ふ。單鈎は手かたまらずして、筆に力なし。故に雙鈎をよしとす。日本流は多く單鈎を用ふ。

一雙鈎の法は、まづ筆を大指と食指にてはさむに、大指のはらと食指の中節のわきに、筆をあらしむべし。此二指は力を主どる。次に中指をかゞめて、筆を指のとがりに附け、筆をおさへ、次に無名指の外、爪と肉とのきはに筆をあて、上におさへあげて、中指と相對してさしはさみ、中指は外より内におさへ、無名指は内より外へおす。此二指は運動を主どる。大指と食指にて、上にて挾みたる筆を、また中指と無名指を以て、下にて挾み、堅固にするなり。次に子指は無名指の下かどにつらねて、無名指の力を助く。筆の左に行き右に行く時、無名指をたすけて導き送る。筆を取る事、五指ともに淺きをよしとす。淺ければ力強くして、はたらき自由なり。

一虚圓正緊は、筆を取る四法なり。知らずんばあるべからず。虚とは、指を掌に近づけずして、掌の内を虚しくひろくするを云ふ。鐙の形の如くなるをよしとす。圓とは、掌の外、手の甲を圓くして、かどなきを云ふ。虚圓の二は掌の形なり。正と

てには―てにをはの略にて助字の事をいふ、後に詳説あり、三八九頁本文参照

世俗は賞翫すれども、古法を知らざるは、皆俗筆なり、學ぶべからず。

一小兒初て手習するには、先一二三四五六七八九十百千萬億、次に天地、父母、五倫、五常、四端、七情、四民、陰陽、五行、四時、四方、五穀、五味、五色などの名目の手本を、眞字に書きて、大に書習はしむべし。

一あいうえお五十字は、和音に通ずるに益あり。横縱に讀覺ゆべし。かな遣てにはなども、是を以て知るべし。いろはの益なきにまされり。國字も皆是に備れり。片假名はおそく教へ知らしむべし。

一凡文字を書習ふに、高く墨を取り、端正にすりて、すり口をゆがむべからず。手をけがす事勿れ。高く筆を取り、雙鉤し、端正に字を書くべし。雙鉤とは筆の取りやうなり。凡字を書くに、一筆一畫平正分明にして、老草に書くべからず。老草とは、平正ならず、わがまゝに疎忽に書くをいふ。手本を能く見て、違はざるやうに、しづかに學ぶべし。才に任せ達者ぶりして、老草に書けば、手跡あがらず。書を寫し習ふにも、平正に書くべし。常の書札など書くにも、手習と思ひて、愼みて正しく書くべし。斯の如くすれば、手跡進み易し。手を習ふには、まづ筆の取りやうを知るべし。

三筆三跡―三筆は嵯峨天皇、橘逸勢、僧空海にして、三跡は小野道風、藤原佐理、藤原行成也

家流―御家流也、尊圓法親王の始めたる一派にして一に青蓮流ともいふ

日本流とて別に有るべからず。唐流の筆法に違へるは俗筆なり。同じくは、唐の正流を初より習ふべし。但近世の正しからざる唐筆を習へば、手跡ひがみ邪にして、讀み難し。文盲なる人は、唐流は讀み難しと云ふ。それは惡しき風を習ひたるを見て言へり。からの書は、眞字をまづ習ひて、それに隨ひて、行草を書く故に、筆跡正し。日本流は、眞字に隨はず、字形をかざる故、多くは字畫ちがひ、無理なること多し。

一眞字は、殊に唐筆の正しき能書を初より學ぶべし。和字も古の能書をはじめより學ぶべし。和字には中華流あるべからず。眞字には和流あるべからず。和流に眞を書くと、唐流に和字をかくとは、皆ひが事なり。此理を知らずして、今時唐流にかなを書く人あり。然るべからず。草書には、和流もあれども、唐流に本づかざる俗流なり、正流にあらず。本朝上代の能書、三筆三跡など、皆唐流に本づけり。其後世尊寺、清水谷など能書の流を家流と云ふ。是また中華の筆法あるは、俗流にあらず。俗流をば學ぶべからず。誠の筆法なし。近代の和流の内、尊圓親王の眞跡は、唐の筆法あり、よのつねの俗流にまされり。眞跡にあらざるは、唐の筆法なし、習ふべからず。眞跡稀なり。其外、古の筆法を知らで、器用に任せて書きたる名筆、近世多し。

らく心正しければ則ち筆正しと、本文にいへるは即ち是也

中華―支那をいふ、もと支那人自ら稱せし誇言也、原本或はチウクワと讀み或はカラと訓じ前後一定せず

くば、筆跡よしといへども、習はしむべからず。初學より、必風體すなほに、筆法正しき、古の能書の手跡を擇んで、手本とすべし。惡筆と惡しき風體を習ひ、一度惡しきくせつきては、一生なほらず。後能書を習ひても改まらず。日本人のよき手跡を習ひ、世間通用に達せば、中華の書を學ばしむべし。然らざれば手跡進まず。唐筆を習ふには、まづ草訣百韻、王羲之十七帖、王獻之鵝群帖、淳化法帖、王寵が千字文、黄庭經などを習はしむべし。また懷素が自敍帖、米元章が天馬賦などを學べば、筆力自由にはたらきてよし。

一和流唐流、共に古代の能書の上筆を求めて習ふべし。今時の俗筆をば習ふべからず。手本惡しければ、生れつきたる器用ありて、日々勤め學びても、見習ふべき法なくして、手跡進まず。器用もつとめも空しくなりて、一生惡筆にて終る。我が國の人、近世手跡拙きは、手習の法を知らざると、古代のよき手本を習はざる故なり。

一本朝にも、古代は能書多し。皆唐筆を學べり。唐人も、日本人の手跡をほめたり。中世以後、唐の筆法を失へり。故に能書少なし。あれども上代に及ばず。近代は彌俗流になりし故、時を逐ひて拙くなる。凡文字は中華より出で、眞行草も唐より始まる。

書は心畫なり—揚子公の言に、言は心聲也書は心畫也聲畫形はれ君子小人見る

柳公權—唐の華原の人博く經術に通ず、穆宗嘗て筆法を問ふや對ふ

和俗童子訓巻之四

○手習法

一古人書は心畫なりと云へり。心畫とは、心中にある事を外に書き出す繪なり。故に手跡の邪正にて、心の邪正顯る。筆跡にて心の内も見ゆれば、愼みて正しくすべし。むかし柳公權も、心正しければ筆正しと云へり。凡書は、言をうつして言語にかへ用ひ、行事を示して當世に施し、後代に傳ふる證迹なり。正しからずんばあるべからず。故に書の本意は、唯平正にして讀み易きを宗とす。是第一に心を用ふべき事なり。あながちに巧にして、筆跡のうるはしく見所あるを宗とせず。もし正しからずして讀み難く、世用に通ぜずんば、巧なりといへども用なし。然れども又いやしく拙きは、用にかなはず。

一凡字を書習ふには、眞草共に、まづ手本を擇び、風體を正しく定むべし。風體惡し

初に愼むべし。初勤めざれば、必後の樂なし。又後の悔なからん事を計るべし。初まず怠りぬれば、必後の悔あり。

一小兒の書を讀むに、文字を多く覺えざれば、書を讀むに力なくして、學問進まず。又文字を知らざれば、すべて世間の事に通ぜず。藝など習ふにも、文字を知らざれば、其理にくらくして、ひが事多し。文字を知れらば、又其文義を心に懸けて通し知るべし。

るもの也。朱子の作と稱すれども其實は朱子の凡例に本づき其門人趙師淵が編輯せるものなりと傳ふ。周の威烈王二十三年より後周世宗の代に至る一千三百六十二年間の紀也
氣臆—記憶に作るべきか

以後の事なり。是に續きて、皇明通記、皇明實記などを見れば、古今に貫通す。

一 小兒の時より、學問のひまを惜み、あだなる遊をすべからず。手習ひ、書をよみ、藝を學ぶを以て、遊とすべし。かやうの勤、初は面白からざれども、やうやく習ひなれぬれば、後は慰となりて、いたつがはしからず。凡よろづの事は、皆暇を用ひて出來るものなれば、いとま程の身の寶なし。四民共に同じ。かほどの惜むべき大切なるいとまを空しくして、時日を費し、又は用にも立たざる益なきわざをなし、無賴の小人に交り、ひまを惜まずして、徒に爲す事もなくて月日を送る人は、終に才智もなく、藝能もなくして、何事も人に及ばず、人にいやしめらる。少年の時は、氣力も氣臆も强ければ、ひまを惜み、書を讀み置くべし。如ㇾ此すれば、身を終るまで忘れず、一代の寶となる。年たけ齒ふけぬれば、事多くしてひまなく、氣力へりて氣臆弱くなり、學問に苦勞しても、しるし少なし。少年の時、此ことわりを能く心得て、ひまを惜み勤むべし。若き時怠りて、年老いて後悔すべからず。此事、前にも既に言ひつれども、老のくせにて、同じことするは、聞く人いとふべけれど、年若き人に、能く心得させんために、返す〴〵告ぐるなり。凡の事、後のためによき事を專らに勤

年のつもり
に—年の積
りたる結果
としての意

朱子綱目—
通鑑綱目五
十九卷をい
ふ、司馬光
の資治通鑑
に據り綱目
に分ち撰せ

は甚大なり。我がともがら、若き時此良法を知らずして、空しく過し、今八十に成りて、年のつもりに、やう〳〵學びやうの道、少し心に思ひ知れる故、今更悔甚し。又尚書の内純粹なる數篇、詩經周易の全文、禮記九萬九千字の内其精要なる文字をえらんで三萬字、左傳の最要用なる文を數萬言、是も亦日課を定めて百遍熟讀せば、文字に於て、恐らくは世に類なかるべし。是學問の良法なり。

一史は古を記せるふみなり。記錄の事なり。史書は往古の迹をかんがへて、今日の鑑とする事なれば、是亦經につぎて必讀むべし。經書を學ぶいとまに、和漢の史を讀み、古今に通ずべし。古今に通ぜざれば、くらくして用に達せず。日本の史は、日本紀以下六國史より、近代の野史に至るべし。野史も亦多し、廣く見るべし。中夏の史は、左傳、史記、漢書以下なるべし。朱子綱目の書は、歷代を通貫し、世敎を助けて、天下萬世に益あり。經傳の外、是に及べる好書はあるべからず。此一書を出でずして、古の事に通じ、善惡を辨じ、天下國家を治むる道理明なり。誠に世の寶なり。學者是を好んで玩覽すべし。殊に國家を治むる人の鑑なり。又通鑑前編續編をも見るべし。前編伏犧より周まで、朱子綱目以前の事を記せり。續編は宋元の事を記す。朱子綱目

韓柳歐蘇曾南豐─韓退之、柳宗元、歐陽修、蘇東坡父子、曾鞏をいふ、いづれも唐宋の大家也、曾鞏は宋の建昌南豐の人、故に此稱あり

をさとれりと云へり。又文章を作るためには、禮記の檀弓、周禮の考工記を熟誦すべし。是等は皆古人の說なり。又漢文の内數篇、韓、柳、歐、蘇、曾南豐等の文の內にて、心に叶へるを擇びて、三十篇熟誦し、そらに書きて忘れざるべし。作文の學、必如此すべし。

一四書を、毎日一百字づつ百遍熟誦して、そらに讀みそらに書くべし。字の置き所、助字の有り所、ありしに違はず覺え讀むべし。是程の事、老らくの年といへども、勤めてなし易し。況や少年の人をや。四書をそらんぜば、其力にて、義理に通じ、諸の書を讀むこと易からん。又文章のつゞき、文字の置きやう、助字の有り所をも、能く覺えて知れらば、文章を書くにもまた助となりなん。斯の如く、四書を習ひ覺えば、幼學のつとめ、過半は既に成れりと云ふべし。論語は一萬二千七百字、孟子は三萬四千六百八十五字、大學は經傳を合せて千八百五十一字、中庸は三千五百六十八字あり。四書すべて五萬二千八百四字なり。一日に百字を讀んで、そらに覺ゆれば、日數五百廿八日に終る。十七月十八日なれば、一年半には足らずして、其功終りぬ。早く思ひ立ちて、斯の如くすべし。是にまされる學問のよき法なし。其つとめ易くして、其功

光陰箭の如く云々―禪門諸祖偈頌に光陰箭の如しと見え又和漢古諺に時節流るるが如し時人を待たずといへり

光陰惜むべし云々―此語顏氏家訓に出づ

一古語に、光陰箭のごとく、時節流るゝが如し。又曰、光陰惜むべし、是を流水に譬ふと云へり。月日のはやき事、年々にまさる。一度行きて歸らざる事、流水の如し。今年の今日の今時、再歸らず。なす事なくて、等閑に時日を送るは、身をいたづらになすなり。惜むべし。大禹は聖人なりしだに、猶寸陰を惜み給へり。況や末世の凡人をや。聖人は尺璧を貴ばずして、寸陰を惜むとも云へり。少年の時は、記性強くして、中年以後數日に覺ゆる事を、唯一日半日にも覺えて、身を終るまで忘れず。一生の寶となる。年老いて後悔なからんことを思ひ、小兒の時、時日を惜みて、いさみ勤むべし。かやうにせば、後悔なかるべし。

一書を讀み學問する法、年若く記臆強き時、四書五經を常に熟讀し、遍數を如何程も多く重ねて、記誦すべし。小兒の時に限らず、老年に至りても、常に循環して讀むべし。是義理の學問の根本となるのみならず、又文章を學ぶ法則となる。次に左傳を數十遍看讀すべし。其益多し。是學問の要訣なり、知らずんばあるべからず。

一小兒の時、經書の内、とりわき孟子をよく熟誦すべし。是義理の學に益あるのみならず、文章を作る料なり。此書文章の法則と筆力を助く。朱子も、孟子を熟誦して文法

記すべし—記憶すべしの義

事づつ記すべし。又毎日數目ある事を二三條記すべし。一日に一事記すれば、一年には三百六十條なり。詩歌をよみ覺ゆるも此法なり。一日に一首覺ゆれば、一年に三百六十首なり。毎日誦して、日々怠るべからず。久しきを積みては其功大なり。

一小兒に初て書を說き聞かするに、文句短く文義あさく、分明に聞え易く言ひ聞かすべし。小兒に相應せざる、高く、深く、まはり遠く、むつかしく、聞きにくき事を敎ふべからず。又ことば多く長くすべからず。言少なくして、さとし易くすべし。まづ孝經の首章、論語の學而篇を早く說き聞かすべし。是本をつとむるなり。小學の書を說くには、義理を淺く輕く說くべし。深く重く說くべからず。是小兒に敎ふる法なり。

一小兒讀書の內に、早く文義を所々敎ふべし。孝經にて云はゞ、仲尼とは孔子の字なり。字とは、成人して名づくるかへ名なり。子は師のことを云ふ。曾子は孔子の弟子なり。參は曾子の名。先王とは、古の聖王のこと。不敏は鈍なること。又論語の首章を讀む時は、學ぶとは學問するを云ふ。習ふとは學びたる事を身に勤めならふなり。說ぶとは面白きと云ふ意、樂むとは大に面白き意なり。かやうに讀書の序に文義を敎ふれば、自然に書を曉し得るものなり。

よみこゑ―よみは訓、こゑは音の謂なるべし従つてよみごゑと連濁に讀過すべからず

つ字を知らしむべし。其後、一句づつ敎ふべし。既に字を知り句を覺えば、小兒をして自ら讀ましむべし。兩句を敎ふるには、まづ一句を讀み覺えさせ、熟讀すれば、次の句を又右の如くに讀ましめ、既に熟讀して、前句と後句と通讀せしめて止むべし。如ㇾ此する事數日にして、後又一兩句づつ、漸に添へて授くべし。其後授くるに、ややく字多ければ、分つて二三次となして、授け讀ましめ、其二三次、各熟讀して、合せて通讀せしむ。もし其中覺え難き所あらば、其所ばかり又數遍讀ましむ。又甚讀み易き所をば、分ち讀む時は讀むべからず。是省ㇾ功の法なり。

一書を讀むには、必句讀を明かにし、よみこゑを詳かにし、淸濁を分ち、訓點に誤なく、てにはを精しくすべし。世俗の疎なる謬に從ふべからず。

一書を讀むに、當時略熟誦しても、久しく讀まざれば必忘る。故に書を讀み終つて後、既に讀みたる書を、時々かへり讀むべし。又毎日前の三四五度に授かりたる所を、今日讀み習ふ所に通して、あとを讀むべし。如ㇾ此すれば忘れず。

一毎日一の善事を知り、一の善事を行ひて、小を積みて止まざれば、必大に至る。日々の功を怠り缺くべからず。初は、毎日日記故事、蒙求の故事などの嘉言善行を、一兩

を采り四言句を以て兩兩相屬對せしめ、童蒙の記憶に便じたる書也

まづ孝經の首章、次に論語學而の篇を讀ましめ、皆熟讀して後、その要義をもあらあら說き聞かすべし。小學四書は、最初より讀みにくし。故にまづ右に云ふ所の文句の短きものを多く讀ませて、次に小學を讀ませ、後に四書五經を讀ましむべし。

一凡書を讀むには、早く先を讀むべからず。每日返り讀を專ら勤むべし。返り讀を數十遍勤め終りて、其先を讀むべし。然らずして、唯はかゆかん事を好みて、返り讀少なければ、必忘れて、我が習ひし功も、師の敎へし功もすたりて、廣く數十卷の書を讀んでも益なし。一卷にても能く覺ゆれば、學力となりて、功用をなす。必よくおぼゆべし。書を讀んでも、學進まざるは、熟讀せずして覺えざればなり。才性あらば、八歲より十四歲まで、七年の間に、小學、四書、五經等、皆讀み終る。四書五經熟讀すれば、才力いでき、學問の本たつ。其力を以て、やうやく年長じて、廣く群書を見るべし。

一小兒に初て書を授くるには、文句を長く敎ふべからず。一句二句敎ふ。また一度に多く授くべからず。多ければ覺え難く、覺えても堅固ならず、其上厭ひ倦んで學を嫌ふ。必退屈せざるやうに、少しづつ授くべし。其敎へやうは、初は唯一字二字三字づ

に、余嘗て謂へらく讀書に三到有り心到眼到口到有り云云

四勿—非禮視る勿れ、非禮聽く勿れ、非禮言ふ勿れ、非禮動く勿れ論語顏淵篇に出づ

蒙求—三卷あり、唐の李瀚の撰にして經史中より事實の相類する者

て、日々に怠りなく進むべし。凡小兒を教ふるには、必師あるべし。もし外の師なくば、其父兄自ら日々の課程を定めて、讀ましむべし。父兄辛勞せざれば、教行はれず。

一初て書を讀むには、まづ文句短くして、讀み易く覺え易き事を教ふべし。初より文句長き事を教ふれば、退屈し易し。易きを先にし、難きを後にすべし。まづ孝弟忠信禮義廉恥の字義を教へ、五常、五倫、五教、三綱、三德、三事、四端、七情、四勿、五事、六藝、兩儀、二氣、三辰、四時、四方、四德、四民、五行、十干、十二支、五味、五色、五音、二十四氣、十二月の異名和名、四書、五經、三史の名目、本朝の六國史の名目、日本六十六州の名、其住せる國の郡の名、本朝の古の帝王の御諡、百官の名、唐の三皇五帝三王の御名、歷代の國號等を、和漢名數の書にかき集め置けるを、そらに讀み覺えさすべし。又鳥獸蟲魚貝の類、草木の名を多く書き集めて讀み覺えしむべし。此外に、覺えてよき事多し。そらに覺えざる事は用に立たず。又周南召南の詩、蒙求の本文五百九十八句、性理字訓の本編、三字經、千字類合、千家詩などの、句短く覺え易きものを教ふべし。右の名目小篇などを讀み覺えて後、經書を教ふべし。初より文句長き讀み難き經書を教へて、其氣を屈せしむべからず。經書を教ふるには、

に吾れ聖人の書を讀む毎に未だ嘗て肅敬之に對せずんばあらず其故紙五經詞義及び聖賢の姓名あれば敢て他用せざる也と見ゆ

三到—朱子の童蒙須知

一小兒の記性を計つて、七歳より以上入學せしむ。初は早晨に書を讀ませ、食後には讀ましめず。其精神を苦むる事勿れ。半歳の後は、食後にも亦令讀べし。

一凡書を讀むには、いそがはしく早く讀むべからず。詳緩に讀之て、字々句々分明なるべし。一字をも誤るべからず。必心到り眼到り口到るべし。此三到の内、心到を先とす。心不在此、見れども見えず。心到らずしては、みだりに口に讀めども覺えず。又俄にしひて諳に讀み覺えても、久しきを歴れば忘る。唯心をとめて、多く遍數を誦すれば、自然と覺えて、久しく忘れず。遍數を計へて熟讀すべし。一書熟して後、又一書を讀むべし。聖經賢傳の益ある書の外、雜書を見るべからず。心を正しくし、行儀を愼み、妄に言はず、笑はず、妄に外に出入せず、妄に動作せず、志を學に專一にすべし。常に暇を惜みて、用もなきに、徒に隙を費すべからず。

一小兒の文學の教は、事しげくすべからず。事しげく、文句多くしてむつかしければ、學問を苦みて、うとんじ嫌ふ心出來る事あり。故に簡要をえらびて、事少なく教ふべし。少しづつ教へ、よみ習ふ事を嫌はずして、すき好むやうに教ふべし。むつかしく辛勞にして、其氣を屈せしむべからず。日々のつとめの課程を、よきほどに短く定め

服を加ふ爾の幼志を棄てて爾の成徳に順へ

周程張朱—前註、八九頁參照

故紙に云々—顏氏家訓

常といふ。四書五經等を經と云ふ。賢人の書を傳と云ふ。傳とは、聖人の敎を述べて、天下後代に傳ふるなり。四書五經の注、又は周程張朱、其外歷代の賢人の作れる書を、何れも傳と云ふ。經傳は、是古の聖賢の述べ作り給ふ所なり。其所載は天地の理に隨ひて、人の道を敎へ給ふなり。其理至極し、天下萬世の敎となれる鑑なり。天地人と萬物との道理、是にもるゝ事なきゆゑ、天地の間、是にまされる寶更になし。是を神明の如くに尊び敬ふべし。おろそかにし、穢すべからず。

一およそ書を讀むには、必まづ手を洗ひ、心に愼み、容を正しくし、几案のほとりを拂ひ、書册を正しく几上におき、跪きて讀むべし。師に書を讀み習ふ時は、高き几案の上に置くべからず。帙の上、或は文匣矮案の上に乘せて讀むべし。必人の蹈む席上に置くべからず。書を穢す事なかれ。書を讀み終らば、もとの如くおほひ納むべし。もし急速の事ありてたち去るとも、必をさむべし。又書をなげ、書の上を越ゆべからず。書を枕とする事なかれ。書の腦を卷きて、折りかへす事勿れ。唾を以て幅を揚ぐる事勿れ。故紙に經傳の詞義聖賢の姓名あらば、愼みて他事に用ふべからず。又君上の御名、父母の姓名ある故紙をも穢すべからず。

の嫡子と凡民の俊秀とに至るまで皆大學に入れ而して之に教ふるに窮理正心修身治人の道を以てす

廿歳云々—内則に、二十にして冠し始めて禮を學ぶ云々

元服すれば云々—儀禮に、祝して曰く今月吉日始めて元

より預け給へる多くの人をそこなふ事、恐るべし。凡の人も、其分限に應じて、人を治むるわざあり。其道を學ばずんばあるべからず。性質遲鈍なりとも、是より廿歳までの間に、小學四書等の大義に通ずべし。もし聰明ならば、博く學び多く知るべし。

一廿歳、古もろこしには、廿歳にして冠を著るを、元服を加ふと云ふ。元服とは、かうべのきるものとよむ。冠のことなり。日本にても、昔は公家武家共に、廿歳の内にて、冠烏帽子を著たり。其時、加冠理髪などの役ありき。今も官家に此事あり。今武家に前髪を去るを元服と云ふも、昔の冠を著るになぞらへて云へり。元服を加へざる内は、猶わらんべなり。元服すれば、成人の道是より備はる。これより幼少なる時の心を捨て、成人の徳に隨ひ、博く學び、あつく行ふべし。其年に應じて、徳行備らん事をおもひて勤むべし。もし元服しても成人の徳なきは、猶童心ありとて、昔も是を誹れり。

○讀書法

一聖人の書を經といふ。經とは常なり。聖人の教は、萬世かはらざる萬民の則なれば、

心すさみ—心の慰み戯るゝ方に進むをいふ

十五歳云々—大學の序に、十有五年に及べば則ち天子の元子より以て公卿大夫

難く、退屈し、學問を嫌ふ心出できて悪しゝ。まづ文句の短くして讀易く、覺えやすきものを讀ませ、そらに覺えさすべし。

一十歳、此年より師に隨はしめ、まづ五常の理五倫の道、あら〳〵言ひ聞かせ、聖賢の書を讀み、學問せしむべし。讀む所の書の内、まづ義理の聞え易くさとし易き、切要なる所を說き聞かすべし。是より後、やうやく小學四書五經を讀むべし。又其ひまに、文武の藝術をも習はしむべし。世俗は、十一歳の比、やう〳〵初て手習など教ふ。遲しと云ふべし。教は早からざれば、心すさみ氣あれて、教を嫌ひ、怠にならひて、勤め學ぶ事難し。

一小兒に、早く心もかほばせも溫和にして、人を愛し敬ひ、善を行ふ事を教ふべし。又心も身の起居振舞も靜かにして、みだりに動かず、騷しからざらん事を教ふべし。

一十五歳、古人大學に入りて學問せし歳なり。是より專ら義理を學び、身を修め人を治むる道を知るべし。是大學の道なり。殊更高家の子、年長じては諸人の上に立ちて、多くの民を預り、人を治むる職分重し。必小兒の時より、師を定め、書を讀ませ、古の道を教へ、身を修め人を治むる道を知らしむ。もし人を治むる道を知らざれば、天道

いつくしみ—慈愛を施すをいふ

門戸の出入し—門戸を出入しの誤寫なるべきか

今年の春—八歳の春をいふ

て不孝不弟となる。是父母おろかにして、子の惡をすゝめなせるなり。漸く年を重ねば、弟を愛し、臣僕を恤み、師を尊び、友に交る道、賓客に對して、坐立進退、ことばづかひの法、各其品に隨ひて、いつくしみ敬ふ道を教へ知らしむべし。是よりやうやく孝弟忠信禮義廉恥の道を教へ行はしむ。人の財物を求め、飲食を貪りて、賤しげなる心を戒め、恥を知るべき事を教ふべし。七歳より前は、猶幼ければ、早く寢ねおそく起き、食するに時を定めず、大やう其心に任すべし。禮法を以て、一々に責め難し。八歳より、門戸の出入し、又は座席につき飲食するに、必年長ぜる人におくれて、先だつべからず、はじめて、へり下り讓る事を教ふべし。小兒の心任せにせず、氣隨なる事を堅くいましむべし。是肝要の事なり。

一今年の春より、眞と草との文字を書きならはしむべし。はじめより風體正しき能書を學ばしむべし。手跡つたなく、風體惡しきを手本として習へば、惡しき事くせとなり、後に風體よき能書をならへども移らず。初は眞草ともに、大字を書き習はしむべし、初より小字を書けば、手すくみて働かず。又此年より、早く文字を讀み習はしむべし。孝經小學四書などの類の、文句長きむつかしきものは、初より讀み難く、覺え

萬事の善は云々ー後漢書に、孝は百行の本衆善の始也

此ころより、起居振舞の禮、尊長の前に出でて仕ふると退くと、尊長に對し、客に對し、物を言ひ、いらへ答ふる法、饌具を尊長の前にすゑ、又取りて退く法、盃を出し銚子を取りて、酒をすゝめ肴を出す法、茶をすゝむる禮をも習はしむべし。又みづから食する法、尊長の賜はる盃と肴をいたゞき、客の盃を頂き飲む法、尊者に對し、拜禮をなす法を敎へ知らしむべし。又茶禮をも敎ふべし。

一 かしづきて從ふ人より、まづ孝弟の道を敎ふべし。能く父母に事ふるを孝とし、よく兄長に事ふるを弟とす。是人たる者の第一に勤め行ふべき道なる事、かしづきて師となる人、早く敎ふべし。次に兄長を敬ひ從ひて、侮るべからざる事を敎ふべし。兄長とは、兄姉をぢをば、また、いとこの內、其外にも、年たけて敬ふべき人を云ふ。凡孝弟の二は、人間の道を行ふ本なり。萬事の善は、皆是よりはじまれる事を敎ふべし。父母兄長におそれつゝしみて、其敎いましめを能く聞きて背かざる事を敎ふべし。敎を背きては、無下の事なり。父母を恐れず、兄長を侮らば、戒めてゆるすべからず。もし人を侮る事をゆるし、かへりて笑ひ悅べば、小兒は善惡を辨へずして、惡しからざる事とおもひ、長じて後、此くせやまず、子となり弟となる法を知らず、無禮にし

六歳云々ー禮記の内則に、六年之に數と方名とを敎ふ

七歳云々ー内則に、七年男女席を同じうせず食を共にせず

和俗童子訓卷之三

○隨ㇾ年敎法

一 六歳の正月、始て一二三四五六七八九十百千萬億の數の名と、東西南北の方の名とを敎へ、其生れつきの利鈍をはかりて、六七歳より、和字を讀ませ、書きならはしむべし。はじめて和字を敎ふるに、あいうえお五十韻を平がなに書きて、たてよこに讀ませ書きならはしむ。又世間往來のかなの文の手本をならはしむべし。此年ころより、尊長を敬ふ事を敎へ、尊卑長幼のわかちをも知らしめ、ことばづかひをも敎ふべし。

一 七歳、是より男女席を同じくしてならび坐せず、食を共にせず。此ころ、小兒の少し智出來、言ふことをきゝ知るほどならば、其智をはかり、年に宜しきほど、やうやく禮法を敎ふべし。又和字のよみかきをも習はしむべし。

一 八歳、古人小學に入りし歳なり。はじめて幼者に相應の禮義を敎へ、無禮を戒むべし。

狂薬にして佳味に非ず

べし。

一小兒のともがら、戯多くいふべからず、人の怒をおこす。又人のきらふ事言ふべからず、人に怒り謗られて益なし。世の人多く賤しき事いふとも、それを習ひて、賤しき事いふべからず、小兒の言葉賤しきは、殊に聞きにくし。

尙書には云云—書經周書酒誥に、祀のみ茲に酒をせよとあるをいふ

狂藥—范魯公の詩に、爾を戒む酒を嗜む勿れ

戸も上戸となりて、後年に至りては、いよ〱多く飲み、恣になり易し。癖となりては一生改まらず。禮記にも、酒者所以養老也、所以養病也と云へり。尙書には、神を祭るにのみ酒を用ふべき由を云へり。然れば、酒は老人病者の身を養ひ、又神前に備へん料に造れるものなれば、年少の人の、恣に飲むべき理にあらず。酒をむさぼる者は、人のよそ目も見苦しく、威儀を失ひ、口のあやまり、身のあやまりありて、德行をそこなひ、時日を費し、財寶を失ひ、名をけがし、家を破り、身を亡すも、多くは酒の失よりおこる。又酒を好む人は、必血氣を破り、脾胃をそこなひ、病を生じて、命みじかし。故に長命なる人、多くは下戸なり。たとひ生れつきて酒を好むとも、若き時より愼みて、多く飲むべからず。凡上戸の過失甚多し。醉に乘りては、謹厚なる人も狂人となり、言ふまじき事を言ひ、爲すまじき事をなし、ことば少なき者も、言葉多くなる。戒むべし。酒後のことば、愼みて多くすべからず。又醉中の怒を愼み、醉中に書狀を人に送るべからず。むべも昔の人は、酒を名づけて狂藥とは云へりけん。貧賤なる人は、酒を好めば、必財を失ひ、家を保たず。富貴なる人も、酒にふければ、德行亂れて、家を破る。高き賤しき、其わざはひは逃れず。戒む

子は、立居振舞飲食の禮などをば習ふべし。必戒めて、無賴放逸にして酒色淫樂を好む惡友に交らしむべからず。是に交れば、必身の行惡しく、不孝になり、財を失ひ、家を破る、甚恐るべし。

一小兒は十歳より內にて、早く敎へ戒むべし。性惡しくとも、能く敎へ習はさば、必よく成るべし。いかに美質の人なりとも、惡しくもてなさば、必惡しきに移るべし。少年の人の惡しくなるは、敎の道なきが故なり。習を惡しくするは、譬へば馬にくせを乘り附くるが如し。いかに曲馬にても、よき乘手の乘れば、よくなるものなり。また鶯のひなを飼ふに、初て鳴く時より、別によく囀る鶯を其傍に置きて、其音を聞きならはしむれば、必よく囀りて、後までかはらず。是初よりよき音を聞きて習へばなり。禽獸といへど、早く敎へぬれば、善に移り易きこと此のごとし。況や人は萬物の靈にて、本性は善なれば、幼き時より、能く敎訓したらんに、勝れたる惡性の人ならずば、などか惡しくならん。人を敎訓せずして惡しくなし、其性を損ずるは、惜むべき事ならずや。

一子孫幼き時より、堅くいましめて酒を多く飮ましむべからず。飮みならへば、下

もてなさば―取扱はば、育まばの意

上智と下愚―論語陽貨篇に、子曰く唯上知と下愚とは移らず

ざればみ―しやれ氣取りて眞面目ならざるをいふ

ちとくすみ過ぎたるは―少しくくすみ過ぎて派手ならざる品はの意

あてやか―上品の意

ふなり。子を育つるに、幼きより能く敎へ戒めても惡しきは、誠に天性の惡しきなり。世の人、多くは愛に過ぎておごらしめ、惡を戒めざるゆゑ、習ひて性となり、終に不肖の子となる者多し。世に上智と下愚とはまれなり。上智は敎へずしてよし、下愚は敎へても改め難しと云へども、惡を制すれば面は改まる。世に多きは中人なり。中人の性は、敎ふれば善人となり、敎へざれば不善人となる。故に敎なくんばあるべからず。

一小兒の衣服は、華やかなるも苦しからずといへども、大もやう、大じま、紅紫などのざればみたるは著るべからず。小兒も、ちとくすみ過ぎたるは、あてやかにて賤しからず。華やか過ぎて目に立つは、賤しくして下部の服の如し。大方衣服の模樣にても、人の心はおし量らるゝものなれば、心を用ふべし。又身の飾にひまを用ひ過すべからず。ひま費えて益なし。唯身と衣服に穢なくすべし。

一農工商の子には、幼き時より、唯物書算數をのみ敎へて、其家業を專らに知らしむべし。かならず樂譜淫樂、其外いたづらなる無用の雜藝を知らしむべからず。是にふけり溺れて、家業を勤めずして、財を失ひ家を亡せしもの、世に其例多し。富人の

蒲生氏郷―初めて若松の城主たりし人、本名は教秀又賦秀、幼字を鶴千代といへり、野史に據るに、本文の事實中或人と有るは稲葉一徹なるべし

仕へられし時、信長の前にて、老人の軍物語するを、耳を傾けて聽かれける。或人是を見て、此童たゞ人にあらず、後は必名士ならんと云ひしが、果して英雄にてぞありける。凡若き人は、老人の古き物語を好み聞きて、覺え置くべし。若き時は、多くは古き物語を聞く事をきらふ。いましむべし。又若き時、我が先祖の事知れる人あらば、能く問ひ尋ねて、記しおくべし。若かくの如くにせず、うかと聞きては覺えず、年たけて後、先祖の事を知りたく思へども、知れる人既になくなりにたれば、問ひて聞くべきやうなし、後悔にたへず。子孫たる人、我がおや先祖の事を知らざるは、無下におろそかなり。況や父祖の善行武功など有るを、其子孫知らず、知れども顯さざるは愚なり。大不孝とすべし。

一父母やはらかにして、子を愛し過せば、子怠りて父母を侮り、愼まずして行儀あしく、氣隨にして身の行あしく、道に背く。父たる者、威ありて恐るべく、行儀ありて手本になるべければ、子たる者恐れ愼みて、行儀正しく、孝をつとむる故に、父子和睦す。子の賢不肖、多くは父母のしわざなり。父母いるがせにして、子の惡しきをゆるせば、惡を長ぜしめ、不義におちいる。是子を愛するに非ずして、かへりて子をそこな

儀に、孝子の深愛有る者は必ず和氣有り、和氣有る者は必ず愉色有り、愉色有る者は必ず婉容有り

おいさきー生先にて、生長し行く前途の意なれば、おひさきとあるべき也

下士は道を聞きて大に笑ふー老子の言

氣を失ふべからず。

一人のほめそしりには、道理に違へる事多し、悉く信ずべからず。愚なる人は、聞くに任せて信ず。人の言ふこと、我が思ふこと、必理に違ふこと多し。殊に少年の人は、智恵くらし。人の言へる事を悉く信じ、我が見る事を悉く正しとして、妄に人をほめそしるべからず。

一幼き時より、年老いておとなしき人、才學ある人、古今世變を知れる人になれ近づきて、其物語を聞き覺え、物に書きつけ置きて、忘るべからず。又疑はしき事をば、知れる人に尋ね問ふべし。ふるき事を知れる老人の物語を聞く事を好みて、嫌ふべからず。かやうにふるき事を好み聞きてきらはず、物事に志ある人は、後に必人にすぐるゝものなり。又老人をばむつかしとてきらひ、ふるき道々しき事、古の物語を聞きては、恨しく思ひ、其席にこらへず、陰にて誹り笑ふ、是凡俗の賤しき心なり。かやうの人は、おいさきよからず、人に及ぶこと難し。古人のいはゆる、下士は道を聞きて大に笑ふと云へる、是なり。かやうの人には、交り近づくべからず。必悪しき方にながる。蒲生氏郷いとけなき時、佐々木氏より人質として、信長卿に來り

間も不和になり、相破れて、恩をそこなふに至る。唯從容として嚴正に敎へ、幾度もくり返し、やうやく告げ戒むべし。是子弟を敎へ、人材を養ひ成す法なり。父兄となれる人は、此心得あるべし。子弟となる人は、父兄の怒甚しく、惡口して責め恥めらるゝとも、いよ〳〵恐れ愼みて、つゆばかりも怒り恨むべからず。

一小兒の時は、智いまだひらけず、心に是非を辨へがたき故に、小人の言ふ詞にまよひ易し。世俗の口のきゝたる者、學問をきらひて、善人の行儀堅く正しきをそしり、風雅なるを惡みて、今樣の風におはずとて謗り、唯放逸なる事を誘ひ勸むるを聞かば、いかに幼く智なくとも、心をつけて其是非を分つべし。斯の如くなる小人のことばに迷ひて、移るべからず。

一怒をおさへて忍ぶべし。忍とはこらふるなり。殊に父母兄長に對し、少しも心に怒り恨むべからず。況や顏色と眼目に顯すべけんや。父兄に對して怒るは、是大なる無禮なり、いましむべし。内に和氣あれば、顏色も目つきも和平なり。内に怒氣あれば、顏色眼目惡しゝ。父母に對して、惡眼を顯すべきや、恥づべし。孝子の深愛ある者は、必和氣あり。和氣ある者は、かならず愉色あり。子たるものは、父母に對して和

口のきゝたる者―口先の達者なる者の意

孝子の深愛ある者は云云―禮記祭

傳に就き外に居宿して書計を學ぶ云々

身に能く事へよとのすゝめなれば、同じくは、師より教へて行はしむるが宜し。故に父母の側をはなれ、晝夜外に出て、教を師にうけしめ、學友に交らしむれば、おごり怠なく、智惠日々に明かに、行義日々に正しくなる。是古人の子を育つるに、内にをらしめずして、外に出せし意なり。

一子孫年若き者、父祖兄長のとがめを受け、怒にあはゞ、父祖の言の是非をえらばず、おそれ愼みて聽くべし。いかにはげしき惡言を聞くとも、ちりばかりも怒り恨みたる心なく、顏色にも顯すべからず。必我が理ある事を言ひ立てゝ、父兄の心に背くべからず。唯ことば無くして、其責を受くべし。是子弟の父兄に事ふる禮なり。父兄たる人、もし人の言を聞き損じて、無理なる事を以て、子弟をしへたげ責むとも、怒るべからず、恨みそむける色を顯すべからず。言ひわけする事あらば、時過ぎて後謝すべし。或は別人を賴みて言はしむべし。十分に我に道理なくば、言ひわけすべからず。

一子弟を教ふるに、いかに愚不肖にして、若く賤しきとも、甚怒り罵りて、顏色と言をあらゝかにして、惡口して恥むべからず。此の如くすれば、子弟我が非分なる事をば忘れて、父兄のいましめを怒り恨み、そむきて隨はず、かへつて父子兄弟の

心をあらく云々―心を疎大にせず、密約にして小にせよと也

神祇をば云云―論語雍也篇に、鬼神を敬して之を遠ざく知と謂ふ可し

小兒十歳なれば云々―内則に、十年出でて外

さきを師に學びそへ、暮毎に、朝學べる事を重ね〲勤めて、怠るべからず。心をあらくおほやうにせず、つゞまやかにすこしにすべし。斯の如くに、日々に勤めて怠らざるを、學問の法とす。

一子弟孫姪など、幼き者には、禮義を正しくせん事を教ふべし。淫亂色慾の事、戲のことば、非禮のわざを戒めて、爲さしむべからず。又道理なき正しからざる札守祈禱などを、妄に信じて迷へること、禁ずべし。幼く若き時より、かやうの事に心迷ひぬれば、其心くせになりて、一生其迷とけざるものなり。神祇をば恐れ尊び、敬ひて遠ざかるべし。なれ近づきて、けがし侮るべからず。我が身に道なく私ありて、神に諂ひ祈りても、神は正直聰明なれば、非禮をうけ給はず、へつらひを悅び給はずして、利益無き事を知るべし。

一古もろこしにて、小兒十歳ならば、外に出して、晝夜師に隨ひて、學問所に居らしめ、常に父母の家におかず。古人此法深き意あり。如何となれば、小兒常に父母の側に居て、恩愛にならへば、愛をたのみ恩になれて、日々にあまへ氣隨になり、艱苦の勤なくして、徒に時日を過し、教行はれず、且孝弟の道を父兄の教ふるは、我が

あさい――いは睡の義なり、朝寢するをいふ

取用ひて行はずば、むげに志なく力なしといふべし。我が學問と才力と勝たりとも、人にほこりて自滿すべからず。言にあらはしてほこるは、云ふに及ばず、心にもきざすべからず。志は僞り邪なく、誠ありて正しかるべし。心の内は、おほひ曇なく、裏表なく、純一にて、青天白日の如くなるべし。一點も心の内に邪惡を隱して、裏表あるべからず。志正しきは、萬事の本なり。身に行ふ事は正直にして、道にまげず、邪にゆがめる事を行ふべからず。外に出て遊び居るには、必常の然るべき親戚朋友の所を定めて、妄にあなたこなた用なき所に行かず、其友として交る所の人をえらびて、善人に常に近づき、良友に交るべし。善人に交れば、其善を見習ひて、善言を聞き、我が過を聞きて、益多し。惡しき友に交れば、早く惡に移り易し。必友をえらびて、かりそめにも惡友に交るべからず。恐るべし。朝には早く起きて親に事へ、事をつとむべし。あさいして怠るべからず。凡人の勤は、朝を初とす。あさいする人は、必怠りて萬事行はれず。夜に至りても事を勤むべし。早くいねて事を怠るも、用なきに夜更るまでいねがてにて時を誤るも、共に子弟の法に背けり。衣服を著、帶をしたる形も整ひて、威儀正しかるべし。放逸なるべからず。朝毎に、昨日いまだ知らざる

身の力財の力を盡す―論語學而篇に、父母に事へて能く其力を竭し君に事へて能く其身を致す云々

と云ふべし。愚なるの至なり。

一父母の恩は、高く厚きこと天地に同じ。父母なければ我が身なし。其恩報じ難し。孝を勤めて、せめて萬一の恩を報ゆべし。身の力、財の力を盡すべし、惜むべからず。是父母に事へて、其力を盡すなり。父母死して後は、孝を盡す事成り難きを、兼て能く考へて、後悔なからん事を思ふべし。

一年若き人書を讀まんとすれば、無學なる人是をいひ妨げて、書を讀めば、心ぬるく病者になりて、氣よわく命短くなると、言つておどせば、父母おろかなれば、誠ぞと心得て、書を讀ましめず、其子は一生愚にて終る。不幸といふべし。

一人の善惡は、多くはならひなるゝによれり。善に習ひなるれば善人となり、惡に習ひなるれば惡人となる。然れば幼き時より、習ひなるゝ事を愼むべし。假にも惡しき友に交れば、ならひて惡しき方に早く移り易し。恐るべし。

一師の教を受け、學問する法は、善を好み行ふを以て、常に志とすべし。學問するは、善を行はんが爲なり。人の善を見ては、我が身に取りて行ひ、人の義ある事を聞かば、心にむべなりと思ひ感じて行ふべし。善を見、義を聞きても、我が心に感ぜず、身に

過を改むるは云々—左傳に、人聖人にあらず誰か過無からん過つて能く改む善焉より大なるはなし

聞かば、悦んで受くべし。必怒り背くべからず。諫を聞きて、もし悦んで受くる人は善人なり。能く家を保つ。諫をきらひふせぐ人は、必家を破る。是善惡の分るゝ所なり。諫むる事、理に違ひたりとも、背きて爭ふべからず。諫を聞きて怒れば、重ねて其人諫を言はず。凡諫を聞くは、大に身の益なり。諫を聞きて、悦んで受け、我が過を改むるは、善是より大なるはなし。人の惡事多けれど、諫を嫌ふは、惡のいと大なるなり。我が身の惡しき事を知らせ、あやまちを諫むる人は、尊み親むべし。わづかなる食物など送るをだに、悦ぶならひなり。況や諫を言ふ人は、甚悦び尊ぶべし。

一 幼き時より、善を好んで行ひ、惡を嫌ひて去る、此志專一なるべし。此志なければ、學問しても益をなさず。小兒の輩、第一にこゝに志あるべし。此事、前にもすでに言ひつれども、幼年の人々のために、又返す〴〵丁寧に告ぐるなり。人の善を見ては、我も行はんと思ひ、人の不善を見ては、我が身を顧みて、其ごとくなる不善あらば改むべし。此の如くすれば、人の善惡を見て、皆我が益となる。もし人の善を見ても、我が身に取りて用ひず、人の不善を見ても、我が身を顧みざるは、志なし

耐煩—明の費元錄の言に、煩に耐ふの二字最も妙、能く煩に耐へば天下何物か倣す可からざらん

へり。是其理を知らざる愚痴なる世俗のまよひなり。凡學問して、親に孝し、君に忠し、家業を勤め、身を立て、道を行ひ、よろづの功業をなすも、皆むつかしき事をきらはず、苦勞をこらへて、其わざを能く勤むるより成就せり。むつかしき事、しげきわざに、心おだやかに苦まずして、一筋にしづかに爲しもてゆけば、後は其事になれて、面白くなり、心を苦むる事もなくて、其事遂に成就す。又むつかしとて事をきらへば、心から事を苦みて、勤むべき事をむつかしとするは、心の僻事なり。心のひが事をば、其まゝにおきて、事の多きをきらふは誤なり。又耐煩とは、むつかしきをこらふるを云ふ。此二字を守れば、天下の事何事もなすべしと、古人云へり。是若き子弟の輩の守るべき事なり。

一小兒の時は、必惡しき癖、惡しきならはしなど有るを、自ら惡しき事と知らば、改めて行ふべからず。又かゝる惡しき事を、人の諫にあひ戒められれば、悅んで早く改め、後年まで永く其事をなすべからず。一たび人の諫めたる事は、永く心にとゞめて忘るべからず、人の諫を受けながら改めず、やがて忘るゝは、守なしと云ふべし。守なき人は、善き人となり難し。況や人の諫をきらひ怒り、恨むる人はさらなり。人の諫を

而親仁行有餘力則以學文の二十五字也

放逸に流れ、淫行を行ひ、一かたに悪しき道に赴きて、よき事を好まず、孝弟を行ひ、家業を勤め、書を讀み、藝術を習ふ事をきらひ、少しの勤もむつかしがりて、頭いたく氣なやむなど云ひ、萬のつとむべき業をば、皆氣つまるとて勤めず。父母は愛に溺れて、唯其氣隨に任せて、放逸を免しぬれば、いよ〳〵其心ほしいまゝになりて、習ひて性となりぬれば、よき事をきらひむつかしがりて、氣つまり病起ると云ひて勤めず。中にも、書き讀む事を深くきらふ。凡氣のつまるといふ事、皆よき事をきらひ、むつかしく思へる氣隨より起れる病なり。我がすき好める事には、終日終夜心を盡し力を用ひても氣つまらず。圍碁を好むもの、夜を打明しても、氣つまらざるを以て知るべし。又蒔繪師、彫物師、縫物師など、いと細なるむつかしき事に、日夜心力と眼力を盡す。かやうの業は、面白からざれども、家業なれば、勤めてすれども、未だ氣つまり病者となるといふ事を聞かず。むつかしきをきらひて、氣つまるといふは、孝弟の道、家業のしわざなどの、よき事をきらふ氣隨より起れり。是孝弟人倫の勤行はれずして、學問諸藝の稽古のならざる本なり。書を讀まざる人は、學問の事不案内なる白徒なれば、讀書學問すれば、氣つまり氣へりて、病者となり、命もちゞまると思

唯二十五字
―弟子入則孝出則弟謹而信汎愛衆

益あり。此六事は、人の子となり弟となる者の、身を修め人に交る道なり。勤め行ふべし。行つて餘力あれば則用ひて學文とは、餘力はひまなり。上に見えたる孝弟以下六事を勤め行ひて、其ひまには、又古の聖人の書を讀んで、人の道を學ぶべし。いかに聰明なりとも、聖人の教を學ばざれば、道理に通ぜず、身を修め人に交る道を知らずして、過多し。故に必古のふみを學んで、其道を知るべし。是則身を修め道を行ふ助なり。次には日用に助ある六藝をも學ぶべし。聖人の經書を讀み、藝を學ぶは、すべて是文を學ぶなり。文を學ぶが内にも本末あり。經傳を讀んで學問するは本なり。諸藝を學ぶは末なり。藝はさま〴〵多し。其内にて、人の日に用ふるわざをえらびて學ぶべし。無用の藝は、學ばずとも有りなん。藝も亦道理あることにて、學問の助となる。これを知らでは、日用の事缺けぬ。藝を學ばざれば、たとへば木の本あれども枝葉なきが如し。故に聖人の書を學んで、其ひまには文武の藝を學ぶべし。此章唯二十五字にて、人の子となり、弟となるものゝ行ふべき道、是に盡せり。聖人の語、詞少なくして義備れりと云ふべし。

一凡子弟年若き輩、惡しき友に交りて、心うつり行けば、酒色にふけり、淫樂を好み、

は則ち弟、謹んで信じ汎く衆を愛して仁に親しみ、行餘力あれば則ち以て文を學ぶ

子のかみ一子の上にて子女の頭といふ義也、古語に兄をこのかみと云へり

ふ。兄は子のかみにて、親に近ければ、敬ひ從ふべし。もし兄より弟を愛せずとも、弟は弟の道を失ふべからず。兄の不友を似せて、不弟なるべからず。其外親戚傍輩の内にて、年老いたる長者をば、敬ひて侮る事なかれ。是弟の道なり。凡孝弟の二は、人の子弟の行の根本なり。尤勤むべし。謹とは、心に恐ありて、萬の事の誤なからんやうにするなり。萬の事は、謹より行はる。謹なければ、萬事亂れて、善き道行はれず。萬の過も禍も、皆つゝしみなきよりおこる。謹めば心に怠なく、身のわざに誤少なし。謹の一字、尤大切のこと也。若き子弟の輩は、殊更是を守るべし。信とは、言に僞なくて、誠あるを云ふ。身には行はずして、口に言ふは、信なきなり。又人と約して、其事を變ずるも、信なきなり。人の身のわざ多けれども、口に言ふと身に行ふとの二より外にはなし。行をつゝしみて、言に信あるは、身を修むるの道なり。汎愛衆とは、我がまじはり對する所の諸人に情ありて、ねんごろにあはれむを云ふ。下人を使ふに情深きも、亦衆を愛するなり。親仁とは、善人に親み近づくを云ふ。汎く諸人を愛して、其内にて、とりわき、善人をば親むべし。善人を親めば、善事を見習ひ聞きならひ、又其諫を受け、我が過を聞きて改むるの

朝は云々ー前註、一〇一頁參照

弟子入則孝するの一章ー論語學而篇に、子曰く、弟子入つては則ち孝、出でて

一少年にて、師にあひて物をならふに、朝は師に學び、晝は朝學びたる事を勤め、夕べはいよ〳〵かさね習ひ、夜ふして、一日の中に口に言ひ、身に行ひたる事を顧みて、あやまちあらば、悔いて、後のいましめとすべし。

一人の弟子となり、師に仕へては、我が位高しといへども高ぶらず、師を尊び敬ひて重んずべし。師を尊ばざれば、學問の道たゝず。師たる人、敎を弟子に施さば、弟子これに法り習ひ、師に對して、心も顏色も、和かに敬ひ愼み、我が心を虛しくして自滿なく、既に知れる事をも、知らざる如くし、又よく行ふ事をも、よくせざる如くにして、へり下るべし。師より受けたる敎をば、心を盡してきはめ習ふべし。是弟子たる者の、師にあひて敎を受くる法なり。

一論語の、子曰弟子入則孝するの一章は、人の子となり弟となる者の法を、聖人の敎へ給へるなり。我が家に在ては、まづ親に孝をなすべし。孝とは善く父母に事ふるをいふ。能く事ふるとは、孝の道を知りて力を盡すをいふ。力を盡すとは、我が身の力を盡してよく父母に事へ、財の力を盡して能く養ふをいふ。父母に事ふるには、力を惜むべからず。次に親の前を退き出でては、弟を行ふべし。弟は善く兄長に事ふるをい

和俗童子訓巻之二

○總論　下

一　幼き時より、孝弟の道を專らに敎ふべし。孝弟を行ふには、愛敬の心法を知るべし。愛とは人を慈み、いとをしみて、おろそかならざるなり。敬とは、人を敬ひて、侮らざるなり。父母をいつくしみ敬ふは孝なり。是愛敬の第一の事なり。次に兄をいつくしみ敬ふは弟なり。又をぢをばなど、凡年長ぜる人をいつくしみ敬ふも弟なり。次に我が弟從兄弟甥など、又めしつかふ下部など、其ほどにしたがひて、いつくしむべし。いやしき者をも、侮りおろそかにすべからず。各其位にしたがひて、愛敬すべし。およそ愛敬二の心は、人倫に對する道なり。人にまじはるに、我が心と顏色をやはらげ、人を侮らざるは、是善を行ふはじめなり。我が氣にまかせて、位に驕り、才にほこり、人をあなどり、無禮をなすべからず。

賈誼が詞に云々―賈誼曰く、太子の善は早く教諭すると左右を選むとに在り

學問をつとめさせ、身を修め人を治むる古の道を教へて、善を行はしめ、悪を戒むべし。よき人をえらびて、もし其人にあらずんば、師とすべからず。既に師とせば、是を尊び敬ひ、其教を受けしむべし。又身の養、飲食などのつゝしみをも教ふべし。左右近習の人を能くえらびて、質朴にて忠信なる人をなれ近づかしむべし。必邪佞利口の人を近づくべからず。かやうの人、甚人の子をそこなふものなり。又邪悪の人にあらざれども、文盲にて學問をきらふ人は、よき事を知らで、幼少なる子の志をそこなふ。左右の人正しからざれば、父の諫、師の教行はれず。心にかなひたるとて、子の害になる人を近づくべからず。賈誼が詞に、太子をよくするは、早く教ふると、左右をえらぶにありといへり。是古今の名言なり。

世の中さかりに—得意全盛の世となりての意

ばずんばあるべからず。

一凡高き家の子は、幼より下なるもの諂ひ從ひて、ひが事を云ひ、僻事を行ひても、尤なりと感じ、拙き藝をも、早く上手なりとほむれば、聞く人自らよしあしを辨へず、諂ひ僞りて譽むるとは知らず、我が言ふ事もなす事も、誠によきと思ひ、我が身に自滿して、人に問ひ學ぶ事なければ、智惠才徳の出來、進むべきやうなくて、一生を終る。是を以て、高家の子には、幼き時より、正直にて智ある人を師とし友とし、側に仕ふる人をえらびて、惡しき事をいましめ、善を進むべし。諂ひ譽むる人をば、いましめ退くべし。富貴の人の子は、とりわき早く敎へいましめざれは、年長じて後、世の中さかりに、おごり習ひぬれば、勢強くなりて、家臣として諫め難し。位高く身豐なれば、民の苦人の愁を知らず、人の費我が費をもいとはず。おごりに習ひては、人をあはれむ心も薄くなる。又さほど高き品にのぼらざれども、時に合ひ勢に乘りては、つねの心を失ひ、人に無禮を行ひ、物のあはれを知らず、人の情をも忘れて、言ふまじき事をもいひ、なすまじき事をもなす事こそあさましけれ。幼き時より、古の事を知れるおとなしく正しき人をえらび用ひて、師とし友とし、早く

めの序也、前註三一八頁參照

いたづがはし—苦痛なり、厄介なりなど云ふ程の意

一富貴の家の子に生れては、幼き時より、世のもてなし人の敬あつくして、よろづ豐かに心のまゝにて、世界の榮花にのみふけるならはしなれば、恐れ愼む心なく、おごり日々に長じ易く、戯遊を好み、人の諫をきらひ惡む。況や學問などに身を苦めん事は、いと堪へ難くて、富貴の人のするわざにあらずと思ひ、むつかしくいたづがはしとて、うとんじ嫌ふ。かゝる故に、おごりをおさへて、身をへり下り、心をひそめ、師を尊び、古を考へずんば、いかにしてか心智をひらきて、身を修め人を治むる道を知るべきや。

一賤しき者、我が身ひとつ修むるだに、學問なくて自らのたくみには成り難し。況や富貴の人は、多くの民を治むる職分、大に廣ければ、幼き時より、師に近づき、聖人の書を讀み、古の道を學んで、身を修め人を治むる理を知らずんば有るべからず。いかに才力を生れつきたりとも、古のひじりの道を學ばずして、我が生れつきの心を以て、みだりに人をつかひ民を司どれば、人民を治むる心法をも、其道其法をも知らで、誤多くして、人をそこなひ道に背き、天官を空しくして、職分を失ふ。然れば、位高く祿重き人の子は、ことさら少年より早く心をへり下り、師を尊び、學

食貨志論にも其入を量つて之を出すといへり

散樂—雅樂ならざる滑稽鄙野の音樂をいふ

飛騨工うつ墨繩の—一筋といふた

日用の切要なる事にして、必習ひ知るべき業なり。近世或君の仰に、大人の子の學びて宜しき藝は何事ぞと問ひ給ひしに、其臣答へて、算數をならひ給ひてよろしかるべしと申されける、いと宜しき答なりけると語り傳ふ。凡高きもひきゝも、算數を知らずして、我が財祿のかぎりを考へず、みだりに財を用ひ盡して、困窮に至るも、又事に臨みて、算を知らで、利害を考ふる事も成り難きは、いとはかなき事なり。又音樂をも頗る學び、其心を和げ樂むべし。されど、專好めば心すさむ。幼少より、遊戲の事に心を移さしむべからず。必制すべし。唐土の音樂だにも、好み過せば心をとらかす。況や日本の俗に翫ぶ散樂は、其章歌いやしく、道理なくして、人の教とならざるをや。藝能其外遊戲の方に心うつりぬれば、道の志は、必すたるものなり。專一ならざれば、直に遂ぐること能はずとて、學問し道を學ぶには、專一に勤めざれば、多岐の迷とて、あなたこなたに心うつりて、よき方に行きとゞかざるものなり。專一にするは、人丸の歌に、

　とにかくに物は思はず、飛騨工うつ墨繩の唯一すぢに。

とよめるが如くなるべし。

轉じて上官高位の人の義にいふ、こゝなるも然り

六藝—禮樂射御書數の六也

入を計りて—禮記王制に三十年の通を以て國用を制し入るを量つて以て出づるを爲すと見え、又歐文

また軍學武藝のみありて、學問なく義理を知らざれば、習ふ所の武事、かへりて不忠不義の助となる。然れば、義理の學問を本とし重んずべし。藝術は誠に末なり。六藝の中、ものかき算數を知る事は、殊に貴賤四民ともに習はしむべし。物よくいひ、世になれたる人も、物を書くこと達者ならず、文字を知らざれば、かたことをいひ、ふつつかに賤しくて、人に見おとされ、侮り笑はるゝは口をし。それのみならず、文字を知らざれば、世間の事と詞に通ぜず、もろ〳〵の勤に應じ難くて、世事滯る事のみ多し。又日本にては、算數は賤しき業なりとて、大家の子には教へず。是國俗のあやまり、世の人の心得違へるなり。もろこしにて、古は天子より庶人まで、幼少より皆算數を習はしむ。大人も、國郡にあらゆる民數を計り、其年の土貢の入を計りて、來年出し用ふる分量を定めざれば、限なき欲に隨ひて、限ある財盡きぬれば、困窮に至る。是算を知らざればなり。又國土の人民の數を計り、米穀金銀の多少と、軍陣に人馬の數と糧食とをかんがへ、道里の遠近と、運送の勞費を計り、人數をたて、軍をやるも、みな算數を知らざれば行ひ難し。臣下に任せては、おろそかにして事違ふゆゑに、大人の子は、殊に自ら算數を知らでは、つとめにうとく、事缺くる事多し、是

二五一頁參照

拳法—柔術をいふ

大人—大德の人又聖人の義なれど

ふ者なり。必其子を戒めて、彼に交らしむべからず。一度是と交りて、其風に移りぬれば、親の戒世の謗をも恐れず。とがを犯し、わざはひにあへども顧みず。もし幸にしてわざはひに免るといへども、大不孝の罪におち入りて、惡名を流す。わざはひを免れざる者は、一生の身を失ひ、家を破る。悲しむべきかな。

一四民ともに、其子の幼きより、父兄君長に事ふる禮儀作法を敎へ、聖經を讀ましめ、仁義の道理を漸くさとさしむべし。是根本をつとむるなり。次に、ものかき算數を習はしむべし。武士の子には、學問のひまに、弓馬劍戟拳法など習はしむべし。但一向に藝を好みすごすべからず。必一事に心移りぬれば、其事におぼれて害となる。學問に志ある人も、藝を好み過せば、其方に心傾きて、學問すたる。學問は、專一ならざれば進み難し。藝は學問を勤めて、其いとま有る時の餘事なり。學問と藝術を同じたぐひに思へる人あり、本末輕重を知らず、愚なりと云ふべし。學問は本なり、藝術は末なり。本は重くして、末は輕し。本末を同じくすべからず。後世の人、此理を知らず。悲しむべし。殊に大人は、身を修め人を治むる稽古だにあらば、藝能は其下たる有司にゆだねても事缺けず。されど六藝は、大人といへど其大略をば學ぶべし。

麻の中なる蓬―荀子勸學篇に、蓬麻中に生ずれば扶けずして自ら直し

朱に交れば赤し―前註

忠信禮義廉恥の行を教へて、高慢の氣をくじくべし。其外人によりて、多才は、かへりて其心をそこなひ、凶惡をますものなり。まづ謙讓を教へて、後に才學を習はしむべし。

一子弟を教ふるには、まづ其交る所の友をえらぶを要とすべし。其子の生れつきよく、父の教正しくとも、放逸なる無賴の小人に交りて、それと往來すれば、必彼に引そこなはれて惡しくなる。況や其子の性質善からざるをや。古人の語に、年若き子弟、たとひ年を終るまで書を讀まずとも、一日小人に交るべからずと云へり。一年書を讀まざるは、甚惡しけれども、猶それよりも、一日小人に交るは惡しき事となり。是惡しき友の、甚害ある事を云へり。人の善惡は、皆友によれり。古語に曰、麻の中なる蓬は、助けざれども自ら直し。又曰、朱に交れば赤し、墨に近づけば黑しといふ事、誠にしかり。若き時は、血氣未だ定らず、見る事聞く事にうつり易きゆゑ、友あしければ、惡にうつる事早し。もろこしにて、公義の法度を恐れず、我が家業を勤めざる者を無賴と云ふ。是放逸にして、父兄の教にしたがはざるいたづらものなり。無賴の小人は、必酒色と淫樂を好み、又博奕を好みて、諫を防ぎ恥を知らず、友を引そこな

篤信—著者貝原益軒の本名

ても事足りぬと思ひ、學問を好まず、人の教を求めず。もし父として、愛に溺れて子の惡しきを知らず、性行よからざれども、君子のごとくほめ、才藝つたなけれども、勝れたりとほむるは、愚にまよへるなり。其善を譽むれば其善を失ひ、其藝を譽むれば其藝を失ふ。必其子をほむる事なかれ。其子の害となるのみならず、人にも愚なりと思はれて、いと口をし。親の譽むる子は、多くは惡しくなり、學も藝も拙きものなり。篤信かつて言へり、人に三愚あり、我をほめ、子をほめ、妻をほむる、皆是愛におぼるゝなり。

一 小兒に學問を敎ふるに、初より人品よき師を求むべし。才學ありとも、惡しき師に隨はしむべからず。師は小兒の見習ふ所の手本なればなり。凡學問は、其學術をえらぶことをむねとすべし。學のすぢ惡しければ、かへりて性をそこなふ。一生勤めても、よき道に進まず。一度惡しきすぢを學べば、後によき術を聞きてもうつらず。又才力ありて高慢なる人、すぢわるき學問をすれば、善にうつらざるのみならず、必邪智を長じて、人品いよ〳〵惡しくなるものなり。かやうの人には、唯小學の法、謙讓にして自ら是とせざるを以て、教を受くるの基となさしめて、溫和慈愛を心法とし、孝弟

偶の稱なれど、こゝは單に人形の事を云へりと見ゆ

れば、筋目違ひ亂れて行はれず、心も亦安からず。故に禮を行はずんばあるべからず。小兒の時より、和禮の法に從ひて、立居振舞飲食酒茶の禮、拜禮など敎ふべし。

一志は虛邪なく、言は忠信にして僞なく、又非禮の事、賤しき事を言はず、形の威儀を正し愼む事を敎ふべし。又諸人に交るに、溫恭ならしむべし。溫恭はやはらかにうやまふなり。是善を行ふ初なり。心あらきは溫にあらず、無禮なるは恭にあらず。己を是とし、人を非として侮る事を、堅く戒むべし。高位なりとて、我を高ぶる事なかれ。高き人は、人にへりくだるを以て道とすることを敎ふべし。氣隨にして我がまゝなることを、早くいましむべし。かりそめにも人を誹り、我が身におごらしむる事なかれ。常にかやうのことを早く敎へ戒むべし。

一およそ人の惡德は矜なり。矜とはほこるとよむ。高慢の事なり。矜なれば自ら是として、其惡を知らず、過を聞きても改めず。故に惡を改めて善に進むこと難し。たとひ勝れたる才能ありとも、高慢にして、我が才にほこり、人を侮らば、是凶惡の人といふべし。凡小兒の善行あると、才能あるをほむべからず。ほむれば高慢になりて、心術をそこなひ、我が愚なるも不德なるをも知らず。我に智ありと思ひ、我が才智に

破魔弓—昔小兒の息災を祈らんがために正月室内に飾りたる弓矢を云ふ、今日にても其儀の存する地ありとぞ、こゝなるは單に遊戲の具を云へりと覺ゆ

天兒—兒女の災を移し負はする呪に用ふる木

の子は、物事豐かに自由なる故に、好む方に心早くうつり易くして、おぼれ易し。早くいましめざれば、後にそみ入りては、諫め難く、立歸り難し。又惡しからざる事も、勝れて深く好む事は、必害となる。故に子を育つるには、油斷して其好に任すべからず。早くいましむべし。おろそかにすべからず。豫するを先とするは、此故也。

一小兒の時、紙鳶をあげ、破魔弓を射、狛をまはし、毬打の玉を打ち、てまりをつき、端午に旗人形を立つる、女兒の羽子をつき、天兒をいだき、雛をもてあそぶの類は、ただ幼き時好めるはかなき戲にて、年漸く長じて後は、必捨るものなれば、心術に於て害なし。大やう其好に任すべし。されど、費多く、かざり過し、好み過さば、戒むべし。ばくちに似たる遊は、なさしむべからず。小兒の遊を好むは、常の情なり。道に害なき業ならば、あながちに抑へかゞめて、其氣を屈せしむべからず。唯後にすたらざる遊好は、打任せ難し。

一禮は天地の常にして、人の則なり。即人の作法を云へり。禮なければ、人間の作法にあらず、禽獸に同じ。故に幼より禮をつゝしみて守るべし。人のわざ、事ごとに皆禮あり。萬の事、禮あればすぢめよくして行はれ易く、心も亦定りて安し。禮なけ

に、緜々を絕たずんば蔓々を若何せん、毫末拔かずんば將に斧柯を成さんとす

一向に——ひたすらに、一途になど云ふに同じ

淫樂などを好む事、又つひえ多き遊、先早くいましむべし。是を好めば、其心必放逸になる。幼きより好めば、其心癖となり、一生、其好やまざるものなり。いかにいとけなくして、いまだ心に辨なくとも、又富貴の家に生れ、萬の事心にかなへりとも、道に背き、人に害あり、物を苦め、財を費す戲遊の、はかなきわざをば、せざる理なりと云ひ聞かせ、悟らしめて、なさしむべからず。又我が身に用なき無益の藝を習はしむべからず。たとひ用ある藝能といへども、一向に好み過して、其事にのみ心を用ふれば、必其一事に心傾きて、萬事に通ぜず、其好む所につきて、ひが事多く害多し。況や益なき事をすき好むをや。およそ幼きより、好む所習ふ事を、早くえらぶべし。

一　小兒の時より、年長ずるに至るまで、父となり、かしづきとなる者、子のすき好む事ごとに心をつけて、えらびて好に任すべからず。好む所に打任せて、善惡をえらばざれば、多くは惡しきすぢに入りて、後はくせとなる。一たび惡しき方にうつりては、取返してよき方にうつらず、いましめても改まらず、一生の間止み難し。故に未だ染まざる內に、早くいましむべし。油斷して、其子の好む所に任すべからず。殊に高家

先入の言—漢書息夫躬傳に、古戒を觀覽し反覆參考先入の語を以て主と爲す無し

兩葉不去云云—木生じ出でたるばかりの時拔き去らざればやがて大木となりては斧柯を用ひて伐らざるべからざるに至るの意、戰國策

てあしゝ、唯其心に任せて置くべし、後に智恵出來れば、ひとりよくなると言ふ。これ必愚なる人の言ふことなり。此言大なる妨なり。古人は、小兒のはじめて能く食し、ものいふ時より、早く教ふ。遲く教ふれば、惡しき事を久しく見聞きて、先入の言、心の内に早く主となりては、後に善き事を教ふれどもうつらず。故に早く教ふれば入り易し。常に善き事を見せしめ聞かしめて、善き事にそみ習はしむべし。おのづから善にすゝみやすし。惡しき事も、少しなる時早くいましむれば、去り易し。惡長じては、去り難し。古語に、兩葉不レ去將レ用二斧柯一といへるがごとし。婦人及び無學の俗人は、小兒を愛する道を知らず、姑息のみにして、唯うまきものを多く食はせ、よき衣をあたゝかに著せ、ほしいまゝに育つるをのみ、其子を愛すると思へり。是人の子をそこなふわざなる事を知らず。今の世にも、其父禮を好みて、其子の幼き時より、しつけを教へ、和禮をならはする人の子は、必其子の作法よく、立居ふるまひ、人の交不束ならず、老に至るまで威儀よし。是其父早く教へし力なり。善を早く教へ行はしむるも、其しるしまた斯の如くなるべし。

一幼き時より、必まづ其好むわざをえらぶべし。好む所尤大事なり。婬慾の戲を好み、

信を失へば人にあらず―論語爲政篇に、人にして信なくんば其可なるを知らず、大車輗なく小車軏無くんば其れ何を以て之を行らん

一幼き時より、心ことばに、忠信を主として、僞なからしむべし。もし人をあざむき、僞をいはゞ、嚴しくいましむべし。こなたよりも、幼子を欺きて、僞を敎ふべからず。こなたより僞れば、小兒是に習ふものなり。かりそめにも僞をいふは、人にあらずと思ふべし。心に僞と知りながら、心を欺くは、其罪いよ〳〵深し。又人と約したる事あらば、必其約を違へざるべし。約を違へては僞となり、信を失へば人にあらず。もし後に信を守り難き事は、初より約すべからず。又小兒には、利欲を敎へ知らしむべからず。よろづにさとくとも、僞りて且慾深く、人の物をむさぼるは、小人のわざなれば、幼き時より、早く是を戒むべし。ゆるすべからず。

一小兒の時より、心もちやはらかに、人をいつくしみ、情ありて、人を苦めあなどらず、常に善を好み、人を愛し、仁を行ふを以て、志とすべし。人我が心にかなはざるとて、顏色をはげしくし、詞をあらくして、人を怒り罵るべからず。小兒もし不仁にして、人を苦め侮りて情なくば、早くいましむべし。人に對して溫和なれども、其身正しければ、幼きとて人侮らず。

一凡小兒の敎は早くすべし。然るに凡俗の智なき人は、小兒を早く敎ふれば、氣くじけ

うそくにして—貧しく不足勝にして、乏しく不十分にして等の意

幼き時艱難に習へば、年たけて難苦に堪へやすく、忠孝の勤を苦まず、病少なく驕なくして、放逸ならず。能く家を保ちて、一生の間、幸となり、後の樂多し。もし不意の變にあひ、貧窮に至り、或は戰場に出でても、身の苦なし。斯の如く子を育つるは、誠によく子を愛するなり。又幼少より養豐かにして、もてなしあつく、心のまゝにして安樂なれば、おごりにならひ、私慾多くして、病多く、艱難に堪へず、父母に事へ君に仕ふるに、勤を苦みて、忠孝も行ひ難く、學問藝能の勤成り難し。もし變にあへば、苦にたへず、陣中に久しく居ては、艱苦をこらへ難くして、病を受け、戰場に臨みては、心に武勇ありても、其身やはらかにして、攻め戰ひのはげしき働成り難く、人に後れて功名をもなし難し。又男子唯一人あれば、極めて愛重すべし。愛重するの道は、敎へいましめて、其子に苦勞をさせて、後のためよく、無病にてわざはひなきやうに計るべし。姑息の愛をなして其子を損ふは、誠に愛を知らざるなり。およそ人は若き時艱難苦勞をして、忠孝を勤め、學問を勵まし、藝能を學ぶべし。斯の如くすれば、必人にまさりて、名をあげ、身を立て、後の樂多し。若き時安樂にて、なす事なく、艱苦を經ざれば、後年に至りて人に及ばず、又後の樂なし。

人の親の—藤原兼輔の詠にして後撰集に出づ
其子の惡しきを云々—大學に、諺にこれ有り人其子の惡しきを知る莫し其苗の碩なるを知る莫し
まどしくば

人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道にまよひぬるかな。

とよめり。唐土の諺に、人其子の惡しきを知る事なしと云へるが如し。姑息の愛過ぐれば、たとひ惡しき事を見つけても、ゆるしていましめず。凡人の親となるものは、我が子にまさる寶なしと思へど、其子の惡しき方に移りて後は、身を失ふ事をも、かねて辨へず、居ながら其子の惡におち入るを見れども、我が敎なくして、惡しくなりたる事をば知らで、唯子の幸なきとのみ思へり。又其母は、子の惡しき事を父に知らせず、常に子のあやまちをおほひ隱すゆゑ、父は其子のあしきを知らで、いましめざれば、惡つひに長じて、一生不肖の子となり、或は家と身とを保たず。あさましき事ならずや。程子の母の曰、子の不肖なるゆゑは、母其あやまちをおほひて、父知らざるによれりと云へるもむべなり。

一　小兒の時より、早く父母兄長に事へ、賓客に對して、禮を勤め、讀書、手習、藝能を勤めまなびて、惡しき方に移るべきいとまなく苦勞さすべし。はかなき遊にひまを費さしめて、ならはし惡しくすべからず。衣服、飲食、器物、居處、僕從に至るまで、其家の位よりまどしくばうそくにして、もてなしうすく、心のまゝならざるがよし。

姑息—禮記檀弓に君子の人を愛するや徳を以てし細人の人を愛するや姑息を以てすと見えたり。姑息は苟且といふに同じく唯目前の安を偷むをいふ

するものなり。乳母かしづき隨ふ人悪しければ、育つる子、それに似て悪しくなる故に、其人をよくえらぶべし。貧賤なる家には、人をえらぶ事難しといへど、此心得有るべし。況や位高く祿とめる家をや。

一凡小兒を育つるには、専ら義方の教をなすべし。姑息の愛をなすべからず。義方の教とは、義理の正しき事を以て、小兒のあしき事をいましむるを云ふ。是後の福となる。姑息とは、婦人の小兒を育つるは、愛に過ぎて、小兒の心に隨ひ、氣にあふを云ふ。これ必後の禍となる。幼き時より、早く氣隨をおさへて、私欲をゆるすべからず。愛を過せば、驕出來其子のため禍となる。

一凡子を教ふるには、父母嚴にきびしければ、子たる者おそれ愼みて、親の教を聞きてそむかず。是を以て孝の道行はる。父母やはらかにして嚴ならず、愛過ぐれば、子たる者父母を恐れずして、教行はれず、いましめを守らず。是を以て、父母を侮りて孝の道立たず。婦人又は愚なる人は、子を育つる道を知らで、常に子をおごらしめ、氣隨なるをいましめざる故、其おごり年の長ずるにしたがひていよ〳〵増す。凡夫は心くらくして、子に迷ひ、愛におぼれて、其子の悪しき事を知らず。古歌に、

安きを要めば須く三分の饑と寒とを帯ぶべし此攝生の要也終身之を守りて可也

聞えつるやうに―述べたるが如くにの意

意は、少しは飢し、少しは冷すがよしとなり。是古人小兒を保つの良法なり。世俗是を知らず。小兒に乳食を多く與へてあかしめ、甘き物果物を多く食はしむる故に、氣ふさがりて、必脾胃を破り、病を生ず。小兒の不慮に死する者は、多くは是によれり。また衣をあつくして溫め過せば、熱を生じ、元氣をもらすゆゑ、筋骨ゆるまりて、身弱し。皆是病を生ずるの本なり。唐も大和も、古より童子の衣の脇をあくるは、童子は氣さかんにして、熱多きゆゑ、熱をもらさんが爲なり。是を以て、小兒は溫め過すが悪しき事を知るべし。天氣よき時は、をり〳〵外に出して、風日にあたらしむべし。斯の如くすれば、はだへ堅く、血氣強くなりて、風寒に感ぜず。風日にあたらざれば、膚もろくして、風寒に感じ易く、わづらひ多し。小兒の養ひの法を、かしづき育つる者に、能くいひ聞かせ敎へて、心得しむべし

一小兒を育つるには、前にも聞えつるやうに、先乳母かしづき隨ふものをえらぶべし。心穩にして邪なく、愼みて言少なきをよしとす。わるがしこく口きゝ、僞をいひ、詞多く、心邪にして僻み、氣猛く、恣にふるまひ、酩酊を好むを悪しゝとす。凡小兒は智なし。心も詞も萬の振舞も、皆其かしづき隨ふ者を見習ひ聞きならひて、彼に似

どするを云ふ、そらは僞の義也

古語に云々ー保嬰論に若し小兒の

つけ、貪りねたむ心ざしを引出す。しかのみならず、父母の愛過ぐる故、あまえて父母を恐れず、兄を蔑にし、家人を苦め、よろづ恣にして人を侮る。いましむべき事をかへりてすゝめ、咎むべき事をかへりて笑ひ悦び、色々あしき事どもを見聞かせ、言ひならはせ、しならはせて、やうやく年長じ、智恵いでくる時に至りて、俄に始ていましむれども、其悪しきならはし、年と共に長じ、久しくならひ染みて、本性も等しくなりにたれば、諫を用ひず。幼き時に教なく、年長じて俄に諫むれども隨はざれば、本性悪しく生れつきたるとのみ思ふ事、いとおろかに、まどひの深き事ならずや。

一凡小兒を育つるに、初生より愛を過すべからず。愛過ぐれば、かへりて子をそこなふ。衣服をあつくし、乳食にあかしむれば、必病多し。衣を薄くし。食を少くすれば、病少なし。富貴の家の子は、病多くして身よわく、貧賤の家の子は、病少なくして身強きを以て、其故を知るべし。小兒の初生には、父母の古き衣を改めぬひて、著せしむべし。衣のあたらしくして温なるは、熱を生じて病となる。古語に、凡小兒を安からしむるには、三分の飢と寒とをおぶべしと云へり。三分とは、十の内三分を云ふ。此

やんごとなき—止む事無き義にて貴きをいふ

非をそだて—非を長ぜしめの意

そらうち—打つ眞似な

習ひ、くせになり僻事出來て後、教へいましむれども、始より心にそみ入りたる悪しき事、心の内に早くあるじとなりぬれば、あらためて善に移ること難し。たとへば小兒の手習するに、始風體あしき手本を習へば、後に能き手をならひても移り難く、一生改め難きがごとし。第一いつはれる事、次に氣隨にてほしいまゝなる事を、早くいましめて、必いつはり恣なる事をゆるすべからず。やんごとなき大家の子は、殊に早くいましめ教へざれば、年長じては、勢強く位高くして、諫め難し。凡小兒のあしくなりぬるは、父母乳母かしづきなるゝ人の、教の道知らずして、其あしき事をゆるし、したがひほめて、其子の本性を害ふ故なり。或は暫く泣く聲を止めんとて、あざむきすかして、姑息の愛をなす。其事誠ならざれば、則是僞を教ふるなり。又たはぶれに恐しき事どもを云聞かせ、より〱おどしいるれば、後に臆病の癖となる。武士の子は、殊に是をいましむべし。幽靈、ばけもの、怪く誠なき物語、必いましめて聞かしむべからず。或は小兒の氣にさからひたる者をば、理をまげて小兒の非をそだて、そらうちなどすれば、驕慢の心いでくるものなり。小兒をもてあそびて、我が心を慰めんが爲に、様々の詞にて、そびやかし苦め、いかり爭はしめて、ひがみまがれる心を

人の道有るや飽食暖衣逸居して教無きときは則ち禽獸に近し聖人之を憂ふる有り契をして司徒たらしめ教ふるに人倫を以てす云々

まめやかに—誠實にして、忠實にして等の意

の教なくては、人の道を知り難し。是を以て、人となる者は、必聖人の道を學ばずんばあるべからず。其教は、豫するを先とす。豫とは、兼てよりと云ふ意、小兒のいまだ惡に移らざる先に、兼て早く教へずして、惡しき事に染みならひて後は、教へても善に移らず、いましめても惡を止め難し。古人は、小兒の始てよく食し、能く言ふ時より、早く教へしとなり。

一富貴の家には、能き人を擇びて、早く其子につくべし。惡しき人になれそむべからず。貧家の子も、早く善き友に交らしめ、あしき事に習はしむべからず。凡小兒は、早く教ふると、左右の人をえらぶと、是古人の子を育つる良法なり。必是を法とすべし。

一凡小兒を育つるには、始て生れたる時、乳母を求むるに、必溫和にして愼み、まめやかに詞少き者をえらぶべし。乳母の外、附き隨ふ者をえらぶも、大やう斯の如くなるべし。始て飯を喰ひ、ものを言ひ、人の面を見て悅びいかる心を知る時より、常に其事に隨ひて、時々教ふれば、やゝおとなしく成りて、いましむる事易し。故に幼き時より、早く教ふべし。もし教へいましむる事おそくして、惡しき事をおほく見習ひ聞

罪を加へざる年―八十九十をいふ、前註、五〇頁參照

高きに登るには云々―中庸に、君子の道は譬へば遠きに行くに必ず邇きよりするが如し譬へば高きに登るに必ず卑きよりするが如しと。

食にあき云々―孟子滕文公上に、

みけるも、むべなるかな。此故に、郷里の兒童の輩を早くさとさん爲に、いさゝか昔聞ける所を、筆に任せて記し侍る。かゝる賤しき書つくり、ひがごと聞えんは、いと恥づべけれど、高きに登るには、必ひきゝよりする理あれば、もしくは未だ學ばざる幼稚の小補にもなりなんかと云ふ事しかり。

一凡人となれるものは、皆天地の徳をうけ、心に仁義禮智信の五性を生れつきたれば、其性のまゝに隨へば、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五倫の道行はる。是人の萬物に勝れて尊き所なり。是を以て、人は萬物の靈と云へるなるべし。靈とは、萬物に勝れて明なる智あるを云へり。されども、食にあき、衣をあたゝかに著、居所を安くするのみにて、人倫の教なければ、人の道を知らず、禽獸に近くして、萬物の靈と云へるしるしなし。古の聖人是を憂ひ、師を立て、學び所を立て、天下の人に、幼き時より道を教へ給ひしかば、人の道立ちて、禽獸に近きことを免る。凡人の小なる業も、皆師なく教なくしては、自らは爲し難し。況や人の大なる道は、古のさばかり賢き人といへど、學ばずして自らは知り難くて、皆聖人を師として學べり。今の人、いかでか教なくして一人知るべきや。聖人は人の至、萬世の師なり。されば人は、聖人

和俗童子訓

卷之一

貝原益軒著

○總論上

一若き時ははかなくて過ぎ、今老いて死なざれば盜人とする、ひじりの御いましめ、逃れ難けれど、今年既に八そぢに至りて、罪を加へざる年にもなりぬれば、かゝる不用なるよしなし言いひ出せる罪をも、願はくは世の人是を免し給へ。年の積りに、世の中の有樣多く見聞して、兎角思ひ知り行くにつけて考へ見るに、凡人は善き事も惡しき事も、いさ知らざる幼き時より習ひなれぬれば、まづ入りし事、内に主として、既に其性と成りては、後にまた善き事あしき事を見聞してもうつり難ければ、幼き時より、早く善き人に近づき、善き道を敎ふべき事にこそあれ。墨子が白き絲の染るを悲

盜人とする—論語憲問篇に、幼にして孫弟ならず、長じて述ぶること無く、老いて死なず、是を賊となす

不足曉諭童蒙而已矣。有志之君子改作惟幸。

益軒　貝原篤信書

和俗童子訓序

君子慎始、差若毫釐、繆以千里。是以古人生子、能食能言而教之。聖人立小學之法、而養蒙以正者、誠有以也。蓋嬰孩之歲、人生之始也。是性相近、而未有習之時、雖知思未發、其爲善爲惡之岐、從此而分矣。辨其毫釐之邪正、而導之以善者、宜於此焉。是所以慎始也。苟諭教之不早、年稍長、則內爲嗜好所陷溺、外爲流俗所誘惑、人欲肆而天理滅矣。貿貿焉莫知所之。欲不歸小人之趣、不可得已。此非繆以千里乎。故教人之法、以豫爲急。後世民間小兒之輩、蒙養不正、其平日所見聞習熟、皆是戕賊德性、蔑棄禮法之事而已。予於此乎、不自揣僭率、取古人訓子弟之意、書以國字、欲便窮鄉村童之無師無學者之翫讀也。顧昏耄之齒、不能爲文理。恐

しの縁に係る縁語

たまくしげ—あくに係る枕詞、玉櫛笥明くの縁也、あけくれは朝暮の意

唯一すぢに善をこのみ、道を樂みて過ぐさんこそ、此世に生けるかひあるべけれ。年老いては、同じことするならひなれば、あまのたくなはくりかへし、かくいひ〳〵て、たまくしげあけくれ自ら心をいましめ、又人に樂をすゝむるなかだちとするならし。かへす〴〵、われも人も、かく生れつる樂を知らで、身をいたづらになし、さてもかひなく世に朽ちなん事うらむべし。もし朝に道を聞けらば、人となれるかひありて、夕に死ぬとも、また何をかうらみんや。

寶永七年臘月　益軒　貝原篤信書

時年八十有一

淵明が云々ー歸去來辭の末節也

飛驒たくみー工匠をいふ、うつ墨なは云々は一すぢといはん爲の序也

あまのたくなはー蜑郎ち漁夫の栲繩にて繰返

をなげき、死をくるしむは、理にくらしと云ふべし。命を知らざればなり。易にこれをいましめてしかいへり。淵明が、いさゝか化に乘じて、盡にかへらん、彼の天命を樂んで、又何をかうたがはんと云ひ、盡くべくは便盡くべし、また獨多慮なる事なからんと云ひ、又朝與仁義生、夕死復何求めんといへりし、誠に達人のことばなるかな。曹孔建が詩にも、先民誰か死なざる、命を知りてまた何をか憂へんといへり。まことに古より死なざる人なし。命を知らで、天運に任せざらんは、憂おほかるべし。平生よき人も、終をよくせざらんは、一生のつとめ空しくなれること、をしむべし。晩節をたもつこと、心にかくべし。

一つく〲と思へば、樂おほき此世なるを、道を知らざれば、我と心をくるしめ、天をうらみ、人をとがむ。かく道を知らでうれひおほき人は、くれまどふ心のやみこそむげに愚なりといふべけれ。人の身金石にあらず、生けるもの終に死なざるはなし。又二たび生れくる身にしあらざれば、此世なる間は、樂みてこそありぬべけれ。くやしく過しむかしの事は、すべきやうなし。いくばくならぬ齢なれば、今よりのち、一日も早く日月をゝしみ、先のひが事をくいて、飛驒たくみうつ墨なはにあらねども、

二七五頁に出でたる土御門院の御製、うきよにはかゝれとて生れけめ理知らぬわが涙かな

易の離に云云―離上離下の卦に、九三は日昃の離、缶を鼓つて歌はずんば則ち大耋の嗟あり凶

天命にまかせて、死ぬるまでは樂み、憂なくして過さまほし。達人は命を知りて憂なし。

一世には、白髮を見ずして死する人多し。道を知らずして死ぬるは、殊にうらみ多し。此世のありさまをだに知らで、世を早くする事をしむべし。我がともがら白髮を見る事久し。幸とすべし。東坡が詩に、人は白髮を見てうれひ、我は白髮を見てよろこぶといひしもむべなり。

一年老いて、夕日のかたぶける如く、死ぬべき時近くいたりぬれば、命を安んじて、悲むまじき理を知るべし。易の離に、ほとぎをたゝきて歌はずんば、終に大耋のなげきあらんといへり。ほとぎは、人のかたはらにある日用の器なり。これをたゝき歌ふとは、かなしみなく、樂んで日をおくるなり。大耋のなげきは夕日の大にかたぶくをなげくを云ふ。人の老にいたり、死の近きこと、夕日のかたぶく如くなるは、是かくあるべき常の理なれば、嘆くべからず。なげくは常の理を知らず、愚なり。故に凶しといへり。是常に樂みて、老にいたるを嘆くべからずとなり。人の若より老にいたり、死に近きは、四時の行はるゝが如く、定まりたるつねの理なり。然るに、老

並びて所謂三才又三極なり

上壽は百歳云々—莊子盗跖篇に出づ

世の中を—拾遺集卷九雜下に出で讀人不知と有り

かゝれとてこそ云々—

へば朝露の如く、一生の過ぎやすきこと、過客の如し。歳月は行きてとゞまらず、時節は去りて流るゝが如し。李白が詩に、人生大夢の如し、胡爲此生をくるしむと云へり。およそ人の命、上壽は百歳、中壽は八十、下壽は六十といへり。下壽をたもつ人もまた多からず。七十なるは稀なり。かゝる短きよはひの内を、一日も善を行はず樂まずして、あだに暮すべからず。古歌に、

　世の中をかくいひ〳〵てはて〳〵は、いかにやいかにならんとすらん。

といへるは、今更おどろくべきにあらざれども、およそ人は皆あだにして定めなき身を持ちながら、死期の近き事を知らずして、平生あやまつて、百年のはかり事をなせり。老の身は、殊に殘生のいくほどなくて、死期の近きにあらんこと、忘るべからず。

一もし我が身に禍あらば、古今はなはだしき禍にあへる人多し。それに我が不幸をくらべて見ば、我が禍はさほどなくて、恨なかるべし。是つたなき計のやうに聞ゆめれど、古の賢者のをしへなり。これを試むるに、しるしを得る事多し。此計すてがたし。

一もし不幸にしてうれひ多からば、我が身はもとよりかゝれとてこそ生れけめと思ひ.

すの意

漢の東平王―前註、一六頁參照

天地と參―天地人と相

感じ、風景を翫び、月花をめで、詩歌を吟し、草木を愛する、此あまたの事、かはる〴〵樂まば、朝夕の樂きはまりなかるべし。老いては、心やすく身樂にして、貧賤を甘んずるこそ、折にかなひて宜しかるべけれ。かゝる時樂まずんば、日月逝きて止らず。をしむべし。かくの如く、世にきはまりなき樂あるを知らで、何となく憂ひくるしみて過さんは、まことに不幸の人、一生を空しくすといふべし。

一人の樂は、善を行ふよりたのしきはなし。漢の東平王の、善をするはいと樂しといへる、むべなるかな。富貴の人は、ひろく人を愛し、もろ〴〵を救ひて、其樂ひろし。貧賤の人も、其分に應じて、人をすくふ志だにあらば、其善をする功多かるべし。

一老いては彌人をむさぼらず、物ごとに慮ふかくして、人を妄にそしらず、いからず、人の妨とならず、人の我に無禮不仁なるをこらへて、怒りうらみず、人ごとに君子ならざれば、かくこそあるべけれと思ひて、心にかけて苦みうれへず、貧賤を甘んじて、身やすく心閑にして樂むべし。

一天長く地久しくして、極りなし。人は天地と參となりながら、命のみじかき事、たと

語なれどここには盜賊の意を兼ねて言へる也

蔘蟲は云々ー五車韻瑞に孔叢子の賦を引いて、是蟲幼にして斯蔘に長じ以て辛と爲さずと見え、又鶴林玉露に、蔘蟲は苦きを知らずといへり

物なりながらー物なるにも關はら

一我がともがら才もなく徳もなく、君を助け民をたすくるわざなけれども、一歩の田をつくらず、一本の麻をうゑずして、食に飽き、衣をあたゝかに著、家に居て風雨にをかされず。是大なる幸なり。農夫は又日夜耕作に苦めども、うゑこゞえを免れず、あはれむべし。是を思ひて、我が身まどしくとも、うれひなく樂むべし。外を求め上をねがふは、おごりて分を知らざるなり。古語に曰、上にたくらぶれば足らざれども、下にくらぶれば餘あり。是を以て、我が身を樂むべし。

一萬の事、はじめ、事のいまだ備らざりし時を思ひ、今にくらべなば、苦なく樂多かるべし。上古の時は、野に居り穴にすむ。五穀のはむべきなく、きぬ布の著るべきなし。もろ〳〵の器なく、火食を知らず。其苦思ひやるべし。今の世の人は、上古にくらぶるに、事毎にそなはりて、樂むべし。又我がはじめ貧賤なる苦を思ひて、今の時にくらぶべし。戰國の時のうきことを思ひて、今の太平を樂むべし。

一人ごとに生れつきたる樂あれども、學ばざれば、己が物なりながら知らず、衆人の樂はみな外欲にあり。是をほしいまゝにすれば、却て我が身のわざはひも是よりおこる。君子は學んで道を樂み、命を安んじて貧をうれへず。閑を得ては書をよみ、時節を

榮啓期が三の樂—莊子及家語に出づ

康節—邵雍の諡也、字は堯夫、宋の河南人、世に其學を百源學派と稱す

白波の立田山—古今集に、風吹けばおきつ白波立田山夜半にや君がひとり越ゆらん、白波はたつの緣

一榮啓期が三の樂は、人となり、男子となり、いのち長かりしをいへりしは、誠にさる事なり。今の世の人は、此上に、又大に樂むべきことひとつあり。これを知りて、人ごとに樂むべし。其の可レ樂はなんぞ。大君の御めぐみによりて、かゝる太平の御世に生れ、堯舜の仁にあひて、白頭まで干戈を見ず、是大なる樂にあらずや。康節の世を論ぜし詞に、太平の世に生れ、太平の世に老い、太平の世に死ぬるといへりしは、誠に大なる幸なり。今の世の人皆しかり。亂世に生れては、朝夕兵革を事とし、或は難をのがれさけて、身のおき所もなく、山にも海にも、白波の立田山、夜半にひとり行きがたきのみならず、白日といへど、同じき輩多く伴はざれば、近き所にも往きかへる事やすからざりしとなん。老いては身の死なざる事をきらふと云ひしは、古の人、亂世の苦をいへるなり。かゝる世に生れし人の苦、今より思ひやるにも悲むべし。昔より亂世は多く、治世はすくなし。今の人は、いにしへ兵亂の世久しくつゞきて、不幸にうれひにしづめる事を思ひやりて、我が大君の御めぐみと、今の世の太平の樂をわするべからず。蓼蟲はからきことを知らず。今の世に生れては、今の世の樂を知れる人すくなし。古を思ひやりて、今の世を樂むべし。

我ほどもなき—うへ見ればかぎりもあらぬ世の中に我程もなき人もこそあれ、此歌二二二頁に出づ
槿花は云々—白樂天の詩に、槿花一日自ら榮と爲す

り、平地木はひきゝ事數寸に過ぎず。同じく樹木となれど、長短各ことなれるは、生れつき定まればなり。きはめて貧しき人も、我が分のひきゝを安んじて、うれふべからず。生れつかざる富貴を羨むべからず。又世には、我ほどもなき人多し。それより下なる人を見て、我が分を樂むべし。上を羨むべからず。又同じく人と生れたれども、長壽なる人あり、短命なる人あり。長き短き其品多くして、あげて數へがたし。富貴をきはめて、萬の事心のまゝなる人も、唯命のさいはひのみ心にかなはず。されども是また生れつきて天命の定まれる所なれば、みじかしとて悲むべき理にあらず。此理に達し、天命を樂みて、身ををはるべし。死ぬる時、もし苦みかなしまば、平生樂めりとも、かひなかるべし。をはりを愼むべし。たとへば松は千年をたもち、槿花は唯一日のみ。長短各ことなり。是生れつきて定まれる分あれば、みじかきは長きを羨むべからず、各其分を安んずべし。

一此世にありては、此世の樂を知らず。富貴にしては、我が力あるを以て善を行ひ、人をたすけて樂む道を知らず。淸福を得ては、淸福の樂を知らず。病なき時は、病なき樂を知らず。たとへばいねたる人の、夢是夢なる事を知らざるが如し。

論擬符と爲す

ことわざ—事業の訓、作業の意也諺にあらず

よそぢ—四十歳をいふ

し。然るに世の人これを好まず。其不幸甚し。これを好む人は、天下の至樂を得たりと云ふべし。

○後論

一つら〳〵世の中の人の命をかんがふるに、長生の人すくなし。いとけなき時より、よそぢに至る間に、世を早くする人おほし。五十を不夭とす。不夭とすとは、若死に非ずと云ふ意なり。六十を下壽とし、七十を古稀といへるは、むべなるかな。わかき時より、なれむつまじき人々のかず〳〵、其面影目の前なりしも、おほくは亡なり行きて、年の經ぬるは誠にかなしむべし。花の春ごとに開くを見ても、昔の人のかへり來らざるをうらむ。是を思ひて、わが齡久しきを悅ぶべし。白髮の新にして又新なるを歎くべからず。

一同じく人と生れて、富貴なる人あり、貧賤なる人あり、其高下の品誠に多し。富貴なる人は、おごらずして人をめぐむを樂とすべし。乞丐も生れつきたる分ありて、定まりたる事をさとり、分をやすんじて樂むべし。たとへば松は高き事數十尺にいた

枕詞
ぬば玉の—夜に掛る枕詞
左氏が書—春秋左氏傳をいふ
詅癡符—顔氏家訓に、吾れ世人を見るに才思無くして自ら清華と謂ひ流布するに至る醜拙亦以て衆し江南號して

一四時にしたがひ、月花をもてあそび、をり〳〵の景物をめで、其折節にかなひたる唐の大和の古き歌を誦して、心に樂まんこそ、みづから作る勞なく、たはやすくして、いと面白きわざなるべけれ。もろこしの古、其才あまりありし人も、賓主に對し、其折にかなへる古き詩を彼是引きて、其情をのべしためし、左氏が書などに多くのせたり。是我が作らんより、ふるめかしく理まさりて、人を感ぜしむること深かりしにや。古の事法とすべし。我が輩つたなき詞を以て、なまじひにふようなること言ひ出すは、自らはいみじと思へど、詩歌を知れる人の見る目も恥かしく、顔之推がいへる詅癡符のそしり免れがたかるべし。我が如きともがら、才つたなくて詞を巧にせんとする苦、いといたづがはしく覺ゆ。もし天才ある人、たはやすく作り出さんは興あるべし。されどそも五字の句を吟じ成して、一生の心を用ひやぶるは益なし。

一およその事、友を得ざれば爲しうべからず。唯讀書の一事は、友なくてひとり樂むべし。一室の内に居て、天下四海の内を見、天地萬物の理を知る。數千年の後にありて、數千年の前を見る。今の世にありて、古の人に對す。我が身おろかにして、聖賢にまじはる。是皆讀書の樂なり。凡よろづのことわざの内、讀書の益にしく事な

其德を玉にすー諺に所謂艱難汝を玉にすの意也

蘇子美ー蘇舜欽の字、宋代の詩人也

古には云々ー雪に映しは孫康、螢を聚めは車胤、壁なうがちは匡衡の故事也

あかれさすー日に掛る

るは、其人によりて、其徳を玉にせんとし給へる理も有りぬべし。才學において幸あらば、貧賤にして時にあはざる事を憂ふべからず。わが輩かゝる愚なる心もて、もし富貴にして、さかんに奢怠にならひなば、文學をきらひ、道に志なくして、樂なかるべし。しかれば自ら貧を甘じて、富貴をうらやむべからず。

一書を讀み字をうつすに、あきらけき窻、いさぎよき机、筆硯紙墨の精良なるを得て用ふるも、亦人生の一の幸なり。此樂を得る者すくなしと、蘇子美がいへるも、書生はまどしき人多ければ、かくいへるなるべし。又貧しきは燈なし。古には雪に映し、螢をあつめ、壁をうがちて、書を讀みし人だにあれば、今此六の助を得て、又燈火をやゝ親む人は、幸ありと思ひ、つとめて書をよむべし。

一或人のいへるは、聖賢の書を以て一の師とし、筆硯紙墨と案とを以て五の友とし、あけくれ是にまじはるは、益ありて樂多し。又燈火の暗を照して晷につぐも、大なる寶也。

一ふみ見るには、時を惜むべし。されどあかねさすひるは、事しげくて功すくなし。ぬば玉のよるは、しづけく、古をかんがふる樂多し。此時をうしなひ、徒に寢てあかすは、惜むべし。

人不通古今云々―符讀書城南と題する勸學詩中の句也、古文眞寶前集の初にも出づ

千葉の花―花瓣の豐かに麗しき花をいふ

まどし―貧しに同じ

し。人不通古今、馬牛而襟裾すと、韓退之もいへり。ふるき書を見ず、古の道を知らざる人は、萬の理にくらく、もろ〳〵の事を知らず、夢見てさめざるが如く、まよひて一生を過す。是大なる不幸なるかな。およそ古今の書に通じて、理をきはめ、事を知れらば、我が心の內、萬物の理、見る事聞く事にうたがひ無くして、大なる樂なるべし。古のふみを知らざれば、からやまと、古今、天地の內にみち〳〵たる理も事も、みな通ぜずしてくらしと云ふべし。

一わがともがら、經史にちぎりを結べるえにし深ければにや、ふみに對すれば、いつとなく又なく樂しくおもほゆるは、天よりさいはひを厚くくだし給へるなり。およそ天の物を生じ給ふこと、二ながら全からず、かれこれ足ひぬるは稀なり。故にこなたを得れば、必かなたを失ふ。たとへば花うるはしければ實よからず、實よければ花うるはしからざるが如し。又千葉の花には實なし。此故に、才學ある人は多くはまどし。才學ありて又富貴ならば、二ながら足へるさいはひなり。是得がたき理なれば、かかる人は世にありがたかるべし。才學ある人の、富み貴くして、さいはひ並びぬるは、天のをしみ給ふ所にして、いと難き事になん。又天のかゝる人を貧賤にして苦め給へ

樂訓卷之下

○讀書

一凡讀書の樂は、色を好まずして悅ふかく、山林に入らずして心閑に、富貴ならずして心ゆたけし。此故に、人間の樂、是にかふるものなし。天地陰陽を以て道の法とし、古今天下を以て、心を遊ばしむる境界として、其おもむき至て大にひろき事、きはまりなし。一日書をよむの樂至れるかな。聖賢のふみを見て、其こゝろを得て樂むは、樂しき事の至なり。其次に、古の事をしるせる史には、我が國は神武天皇より今年まで二千三百七十年、もろこしは黃帝より今まで四千四百年の間の事をのせたり。此故に、からやまとの史を見れば、遠き古のあと、目のあたりに明かに見えて、我が身あたかも其世にあへる心地して、數千年のよはひをたもてるが如し。此樂もまた大なるかな。今目の前なる事のみを見て、古のふみを知らざるは、きはめて頑

四時の行はれ云々—前註、二八七頁參照

ついで—順序の意

年の發生の惠をふくみたんめれば、始をなせりといふべし。人の夜なくねいり氣しづまれるは、終日のいたはりを休め、明日のうごきなせるしわざの力の本となれり。もし夜よくいねざれば、今日のいたはりを休めがたく、明日のはたらき力なきが如し。冬にあたりて、人も亦天の時にしたがひて、しづかに精神を養ふべし。

一すべて一年の内、月日のめぐり、四時の行はれ、百物のなれるついで、年ごとにたがはず。萬古より末の世までかはらざること、天道の誠いたつて貴ぶべし。しづかにして是を感ずる人は、其樂深かるべし。もしよく此理を知れらん人は、卽道を知れる人なるべし。

一時節は、目に見えて早く立つとしも無けれど、日數かさなりゆけば、一年の過ぐるは程なし。人の一生を經るも、亦年やうやくかさなれば、老死にいたること遠からず。況や人の命は、いたりて危くして、朝夕を知らず、少壯といへど、老大に先だつ人多ければ、賴みなし。久しからざるうき世に、時のうつり行く事早ければ、あたら時日をむなしく過すべからず。

達士―達人と同じく、道理に通達せる士をいふ

春生じ云々―前註、一五五頁參照

し。愁人は是によりて悲み、達士は是によりて樂む。景氣は同じけれど、唯見る人から、えんにも凄くもおもほゆるなるべし。

一年の内をすべて思ふに、春は陽氣はじめてのぼり、萬物生ず。空の景色のどかに、人の心もうらゝかにして賑はし。夏は陽氣こと／＼く上り、宇内にあまねく滿ち、天地まじはりて、草木しげく、萬物長す。秋は陽氣はじめて下り、陰氣のぼり、萬物藏まりて、景色いさぎよく、人の心にしみて、感ずる事ふかし。春に對して、はた裏表となれり。冬は陽氣こと／＼く下り、陰氣專らにして、萬物かくる。夏に對して、又裏表となれり。およそ一年のめぐり、冬にいたりて天地まじはらず、とぢふさがりて品物かくれぬれば、春生じ、夏長じ、秋をさむる如くなるしわざはなくて、月日多くうつろひ行けど、何のうるはしき景氣も見えず、四時の内にて、爲す事なくて、いたづらなる時ぞと見ゆれど、春夏秋のうるはしき景色と、なし出せるしわざと、此時にいたりとゞまり、一年の大なる功をなしをはりて、そこばくの元氣を深く貯へかくして、來れる春の本となる理をふくめるは、此時にぞあんなる。されば冬の氣の一方にとぢかくれて、爲す事なきは、一年の功成り、事遂げて、終をなせるのみならず、又來る

いらゝぎ居る—四角張つて居るといふ程の意

うれはし—憂ふべしの意

せきあへず—堰き切れずにて、多人數の行き交ふ樣をいへる也

まいて—ましての音便

に見ゆ。或は埋火にむかひ、文をまきひろぐるを以てわざとする人は、樂深くぞありぬべき。凡の事、年に先立ちて早くはかるべし。若き時つとめて文をよみ習はゞ、かかる時もわびしかるまじ。

一冬の末つ方にも至りぬれば、今年の日かず殘りすくなく、曆の軸あらはるゝばかりにて、春のとなり既に近し。年の終るはをしむべく、齡のかさなるはうれはしけれど、新しき年を迎ふるは、珍かにて喜ぶべし。此ころは、世の中の人何くれといそがはしく、せきあへず、おほくのゝじりて、走りまどふを、ひとり靜かに見る人は、樂むべし。一年は、はかなき夢の心地して過ぎぬれば、あとをかへり見て、せちに名殘をしむべし。老の身は、月日もいとゞたちやすく、何ほどもなき一年なるを、數へ添るもうらめし。されど人の世をふるは、思はずも變多き事なるを、一年の内、わざはひなくて過ぎぬる人は、また樂しからずや。春秋の暮行くだに、名殘をしむべし。まいて一年の終の今日の日の夕暮になりぬるをや。もろこしの人は、守歲といひて、今宵はよもすがら寢ねずとかや。是ふるきを送り新しきを迎ふる心なるべし。送迎につきて、憂喜一かたならず。凡四の時のおしうつる折々につきて、感をおこす人は情ふか

神無月、小春—共に十月の異名也

山もあらはに—新古今集に、冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峯にさびしき

心にくし—奥ゆかしく上品なる意

しむべし。春の盡くるにくらぶれば、草も木も、やう〳〵枯れはてゝ、行末の景色まで思ひやられて寂し。

一冬も來ぬれば、今朝よりなるゝ埋火のもと、やう〳〵立はなれがたし。露と霜とおきかはし、紅葉いろ濃く、木々のこずゑ、淺茅が原も、冬枯の景色となり、おもがはりするも、秋にことなる眺なり。神無月の液雨もすぎて、日あたゝかなれば、すこし春ある心地す。むべ此月を小春とぞいへる。されど一の日二の日、やうやくかさなれば、風氣いよ〳〵はげしく、木の葉ふりて、山もあらはに見え、殘れる松も峯にさびし。春夏秋のえんなる景色、よそほしかりつる有樣、皆此時にいたりて盡きぬれば、ことの外にもかはれる空かなと、目おどろかれぬる。日頃雪いみじう降りて、いかめしう積りたる曉は、山も里も、ひたすら銀世界となりて、世かはり、景色ことなるありさまなり。冬ごもりせし梢の枯れたるも、ふたゝび花さけるが如し。ことさら冬の夜のすめる月に、雪の光りあひたる空こそ、見る人なく、ひとり身にしみて、あはれも深けれ。空霽れて後まで、友待つばかり所々に消え殘りたるはだれ雪も、いと心にくし。かゝる時、するわざなく、唯袖くゝみして、いらゝぎ居る人は、いとわびしけ

いのねられぬまゝに—就眠すること能はざるに依りて

此の爭—春秋の爭也、萬葉集なる額田女王の歌を始めとして其類代代に多かり

風のおと、蟲のね、いづれとなく人の心にしみて、春にもまさり、あはれ深し。秋は夕と、誰かいはざるべきや。夜長ければ、曉のかね人をおどろかしやすく、ねざめがちなり。ことさら老のねぶりは早くさめて、常に夜を殘せば、いのねられぬまゝに、懷古の心殘夜に生じて、來しかた行くすゑの事、思ひつゞけらる。老いては常に昔の事のみぞ忍ばしき。

一もろこしの人は、一とせの內、ことに春をめでて、ふみにも春を賞せし詞多し。我が國の人は、昔より秋に心をそめける。此爭、いにしへ我が國の人、ふみにも多くあらはせり。春秋のことわり、陰陽ことなれど、其景色は何れもすぐれてめでたければ、此あらそひは、いみじき賢哲といふとも、わかちがたかるべし。況や人の心同じからざること、其面の如くなれば、其本性の好みによつて、春秋のおとりまさりありぬべし。我輩の心は、時につけつゝ移り行けば、いづれをまされりと定めがたし。花紅葉の散れるも、いづれまさりて惜しと云ひがたし。

一長月の末になりぬれば、秋の花みな衰へ、蟲の音も鳴きかれて、紅葉やうやう色づきぬれば、秋の暮れ行く物思も亦ふかし。秋は唯今日ばかりぞと眺むるも、名殘いとを

書

春は唯―拾遺集卷九雜下讀人不知

陳眉公―陳繼儒をいふ、前註、一一八頁參照

心づきなかりし―氣がつかざりしの意に解すべし

一凡一とせの內、梅の咲きそめしより、菊にうつるまで、いくいろの花の盛にあひきつつ、なれて見しや、數知らず。此をりくの樂も、亦思出少なからず。

一秋は陰氣のなれる初なれば、空きよう澄みわたり、高くほがらかにして、月日の光明けく、四方にかへり見るに、茫々として廣く、風いとはだ涼しく吹き、其けしき人の心にしみて、感ぜしむること深し。

　春は唯花のひとへにさくばかり、物のあはれは秋ぞまされる。

とよみしも、時にしたがひては、理にこそ聞ゆめれ。

一陳眉公が、世の人は皆秋の月をめでて、秋の日の妙なるを知らずといへり。此事世の人も心づきなかりしに、まづ我が心の同じく然る事を得て、げにもとぞ聞ゆめる。心をつけて、秋の日の光草木にかゞやき、いさぎよく妙なる事を知るべし。未くだる程より、其景色いやましなり。殊に夕陽の西にかたぶき、山に入り海にしづまんとするこそ、世に又類なく、えもいはぬ眺なれ。日と月は、大空にふたつ懸並べたる光なれば、萬物にすぐれたるはむべなるかな。

一秋は又夕暮のけしきこそ、たゞならず見ゆれ。薄霧のまがきに立ちのぼるよそほひ、

らば、いとましてめづらしなど有るべからむ

けやけき—けざやか、艶麗などの意

春は只一つ草—古今集巻五秋下に、緑なる一つ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

離騷—楚の屈原の辭賦を輯めたる

女郎花、尾花、葛花、なでしこ、ふぢばかま、あさがほ、此七草の外、桔梗、りんだうなど、くさ〴〵の花猶も多かり。秋はまづ陰氣下へくだれる故ならずや。なでしこ、春は唯ひとつ草とのみ見ゆれど、夏より咲きそめて、秋の色をあらはせるは、唐のやまとの、いろ〳〵の花ぞ咲くめる。長月の比は、秋の花も過ぎ、紅葉もまだしき折なるに、菊は百花におくれて、ひとり晩節をたもち、霜にほこりて、操の色をあらはし、なべての花に、時を異にするのみならず、色形匂ともに、殊にすぐれてあてやかなれば、此時もし花多くとも、わきてあはれむべきに、秋の末にひとり盛なれば、折にあひて、いとめでたし。元稹が菊を詠じて、不是花中偏愛菊、此花開盡更無花といへりしは、菊をめでし心猶うすし。此花萬葉集にのらず。古今集には詠じたれば、奈良の御時まで、いまだ唐より來らざりしこと、今さら古を思ひやるにも、猶ことたらず、恨多し。屈子が離騷に、梅を忘れし類なるべし。老杜が海棠を詠ぜざりしは、禮にかなへれば恨なし。菊は品たかくて、世はなれたる花なればにや、これを好む人すくなし。牡丹は富貴なる物なれば、近俗のます〳〵耽ること、むべなり。歐陽子が、人の心は、其好むところを以て知るべしといへる、げにさる事ぞかし。

どあるより書けるにや、そは安らかに世を治むる意にて八つの隅にはあらず、或は八荒などの意にて八隅と云へるにや
今人は云々ー李白把酒問月と題する詩の一句也
いとましめづらしー猶一層珍らしの意か、然

し。あたら夜の月なれば、同じくは、心知れらん人と共に見んこそ本意なれど、同じ心に見ゆる人稀なれば、西行が、ひとりぞ月は見るべかりけるとよめるも、むべなり。もろこしの人も、秋月は俗士と見るべからずといへり。李白は、今人は古時の月を見ずといへれど、むかし世々の人の眺め來しも、此月なれば、古人のかたみとなれるも、昔おぼえて忍ばし。古今の人の世をさり行くは、流水の行きてかへらざるが如し。唯月の光のみ、古今かはる事なきこそ、こよなうめでたく貴ぶべけれ。月の梧桐の上にいたり、風の楊柳の邊に來るは、心を洗ひ興をもよほして、えもいはぬ快き折ふしなり。四時ともに思出おほき此世なれど、取わき秋の月は、見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍る。秋も半すぎ行けば、大空に、はつ鴈がねのつらなりて鳴き渡るも、亦めづらし。花は春とこそいへれど、秋もまた花おほかめる。殊さら野べにたてる秋草の、名も知らぬ花ども、おほく草むらにひもとき、錦をさらすが如く見ゆれば、秋の野いとましめづらし。秋の花の、久しきに堪へて散りがてなるは、春の花の見る程もなくて、早く散りぬるにまされり。およそ花のいとけやけきは、春は梅、櫻、桃、李、海棠など、木々の花多きは、陽氣はまづ空にのぼれる故にや。秋は萩、

氣をいふ

酷吏の去りて云々―杜甫の詩に、大暑酷吏去り清風故人來る

ついでひとつ―節序只一回の意なるべし

年のはに―年毎にの意

八すみをしろしめし―萬葉集に八隅知（やすみし）な

古き書どもまきのぶるに、時を得て、萬の樂にまさり、こよなう面白し。荻のうは風、萩の下つゆ、さまぐ\の蟲の音、皆秋のあはれを催して、身にしむ事かぎりなし。門田の稲葉朝露にうるほひ、夕の風おとづれてそよぐけしき、殊更早稲晩禾の先立ちおくれて、穂に出でたるありさま、皆見るに堪へたる眺なり。秋の最中になりぬれば、一年を經て待ち得たる月明けきは、凡あめつちの間に竝なきついでひとつの見ものなれば、よろづのうるはしき景物は、皆其下なるべし。このゆふべ此景にあへるこそ、うき世の中の面白さもあはれさも、殘らぬ折なれ。年のはに、一とせの内、月ごとに上の弓張より、居まちの比まで、空はれぬれば、夜ごとに心を樂ましめ、目を悦ばしむる事、さらに數なし。ことさら三秋の間、折々のいみじき光を、年ごとに心にまかせて見る事、まことに福おほき此世なり。およそ天が下の君は、八すみをしろしめして、天地は皆其領し給へる國の内なれど、賤しきわが儕まで、天つみ空に唯ひとつかゝれる月を、己がものとして、恣にあふぎ見るも、いともかしこく、身にし餘りて、いみじき幸なり。宿わかず、賤しきちまたをも同じく照らせる、いとめでたし。年々に、月と花とをあくまで見るは、まことに思出おほき此世なりと云ふべ

このねぬる朝けの風―このねぬるは朝けの枕詞、彼の寢起の朝風の意
人皆云々―舊唐書柳公權傳に依るに此句は文宗帝の作也公權之れに續けて曰く、薫風南より來り殿閣微涼生ず
金氣―秋の

夏は夜といひつれど、ゆふべは蚊と云ふ蟲人をさして、年老いては、殊更いみじうたへがたければ、唯このねぬる朝けの風の涼しきこそ、清くして心にかなひ侍りつれ。

一志士は惜日短と、傅玄いへり。然れば、人皆苦炎熱、我愛夏日長と柳公權がいへるも、むべなるかな。暮れがたき夏の日は、もの學び、わざを勤むる人のために、まことに愛すべし。されども、炎暑のさかんなる時は、萬國紅爐の中にある如く、すゞろに汗あゆるばかりにて、身の力よわりて、いと堪へがたければ、夏の過ぎゆくは、春秋の盡くる日、冬の終など、名殘をしむには變りて、みな月祓する比になれば、心よし。唯年の半すでに過行くこそ、いと惜むべけれ。

一秋來ぬれば、はつ風涼しくうち吹きて、草木のそよぎ、秋の聲の、いづこにも打なびきて聞ゆるこそ、はつ春の風にかはり、心をいたましめ、身にしみて、金氣の至れるしるべとおぼゆれ。きりぐ〵すの、きざはしのもとにすだくも、折知り顏に聞えさす。阮籍が懐を詠ぜし詩に、開秋兆涼氣、蟋蟀鳴床帷と云ひしも、此比の景氣をいへるなり。大暑やうやく退き、新涼すでに來りぬれば、あたかも酷吏の去りて、故人のここに來れる心地ぞすなる。この比は、人の形氣力を得て、燈も親しくなりぬれば、

昔おぼゆる花たち花―古今集に、さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

すだく―叢るをいふ

みな月―六月の異名

わらふだ―圓座、布ならぬ裀をいふ

むすび―掬ふこと

ひし前栽の草木ども、雨をおびて、各其梢をあらはし、所得顔に、心にまかせて生茂れるも、うれしと見ゆ。昔おぼゆる花たち花のかをれる夜は、追風もいとなつかし。早苗とる比、田家は雨を待ち得て、いそがはしく賑はし。此ころ遣水のほとりに飛ぶ螢の、音もせですだくを見れば、鳴く蟲よりいとあはれむべし。夏山のけしき、青みわたりたる高き峯、大空につらなりて、雲の外にそびえたるを、あくまで見るこそ、殊にすぐれて、心を快くする眺なれ。白樂天が、眼を放にして青山を見るといへるが如し。

一みな月の比になりぬれば、端居の風したしく、わらふだ敷きて居るも心よし。池の心ふかく、蓮葉の濁にしまずして、花ならで、夕風ににほひわたるだにも、異草にすぐれたり。ことに花の笑の唇ひらけたるは、所せきまで薫りみちて、世に似たるものなく清らなり。涼を逐て木陰にやすらひ、木々の下風のなつかしきに、清き泉をむすび、夏をわするゝ心地するも、いさぎよし。光明けき夜半の月を、清き水に宿して見るは更なり、遣水の音など聞くも、いみじう心ゆくばかりなり。日ごろへて、暑さたへがたきに、夕立のしぐれわたりて、名残すゞしきも、いと心よし。清少納言は、

嗚呼喧しとの意

生ける類より云々—草木は自然の儘にして動物より一層私なければ怪みの心を挿むべき所も無く誠に愛翫すべしと也

なるかみおどろ〳〵し—雷鳴殷々たりとの意

多ければ、出て遊ぶによし。朝まだき起きて、園をうかゞふにも、風あたゝかにして、なやみなければ、日々にわたりて、見所多く、草も木も皆緑の色をあらはして、各其趣をなせるは、天地の恵をうけしまに〳〵、生ける類より更に私なくして、いぶかしみ無くなづさはれぬ。韓渥が詩に、四時最好は是三月といへる、まことに然り。されど年たかくなりぬれば、暑さ寒さをわびて、一とせの内いと心にかなへる時は、卯月にしくはなし。さればにや、明の李夢陽が、四時の景初夏にしくは無しといへるも、先輩にかはりていみじく、むべなるかな。卯月はかく空はれやかなれど、やがて五月になりぬれば、大空の景色、さいつ頃に引きかへて、さみだれ久しくつゞき、折々は、なるかみおどろ〳〵しくて、降らぬ時だに曇らはしく、物のあやめも知らず、園をうかゞふべき隙まれにして、常にたれこめて日数を経るもわびし。

一夏もやう〳〵深くなりぬれば、木として繁らざるはなく、草として榮えざるはなく、日々に物を引延ぶるやうに見えて、ひたすらに緑の色深き夏木立こそ、花にもをさ〳〵劣るまじけれ。春の花は、所々に咲きて稀なり。夏は山も里も、あるとしある草木ごとに打はへて、皆緑の色なれば、春に異なる眺なり。八千草に植集めてなづさ

百五日也
よばぬにきたる—呼ばぬに來る也一本よはにぬぎたると讀む、夜半に脱ぎたると解せるなるべし
夏衣のうらめづらし—夏の景色の何と無く珍らしといふを衣の裏に掛けていへる也
あなかま—

空に殘りて、面影去らぬも、情ふかし。藤は又春にひとり立ちおくれ、夏に咲きかゝりて、傍にならぶ花なければにや、ひとへに興ある樣に見えて、春にわかれし物思も、すこし忘らるゝ心地ぞし侍る。

一惜めども止まらぬ春、すでに去りぬれば、よばぬにきたる夏衣のうら珍しく、今めかしう改まれる比ほひ、大かたの空のけしき、心地よげなるに、青葉の木ずゑ若やかに、物ごとに春に立ちかはりて、又世異なる有樣なるも、いとなんめでたき。綠陰晝寂を生ずれどもわびしからず。閑談にふける人は、繁花にもまされりとす。折まち得たる杜鵑の初音、まづなつかしくて、鶯のなく音、すでに老いにたるに、代れる心地ぞすなる。もろこし人は、杜鵑の聲きく事を惡めども、我が日の本にては、昔よりこれをあはれみて、歌にも多くよめり。夜もすがら空もとゞろに鳴きわたれども、聞く人みなあなかまとは思はず。多からぬ所は、今一聲だに聞かまほし。又鳴き行く方の人も待ちなんと思へば、過行くも、更にうらむべからず。卯の花の、かき根の雪にまがへるも、ひとり此の月の名をおひて、美を專にすと云ふべし。およそ卯月のけしきは、清く和かにして、空晴れ、雨久しくふらず、餘寒盡き、日彌永くして、いとま

月の異名也

めかれせず―目を離す事無くの意

いやをちにいどましく―いどましは互に競ひ爭ふ意、いやをちには立ち復り咲ききほふ意なるべし、語例萬葉集に見ゆ

酴醾―寒食に臣下に賜ふ酒、寒食は冬至の後

はり、さかり久し。殊更列をなして植ゑたるつら〳〵つばき、つら〳〵に見れどもあかず。階のもとの薔薇も、夏を待顔なり。すべて春は、草木の花先立ちおくれて、いやをちにいどましく、遅く迅く咲きつゞき、酴醾にいたりて、花の事終りぬるは、名殘をしと見ゆ。春の花は、いづれとなく開け出づる色、ことに目おどろかれぬるに、心みじかくて早く散りぬるはうらめし。九十の春光はいとながけれど、何くれと紛はしく、風雨も亦しげければ、爲す事なく、はかなく過ぎて、とゞめあへぬ春のかぎりの、けふの日の夕ぐれにさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、春の名殘いとをしむべし。蘇子瞻が、青雲還一夢といへる、むべなるかな。吾がともがら、うき世のちりも、吾が心のきたなきも、花見るほどは忘られしに、今より後は如何せん。かゝる折にふれては、殊更時の早く過ぎて、失ひやすき事、思ひ知られぬ。老いぬれば、今幾年か花もあひ見んと思へば、春の惜しさはいやまさりぬ。いとせめて樽酒餘春を樂みて、この憂を忘るべし。すべて春の景色は、一とせの内すぐれていと艶なり。其うるはしきありさま、言ひつくすべくもあらねば、かゝる拙き詞には、この片端だにかたはらいたし。雨風に花はあとなくなりはてゝ、空しき枝をのみ形身と見ぬれど、猶春の色は

思ふどちかい連れ—心合へる同士相携への意

春宵一刻云云—蘇軾が春夜と題する七絕中の句也

いやよひ—彌生にて三

わざなれ。世の中の、いみじく嬉しき事の、あるが中なる其一なるべし。我が心の樂を知らざる人は、無賴の少年の、閑をぬすみて、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏にむなしきも、此をりなり。杜が詩に、鶯の歌あたたかにして正にしげしと云ひ、陳希夷が野花啼鳥一般の春と詠ぜしも、皆此時なり。花のゆふばえを、すこし醉にのりて見るも、ことに色まされる心地ぞすなる。花に坐し月に醉ひて、二ながらかねたる樂、春宵一刻値千金、花有清香月有陰といふ詩を思ひ出でられぬ。又惜花春起早、愛月夜眠遲といへり。古人はかくこそ月花をめでしに、今の人の、あたら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すは、いと惜むべし。又夜の間の風のうしろめたきをも知らで、朝起くることおそきは、花を惜まざるなり。此比夕ぐれは、遠き山邊の燒けぬるも、目だつべき見ものなり。されば春入燒痕靑と云ひ、又野火燒不盡、春風吹後生といへるも、やけ野の草を詠ぜしなり。古詩に、池塘春草生といへりしは、此比の眼前のけしきを、唯ありのまゝに云へるなるべし。いやよひも半なる比、八重山吹の風にひるがへるは、井手のわたりも見る心地して、賑はしければ、めかれせず眺めがちなり。春の花のおほかる中に、唯山茶のみ異花にか

おいみいわけみ—老み幼けみにて老いたるも若きもの意

荘周は野馬といふ—荘子逍遥遊に野馬は塵埃也生物の息を以て相吹く也

けおされぬ—壓倒せられて更に値打なくなれりと也

うしろめたし—氣に掛るの意

るにつけても、春の氣は下よりのぼるけぢめ、いと明けし。花もやう〲咲きつゞきて、梅花すでにうつろひて後新なるは、我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるはたなびく雲の面影のたつ心地す。李白きは、きえがての雪の、梢に殘れるかと見えていとうるはし。櫻のほころび出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動して、えならぬ眺なれ。是我が日の本にて、四時の花の多き中にも、第一の見ものなれば、梅ちりて後、この比の異花は、皆けおされぬ。されど日頃またせ〲て、やう〲咲けるが、あくまで見る程もなく、疾く散るは、又うらめし。

よしさらば散るまでも見じ山櫻、花のさかりを面かげにして。

と、古の人のよみけんも、後の思出にせんとにや、情ふかし。此折から、春雨のしき〲ふれば、我がやどの園の櫻は、如何に有らんと、うしろめたし。柳綠に花紅にして、春の色をゑがき出せるは、いと麗しき眺なり。春やう〲深くなれば、風和かに、日あたゝかに、百草芳をあらそひ、群花艶をきそふ折なれば、いづれの處か春の無からんや。かゝる景色にふれては、人の心も浮立ちて、思ふどちかい連ね、春を尋ねてあくがれありき、ひねもす花を眺くらすこそ、目を恣にし、心を快くする

馴れ親しみ愛翫せらるの意

春は曙―清少納言枕草紙開卷第一の言也

やぶしわかれば―日光は叢をも分け隔てなく照すを以ての意、古今集に、日の光やぶしわかればいそのかみふりにし里に花も咲きけり

好處といへりしは、早春のけしき、一年の内にて、ことに珍かにすぐれたる故なるべし。きさらぎの程より、よろづ皆冬の心盡きて、空の色うらゝかに、景色だちて、四方山も霞こめたるよそほひ、ことに曙のけしき、譬ふべき物なく、あはれむべし。古の人、春は曙と云ひけんも、むべなるかな。日の光やぶしわかねば、かずならぬ垣ねの内も、冬にかはりて輝きいで、草木おひて、皆顔色を生じ、花まち顔になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人のわざも舊年より暇ありて、いそがはしからず。日ながくして少年の如く、心閑にゆたけし。海の面日和よく、うら山もうらゝかに霞渡りたる景色、いと遙けし。夕つけて日は既に入りぬれど、殘れる光猶久しきは、日の長きしるしなるべし。此比は、陽氣ののぼるけにや、童ども紙鳶といふもの造り、長き絲つけ、風にまかせて放てば、高くあがり、雲の上まで遙けくたなびくを戯とすれば、おいみいわけみ、空をあふぎ見るもをかし。野には又陽烟と云ふもの、霞のごとく、地より立ちのほれり。又かげろふともいふ。莊周は之を野馬と云ふ。老杜が詩に、落花遊絲白日靜なりといへるも、是ならし。是みな常には無き物なるが、春めきていとめづらし。又かきねの草、早く萌出づるを見

ろ天何をか言はんや
ことたつ―ことだつと濁りて讀み常と異なれろ事を爲すの義に解す可からん
つとめて―早朝の意
はだれ―斑也、所々解けてまだらとなれるをいふ
こほしく―戀しくの古語
なづさはれぬ―自然に

一いでや天地の内にみちたる四時のけしきの、きはまりなき樂をいはん。春はまづ一夜のほどにあらたまの年立ちかへる朝の空の光、心づからにや、舊年にかはりて長閑けし。睦月はことたつとて、貧しき家にも、春盤などいふものをまうく。又かはらけとりいで、おほみきすゝめて、まづつとめて父母にことぶきし、次にみづから祝し、賓客にもてなすさまなど、つねにかはりて、いとなんいみじう珍かなり。時は今は四の始なれば、そらのけしきやう〳〵引きかへ、こち風ゆるく吹きて、氷とけ、遠き山邊に霞のうすくたなびける、さま〴〵に物けざやかに見えて、冬の空に立ちかはれる粧、まづ春の來れるしるしあらはなり。かきねがくれに、冬より殘れる雪の、ところ〴〵はだれに見ゆるも、去年の名殘をしむべし。まちわびし梅のにほひ、百花に先だち、春の消息を得てよろこぶべし。谷をいで高きにうつる鶯の、春をむかへて物わかき聲、はつ春の初音の今日にあへる、耳とまりてこほしく、花ならで身にしむものならし。花をめで鳥をうらやむは、是まづ春のたまものなり。是をはじめとして、猶行先はるかに榮ゆる春の豐なる惠たのもし。千年を經べきみどりの松も、今一入の色をまして、つねに見なれしも、彌めづらしくなづさはれぬ。韓文公が最是一年春

四時の行はれ云々—論語陽貨篇に子曰く天何をか言はんや四時行はれて百物生

樂訓卷之中

○節序

一年の内、天地の道常にめぐり、四時に行はれて、萬古よりこのかた止まず。其間霞たつより雪の積れるまで、其けしき、をり〳〵に異なり。又朝夕のけしき日々に異なれる、變態きはまりなき眺也。天にありて象をなせるは、日月の輝き、風雨のうるほひ、霜雪の清らかなる、雲烟のたなびけるは、天の文なり。地にありて形をなせるは、山河のそばたち流れ、江海の深く廣き、鳥獸の鳴き動き、草木の生茂れるは、地の文なり。かくの如く、天地の内、四時の行はれ、百物のなれる有樣、目のまへにみち〳〵て、人の見る事を喜ばしめ、心を感ぜしむる事、大なる樂なるかな。これを樂まん人は眼力を以て境界とし、四時を以て良辰として、其樂、何ぞ唯人間三公の貴き萬戸侯の富に比べんや。よく心をとめて翫ばん人は、其樂極りなかるべし。

つゞしり歌ふ—一口づつぼつ〳〵と歌ふ也

張良—字は子房、戰國の世の人也史記留侯世家に曰く、余を以て其人を計るに魁梧奇偉と爲す其圖を見るに至り狀貌婦人好女の如し

一　武士は、勇を專らにすべし。勇を外にあらはさずして、內にふくむべし。つねの時は和樂にして、人に對するに溫厚なるべし。勇天下におほへども、これを守るに怯を以てすと、家語にいへる如くなるべし。怯とはおくびやうの事なり。又大勇は怯きが如しといへり。是外に勇をあらはさゞるなり。和順にして禮あれば、人あなどらず。人にあなどられまじきとて、言語氣象をあらゝかにすべからず。是和樂を失へるなり。眞の勇者は、かほかたちあらゝかならず、かへつて柔和なり。張良は、其形婦人の如くにして、其氣象從容とおもむろなりしは、眞の大勇なり。欲をよくこらへ、義を見て必行ひ、節義をかたく守る、是眞の勇なり。眞の勇者は、つねには和樂也。

忍は是れ衆妙の門―呂氏春秋に出で、更に此語の下に宜に當り事を處する尤是れ先務此れ事を處するの本也といへり

くすしがたく―醫療を加へ難くの意

酒は微醉―前註、一三二頁參照

に古語に、忍は是衆妙の門と云へり。忍のことわり、樂を得るにおいて、其益大なるかな。

一酒は天の美祿なり。少し飲めば、心を寬くし、憂をけし、興をやり、元氣を補ひ、血氣をめぐらし、人と歡を合せ、樂を助けて、其益多し。もし多く飲んで酩酊すれば、人の見る目も見ぐるしく、言おほく、妄に語り、すがたも常にかはりて愼なく、心あらくして狂するが如し。古人是を狂藥といへるもむべなり。其上病を生じてくすしがたく、大なるわざはひとなる。若き時より多飲をいましめざれば、習ひてくせとなる、うらめし。是を以て、古語に、酒は微醉にのみ、花は半開に見るといへり。酒を飲まば微醉を限りとして、樂を失はざるべし。ほしいまゝに飲んで、苦を求むべからず。天の美祿として、樂を生ずるめでたき物なるを以て、かへつて狂藥とし、大なる禍をなして、憂を生ずるは、むげの事なり。

一いにしへの郢曲早歌の類、聲をかしく氤氳としてつゞしりうたふも、いさゝか心ゆくばかりなるは、湮鬱を開きて、氣をやしなふ助となりぬべし。古人は、詠歌舞蹈して、其血脈をやしなへり。是心を樂ましめ、氣をやしなふ術なるべし。

山水の癖—所謂烟霞の痼疾といふ類にて、深く山水を愛するをいふ

やつ〳〵し—寠々しにて、貧しく哀れなる様をいふ

て尋ねいり、もとより山水の癖ありて、青山夢に入ることしきりなる人は、心をとめて、歸る事をわすれぬ。あるは海べた、山遠き、眼界ひろきながめは、萬戸侯の富にもまされり。又其里におひ出でたる名産の異なる品を見て、其味をこゝろむるも、いと珍しく、心なぐさむわざなり。すべて勝地にあそびて見きゝせし事、唯一時の耳目を悦ばしむるのみならず、いく年經ぬれど、其時見聞せしありさま、老の後までをりをりおもひ出でられて、あたかも其時見聞せし思ひをなして、樂むべし。是を以て、世にめでたき事を思出と云ふも、むべなるかな。

一忍は、しのぶともこらふるともよめり。俗にいはゆる堪忍する事なり。忍ぶべき事多し、大やう忿と欲との二に出でず。我が身の好める酒食聲色財利などの私慾をこらへて、恣にせざると、身のやつ〳〵しく、豊ならざるをこらへて、貧をあまんじ苦まざるは、慾を忍ぶなり。人の我に情なく無禮なるをば、凡人はかくこそ有らめと思ひこらへて、いかり恨みざるは、忿を忍ぶなり。凡忿と慾とを忍べば、心平かに氣和ぎ、身やすく、人にさはりなくして、恥なく、苦なく、後のうれひなく、わざはひなし。忍の一字より、萬の善き事出づ。忍ばざれば、萬のあしき事、是より出づ。故

からず、よく通じて等の意

よすが―手段、方便の意

一凡生けるもの、静にいとまあるはまれなり。富貴の人は、古より世ごとにおほけれど、心安くして憂苦なく、身閑にいとまありて、つねに樂む人は、世にまれなり。是を以て、清福の樂、富貴にまされること、はるかに越えたることを知るべし。おろかなる人は、清福を得ても、知らずして樂まず。又清福を知りても、身に清福なければ此樂なし。此清福を得る人、世にすくなきは、天の惜み給ふ所なれば、尤得がたしといへり。もし此清福の樂を知りて、清福を得たらん人は、世に類すくなき福なり。天の物を生ずる、二ながら全からず。花よきものは、實よからざるが如し。すでに清福を得たる人は、さらに富貴を願ふべからず。二ながら得んとするは、欲ふかくして、天命にそむけり。かゝる樂を得ても、猶外をねがひ、富貴をうらやみて、自ら足る事を知らざるは、分を知らずして、樂をわするゝなり。愚なるかな。

一旅行して他鄕にあそび、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝をあらひすゝぐ助となれり。是も亦我が徳をすゝめ、知を廣むるよすがなるべし。又いひしらぬ異境に行きて、見なれぬ山川のありさまを見て、目をあそばしめ、其里人にあひて、其所の風土をとひ、あるは奥まりたる山ふところに、岩根ふみ

ざる者には白眼を以てせる事見ゆ
滿籯―籠一杯といふ程の意
いかなるえにしありてか―何等かの因縁ありての意
たど〳〵しからず―暗

よみ、古の道を樂むは、是清福のいと大なる樂なり。又其心風雅にして、古書を讀み、詩歌を吟じ、月花をめで、山水を好み、四時のおしうつる折々の美景と、草木のかはる〴〵榮えうるはしきを見て樂み、貧しけれど飢寒のうれひなく、蔬食口になれぬれば、味ありて、肥濃なる美味をうらやまず。淡薄なるは、かへつて身を養ふに宜し。布の衣、紙のふすま、いさゝか寒をふせぐに足れり。葎おひてあれたる宿に起臥しても、風雨のうれひなかるべし。もし幸に書を多く貯へて、架にさしばさまば、貧とすべからず。是眞の寶なれば、滿籯の金にまされり。又良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂み、名區佳境にあそびて、其地のことなる形勝をもてあそぶ、是皆清福を得たるなり。いかなるえにしありてか、かゝる福をうくるは、富貴の驕樂にまさりて、幸甚し。

一清福は、いとまありて身やすく、貧賤にしてうれひ無きを云ふ。書を讀んで、古の道にたど〳〵しからず、また山水月花の樂あり、是財利の富饒なる福にまされり。或は靜室に安坐し、書を讀み道を樂み、又良友に對して、道を論じ、同じく風月を賞する、是清福のいとすぐれたる樂なり。

白樂天―名は居易、唐代の平民詩人也

白眼―にらみ附けるをいふ、晉書阮籍傳に、籍禮教に拘はらず我が好める者には青眼を以て對し然ら

一 白樂天が詩に曰、自ら延年の術あり、心閑なれば歳月長し。又曰、閑中日月長し。東坡が詩に、無事にして此靜坐すれば、一日是兩日、人若活けること七十ならば、便是百四十といへるも、心しづかなれば、月日長きことをいへり。凡閑中つねに樂多し。いとまなき人も、をり〳〵閑を求めて、心をやしなふべし。心閑ならざれば、樂は得がたし。されど閑靜に專らにして、動作をきらふは、正道にあらず。

一 心安く身閑にして、獨坐するも、また貧居の樂なり。世俗の宴遊をこのみ、さわがしき友多きにまされり。學好まざる人のとひ來ぬは、かへつて情あり。心なき人の、己がつれ〴〵といとまあるまゝに、とひ來りて長居するはわびし。されどかゝる人を白眼にして見るはなさけなし。禮を失ふべからず。

一 清福といふ事あり。樂をこのめる人、必これを知るべし。是識者の樂む所にして、俗人は知らず。此故に、我が身に淸福を得て、大なる幸あれども、是を知りて樂める人まれなり。たとへば寶の山に入りても、寶を知らざれば、手を空しくして歸るが如し。淸福は、富貴の驕樂なる福にはあらず。貧賤にして時にあはずとも、其身安く靜かにして、心にうれひなき、是なん淸福とぞ云ふめる。いとまありて、閑に書を

東坡―蘇軾の號、父弟と相竝びて三蘇と稱せらる、宋代の大文豪也

なつ〱し―なつかしに同じ、なれ親しくの意

一幼より、壯になり、老にいたり、衰へて死にいたるまで、百とせのよはひも、亦いくほどなし。人の世にある事、假にやどれる旅人のごとし。東坡の詩に、一年如二一夢一、百歳眞過客といへるもむべなり。かく短き此世なれば、無用の事をなして時日をうしなひ、或はいたづらに爲す事なくて此世暮れなんこと、をしむべし。つねに時日ををしみ、益ある事をなし、善をする事を樂みて過さんこそ、世に生けらんかひあるべけれ。

一心にあはれみふかく、善を好みて、心氣和平ならば、物に情ありて、人倫にしたしきは言ふに及ばず、草木までも、皆我とへだてなく、なつ〱しくなりぬる心地ぞすべき。

一つねの氣象は、從容として不レ迫、此四字を守るべし。從容とは、おもむろにして靜なるを云ふ。速にいそがはしき時も、心平かに氣和にして、樂を失ふべからず。事多くとも、心は靜なるべし。靜ならざれば、あやまる事多し。人の我に對して、如何になさけなく無禮なりとも、怒りて言をはげしくし、目をいらゝげ、きたなき氣色をあらはして、樂を失ふべからず。つねに其氣象、從容不迫なるべし。

事をよす―かこつける意

ちりひぢの數にもあらぬ身―塵芥の數にも入らぬ程の賤しくはかなき身といふ意

く費さずしても、すくひ易くて、其益大なり。是を以て、大富人ならざれども、仁心だにあらば、眼前に人のうゑこゞえぬるを助くる程の惠は、行ひやすかるべし。況や富貴厚祿の人は、多くの人の飢をたすくること、いとやすき事になん侍る。唯志のなきを恥ぢて、財の足らざるに事をよすべからず。

一富貴なれば、おごり怠りやすくして、此樂を得がたし。貧賤の人は、おこたり少なくして、さとし易し。富貴の人は、世のはかなきわざ多きに迷ひて、書を讀んで道を樂むことを知らず。然れば富貴なるは、かへつて不幸と云ふべし。此大なる樂を得がたければなり。古語に、貧しきは富めるにまされりと云ひ、又讀書は貧者の樂といへるもむべなり。我がともがら愚かにして又いやしければ、ちりひぢの數にもあらぬ身なれど、書をよみ道をたふとぶ樂は、いかなる富貴にもかへがたし。

一人の命は限りあり、ひいて長くしがたし。限りある命の内の光陰ををしみ、樂みて月日を送るべし。しばしが間も、益なき事をなし、ひが事を行ひ、樂まずして、空しく過すべからず。況やうれひ苦み、怒りかなしみて、樂を失ふは、愚なり。なす事なく樂まずして、月日を空しく過さば、千年を經ともかひ無かるべし。

天をうらみ云々ー論語憲問篇に、天を怨みず人を尤めず又荀子の語に、自ら知る者は人を怨みず命を知る者は天を怨みず

かくて富貴ならんは、貧賤なる人の足れる事を知れるには、はるかに劣れり。富貴貧賤は、賢愚によらず、唯生れつきたる分あり。古人の詩に、耕牛宿食なし、藏鼠餘糧ありといへるが如し。賢者も貧しく、不肖者も富める人多し。是生れつきたる分なり。分を安じて、分外をうらやみ願ふべからず。外をねがふ人は、樂なくしてうれひ多し。禍も亦これよりおこる。愚なりと云ふべし。世には福われほどもなき人多し。我より下なる人を見て、足る事を知り、分を安じ、外をねがはざれば、うれひなく、樂多くして、わざはひなし。又極めて貧しき人も、人各生れつきたる分ある事を知りて、分を安じて、天をうらみ人をとがむべからず。

一世の中に、同じく人とむまれて、飢ゑこゞゆる人亦多し。其不幸あはれむべし。我が身餘財あらば、かゝる貧人に施しすくひて、自ら樂み、人を樂ましむべし。人間世の樂は、みづから善を樂み、人をすくひて善をするに越えたる樂はなし。おごりて益なき事に財を多くつひやすは、浮氣のなすわざ、甚をしむべし。よく思ひて、樂にはあらざることを知るべし。富める人のおごりて、一日一事につひやせる財を川ひなば、千萬人の飢を助くるにも猶餘あるべし。然れば百人のうゑをすくふは、財おほ

とし、とき—迅し迅きの意を年、時に兼ねて云へる也

うける事—根據なきこと、浮説

としぐ\に云々—唐の劉希夷の代悲白頭翁と題する詩の句に、年々歳々花相似たり歳々年年人同じからず

過ぎ行くは、止めあへず。むべもとしと名づけ、又ときと言へるならん。されば光陰箭の如く、時節流るゝが如しといへるも、うける事にあらず。老にむかへば、猶更に年月の早く過ぐること、あたかも飛ぶが如し。あとをかへり見れば、五十のよはひを過來しも、さのみ久しからず。たとひ五十の後、又五十のよはひを經て、百年にいたるとも、猶行先の月日いよ〱早くして、ほどなく盡きなんこと、思ひやられ侍る。いくほどなき殘れる齡を、ののしみてこそ過さまほしけれ。うれひ苦みて、むなしく過ぎなんは、いと愚なりや。としぐ\に花は相似たれど、としぐ\に人は同じからず。老かさなれば、一とせの内にも、やうやく衰へ行きて、今の昔にしかず、後の今にしかざる事を知りて、かねてより悔なからん事をおもひ、時日ををしみ、一日もいたづらに過すべからず。今日暮れて明日もありとて賴むべからず。今日の日の内を、日々にをしむべし。

一我が身の足る事を知りて、分をやすんずる人まれなり。是分外をねがふによりて、樂を失へり。知足の理をよく思ひて、つねに忘るべからず。足る事を知れば、貧賤にしても樂む。足る事を知らざれば、富貴をきはむれども、猶あきたらずして、樂まず。

五福—書經洪範に、一に曰く壽、二に曰く富、三に曰く康寧、四に曰く好む攸は德、五に曰く考いて（老いて）命を終ふ

梓弓—春の枕辭

なる大富貴なる幸あつき人も、身に病なく、いのち長く、親戚にうれひなく、五福そなはり、思ふ事心にかなへる人はまれなり。かゝる世のためしを知らで、世變のために心を苦むるは、愚なるかな。

一もし此理を知れらば、身の上につきて樂み、外を願ふべからず。貧賤にしても、患難にあひても、時となく所として、樂あらずといふ事なかるべし。坐には坐の樂あり、立には立の樂あり、行にも、臥にも、飲食にも、見るにも、きくにも、ものいふにも、樂あらずといふ事なし。樂はもとより心に生れつきて、身にそへるものなればなり。されど此樂を知りて樂む人すくなし。理くらければ樂を知らず、欲ふかければ樂をうしなふ。

一人もしいとまあらば、心のどけく閑にし、日を永くして、いそがはしかるべからず。殊に老ては殘れる齡やうやく少なく、時節のすぐる事殊に早ければ、時刻ををしみて、一日を以て十日とし、一月を以て一年とし、一年を以て十年として樂むべし。樂ますしてあだに月日を暮して、後に悔ゆべからず。

一梓弓はる立ちしより、年の暮れ行くまで、射るが如くにおもほゆれば、時日のはやく

知る者は富むとある類

君子は云々—禮記樂記に、君子は其道を得るを樂み、小人は其欲を得るを樂む云々

時世うつらふ—失意沈淪の時代となるをいふ

し。老いてはいよ〳〵むさぼらず、足る事を知りて、貧賤を甘んずべし。

一君子小人ともに、樂を好むは人情なり。されども君子小人の樂とする所同じからず。禮記に、君子は道にしたがふ事を樂み、小人は欲にしたがふ事を樂む。道を以て欲を制すれば、樂んで亂れず、慾を以て道を忘るれば、みだれて樂まずといへり。こゝを以て、小人の樂は眞の樂にあらず、はては必苦となる。

一天地に風雷の變あれども和氣を失はず、人に患難ありとも和樂を失ふべからず。人も
し身は沈み、位みじかくなり、時世うつろひぬとも、天命を安じ、心を自ら寛くすべし。土御門院の御歌に、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ、理知らぬわがなみだかな。

又古歌に、

うき事は世をふるほどの習ひぞと、思ひも知らで何なげくらん。

又曰

ならひぞと思ひなしてや慰まん、我が身ひとつのうき世ならねば。

とよめるが如し。うき世に住めば、心にかなはざる事多し。是世のならひなり。いか

といふに同じく爭ふこと無き意

いさむる―戒め告むる意

二の失―おごりとおこたりとを云ふ

知足者云々―老子の言に、足るを

山水風月の佳景は、もとより定まれる主なければなり。かく天地の内きはまりなき樂を知りて、樂める人は、樂むべき事、富貴の驕樂をうらやまず。其樂富貴にまさればなり。此樂を知らざる人は、目のまへに常にみち〳〵て多けれど、其樂を知らざれば、樂まず。世俗の樂は、其樂いまだ止まざるに、はやく我が身の苦とぞなれる。たとへば味よき物をむさぼりて、恣に飲みくへば、はじめは快しといへど、やがて病おこり、身の苦となれるが如し。凡世俗の樂は、心をまよはし、身をそこなひ、人を苦ましむ。君子の樂は、迷なくして心を養ふ。外物を以ていはゞ、月花をめで、山水を見、風を吟じ、鳥をうらやむの類、其樂淡ければ、終日樂めども身にわざはひなく、人のとがめ、神のいさむるわざにあらず。此樂、貧賤にしても得やすく、後のわざはひなし。富貴の人は、其おごり怠にすさみて、此樂を知らず。貧賤の人は、此二の失すくなし。志だにあれば、此樂を得やすし。

一君子は足る事を知り、貪なければ、身貧しけれども心富めり。古語に、知足者は心富めりといへるが如し。小人は身富めれども、心まどし。むさほり多くして、あきたらざればなり。然れば唯此樂を知りて、貧賤を安んじ、富貴を願はざる計をなすべ

在らざれば視れども見えず聽けども聞えず食へども其味を知らず

一錢を云々—李白の襄陽曲に、清風明月一錢の買ふを用ひず

いさはず—いさかはず

て、わづかなる命の內を、はかなく月日を送ること、をしむべし。

一心明かにして、世の理をよく思ひ知り、物に情あらん人は、我が心にある樂を知りて本とし、身の外、四の時、をり〳〵につきて、天地陰陽の道の行はるゝをもてあそび、天地の內なる萬のありさまを見聞くに從ひて、耳目を悅ばしめ、心を快くし、其樂極りなくして、手のまひ足のふむ事を知らざるべし。

一世の人、まどしくしては憂ひ苦み、富貴をうらやみて樂なく、富貴にしてはおごり怠りて、欲をほしいまゝにし、財をつひやして、樂を求むれど、欲にやぶられて、かへりて自らくるしみ、人を苦ましむ。すべて富貴も貧賤も、其ねがひ外にありて、內に道を得ざれば、苦のみにて樂なし。

一內の樂を本とし、耳目を以て外の樂を得る媒として、其欲になやまされず、天地萬物の景氣のうるはしきを感ずれば、其樂かぎりなし。此樂、朝夕つねに目の前にみちみちて餘あり。これを樂める人は、すなはち山水月花の主となりて、人に乞ひ求むるに及ばず、たからもて買ふにあらざれば、一錢を費さず。心にまかせて、恣にとりて用ふれども盡きず。つねに我が物として領すれども、人いさはず。如何となれば、

心こゝにあらざれば云々—大學に、心焉に

一世の人のひが事多きは、うき世の習なれば、如何ともしがたし。教へても從はざるは愚人なり。聖人といへど、力に及ばず。人の愚なるによりて怒りて、我が心をなやますべからず。人の惡しく生れつきたるは、其人の不幸なり。あはれむべし。我が心にあづかりて、恨み咎め、自ら苦むべからず。人の惡しきゆゑ、我が心の樂を失ふは愚なり。

一小人の、われに思ひかけぬ惡しきしわざを爲して、情なく、ひが事を施せる橫逆の者あるも、また昔よりおほき世の習なれば、衆人はさこそ有るべけれと思ひやりて、うらみ怒るべからず。

一堯舜の聖も、我が子の不肖なるを如何ともしがたし。我が子弟親戚など教へても從はずんば、責め咎めて、和を失ふべからず。人の生れつきて不肖なるも、我が身の斯る人にあひて不幸なるも、皆天命なれば、自ら苦み、人を怒りて、樂を失ふべからず。

一心こゝに在らざれば、見れども見えず、目のまへにみち〳〵て、樂むべき有樣あるをも知らず。春秋にあひても感ぜず、月花を見ても情なく、聖賢の書に向ひても好まず。唯私慾にふけりて、身を苦め、不仁にして人を苦め、さがなく賤しきわざをのみ行ひ

心ひろく云云ー大學曾子の言に、富は屋を潤し德は身を潤す心廣く體胖かなり

べちー別に同じ

心にしたがひ、我が仁心をたもちて、常に樂み、溫和慈愛にして情ふかく、人をあはれみ惠み、善を行ふを以て樂とすべし。人の惡を戒めんため、怒り詈るは、已む事を得ざればなり。常には和樂にして、其氣を養ふべし。されど又和に專一にして禮なければ、一偏に流れ亂れて、樂をうしなふ。

一人のうれひ苦みを慮りて、人の妨となる事を施すべからず。常に心にあはれみありて、人を救ひめぐみ、かりにも人を妨げ苦むべからず。我ひとり樂みて、人を苦むるは、天の惡み給ふ所おそるべし。人と共に樂むは、天のよろこび給ふ理にして、誠の樂なり。

一此の故に、天の道にしたがひ、人の道を行ひて、みづから樂み、人を樂ましめんことは、つねに善を行ひ、惡を去るを以て、わざとすべし。かくの如くにせん事は、べちの務なし。唯聖の道をまなんで、其理を知るべし。

一人を恨み怒り、自らほこり、人をそしり、人の小なる過をせめ、人の言をとがめ、無禮をいかるは、其器小なり。是皆樂を失へるわざなり。怒と慾とをこらへ、心を廣くして、人を責め咎めざるは、器大なるなり。是和氣をたもちて、樂を失はざる道なり。

たゝずまひ—趣、樣子などいふに同じ

聖人云々—易に天を樂み命を知るといひ、論語に知者は樂み仁者は壽しといへる類甚だ多し

の大なるしわざ、月日の明けき光、四時のめぐり行く序にしたがへる、折々の景氣のうるはしき有樣、雲煙のたなびける朝夕の變態、山のたゝずまひ、川のながれ、風のそよぎ、雨露のうるほひ、雪のきよき、花のよそほひ、芳草のさかえ、嘉木のしげれる、鳥獸蟲魚のしわざまで、すべて萬物の生意の止まざる、是をもてあそべば、きはまりなき樂なり。是に對すれば、其心を開き、其情を清くし、道心を感じ興し、鄙吝を洗ひ盡すべし。是を天機に觸發すと云ふ。觸發とは、外物にふれて善心をおこすをいへり。是外物の養をかりて、內の樂を助くるなり。

一學ばざる人は、內にある樂を知らず。又外なる樂を空しくす。內外二ながら失へり。

一聖人やゝもすれば樂の字を說き給へり。其故を如何と思ひ、樂の身にせちなる事を知るべし。禮經にも、心中しばしも和がず、樂まざれば、いやしき心生ずといへり。此樂を失はざれば、きたなき心おこらず。此故に、およその人、賢し愚なる、皆此樂を求むべし。唯賢者にゆづるべからず。此樂內にあれば、德の身をうるほして、心ひろく體ゆたかなること、あたかも富の家をうるほすが如くなるべし。

一天地の御惠をうけて人となり、天地の御心をうけて心とせし人にしあれば、天地の御

あふさきるさ—右につけ左につけ、何につけ彼につけ等の意

り、鳥のさへづり、獸のたはぶれ遊び、鳶の飛んで天にいたり、魚の淵にをどるも、皆此樂を得たるなり。されども衆人すら此樂を知らずして失へり。いはんや鳥獸は云ふに及ばず。

一人の心の内に、もとより此樂あり。私慾行はれざれば、時となく所として、樂しからずといふ事なし。是本性より流れ出でたる樂なり。外に求むるにあらず。又我が耳目口鼻形の五官、外物にまじはりて、色を見、聲を聞き、物くひ、香をかぎ、動き、靜なる五のわざ、欲すくなく、よきほどに過ぎざれば、あふさきるさ、こと〴〵に樂しからざる事なし。是外物を以て樂の本とするにあらず。又外物にふれて、其喜ばしき力を得て、樂初ていでくるにもあらず。もとより人の心の内に、生れつきたる樂あるゆゑ、外物にふれて其助を得て、内なる樂さかんになれる也。たとへば人にもとより生れつきたる元氣あり。是生命の本なり。されど飲食衣服などの、外よりの養なければ、うゑこゞえて元氣を保ちがたし。外物の養を以て内の樂を助くるは、外にある飲食衣服の養を以て、内なる元氣を助くるが如し。又心の内に此樂あれば、飲食などの外のやしなひも、皆樂の助となる。しかのみならず、朝ゆふべ目の前にみちたる天地

顔之推—傳記前註、七二頁參照、同頁に顔子推とあるは原本の誤寫なるべし

なべての人—おしなべての人、世間一般の人

んこそ本意なけれ。顔之推が、人身は得がたし、空しく過す事なかれといひけん事、心にとゞむべし。この故に、人は幼より、古の聖の道をまなび、我が心に天地より生れ得たる仁を行ひて、みづから樂み、人に仁を施して、樂ましむべし。仁とは何ぞや。あはれみの心を本として行ひ出せる諸の善を、すべて仁と云ふ。仁とは善の惣名なり。仁を行ふは是天地の御心にしたがへる也。是すなはち古の聖人のをしへ行ふ人の道なり。此道にしたがひて、みづから樂み、人を樂ましめて、人の道を行はんこそ、人と生れたるかひ有りて、顔之推が云ひけん空しく過すの恨なかるべけれ。

一およそ人の心に、天地よりうけ得たる太和の元氣あり。是人の生ける理なり。草木の發生して止まざるが如く、つねに我が心の内に、天機の生きてやはらぎ喜べる勢の止まざるものあり。是を名づけて樂と云ふ。是人の心の生理なれば、卽是仁の理なり。唯賢者のみ此樂あるにあらず、なべての人も皆これあり。されど學ばざれば此樂を知らず。易に百姓日々に用ひて知らずといへるが如し。又私慾にわづらはされて、此樂をうしなふ。ひとり賢者は此樂を知り、又私慾のわづらひなくして、樂を失はず、唯人のみ此樂あるにあらず、鳥獸草木にも此樂あり。草木の生ひ茂り、花さき實の

樂訓

貝原益軒著

卷之上

○總論

一あめつちの惠をうけて、生きとし生ける諸きはまりなき内に、人ばかり貴き物なし。如何となれば、人は萬物の靈なればなり。されば人と斯く生れきぬる事、いたりて得がたき幸なり。然るに我輩おろかにして、人の道を知らざれば、天地より生れ得たる人の心を失ひ、人の行くべき道をば行かで、行くまじき道に迷ひ、あさゆふ心をくるしめ、其上我が身に私して、人に情なく、おもんぱかり無くて、人のうれひを知らず。いたりて近き父母に事へてだに、其心にかなはず。およその人倫にまじはりて道を失ひ、人と生れたる貴き身をいたづらになし、鳥獸と同じく生き、草木と共に朽ちな

萬物の靈―前註、一五頁參照

人倫―人類人間の意にて云へり

大禹謨—書經虞書の一篇也

天道云々—易上象傳

人の己を云云—論語爲政篇、里仁篇、憲問篇、衞靈公篇

其罪をいましむるは然るべし、心に掛けて、深く怒り恨むべからず。是わが身ををさめ人に交るに、みづから心を安くし、樂を失はずして、よく世にをるの道なり。

一大禹謨に曰、滿は招レ損、謙受レ益。わが才徳を滿てりとするは、禍ありて、わが損となる。謙ればかへつて身の益となる。易曰、天道虧レ盈而益レ謙といへるも、同理なり。

一天下皆非なるの理なし。人の行をあしゝとのみ思ふべからず　わが身をかへりみおさへて、己を責むべし。人の非をのみ見て、わが身をかへりみざるは、是滿は損を招ぐなり。

一人常にわが身をかへりみて、わが身に道を求むべし。實をつとめて、外をねがふ心あるべからず。人を責め、外に求むるは、實をつとむるにあらず。論語の内、孔子の言に、人の己を知らざることをうれへざれ、人を知らざることをうれふ。かやうの語、數章あり。其語意、大抵相似たり。聖人しばしばのたまふは、皆人に實を務むることを教へ給ふなるべし。學者の常に心に掛けて行ふべきことなり。

わが身さへ云々―藤原爲子の歌に、心だに我が思ふには叶はぬを人をうらみんことわりぞなき

善柔なりとも、其心信じがたし。剛直なる人は、和順ならざれども、かへつて忠實なり。わが子をたのみ、わが家をたのみ、わが身後の事をたのむ、其人に非ざれば、かへつて害あり。臣下朋友、すべて人を用ひ、人をたのまば、知ありて忠信ある人をえらぶべし。かやうの人、世に有りがたし。もし無くんば、其次には、才力鈍くとも、忠實なるを用ふべし。忠實ならずば、才ありとて用ふべからず。才ありて忠信なき人は、必害となる。おそるべし。

一凡人倫に交りて、其はじまる所の人、われに對し施し行へること、もし禮義にあたらずして、わが心に叶はずとも、人聖賢にあらざれば、事ごとに禮義にあたるべからず。是即凡人の常にして、古今天下の世の習はしぞと思ひなだめて、心に掛くべからず。いはんや恨み怒るべけんや。わが身さへ、我が思ふ如くに行ひがたし。何ぞ人われに施す所、わが心の如くならんや。わが身さへ道に違はずば、人の我に施すこと道にかなはざるは、わが身にあづからざる事なれば、心に掛くべからず。我がうれふべき事にあらず。人倫の内、我より位たかき君父と兄夫の、われに無禮なるは、言ふに及ばず、わが子弟臣僕のともがら、我よりいやしき者、我に禮義なくとも、禮ををしへ、

君子以云々—易下象傳

いふこと勿れ云々—武王の銘の言、一四八頁本文參照

が情のうすくして、疎略なることを謝すべし。餘事に事をよせて、僞りてわが罪を謝すべからず。是小事といへど、誠の道にあらざれば、心術を害することは大なり。

一易に、君子以遠㆓小人㆒、不㆑惡而嚴。いふ意は、君子の小人に對して遠ざからんとするは、顏色と言を惡しくせず、唯我が身を嚴にすれば、彼おのづから遠ざかる。

一およそ人に交るに、其人をよくえらぶべし。其人の善惡見知りがたくば、先好んで交るべからず。彼より親むとも、唯こたへの禮をばつとめて、我よりは疎かるべし。其人小人なれば、親みて後必悔あり。既に親しく成りぬれば、小人と知れども、にはかに疎じがたし。疎ずれば害あり。初其小人なることを知らず、知るといへども、彼より親むゆゑに、ふせぎ難くて、とき〳〵交ることあり。小人に交りては、必後に何事ぞにつきて、大事か小事かわが身の害となる。古語に曰、いふこと勿れ何の害かあらんと、其禍まさに至らんといへるが如し。古人の言たがふべからず。小人と知らば、わが方より疎ずべし。然れば彼おのづから疎くなる。

一人を知ること、極てかたし。古人といへども、人を知ることいと難き事なりといへり。況や今の人をや。若いつはりて忠言をあらはし、謹厚なるやうにして、われに和順に

惡を掩ふ能はず、胸中正しければ則ち眸子瞭かに、胸中正しからざれば則ち眸子眊し

なだめて―自ら思ひ慰めて、又は大目に見ての等意

き心得あるべし。唐の張九齢が、安祿山に叛相あることを、兼て知りたるは、先見の明と云ふべし。才鈍くとも、邪なく、忠實なる人を用ふべし。眼前は快からざれども、後のうれひなく、且わが知らざる所にも益多し。小人を用ひ、小人に交れば、必後の害となる。

一 さばかり善き所ある人をば、一のくせ、一事のあやまりにより、すこし心にあはずとも、なだめてこそは有べきに、一向に捨つること、惜むべし。

一 人の惡しきのみを咎めて、わが身に反り求めず、自ら修めざれば、怒うらみ多くして、わが心和せず、人と爭ふことしげければ、世に立ちがたし。我が心に於ても、くるしみ多く、樂なかるべし。身にかへり求むる工夫を專一になすべし。かくの如くすれば、人我相和して、人と爭なく、世に立ちやすくして、其樂を失はず。是人に交るの道なり。

一 我よりは善を施すべし。彼よりもまた善を以てむくゆる事を望むべからず。彼は彼、我は我、我はたゞ我が道を行ふべし。彼が善不善は、我が心にあづかるべからず。

一 朋友親戚の間は、たゞ誠を以て交るべし。若我より久しく音問おろそかにせば、唯わ

己立たんとせば云々—論語雍也篇に、夫れ仁者は己立たんと欲して人を立て己達せんと欲して人を達す

眸子—ひとみ也、孟子離婁上に、人に存する者は眸子より良きは莫し眸子は其

とすべからず。かくすれば、人もまた爭ひて、我を立てじとす。是かへつて身の禍となる。己立たんとせば、まづ人を立つべし。かくすれば、人も亦爭はず。才あるもの、わが才にほこり、同官をないがしろにすれば、必同官に惡まれて、禍にあへる人、古今多し。愼むべし。我一人にて事をとらんとするは、甚あしゝ。善きことは同官にゆづり、我一人の才名をあらはさんとすべからず。

一世に居るには、人情を知り、時變を考へて、天命に安ずべし。或老人のいへるは、年の積に、世の中のありさまを、とかく思ひ知り行くまゝに、わが生める子、わが祿をあたふる奴だに、わが心のまゝになりがたし。況や世の人の心、さま〴〵に變れば、わが思ふまゝに從ひがたし。畢竟たゞわが身を修めて、人を責めざるべし。是世にをるの道なり。

一およそ人に交るに、其人よく物いひ、才はたらきて、我が心に叶へりとも、其眸子正しからず、心術うたがはしくば、交を深くすべからず。後に必我が身の害となることあり。悔ゆれども益なし。是久しく世を經て、おほく人に交りて、知る人のいふ所なれば、違ふべからず。若後まで害なきは、是幸なり。家臣をつかふに、殊更此目

動心忍性―孟子告子下に、天の大任を是人に降すや必ず先づ其心志を苦め其筋骨を勞し其體膚を餓し其身を空乏にし行其爲す所を拂亂す心を動かし性を忍びて其能くせざる所を曾益する所以なり

とくなる横逆の人あり。かゝる逆境にあひたる時ごとに、必堪忍の工夫をなして、怒り恨むべからず。色にあらはし、言にあらはすべからず、是動心忍性で氣質を變化し、心をみがきて學に進む時なり。空しく過ぐべからず。かやうの時、つねに心にかけて、忍べる工夫をなすべし。

一人のするわざ、其善惡十分に知れて、明白なること有り。又其事の有様、其人の心の中、善きも惡しきも、明かに知らざること多し。我が心に惡しゝと思ふことも、その實をよく尋ぬれば、道理あることあり。善しと思ふことにも、善からざることあり。かやうのこと唐もやまとも、古今多し。天下皆非なるの理なしと、古人もいへり。何事も、人のしわざに故あらんと思ひ、妄に人を惡みそしるべからず。又妄に譽むべからず。

一友をとるには、人をえらび、人の心を知りて後、交を定むべし。知らずして交れば、後悔することあり。人心はかくれて知りがたし。同じ官職をつとめ、事に出合ひ、旅宿を共にするやうの事にて、其人に馴るれば、人の心見ゆ。

一人と共に、同じ官職をつとめ、同じ技藝をとる者、我のみひとり身を立て名を得ん

面のけしき―顔つきといふ程の意

づかに行へば、過すくなし。

一 下に對するに、わが心にひいき偏頗の私なかるべし。我が心に合ひたる者をばひとへに愛し、氣に不合者をば偏に惡むは、是愛憎の私なり。如此すれば、人に施すに過不及ありて、公ならず。衆人は、愛過ぐれば奢る。愛せざれば恨む。是偏愛偏憎の私よりおこる。人に對し下に施すに、私なくして、其人の貴賤親疎功罪賢愚にしたがひて、與ふべきほどあたへ、與へまじきには與へず。かくの如くなれば、幸不幸なく、過不及なくして、諸人のいきどほりなし。人々其處を得て、不足のうらみなし。是平かにするなり。

一 いとまある人、寂さのあまりに、いとま無く時を惜む人のもとに來り、心のどけく、よしなき長物語し、あるじに厭はるゝこそ、むげに心なきわざなれ。されどかゝる人に對せん時、わが心に叶はずとも、ひたすらに面のけしき惡しく、言づかひ不順なるべからず。

一 人われに對して、不慮に無道なる事をしかけ、言ひかけして、甚我が心にそむくことあり。是橫逆の人なり。かやうの處を逆境と云ふ。世に交るには、必かくのご

衆人を以て云々—韓退之の原毀に、夫れ是を之れ衆人を以て其身を待たずして聖人を以て人に望むと謂ふの句見ゆ、蓋し此類也

一古人の言に、衆人を以て人を望めば、人從ひやすしといへり。衆人とは凡夫のことなり。人の我に對し不義なるをば、凡夫なればかくこそあらめと思ひ、なだめ許して咎めざれば、人我に從ひやすく、人そむかずとなり。君子の道を以て矩にして、凡夫を一々たゞせば、一も矩にあはず。一人も全き人なかるべし。かくの如くすれば、人我に從はず、背きやすし。ひが事多きは、うき世のならひぞと思ひさとりて、人をとがめ世をうらみざる事、君子の心なり。

一喜によつて、人に物をあたへ、賞を行ひ、怒によつて、人を責め、罰を行へば、必理にあたらずしてあやまる。喜怒の時、こらへて事を行ふべからず。喜も怒も止み、常の心になりて後、事を行ふべし。公事を聽く人、訟ふる者のことばによりて、怒を起し、悅をなすべからず。怒れば必非分のせめを行ひ、悅べば罪あるをゆるす。愼むべし。人を治むるには、まづ我が心を修むべし。我が心修まらずしては、理非をわかちがたかるべし。怒によつて理をまげ、是を非とし、罪を重くするは、賄賂にふけりて理をまげて、罪をかろくするに同じ。

一事に處るには、よく思案し、しづかに行ふべし。よく思案すれば、理にそむかず。し

人を失ふを恐る

瘖は云々ー淮南子に、瘖は言はず聾者は聞かず豈獨り形骸のみならんや心志も亦これ有り

一瘖は口物いはず、聾は耳きこえず。口耳に聲言の通ぜざるのみにあらず。心にも亦生れつきて、瘖のいはざるが如く、聾の聞かざるが如くに、理の通ぜざる人あり。其人と、是非を爭ふべからず。是と爭ふは、我も亦人を知らざるなり。愚といふべし。

一我がもとに來るべき人、ひさしく來らずとも、故あるらんと思ひ、恨むべからず。こなたよりは、親しき人には、親みを失ふべからず。これ厚き道なり。

一人われに對して過あらば、心を廣くして許すべし。我が身に過あらば、心を小にして責むべし。

一對しがたき人に對せば、彌厚かるべし。なしがたき事をなさば、彌緩なるべし。急なることに對せば、彌靜なるべし。是古人の言なり。或人祐筆にふみを書かするに、急用のことなり、靜かに書くべしといへり。又俗語に、急がばまはれといへるも、其意同じ。

一人の善言を聞きて移りやすきは、誠によし。人の不善なる言を聞きて、移りやすき人あり。まよへりと云ふべし。是知なければなり。よく心の内に思案し、其言の是非をわきまへて、惡しき言にまよふべからず。

たゞにぞと見えたり
周公は云々―史記魯周公世家に、周公伯禽を戒めて曰く我は文王の子武王の弟成王の叔父我天下に於て亦賤しからず然も我一沐に三たび髮を捉り一飯に三たび哺を吐き起つて以て士を待つ猶ほ天下の賢

我が位よりいやしき人なりとも、早く出て對すべし。久しく待たしむべからず。客を久しく待たしむるは、無禮の至なり。富貴權勢の家に、必此あやまりあり。もし故ありて、早く出であふ事ならずば、人をして其由を告げやるべし。周公は文王の子、武王の弟にて、其位貴かりしかど、客來れる折ふし、髮洗ひ給へば、髮をにぎりて客にあひ、飯をくひ給へば、口中なる食をはきて、客にあひたまふ。人の心を失はんことをおそれ給ひてなり。又家に敎なければ、其やつこ、必客に對して無禮なり。ことに權勢の家のやつこ、主人の戒なければ、必主人の權勢にほこり、賓客におごりて、無禮を行ふ。是諸人のいかり惡む所なり。其やつこは責むるにたらず、其とがは、皆主人に歸す。主人たる人是を知らざるべけんや。

一陸宣公曰、寧人負我、我勿負人。是忠厚の道なり。忠厚とは、人を愛すること眞實にして厚きなり。人のよきに愛でて、我をよくするは、厚といふべからず。人の我にそむき、我をそしるを、怒り恨みず、我より人に背かずして、いからず、恨みそしらず、人の我に從ふと、從はざるを心にかけざる、是厚といふべし。もし如此ならば、彼も亦人なれば、感じて從ふべし。從はずとも、わが心法に害なし。

思ふ事云々―新勅撰和歌集に出でたる業平の歌也、たゞにやの一句、集には

べし。

一人のほめそしりを聞くこと、よく察すべし。譽むる人、そしる人、智なくして、人の善惡と事の是非を知らず、其上私ありて、わが氣にあへるを譽め、氣にあはざるを毀れば、善惡亂れて、人をまよはす。かゝる人のほめそしりは、必信ずべからず。これを信ずれば、あやまりて是を非とし、惡を善とし、咎なき人をうらみ、善人を遠ざけ、惡人を近づくれば、其わざはひ甚し。人のほめそしりに迷ふべからず。

一心あへば千里も相したしみ、心あはざれば隣家も往來せず。或は日々に對談しても、其心を知らず。或は千里をへだてゝも、其人を相したふ。是心の合ふと合はざるとによれり。心の合へる人まれなり。

思ふことといはでたゞにや止みぬべき、我にひとしき人し無ければ。

とよみけん事むべなり。世に相知れる人多けれど、同心の人まれなり。其上、人を知ること至てかたし。兄弟にても相知らざること、世に多し。人の我を知らざるを恨むべからず。

一賓客を久しく待たしめざるは、主人の禮なれば、古人のよしとする事なり。容來らば、

輕んずる也と見ゆ

も心を用ひて、愛敬の誠を行ふべし。下人にまかせて、濫惡なる物を人に贈るべからず。

一人に對して物いふに、我が位と年との程をかへりみ、又對する人の位と年との品を知りて、其宜にかなふは禮也。若いまだ物なれざる人は、すこしは人をうやまひ過すは、節にあたらざれども、大なるあやまりにあらず。わが位よりおごれるは、無禮にして大なる過なり。見にくし。座につくにも、我が身に宜しきよき程の所につくべきを、ゐなか人か、又禮知らぬ人は、人の請ぜざるに、高座に上りすぎて、見苦しく笑ふべし。我が位より下座につくは、禮にあたらざれども、大なる誤にあらず。

一我が身を卑下して、人にたかぶらざるは、誠によし。されどあまり卑屈にして、へりくだり過し、つくべき座敷などにも、たやすくつかず、道行くにも、我が先へ行くべき位なれど、辭して行かず、我が前にめぐり來れる盃をも飲まずして、人の言を多くつひやさしむるも、かへりて無禮なり。たゞわが當然なるべき程を、あながちに強く辭退すべからず。位ある人、老いたる人、下座にありては、賤しく若き人の居るべき座なくして、各其處を得ざることあり。しかれば卑下するにも、過不及なかる

大人を云々—論語季氏篇に君子三畏有り天命を畏れ大人を畏れ聖人の言を畏ると有り、又孟子告子下に大人に説くには則ち之を藐し其巍巍然たるを視る勿れといひ、註に藐は之を

一古語に善をよみして不能をあはれむといへり。人の善事は賞翫し、得ざる事をばあはれみて、責むべからず。是君子の心なり。

一高位の人に對すとも、其勢に屈しへつらふべからず。又品くだれる人に對すとも、侮りかろしむべからず。孔子の大人をおそれ給ふは、其位をうやまひ給ふなり。孟子の大人をかろんじ給ふは、其勢に屈せざるなり。聖賢の道ならび行はれて、相背かず。共に萬世の師なり。

一人に交るに、贈物を以てするは何ぞや。是心の愛敬を外にあらはし行ふ禮なり。贈物を用ひざれば、心にある愛敬の誠を、外にあらはすべきやうなし。贈物を用ふるは此故なり。是人に交るの道なり。いにしへ神につかふるに、蘋藻のすゝめ物あり。是いさぎよき水草を以て、神にそなふるなり。はじめて師に見ゆるに、束脩の禮あり。是贄を持參して、師を敬ふなり。神に事へ、人に交るに、かくの如くならざれば、其誠あらはれず。されど貧しき者は貨財を以て禮とせず、力に及ばざる贈物を、つとめて行ふにはあらず。老いたるもの、筋力を以て禮とせざるが如し。又よからざる物を人に贈るは、贈らざるにおとる。贈物によりて、其人の志の實不實あらはる。贈物に

得たる所を用ひて云々―宋の袁采著世範に、人の性行短なる所有りと雖も必ず長ずる所有り人と交游するに若し常に其短を見て其長を見ずば則ち時日も同處す可からず若し常に其長を見て其短を顧みずば終身之と交游すとも可なり

へども、彼に得ざる所あり。何事も、一人の身に、よきこと備れる人なし。其人の得たる所を用ひて、得ざる所を責むべからず。一事よきことあらば取用ひて、其餘のよからざるを咎むべからず。我が身をかへりみば、得ざること亦多かるべし。もし人の得ざる所を責めて、得たる所をすてば、天下に用ふべき人なく、交るべき人なかるべし。得たる所を取用ひ、得ざる所を許して責めざれば、天下にすたれる人なかるべし。人に交るにも　かくの如くすれば、人の恨なし。

一人の得たる所を以て、得ざる所を信ずべからず。一事得たりといへども、他事には得ざることあり。又得ざる所を以て、得たる所をうたがふべからず。一事得ずといへども、他事に得たることあり。我が得たる所を以て、人の得ざる所を誹るべからず。是恨をとる道なり。

一不智不才の人といへども、必すぐれて得たる所あり。智者は其得たる所を取りて、得ざる所を許す。故に天下に廢る人なし。たとへば良醫の藥を用ふるが如し。いかなる賤しき草にも、よき能あれば取用ふ。大匠の材を用ふるが如し。直なるを柱とし、それるを梁として、材を捨てず。

朱に交れば—家語に丹の藏する所の者は赤く漆の藏する所の者は黒しと見え、野客叢書には傅玄太子の箴とて朱に近づけば朱く墨に近づけば黒しといへり

獸の角と牙とを以て爭ふが如し。爭はざるは、人に交るの道なり。凡節義をまもり、武勇を行ふは、進んで人に先だつべし。其外の事は人に先だたず、少し人におくれ、少し人にまけたるが、爭なくして禮にかなひ、其上禍なき道なり。

一善人に交れば、日々に善言を聞き、善事を見ならひて、益あり。惡人に交れば、日々惡言を聞き、惡行を見ならひて、損あり。交る人えらぶべし。古き諺に、朱に交れば赤し、墨に近づけば黒しといへるが如し。正直なる人に交れば、我が心につゝしみ出來、我があやまりを聞きて、益あり。我にへつらふ人に交れば、諫を聞かず、我が心に從ひほむる故、我が心おこたりて、損あり。たとへば味よき酒食を多くのみくらへば、病おこり、苦きくすりをのみ、あつき灸をすれば、病いゆるが如し。

一愚なる人は、情こはくしてさとし難く、義に移りがたし。かゝる人に對して爭ふべからず。我が身の振舞だに、我が心に叶はざること多し。なんぞ他人のしわざ、わが心に叶はんや。人のわざの我が心に叶はぬは、許すべし、咎むべからず。たゞ我が身をかへりみ、わが過を知りて改むべし。

一人の生れつきは、各同じからず。得たる所あり、得ざる所あり。これに得たりとい

明月の玉—暗夜にも能く光輝を發すといはる寶珠、李斯諫逐客書漢書鄒陽傳等に散見せり

一世には愚なる人多し。世に交るに、我が道理を專に立てむと思ふべからず。我に道理あり、人に非ありとも、人と爭ふべからず。人に十分のあやまりありとも、人にも少しは道理をつけ、少しは人にまけて、人に勝たんことを好むべからず。かやうにすれば人と爭はず、我と人との間和して、人の心をうしなはず、無事にしてさはりなし。

一明月の玉にも、瑕なきことあたはず。過なき人、なんぞ今の世にあらんや。今の人、人の小過あるを見て、其人を賤み、すこし短なる所あれば、長ずる所あれど、言ひおとし、すてゝ取用ひず。おろかなるかな。聖人は過なし。聖人を以て人を望まば、世に人なかるべし。人の過を責めて、我が過を知らざるは、愚なるかな。是我が身をかへりみざればなり。もし我をかへりみば、我が身にも過おほかるべし。我が身をかへりみて、我が過を責めば、人の過を咎むるには、いとまなかるべし。我が田の草のおほきをば、其まゝおきて取らず、人の田をくさぎるに、古人もたとへたり。

一君子は、禮儀を專らにして、爭なし。爭は小人のことなり。小人は、人に交れば、わが才智藝能など、凡我が身に能あるを以て、人にほこり爭ふ。是禮儀の道にあらず。

し中に無き所之を強ふれば終に從ふ能はず

人の心の云云―左傳襄公三十一年の條に、子産曰く人心の同じからざること其面の如し

己に求む―論語衞靈公篇に、君子は諸を己に求め小人は諸を人に求む

一　凡夫の心は、たのもしげなし。親みあつけれども、變じやすし。今親むといへど、後を保ちがたし。人の心を賴みてあやまつ事なかれ。

一　凡人の心の同じからざるは、その面の如し。世間の人ごとに、各心かはれる故に、人のなすわざ、我が思ふ如くならざるは、人の心のありさま、かくの如しと思ひ、我が心に叶はざるとて、人を咎むべからず。これを堪忍して、怒らず、言に出さざれば、無事にして我が心やすく、人にさはりなし。是世に交る道なり。

一　君子はみづから責めて人を責めず。故に善を己に求む。小人は人を責めてみづから責めず。故に善を人にもとむ。小人は人を責むること重く、我が身を責むること輕し。人を愛すること薄く、我が身を愛すること厚し。君子は然らず。人を責むる心を以て我が身をせむれば、過すくなし。我が身を愛する心を以て人を愛すれば、仁をつくす。

一　人に交る道は、厚きをむねとす。厚しとは、人を責めずして、我を責むるを云ふ。如此すれば、我が心和樂にして、人をうらみず。人もまた我をうらみずして、從ひやすし。うすければ其裏なり。人のあやまりを嚴しく責むれば、子弟の輩も恨ふかく、そむきやすし。況や他人をや。

およそ人に云々―韓魏公の言に、大凡人をして善を爲さしめんには須らく其性上に就いて做すべし若

一人われに無禮なりとて、咎むべからず。愚なる人か、或は酒に醉ひたる人は、狂人と同じければ、堪忍したりとて、いさゝか恥辱にはあらず。彼に對して、怒りあらそふは、我も亦愚なりと云ふべし。敵對すべからず。

一小人の、我に對して、ひが事を言ひ行ひて、さとし難きは、すべきやうなし。もし小人にたてあひて、我が顏色と言語をはげしくし、怒りあらそひて、其是非を言ひきかせても、彼もとより賢からざれば、きゝわけず、却ていよ〳〵怒りあらそふ。かくの如く彼と怒りあらそへば、我も亦小人なり。いよ〳〵我が身をつゝしみ修め、顏色を和げ、言を順にして、道理を言ひきかせ、爭はざれば、彼もしすこし人心地あらば、みづから其非をさとるべし。彼さとらずとも、我が心法に害なし。

一人に交るに、小人と知らば、其人を許して、彼と善惡を爭ふべからず。又小人と知れども、甚へだてなく咎めざれば、小人我を害せず。

一およそ人に善を敎へて行はしむるに、其人の生れつきたる所につきて、すゝめ行はしむべし。若生れつかず、其人の不得手にて心になき事を、しひて責めすゝめても、つひに從がはざれば益なし。必我が心の如くにせんと思ふべからず。

一朝の怒に云々―論語顔淵篇に、一朝の怒に其身を忘れ以て其親に及ぼす惑へるに非ずや

人の怒もおこらずして、わが身に恥辱なしとなり。しばしの間、怒をこらへずして、人と爭ひたゝかひ、人を殺し、身を失ふ。一朝の怒に其身をわすれて、其親に及ぼして、父母をうれへしむ、不孝の至なり。君父の大事に死ぬべきあたら命を、かゝるよしなき事に捨つるは、至ておろかなり。忠孝の道知らざるのみならず、武勇に心がけざればなり。あらそはざれば、かたき出來ず。人の無禮を許して、怒をこらふれば、死ぬることやすく、死して道理にかなふ事はかたし。

一臍下三寸を丹田と云ふ。人の一身の氣を、つねに丹田にをさめて、胸にあつむべからず。是氣をさむる良法なり。人に交り、事に應じ、物をいふに、まづ心をしづかにし、又氣を丹田にをさめて、物をいひ、事をなすべし。是氣の本を立つるなり。本たてば、力ありて道生ず。然らずして、氣のぼりて胸にあつまれば、心動きさわぎてをさまらず。此時ものいひ、事をなしいだせば、力なくて、必あやまり多し。學者身をさめんと思はゞ、心を平かにし、氣を和かにすべし。氣を胸にあつめずして吐出し、丹田にをさむること、術者の言に似たりといへども、よく習ひなせば、甚其しるしを得ることあり。物をいひ、業をつとむるに、氣をさむる良法なり。

晏子が云々―論語公冶長篇に、子曰く晏平仲善く人と交り久しうして之を敬す

に禮義正しく慇懃なれば、人と我との間滞なくして、和ぎ睦まし。人に交るに無禮なるは、是いやしき俗人下部の風俗なり。士の交にあらず。いましむべし。晏子が、人に交るに、久しくして敬ひしことを、聖人も譽め給へり。久しく交りて互に心やすくなり行くまゝに、無禮をなすべからず。

一人我に無禮なりとて、わが恥辱にならざる事は、咎むべからず。人の無禮をなだめ許して堪忍すれば、わが心和平にして、樂をうしなはず、人に爭はずして無事なり。われに恥辱なし。古語に、忍過ぎて、事喜ぶにたへたりといへるが如く、堪忍して後は、喜となる。もし人の無禮をとがめて、我よりもまた惡言を出し、無禮を行へば、人も亦いかりて堪忍せず。我が咎めしより猶過ぎて、甚しく無禮を我に施せば、堪忍なりがたくして、即時に鬪に及ぶ。此時にいたりて、はじめてその災をおそれて堪忍するも見ぐるし。たゞ初より禮義正しくして、人もし無禮を行ふとも、わが恥辱にならざる程は、堪忍して、我より又人を惡口すべからず。彼が愚なるに對して、怒をおこし、無禮をほどこせば、われも亦愚なり。

一古語に、和なれば敵なし、忍べば辱なしといへり。言ふこゝろは、溫和にして人と

我がきらふ事を云々――論語顔淵篇に、己の欲せざる所人

一朱子曰、平レ心和レ氣は、是學問の根本なり。此語よく思ふべし。人の萬事は、心氣を本とす。心氣和平ならざれば、萬事の本たゝずして、道理行はれず。人に交るに、尤和平なるべし。父母に事ふるには、必氣を下し、色を怡ばしめ、聲をやはらぐる、是心氣の和平なるなり。たゞ父母に事ふるに、かくの如くにすべきのみならず、すべて人に交るに、皆かくの如くなるべし。人一言わが心にそむけば、たちまち心に怒り、色にあらはれ、目をいからかし、言をはげしくする、これ心氣の和平ならざるなり。又器のせばきなり。心氣すでに動き亂れては、本みだれて末をさまらず。なんぞ其言行よろしかるべきや。

一人に交るに恕を以てすべし。恕とは己を推して人に及ぼすなり。言ふ意は、我が心を以て人の心にくらぶるに、違ふことなし。我が好む事は、必人も好めり。我がきらふ事は、必人もきらへり。故に我が心を以て人の心をおしはかり、我がきらふ事を人に施すべからず。我が好むことは、人に施すべし。是仁を行ふ道なり。又人にあやまちあらば、凡夫はかくこそあらめと思ひて許すべし、咎むべからず。人の得ざる所を責むべからず。愚なるをば怒るべからず。人の我に無禮を行はゞ、理知らぬ故と

犬馬をやしなふ—論語爲政篇に、今の孝は是を能く養ふと謂ふ犬馬に至るまで皆能く養ふこと有り敬せずんば何を以て別たん

賓容に交るも、皆愛敬を以て心法とす。親には愛を主として敬を行ふべし。親を愛するのみにて敬はざれば、犬馬をやしなふに同じ。君には敬を主として愛を行ふべし。君を敬ひ畏れたるのみにて、心誠に愛せざれは、忠にあらず。臣たるの道たゝず。

一親しき人を愛し、貴き人をうやまふは、言ふに及ばず、うとき路人に對し、いやしき乞丐に對すとも、皆是天地のうめる人なれば、其分にしたがひて愛敬すべし。惡みあなどるべからず。疎き親しきにより、貴き賤しきにしたがひて、愛敬する厚薄はあるべけれど、愛敬せざる事なかるべし。

一凡愛敬を行ふには、信を本とすべし。信とは、愛敬を行ふに、其心眞實にして僞なきなり。信なければ眞の愛敬にあらず。信は人に交る道なり。信なくては、人と我との心感通せず。いかに言と貌に愛敬をあらはすとも、信なければ、人誠とせずして、愛敬の道行はれず。

一人に對するに、溫和にして謙り、己にほこらず、人をあなどらず、言すくなく、信實に愛敬ありて、向ひよからんこそ、善人とは云ふべけれ。我が身かろ〴〵しからずして正しければ、溫和なれども人あなどらず。

なめげ—禮義なく無躾なるをいふ

大和俗訓巻之八

○應接　事に應じ人にまじはる道をしろす

一人に交るには、つねに禮義を正しくすべし。禮義のはじめは、先威儀をとゝのふべし。威儀とは身の形儀をいふ。衣服を正しくし、顔色をとゝのへ、形を厳にし、ことばを順にするを、威儀と云ふ。殊更ことばづかひ敬ひて、無禮なるべからず。言のなめげなるは、下部の交なり。言語容貌は、内心の外に見ゆる符なり。言と形を見きゝて、其内心の善悪は知れやすし。つゝしむべし。又言のうやまひ過ぎたるも禮にあらず、へつらへるなり。過不及なかるべし。

一人に交るには、貴賤と親疎によらず、愛敬をむねとすべし。愛とは人をいとしみて、悪まざるなり。仁の用也。敬とは人を敬ひて、侮らざるなり。禮の用也。人に交るは愛敬なければ、人我の間へだたりて、人倫の道行はれず。父母に事へ、兄弟夫婦に對し、

れ來れる本初を忘れたるなり。人と生れたるかひなしと云ふべし。我人の恥ておそるべき事、是より大なるはなし。

一善をするは、のぼり坂をのぼるが如し。つとめざれば爲しがたし。惡をするは下り坂をくだるが如し。つとめざれども爲しやすし。しかれば善は好みて力を用ひ、つとめ行ふべし。惡は惡みて愼みおそるべし。

封に、初九は遠からずして復る悔に祇ること旡し元吉

愼レ終于レ始と、尚書にいへり。

一身の禍福は天命に任すべし。人に求むべからず。身の徳行はわが心に求むべし。人を責むべからず。君子は人道の行ふべき法を行ひて、身の上の吉凶は、天命を待つ。是則とすべし。

一人のために益ある善事を、毎日多く行ふべし。其善事とは、富貴なる人は、人に施しすくふこと自由にして、ひろく行ひやすし。心にかけて行はゞ、其功大に、其樂もまた大なるべし。貧賤なる者も、志だにあれば、所にしたがひ、時にしたがひて、人の利益となること多し。わが家の内、または外なる道に、人の往來に足にさはりとなる物あれば、これをのけて他所へうつし、のんどかわく人には一盃の水をあたへ、つかれたる者に一椀の食をあたふる、かやうの類、少なき事ながら、人の益になる事きはまりなし。上は王公より、下は庶人乞丐にいたるまで、皆行ふべし。年久しく積行はゞ、其善大にして、きはまりなかるべし。常は善を行ふを以て、樂とすべし。

一天地父母は、わが生れし本にして、わが身のよつて來れる初なり。忘るべからず。天地の恩を知らずして仁にそむき、父母の恩を思はずして孝を行はざるは、我が身の生

古語に云々—説苑説叢篇に、力むれば貧に勝ち謹めば禍に勝つ

遠からずして云々—易震下坤上の

人欲の私によりて爲すあり。又ならはしの誘によりて爲すことあり。此三の内、氣質の偏なるは惡の本なり。人欲の私は惡の幹なり。俗習の誘は惡の末なり。身の禍となる事は共に同じ。氣質のあしきをば變化して改むべし。人欲をば忍びてほしいままにすべからず。俗習をば其非を知りて移るべからず。

一よき人は、心を用ふる事多き故、事ごとによくをさまりて、過すくなし。よからざる人は、心を用ひずして、過多し。下部などの、智慮なくして、用にかなはざるは、皆心を用ひざればなり。心を用ふるとは何事ぞや、思案するを云ふなり。

一古語に、つとむれば貧にかち、愼めば禍にかつといへり。いふ意は、つとむる人は必富む。つゝしむ人は必禍なし。

一過ぎにし事を思へば、あやまり多くして、くやしき事多けれど、一たびあやまりて返らざる事は、悔のやちたび悲めども益なし。今より後をつゝしみて、過なく悔なからん事を思ふべし。又あやまりて後、はやく改むれば、過なくなる事多し。易に所謂、遠からずしてかへる、悔にいたる事無きなり。萬の事、はじめによく愼みおもんぱかりて、後悔なからん事を思ふべし。はじめに思慮なければ、あやまりて悔あり。

憾無くして後安に卽く

し。油斷あれば、急なる事はさしおきて急がず、急ならざる事をいそぎて勤む。緩急をかんがへて、前後の次第を失ふべからす。さして用なき事をつとめ、いたづら事を好みて日をおくるは、はかなしといふべし。若き時は、殊にすべきわざにも心を用ひずして、むなしく過すこと多し。よく〳〵心をつくべし。

一人の知らん事をうれふる事ならば、惡事なるべし。心にきざすべからず。殊更身に行ふべからず。

一人の惡しきをそしる人は多し。我が身の惡しきをかへりみて、改むる人すくなし。我が身をわすれて、人の上をそしる事、愚なり。

一わが身の上を、常にかへりみ修むべし。人のほめそしりは、あながちに憂よろこびとするに足らず。如何となれば、ほむる人、そしる人、必皆賢者にあらざればなり。

一人我をそしらば、たゞ我が身の過をかへりみるべし。もし我が身に過あらば、そしる人は、卽わが師なりと思ひ、うらむべからず。我が身に少しも過なきをそしらば、彼の人は妄人なり。彼とあらそひ惡むに足らず。

一人の惡をする事、三の故あり。氣質の偏より惡をなすあり。又あやまちとは知れども、

見義而不爲無勇也―論語爲政篇

夜にして後云々―國語に、夜にして過を計り

ひ、此上は思案に及ばずと思ふとも、又いかなる惡しき事もあらんかと猶豫して、俄に決斷すべからず。是あやまちすくなく、悔すくなくする道なり。

一思慮して、善惡をよく明めたらば、必決斷して、猶豫なく行ふべし。思慮して、理明かになりても、決斷つよからざれば行はれず。悠々としてむなしく時を過すはあしゝ。所謂、見義而不爲無勇也。思慮と決斷との二そなはりてよし。思慮なくして、みだりに早く決斷すればあやまる。是不智なり。思慮して道理はわかれぬれど悠々として時を失ふは、おこたりなり。是無勇也。二の者はいづれも悔あり。

一凡あやまりは、おほくは初一時の快きを求むるより出でて、後はながき憂くるしみとなる。はじめ少し心を用ひ、少し慾をこらふれば、其ちからを用ふる事はすこしなれど、しるしを得て、福となる事は大なり。少しの間、少しの事をこらへずして、大なる禍となる事多し。

一夜にして後、けふのわが身のなせるわざを、よくかへりみて、ひが事あらば、後日のかゞみとして、改めん事を思ふべし。毎夜かくの如くすべし。

一人の身の上、さしあたりて爲すべきこと多し。よく思ひて、油斷なく、早くつとむべ

はかねてと云ふ意、事を前に定むるなり。萬事かねて思案して定むれば、事立ちて行はる。さなければ、事すたりて行はれず。物いふにも、かねて先思案していへば、言つまづかず。事を行ふにも、かねて思案して定むれば、事にのぞみて、行きあたり、くるしまず。

一 世に住むこと一日なれば、一日の善人となるべし。一日も善を行はずして、日を送るべからず。公儀の官職にあづかりて、官に居ること一日ならば、一日の善事をなすべし。一日も善を行はずして、官をむなしくすべからず。世に久しく住みて、善行なきは、一生を空しくするなり。官職に居て善行なきは、官職を空しくするなり。此二は、大なる恥なり。

一 衆人の行ふわざは、かねて思案なく、又事にのぞみては慮もなく、はやく決定するゆゑに、毎事あやまり多くして、後悔すれどもそれにも懲りず、つねに事ごとにかくの如し。一事あるごとに、必後のあやまり、悔あらん事をおそれ、しづかに思慮して行ふべし。何の害かあるべきと思ひ、思慮もなく、其まゝ決定すべからず。もし卽時にきはめがたくば、重てよく思案して行ふべし。事にあたりて、十分に道理にかな

いたづがはしー煩はし面倒也等の意

それざるべし。小人不善を行ひて、人の誹をおそれずんば、其悪きはまりなかるべし。

一耐煩とは、むつかしき事をきらはずして、堪忍してつとめ行ふを云ふ。もし孝弟忠信など諸のつとめをむつかしとて怠り、人の附託をうけて、いたづがはしとて、おろそかにするものは、善を行ひ遂げず。是善を好まざればなり。わが好むことは、日夜つとめても勞せず。何事も、勤をむつかしとて苦しむ者は、氣むすぼれて必病おこる。

一今日は明日の計をなし、今月は來月の計をなし、今年は來年の計をなし、平生は一生の計をなし、生前に早く死後の計をなすべし。おこたるべからず。

一明日行ふべき事あらば、必今日より其事を思ひはかりて定むべし。明朝使をつかはし、文をおくらんと思はゞ、今夕より書きとゝのへて、使を命ずべし。其日の事を其日はじめて思案しいとなめば、はかゆかず、事にのぞみて、或はさまたげ出來、まぎらはしくて過多し。

一中庸に、凡事豫則立、不レ豫則廢、言前定則不レ跲、事前定則不レ困といへり。豫と

敏事｜論語學而篇に、君子食飽くを求むる無く居安きを求むる無く事に敏にして言に愼む云々

事はきびしく、わが悪をゆるす事はゆるやかなり。

一富貴の人善を好めば、富貴の力によつて人をすくひ、善を行ふこと廣し。是まことに樂多かるべし。富貴にして善を好まざれば、富貴の力によつて、おごりて人をくるしめ、悪を行ふこと廣し。かくの如くなれば、富貴なるもかへつて禍となり、貧賤におとる。何の樂かあらん。貧賤なる人、もし艱難によりて、よく身をつゝしみて、過をあらため、善をつとめ行はゞ、禍なくして、樂多かるべし。かくのごとくなれば、貧賤なるもかへつて福となり、富貴にまさる。

一敏レ事とは、行ふべき事を、油斷なくするどに勤めて行ふを云ふ。何事もつとめずして怠れば、事行はれず。行へどもはかゆかずして、なすこと成就せず。よく事をつとむる者は、事を急がざれども、おこたりなき故、一日に十日の事をなす。おこたる者は、十日にたゞ一日の事をなす。おこたると勤むるとは、其功はるかにかはれり。

一自信とは、わが行ふ所理に當れりと、あきらかに思へば、人のそしりをかへりみずして、心を動かさざるを云ふ。古詩に、禮義不レ愆、何憂二人言一といへるが如し。小人非義を行ひて、人の誹をかへりみざるとは、甚別なり。君子善を行はゞ、人の誹をお

善に志すは云々ー孟子盡心上に、鷄鳴にして起き孳々として善を爲すは舜の徒也、鷄鳴にして起き孳孳として利を爲す者は蹠の徒也

みて、しづかに行はゞ、過すくなくして、後悔なかるべし。あくまで思案し、十分にはかりて、後過あらんは、わが心の分量をつくしたれば、力に及ばず。其上は天命に任せて、うれふべからず。

一君子は、朝夕つとめて善を行ふ。小人は、朝夕つとめて利を行ふ。君子小人ともに、つとめ行ふといへども、其志は、利と善とかはれり。善に志すは聖人の徒なり。利に志すは盗蹠が徒なりと、孟子のたまへり。利とは、財利をむさぼるのみにあらず、我ひとり勝手よきやうに、便利をはかるも、利心なり。是私なり。私を行へば、必人に害あり。人に害あれば、必わが身の禍となる。善を行はん人は、必先利心を去るべし。利を心にさしはさんでする善は、誠の善にあらず。

一君子の道は、すべき事を行ひ、すまじき事をせず。これ義なり。好むべき事を好み、好むまじき事を好まず。是善なり。君子の道はかくの如きのみ。是孟子の語意なり。

一人の知は目のごとし。人の目はよく百里の外を見れども、わが睫を見がたし。人の智よく他人の悪を知れども、わが身の悪を知らず。人をみることは常に明なり。私なければなり。自ら見ることは常にくらし。私あればなり。こゝを以て、人の過をせむる

孟子の云々—告子下—に、入つては卽ち法家拂士無く出でては卽ち敵國外患無き者は國恆に亡ぶ然して後憂患に生きて安樂に死するを知る也

ればなり。ひきゝに下るものは倒れやすし。勢順にしてやすければなり。孟子の、憂患に生きて安樂に死ぬるとのたまふも、此意なり。うれひおそれあれば、生命をたもつ。安樂にして放逸なれば、死をまぬかれがたし。敵ある國は長久し、敵なき國はかへつて亡びやすきが如し。

一周の武王の席銘曰、安樂必敬無行可悔。此銘の意は、艱難にうれひある時は、おそれつゝしみて、過すくなきゆゑ禍なし。心やすく樂きときは、必おこたり油斷して過いでき、わざはひ起る。かゝる心やすき時、殊につゝしむべし。つゝしめば過すくなく、行ふことごとに後悔なし。のぼり坂はなやめる故につまづかず、くだり坂はなやみなくして轉びやすきが如し。

一日々行ふことごとに、過なからん事を思ふべし。過あれば必後悔あり。後悔はあやまりより起る。いかりと欲とをこらふれば、過すくなく後悔すなくして、後の禍なし。又事ごとに早く行はずして、しづかによく思案して、是非のうたがはしき事は、みづから決定せず、人に問ひて、わが善惡を考ふべし。いそぎて、にはかに事を決斷すべからず。早く決斷すれば過多し。諺に悔はさきだたずといへれど、事に先立ちて、思ひつゝし

孔子の云々—論語述而篇、前註二一二頁参照

ふきよう—不器用、働きの無く、巧ならざる意

用ふる事精しくして後、好き詩文を作り出せり。和歌をよむも同し。如ㇾ此ならざれば、詩聖歌仙といへども、好き詩文和歌を作る事かたかるべし。碁をよくうつ人の、碁子を下すをみるに、久しく思ひて後に下す。一子もみだりに早く下さず。こゝを以て、碁子をくだせば其所にかなひて、よく人にかつ。是を以て思ふに、賢者の言行もまた如ㇾ此、よく思案して後ことばを出し、事を行ふべし。此故に、賢者の言行はあやまちすくなし。もし早く決定して、かるぐ〵しく行はゞ、賢者といへども過多かるべし。孔子の、必也臨ㇾ事而懼、好ㇾ謀而成者也とのまふを以て見つべし。當世の愚人より、聖賢のなす所を見ば、はかゆかず鈍くして、もどかしかるべし。常人も思案をこのめば、わが心を盡すゆゑ、事を早く決定せずに、ふきように見ゆれど、過すくなく、道理に當ること多し。決斷早き人は、はかゆけども必過多く、後悔多し。

一順境とは、思のまゝなる境界を云ふ。逆境とは、思ふやうにならざる境界を云ふ。世間の事、順境に居るはやすく、逆境に居るはかたし。故に逆境に居れば、敬畏出來て、身の過すくなくして、かへつて福となる。順境に居れば、驕怠の心出來て、身の過多くして、身の禍となる。たとへば高に登るものは倒れがたし。勢逆にして難け

ぬれて苦めども懲りず、いくたびもまた斯の如し。かく用意なくて、後の憂をかへりみざるは、賤しき者のくせなれば、よからぬ事と知るべし。すべて人の惡を行ふも、過をするも、皆事にのぞみて思慮せざるより起る。酒食をほしいまゝに過して、病をおこすも、其時にのぞみ思案なくして、唯欲にまかせて飲食ふゆゑに、病を生じ、はては身を失ふにいたる。よく思案して愼むは、欲にかち、禍をまぬかるゝ道なり。

一わが身の過を改めんため、人の諫を好むこと眞實ならば、いさむるもの多からん。酒食は人の好む物なれば、人辭退して拒げども、しひて飲ませ食はしむるは、世のならひなり。是人の眞實に酒食を好む事を知ればなり。酒食を好む如く、諫を好み、わが過を改めば、諫を言ふ人多くして、我が身の過なかるべし。

一子曰、躬自ら厚くして、人を責むるに薄ければ、うらみに遠ざかる。言ふ意は、わが身の行をあつくし、十分に善くせんことを求めて、常に我が身の行のたらざる事を思ひて、つとめ行ふべし。人の足らざるをゆるして責むべからず。かくの如くすれば、人の怨なし。

一能く詩文を作る人は、妄に輕々しく文字を下さず。久しく沈思して、一字一句に心を

言爭ふ、言張る

子曰云々—論語衛靈公篇

孔子曰云々—論語衞靈公篇

いたづがはしきのみにて—厄介なだけで、面倒なだけで

あらがふ—

し。あわたゞしく、思案なくして行へば、必義理にちがひ、あやまること多し。すでに一たびよく思ひさだめても、又一ぺんに心得そこなふ事多し。其事の外に心をめぐらし、其變を考へて、二たび思ふべし。孔子曰、人遠き慮なければ、必近き憂あり。さしあたりたる事を思ふは言ふに及ばず、後の事を思ひはかり、あやまり無く、悔無からん事を思ふべし。たとへば古語に、旱に簑笠を備ふべしといへる如く、唯今宿を出でて他所に行くに、天晴れ日和よくして、雨ふるまじき景色なりとも、遠き所に行かば、天變はかり難ければ、簑笠を持ち行くべし。たとひ天氣よく雨ふらずとも、簑笠もたる、いたづがはしきのみにて、さほどの妨にあらず。若思はざるに雨ふりなば、ぬれそぼちて衣ぬらすのみかは、心をいたましめ、身を苦ましめ、折節人にも用あるべき簑笠を乞ひかりて、又もたせ返すも、我人のためいたづがはし。萬の事、兼て心を用ひ、おそれ愼み、ふかく思ひ、遠く慮りて事を行へば、あやまち少なく、悔すくなし。やつこ下部などの心ならひは、さしあたりて我が身の便よき事のみを思ひて、後の禍を知らず。たとへばやがて雨降りなんと見ゆる空にも、雨衣の用意もなく、出づる時主持て行かんことを命ずれども、雨ふるまじきよしをあらがふ。やがて雨に

朝居―朝いとあるべし朝寝する事にて、いは熟睡の義なり、居の義にはあらず

早く起くるは、家の榮ゆるしるしなり。遲く起くるは、家の衰ふる基なり。朝つとにおきて事を勉むるを以て、身の習はしとし、家のつとめの則とし、見習はしむべし。凡の人を見るに、朝居しては學ぶことならず。家業怠りて、富めるもの稀なり。朝居するは怠のはじめ、貧窮のもとゐなり。よく事をつとむる者は、一日を以て十日とす。つとめて怠なく、鋭なれば捗ゆく故なり。おこたる者は、十日を以て一日とす。日數多く經るといへど捗ゆかず。凡善をつとめて怠らざるを良士とす。必家をおこす。家業をつとめて怠らざるを良民とす。必富む。

一知れば行ひやすく、行へば知りやすし。二の者たがひに相助けて、道明かにして行はる。たとへば道路を行くが如し。道を知らざれば行きがたく、行かざれば行路を知りがたきが如し。

一わが身の過すくなく悔少なからん事を思はゞ、事にさき立てはやく思案し、其事の是非を考へはかり、其事にのぞみて、又義か不義かをかへりみて、其理にかなはん事を思ひはかるべし。かねて思案なくして、其時にいたりて、俄にまどひつまづくべからず。たとひいそがはしき事に臨むとも、思ひめぐらして、理の當否をえらび行ふべ

一年のはかりごとは云云ー通俗編三卷に、一年の計は春に在り一日の計は晨に在り云々

となり。

一終日つとめ〳〵て、夕にいたりてもおそれつゝしむは、易の教なり。天道は日夜めぐりて止まず。これを手本としてつとむべし。古人は、つとに起きよはにいねて、日夜つとめし故、其しるしあり。

一古語に、一生のはかりごとは務にありといへり。つとめざれば萬の事行はれず、身を立つる事かたし。又一生のつとめは、若き時にあり。人の身を立つるはかりごとは、三十歳の内に覺悟すれば、一生の家業成立つ。其内覺悟なく怠れば、一生立ちがたし。一年のはかりごとは春にあり。春の間怠りぬれば、一年のこと成りがたし。一月のはかりごとは上旬にあり。朔日より十日までの内につとむれば、一月の事成りやすし。十日の間に、すゑ二旬の日數を賴みて怠れば、其事成就しがたし。一日のはかりごとは朝にあり、朝に一日の間の事をよく考へ定め、早くつとむれば捗ゆく。若朝の間おこたれば、一日のつとめ捗ゆかず。又明日のはかりごとは今夕にあるべし。明日のことを、明日はからんとて、今日定めざれば、つまづきて捗ゆかず。

一古人は、人の朝早く起くると、おそく起くるとを以て、家の興廢を知るといへり。朝

かざるを欲せば言はざるに若くは莫し、又漢書枚乘傳にも類句見ゆ

人生在勤云云ー左傳に出でたる晉の欒武子の言

あきものー商品をいふ

て、病を去るが如くすべし。たちまちに責めざれば身に害あり。

一古語に、人生在レ勤、勤則不レ匱といへり。つとめは利の本なり。よくつとめて、自ら得るは眞の利なり。利を專らむさぼれば、必害あり。農の田をつくりて、五穀を多く得るも、工のたくみを營み、商のあきなひて利を得るも、皆つとめよりなし出す利なり。士は佞巧を以てへつらはざれども、たゞ忠勤をだに專一にすれば、求めざれども君の寵ありて、祿を得、さいはひを得る。農は歲の凶にあひても怠らず、耕作に專一なれば、自らなりはひを得る。工は器を精しく作りて、粗糙ならざれば、必其利を得る。商人はいつはりなく、正直にして利分をすくなく取れば、諸人の信愛あつく、たのもしげありて、必あきもの多く賣るゝ故、利を得ること多し。是皆本をつとめて、自ら來る所の、まことの利なり。もし工は器をそさうに作りて詐り、商はあきものを詐りて、利を多くむさぼれば、人信ぜずして、かれが器、うりものを買ふ人すら無くなり、かへりて利を得る事すくなし。漢書に、貪賈は三レ之、廉賈は五レ之といへるも、此意なり。言ふ意は、欲ふかき商人は三分の利を得、欲すくなき商人は五分の利を得る。欲ふかき者は、利を得ること少なく、欲すくなき商人は、かへりて利を多く得る

その國の禮法に背くべからず。國法にそむきて、古の禮法を行ふは、道にそむけり。但古の禮法の中に、國法に背かずして、今の世に行ひて宜しき事は行ふべし。もろこしの古の禮法なりとて、今の世の時宜にかなはずば行ふべからず。

一忠信を主として僞なく、仁愛深くして人をあはれみ、義理をかたく守りて、行ふべき節を失はず、父母兄弟に孝友をあつくし、主君に仕へて身をわすれ、親戚をしたしみて疎からず、朋友に信實にしてたのもしく、家にありて、嚴にして内行正しく、儉約にして奢なく、貧窮をめぐみ、艱難をすくひ、利欲すくなく、權勢をへつらはず、舊恩を忘れず、武をたしなみ、軍用を缺かず、一度約諾したること後まで背かざるを良士とすべし。

一古語曰、人の聞かんことをおそれば言ふべからず。人の知らん事をおそれば行ふべからず。是過すくなく、悔すくなく、また禍なき道なり。

一善は必日々行ひ、久しく積みかさねて後、其功なりぬ。たとへば補藥を用ひて元氣を補ふが如し。其驗おそし。久しく服して其驗あり。惡は少なりともおそるべし。たとへば毒をくへば忽ち害あるが如し。其驗はやし。惡を去ることはつよき藥を用ひ

古語に云々 ―古謠諺八― に、人の知る勿きを欲せば爲す勿きに若くは莫し人の聞

五常五倫―前に既に詳說あり又註を加ふ、六六頁參照

ざるは、あやまちの本なり。私欲ふかきは、身を殺すの本なり。怒をこらへざるは、爭の本なり。儉約ならざるは、困窮の本なり。此六本去らざれば、身と家とを保ちがたし。つとめて是を去るべし。

一善をする事はやすく、善を行ひて、其名聞を求めざる事はかたし。是まことの善なり。人を犯さゞる事はやすく、人の我を犯せども、其返報をせざるは難し。

一心には古の道を守り行ひ、身の作法は今の世の風俗にそむくべからず。今の世に生れ、古の法にかゝはりて、必行はんとするは僻事なり。道に害あり。古法の內、當世にも行はるべき事は行ふべし。當世の時宜にそむくべからず。又當世の風俗に流れて、古の道にそむくは、甚わるし。是道に志なきなり。道は五常五倫を云ふ。法は禮なり、作法を云ふ。

一世に交るには、和して流れざるをよしとす。和すれば人にそむかず。流れざれば道を失はず。是世にまじはる、よき程の中道なり。

一五常五倫の道は、古今和漢同じ。若時により、所によりてかはらば、誠の道にあらず。法は時により、所によりて、よろしきと宜しからざる事ある故に、古今和漢異なり。

至りては印刓弊すれども忍んで予ふる能はず此れ所謂婦人の仁也

一わが身は十分に善ならん事を求むべし。人の身には十分に善ならん事を責むべからず。人に一の善あらば、又一の善を求むべからず。是一を得ば、二を求むべからざるなり。

一君子は己をせむ。小人は人をせむ。己をせむれば身修まる。人をせめざれば人の恨なし。小人は此うらなり。人をせむる心を以て、我が身を責むれば、過すくなし。己をゆるす心を以て人をゆるせば、人の恨なくして、交を全くす。

一徳行は、我より上なる人を見てうらやみ、彼に及ばん事をおもふべし。ひきゝに臨みて、我が身を高しとおもふべからず。財祿は、われに劣れる人を見て、自らたのしむべし。世には、身の福祿、我ほどもなき人多し。人各其分を安んずれば、世にうらみ無く、もとめ無くして、樂多し。上を見て、我が身をあきたらず思へば、大富貴なる人も願多く、其欲かぎりなくして樂なし。下を見れば、分を安んじて樂多し。

或人の歌に、

上見ればはてしもあらぬ世の中に、我ほども無き人もこそあれ。

とよめるが如し。

一酒食をすごすは、病を生ずるの本なり。言をつゝしまざるは、禍の本なり。思案せ

項羽を云々ー婦人の仁とは施すに足らざる小惠をいふ、史記淮陰侯傳に、韓信曰く項王人を見るとき恭敬慈愛にして言語嘔嘔たり人疾病あるときは涕泣して食飲を分つ人の功ありて當に封爵すべき者に

一程子曰、財をしみては、よく善を行ふことなり難し。誠なくしては、善をなす事はなり難しと。此言むべなるかな。財を用ひずして、たゞ言を以て人をかたらふとも、人を救ひがたし。人もまた悅ばずして、其人のために忠を盡さざれば、功をなすこと成りがたし。項羽を婦人の仁といひしも是なり。又凡の事、いつはりを以て善を行へば、中心より出でざる故、善を行ふに專一ならずして、其事成就せず。誠の善とすべからず。人も亦信とせず。感通の理なし。

一禮義廉恥の正しくいさぎよき道を以て、我が身を正すべし。かくの如くすれば、過すくなし。これを以て人を責むべからず。人の上を事ごとに責めたゞして、我が思ふ如くによくせんとすれば、人と爭ひ、人の恨多くして、世に交りがたし。人の善をば譽めすゝむべし。人の不能をばあはれみて、妄に誹り咎むべからず。

一聖人を以てわが身を正すべし。聖人を以て人を正すべからず。凡人を以て人を許すべし。凡人を以て我が身を許すべからず。

一人の悪しきをばゆるすべし。我が悪しきを人にゆるさるべからず。人の悪しきをゆるさゞるは心の量せばし。我が悪しきを人にゆるされん事を思ふ人は、鄙狹の至なり。

やつこ―奴也、下僕をいふ

一人の身になすわざ、何事にも道不レ在と云ふことなし。坐するには坐するの道あり。臥すには臥すの道あり。行くには行くの道あり。飲食には飲食の道あり。言ふには言ふの道あり。動くには動くの道あり。視るには視るの道あり。聽くには聽くの道あり。道を行はんと思はゞ、事ごとに道あることを思ひて、謹をいたして、しばらくも道を離るべからず。是身を修むる道なり。

一不仁にして吝嗇なれば、財多くもちても、人をすくひ惠むことなし。吝嗇ならざる人も、仁愛に心を用ひざれば、其施なくして、かへりて無益の事に財をつひやす。一兩事をあげていはゞ、門内に饑に及べる乞食貧人來りて食をこへども、心を用ひて是をめぐまざれば、家のやつこも食をあたへず。又寒夜に客來りて語るに、客にしたがひ來れる下部などを、屋の内寒からざる所に入れ置き、こゞえざるやうにするは、いと易き事なるに、客に對するに專らにして、まぎらはしく、従者の寒氣にくるしむべきを心にかけざれば、彼が飢寒を知らずして、いたはる事なし。是心を用ひざればなり。善を行ふに、志あらん人は、萬の事、折節につけて、心を用ひて、人の苦なからん事を思ひはかりて、人をすくふべし。

大和俗訓卷之七

○躬行　下

一人の身に、氣質のあしき所と、過とあるは、身に病あるが如し。病ある人、醫をまねき藥を服し、針灸をして、病をせめざれば癒えず。身に過ある人、其過をせめざれば、たとへば病ある人の、藥を用ひ、針灸をして、病をせめざれば、病いえざるが如し。氣質を變じ改むるは、きはめて難し。つねに心を用ふべし。故に前にも言へれども、又くりかへして人に告ぐるのみ。

一天は常にめぐり動きてやまず。人これに則りて、常につとめて止まざるべし。地は常に止まり靜かにして動かず。人是にのつとりて、つねに愼み靜かにして、心を動かさざるべし。務むるにあらざれば、人の道行はれず。愼むにあらざれば、人の道たゝず。務むると愼むとは、卽天地の道にして、人の法として行ふべき道なり。

よそ人間の樂は、善をするほどの面白きことなし。いやしき匹夫も、善を行ふ志あれば、善をすること多く、其樂多し。日々善を行ひてやまずば、其樂きはまりなかるべし。況や富貴の人善を行はゞ、其功大きに廣くして、其樂もまた甚しかるべし。東平王の答、むべなるかな。凡善をすれば、我が心快く、人もまたよろこび隨ふ。また樂しからずや。

一 尚書に、有レ備無レ患といへり。言ふ意は、萬の心、かねて早く用意をすれば、にはかなる事にあひても、患なしとなり。つねに武を心がくる人は、無事の時の用意ある故、俄に兵亂ありても、行きあたりて患なし。常に儉約して、財をたくはへあれば、にはかなる變にあひても困窮せず。其餘の諸事、皆かくの如し。當時のつひえをはぶき、私欲をこらへて、後の用意をしおくべし。常の時に、變にあへる時の覺悟なければ、不意に變にあひてつまづく。明日のことは、今日より心を用ふ。來年のことは、今年より心を用ふ。一生の事は唯今よりつとむべし。すべて萬の事、後悔なきやうに、かねて思ひはかるべし。人遠き慮なければ、必近きうれひありと、聖人のたまへり。

有備無患—商書說命中の語

人遠き慮なければ云々—論語衞靈公篇に出でたる孔子の言

南子人間訓に同義の語見ゆ、前註、一三四頁參照

東平王―前註、一四頁參照

も君子の善を行ふは、其むくいを望むにはあらず。自然の驗を云ふのみ。

一 世俗は、耳目口腹の欲をほしいまゝにするを樂とす。しからざれば、わが身人と生れ、富貴なるかひなしと云ふ。是まことに世俗のいやしき志なり。人の道を知り、善を行ひ、道にしたがひ、人をすくふほどの樂、此世の中に何かあるべきや。たかき賤しき、たゞ善を行ひ、道にしたがふを以て、樂とすべし。天理にしたがひ、人道を行ひて、人をあはれむを以て、樂とせずして、そゞろなる俗樂をねがふは、富貴の人といへども、誠に不幸なる人と云ふべし。ことさら富貴の人は、貧困なるものをあはれみ、施すことを樂むべし。是富貴を得たる福徳なり。然らざれば、富貴を得たるかひなし。耳目口腹の欲も、よき程なるは、道にそむかずして樂となる。よきほどに過ぎて、欲をほしいまゝにするは、身のわざはひとなり、人に害ありて、樂にあらず。却てうれひとなる。

一 後漢明帝の弟東平王、其國より都に參勤ありし時、明帝問うて曰、家に居て何か樂しきや。東平王答へて申さく、爲善最樂といへり。いふ意は、われ國にありて、臣を愛し、民の貧窮飢寒をすくひ、鰥寡孤獨を養ひて、善をするは、尤たのしきとなり。お

天道のむくいあり

り。たとへば、食にあきたる者に又食をあたふるは益なくして却て病となる。うゑたる者には、少し食を與へても利益ふかきが如し。財を多くつひやしても、無益の事に用ふれば人の助とならず。たとへば、萬燈をともしても、あたら油をつひやしたるのみにて利益なし。其費を以て貧人をやしなはゞ、大なる利益なるべし。善を行ふとは、たゞ人の利益になることを行ふにあり。人を利益すれば、天地神明の御心にかなひて、つひに其むくいありて、さいはひを得る理、古來そのためし多し。およそ善を行ひて人をすくふこと、上は王公より、下は乞丐にいたるまで、行ふべき道あり。富貴貧賤によらず、たゞ善を行ふ志だにあらば、善行はれずといふことなし。善を行ふべき時にあたりて、心をつくすべし。怠るべからず。まづしく賤しき人も、仁に志して行へば、其身に應じ、日々に人に利益あること多し。いはんや富貴の人其志あれば、人を救ふことひろく、其功大なり。たかきも賤しきも、怠なく久しく行へば、善をつむこと限りなし。あに樂まざるべきや。かく心の内に陰徳をたもち、善を行ふこと久しければ、天道のむくいありて、あはれみをかうむり、其さいはひ子孫にいたる。此理は、古今、からやまと、其ためし多し。うたがふべからず。されど

吳臨川－吳澄をいふ臨川公に封ぜられしかば此稱有り、字は幼淸・崇仁の人後元に仕へて翰林學士となり學者草廬先生と稱す

れども、義理にあたりては命をもかろく棄つること、君子はいふに及ばず、凡夫も能くするは、是人の本心なり。然れば、義理ほど重きものは無しと知るべし。かほどに一命より甚重き義理をすてゝ、きはめて輕き私欲にしたがふは、本心を失へるなり。誠に愚なりといふべし。

一怒はつよく、欲はふかき故、是にかちがたし。力をつくして堪忍すべし。力よわければ、怒と欲にかちがたし。忍の字は、心の上に刄を書く。怒と欲の心起るを斷去ること、刄を以て切りたつが如くなるべし。是吳臨川が、忍の封をつくりし說なり。又敵にむかひて戰ふが如く、十分の力を用ふべし。如レ此せざれば、怒と欲とにまけやすし。堪忍の工夫なく、怒と慾とにかたざれば、平生の學問も用にたゝず、いたづら事なり。

一人と生れては、道に志して、つねに仁を心にたもちて、毎日人に利益ある善事を行ふべし。主君、父母、舅姑、兄長などによくつかへ、家人を愛するは皆善なり。又人をめぐみ救ふこと、また善なり。是皆心をつくして行ふべし。人をめぐみ救ふことは、必財を用ふることの多少によらず。唯人の難儀をすくへば、其功大なり。富める者には、財を多くあたへても益なし。貧しき者に施せば、少しあたへても其利益大な

語述而篇に子路曰く子三軍を行はば誰と與にせん子曰く暴虎馮河死して悔ゆる無きは吾與せず必ずや事に臨んで懼れ謀を好みて成さん者也とあるをいふ

志士は云々―孟子滕文公下篇

ひしも、此意なり。

一人の性もと善なれば、惡をする心もとより無しといへども、利害喜怒愛憎の私欲にひかれて、惡心生じ、惡事を行ふ。故に善をする人常に少なく、惡をする者つねに多し。わが心の中をかへりみて、其惡のおこる所を求め去りて、善心の生ずるを育て、おしひろめ行ふべし。

一孟子曰、志士は溝壑にあるに忘れず。勇士は其元をうしなふに忘れず。いふ意は、義理に志ある士は、たとひわが身不幸にして、飢ゑて溝壑にふしまろびて死ぬるとも、其時までは、義理を忘れず。又義理に勇む士は、たとひ人と戰つて、我がかうべを失ふ時にいたるといへども、義理を忘れずとなり。士たる者は、必此語を常に心にたもちて失ふべからずと、古人もいへり。人の命はおもき物なれど、義理は又命より甚おもし。故に生死の大事にのぞんでも、義理を忘るべからざる事、かくの如し。いはんや名利好色財寶は、皆外物の輕き物なれば、なんぞ是をむさぼりて、おもき道義を失はんや。およそ人の欲は、富貴をきはむるにあり。然れども、いたれる富貴よりも、換へがたきは命なり。命なくては、富貴も用なし。命はかほど重きものな

無しなど見えたり

鬼神を云々—論語雍也篇に、樊遲知を問ふ子曰く民の義を務め鬼神を敬して之を遠ざく知と謂ふ可し

三軍を行ふに云々—論

然の道理なり。賤しき者の、日月を祭り、又祭るまじき神を祭り、久しくして大なる禍にあへる人多し。我がしばしば見る所なり。おそるべし。鬼神を敬ひて遠レ之と、聖人のたまへり。いふ意は、神はおそれ敬ふべし、近づきあなどるべからず。たとへば王公大人などに、おそれて近づかざるが如し。是遠レ之なり。神の社に入るにも、此心得ありて、みだりに近づき侮るべからず。おそれて遠ざかるべし。

一よく人の言を用ひ、人の諫を聞く人は、必過すくなく、行正しく、よき譽あり。人の言を用ひざる者は、ひが事多く、そしり多し。もろこしに岳飛といへる忠臣あり。すぐれたる良將なりしが、此人大將として出陣する度ごとに、先かねて其下にしたがへる諸司をよび集め、饗應して、此度の戰、敵にかちぬべき手立をたづね、人々にいはせ、負けぬべき惡しきすぢをも言はせて聞く。其内にて、よきを選び用ひて、かねてよく謀を定めて、十分に勝ちぬべきと議定して後、出陣せしかば、戰ふたびごとに、かち軍のみして敗軍せず、向ふ所敵なかりしとなり。是軍のみにかぎらず、大事小事、皆此ごとく、兼て人とよくはかりて事を行はゞ、過なかるべし。孔子の、三軍を行ふに、つねの時事にのぞんでおそれ、謀を好んでなさん者に與せんとのたま

いはへる—祭れるの意

祭るべき神に云々—論語爲政篇に其鬼に非ずして之を祭るは諂へる也と見え又禮記曲禮に其祭る所に非ずして之を祭る名けて淫祀と曰ふ淫祀は福

り。社稷とは國土と五穀とを守る神なり。人鬼とは、人死して神にいはへるを云ふ。わが家の父母先祖の神あり、是祭るべし。王公の先祖宗廟の神あり、貴ぶべし。これを祭るは恐多し、無禮なり。又先祖にあらざれども、人民に功德ありし人あり。これ皆人鬼なり。是また尊ぶべし。およそわが身に應じたる神を祭るべし。身に應ぜざるは祭るべからず。天神、地祇、人鬼ともに、人の位によりて、わが身にあづかりて、祭るべき神あり。身にあづからずして、祭るまじき神あり。わが祭るべき神にあらざれば祭らず。是を祭るは諂なり、非禮なり。神は非禮をうけ給はず。わが身にあづからずして、祭るべき神にあらざれば、正しき神にても淫祀と云ふ。淫祀は無福とて、わが祭るまじき神を祭りて、いのり諂ひつかへても、非禮なればうけ給はず、利生なし。利生なきを無福と云ふ。わが祭るべき神と、祭るまじき神とを、よくわきまふべし。祭るまじき神を祭るは、非禮にして神慮にかなはず、利生なくて神罰はかりがたし。天子諸侯の祭り給へる所の、及びなき天地神明を、いやしき者けがし侮りて祭るは、大なる非禮なり。天道神明は公にして、人間のごとく、即時に其非禮をとがめ、罰を行ひ給はざれども、久しきをつみて、必わざはひをかうぶるは、必

まどしき—貧しといふに同じ、前後に屢々見ゆ

四恩—前に解説あり又註を加ふ二〇三頁参照

ずと思ひ、人を咎むべからず。是人情を知れるなり。たゞ我が身は恩を忘るべからず。

一およそ人の施をうけ、恩をかうぶり、或は我を君にすゝめたる恩あらば、ながく忘るべからず。折節の禮義をつとむべし。久しくして怠るべからず。或は初につとむれども、誠すくなき人は、久しきを經れば、必舊恩を忘れて、訪ひくる事だになし。始終一の如くなるべし。凡恩を知らざるは、世の凡人のならひなれば、責むるにたらず。我が身かゝるうすき人情にならひて、恩を忘るべからず。恩を忘るゝは、人にあらずと思ふべし。犬はいやしき獸なれど、養をうけし主人をしたひて去らず。他の富める家に引寄せ、つなぎ置きて、食に飽かしむれども、まどしきもとの主人の家に逃歸る。或は數十里の道をも歸り、遙なる海をおよぎても歸ることあり。されば恩を知らざるは、人を以て犬にも如かずといふべし。

一人倫をあつく愛し、四恩を感じ報いて、又神をたふとぶべし。古人の曰、民は神之主也。是を以て、聖王は先民を養ひて後、神に力を用ひ給ふ。人事を務めずして、神に助を求むべからず。神に三あり。天神、地祇、人鬼なり。天神は天の神靈をいふ。日月星も其内にあり。地祇は地に在る神靈なり。名山大川の神、社稷の神も、其内にあ

施恩勿念云云―崔子玉座右銘中の句に施を受けては愼んで忘るゝ勿れと見え、戰國策にも同義の語見ゆ、支那の古諺なるべし

人ならざれども、舊恩を忘するゝ者あり。義なしといふべし。

一古語曰、施恩勿念、受惠勿忘。人に恩をほどこさば、是わがなすべき當然の道とおもひて、かさねて其施したる事を忘るべし。思ひ出すべからず。恩をほどこしたるとて、恩だたしくするは見ぐるし。又人の惠をうけば、其恩をわするべからず。必むくいん事を思ふべし。小人は、人の恩を受けては必わすれ、人に惠をほどこしては、必忘れずして、其むくいを求む。其人むくいざれば、うらみ怒る。凡天地の、人を生じ育ひ給ふは、其めぐみ廣大なれど、君子にあらざれば其浩恩を知らず、天地に仕へんと思ふ心なし。父母の恩をうけし事は、猶近くして誰も知れる事なれど、それだに忘れて不孝なるは、凡夫の生れつき習はしなり。いはんや其餘の人倫の交の内にて、たとひそくばくの恩を施したりとも、父母の惠にくらべば、萬が一なるべし。人皆君子にあらざれば、恩をふかく受けながら、十人に九人は、必わすれて報いず。恩をうけて忘るゝは、凡夫のならひぞと思ひて、我より恩を施せりとて、ほこるべからず。ほどこして報をのぞめば、人其恩を忘れたる時、うらみ怒りて我が德をそこなふ。是人情を知らずといふべし。恩をうけて忘るゝは小人のくせなり、めづらしから

司馬溫公―名は光、宋代の學者にして資治通鑑の著者也太師溫國公を贈られたるを以て溫公と稱す

一今の世に、道を敎ふる師は有りがたし。もし有らば貴び仕ふべし。道の敎をうけたる師は、其恩深きこと君父にひとし。又書を讀みならひたる師を、句讀の師と云ふ。其勞はなはだし。藝術の師は、又其次なり。是等は、君父聖人の恩にはならべ難しといへども、其苦勞の恩わするべからず。此外、人の生涯には、恩を受くること多し。およそ人の恩を受けば、心に銘して忘るべからず。一言の情をも感じ、一事の志をも心にかけて思ふべし。人の情あれども感ぜず、人の志をもむなしくするは、無下に心なきなり。

一司馬溫公の曰、人の恩をうけて、そむくに忍びざる者は、其人必忠孝ならんと。此言、道理至極せり。然れば、恩をうけて忘るゝものは、忠孝ともに無かるべし。忠孝も、君父の恩を不レ忘道なり。俗語に、恩を不レ知は木石にひとしといへるも、恩を知らざるは、人の心なきなり。君子の道、天地につかへて仁を行ひ、父母に孝を行ひ、君に忠をつくし、師をたつとび、故舊にあつくするは、皆恩をむくゆる道なり。人の性によりて、無學なる俗人にも、恩を忘れずして節義をつとめ、禮を欠かざる者あり。是其天性のすぐれたる所なり。其善行貴ぶべし。又よのつねの事は、才ありて惡

父母に事へて自ら足るとせざる者は其れ舜か得て久しくす可からざる者は親に事ふるの謂なり孝子は日を愛む

論語に云々―此語學而篇に出づ

わが身を養ふのみならず、父母妻子をやしなひ、奴婢をつかひ、衣服、居宅、器物、萬の用ともしからずして、安樂に世をわたる事、ひとへに君のたまものなり。是又父母にならびて、其恩大なり。君につかふるには、我が身をわすれて、身をわが物とすべからず。君に奉りおくべし。是身をゆだぬるなり。論語に、子夏曰、事二父母一能竭二其力一、事レ君能致二其身一とは是なり。

一父母に生れ、君にやしなはるゝといへども、聖人の敎なければ、人の道を知らず、道を知らざれば、食にあき、衣をあたゝかに著、居所をやすくしても、人の道なくしては、禽獸にちかければ、人にむまれたるかひなし。今敎を受けたるいにしへの聖人の恩は、君父にひとし。聖人は萬世の師なり。萬世の後まで、いとたふとぶべし。聖人の恩を報いんとならば、聖人の敎にしたがひ、其道にそむかざるべし。是聖人の恩を報ずる道なり。

一およそ天地、父母、主君、聖人の恩、相ならびて至ておもし。此四恩をわすれそむくは、人にあらずと思ふべし。報いずんばあるべからず。これを報いんと思はゞ、道を學びて行ふにあり。他の道あるべからず。

孝子は日ををしむ―揚子法言に、

つき恵をうく。生をうけし初より、身ををはるまで、天地の恩をうけし事、かくの如し。かゝる大恩あることを悟りて、身ををはるまで天地につかへ奉りて、孝を行ひ、其きはまりなき徳に報いんことを思ふべし。是人間の一大事なり。故にたび〳〵くりかへして言ふなり。

一父母の恩、きはまりなき事天地にひとし。父母なくんば、何ぞ我あらん。其恩海よりふかく、山より高し。海山は限りあり、父母のめぐみはかぎりなし。いかんしてか、其恩をむくいんや。たゞ孝を行ひて、其恩の萬一を報ずべし。父母につかへて其力をつくして、惜むべからず。力とは身と財との力を云ふ。身の力の限りをつくして事へ、財の力の限りをつくして養ひ、其力ををしむべからず。わかき時は、われも人も父母の恩を思はず、力をつくさずして不孝を行ひ、父母終りて、後悔すれど益なし。是一生の限りなき恨なり。人の子たる者、後悔なからん事を思ひ、父母の生ける時、力をつくして孝を行ふべし。一日も孝を行はずして、あだに過すべからず。父母につかふる年は久しからず。孝子は日を惜むといへる事、心にかくべし。

一父母われを生むといへど、君の養にあらざれば、我が身立たず。君の祿をうけて、

數には諸佛國王、父母、施者と見ゆこゝには聖人を加へて聊か其語を儒學化したる也

奉りて、孝をつくし、其恩の萬一を報ずる道なり。天地の御心にしたがふとは何ぞや。人たるものは、天地の、萬物を産みやしなひ給ふ、其御心をうけて心とす。是仁なり。仁とはあはれみの心なり。仁を失はざるは、天地の心にしたがふなり。仁を行ふ道、いかん。天地は、其産める所の人をあつく愛し、次には萬物を愛し給ふ。其心にしたがひて、人倫を厚く愛し、次に鳥獸以下の萬物を愛してそこなはざる、是天地の御心にしたがふなり。卽是仁なり。仁を行ふは、天につかへ奉りて、其大恩の萬一をむくふ道なり。天地は人の大父母なり。人は天地の子なれば、是天地につかへ奉る孝の道なり。人となる者の、一生つとめ行ふべき道、是より大なるはなく、是より急なるはなし。人となる者、必知らずんばあるべからず。此こと前卷に既にいへり。初學の人に知らせんために、しば／＼いふなり。

一父母我を産めりといへども、其生をうけし初は、天地の氣をとりて生ず。是天地は、生の本なり。其上、むまれて後、いとけなきより身をはるまで、天地の養をうけ、天地の生ずる物を、食とし、衣とし、家とし、器として、身をやしなふ。天地の性をうけ、五常の德を心にむまれつきて、萬物の靈となり、天地の内にすみて、天地のあ

四恩－佛書に天地、國王、父母、衆生の四恩を擧げ諸乘法

重あること此の如し。義理の、生命よりも富貴よりも、重く貴ぶべきこと、是を以て知るべし。然れば、命ををしみて義理を失ふは、輕重を知らざるなり。いはんや利欲によりて大なる義理を失ふは、いふにおよばず。

一凡の人、財祿を得ることを好まざるはなし。これを好まば、家業をよく務むべし。又長生を好まざるはなし。これを好まば、養生の道をよく務むべし。又義を好まざるはなし。これを好まば、學問をつとめて義理を知るべし。

一恩を報ふこと、人道の大節なり。禽獸は恩を知らず、恩を知るを以て人とす。恩を知らざるは、禽獸にひとし。是人と禽獸とわかるゝ所なり。是を以て、恩を報ずるは人道の大節なりといふこと、むべならずや。恩を知らば、必報ゆべし。知りて報ぜざるは、知らざるに同じ。恩を報ずるには、誠を以てすべし。

一人に四恩あり。天地の恩、父母の恩、主君の恩、聖人の恩。此四恩わするべからず。天地は人の大父母なり。父母の氣は、卽天地の氣なり。人は天地の氣より生る。又むまれて後は、天地の養をうけて身をたつ。故に天地の恩は、廣大にしてきはまりなし。何を以てか、其恩をむくいんや。天地の御心にしたがひて背かざる、是天地につかへ

なはん事を願ふを云ふ。義を行はざれば、人道を失ふ。凡務業富貴に居り、生を養ひて長生を得ても、人の道なくんば、禽獸にちかくして、生けるかひなし。古の聖人これをうれひて、師を立て、學を立て、人倫の道をなしへ、義理を知らしめ給ふ。此三の内、務業より養生はおもく、養生より行義はおもし。いかんとなれば、務業は富貴をきはむるを宗とす。國土を領し、高位にのぼるは、富貴のきはまりなり。されども壽命なければ、富貴も用なし。たゞ今、人ありて、汝に國土をゆづり、高位をさづくべし、然らば汝が命をうばふべしとならば、至て欲ふかき愚なる人も、命を失ひて國土と位を得んと思ふ者あるべからず。しかれば富貴より、命はおもきにあらずや。故曰、務業より養生は重し。又君父のために命をすつるは、云ふに及ばず、朋友とつれ立て道を行くに、もし向より人來りて、朋友と口論し闘はゞ、士ほどの者は、其友を見すてゝ、逃ぐる人あるべからず。たゝかひて死すれども、かへりみず。又わづかなる祿を得て、君に仕ふる下部も、主人のため命をすつるは、めづらしからず。是生命より義理はおもきにあらずや。凡此三は、天下の人、むまれつきて、各其心にねがふ所にして、又行ふべき當然の道なり。つとめて怠るべからず。其内に、輕

—齊の晝邑の人王蠋の言にして史記田單傳及び戰國策齊策等に出づ

名をながす。およそ人生前の血肉をのみ、わが身と思ふべからず。死後の善惡の名も、またわが身の內なることを思ふべし。生けるもの、必一たび死なずと云ふことなし。節義をうしなひて、かひなき命を生き、たとひ百年のよはひを保ち、富貴をきはむとも、人の道をうしなひて、世に生けるかひなくば、何の樂かあらんや。是人のつとめ行ふべき大節なり。

一凡人のつとめ行ふべきわざ、三あり。願ふ所も、また三有り。一には務レ業。二には養レ生。三には行レ義なり。務レ業とは、四民ともに、其家のわざを務むるなり。士は君につかへ、農工商は各其家業をつとめて、其衣食を求むるを云ふ。家業をつとめざれば、飢寒貧窮をまぬかれず。是諸民の先つとむべき事にて、財祿あらん事をねがふ所なり。業を務むれば、衣食と居處を得て、身をやしなふ生計は、其內にあり。二には養レ生は、飲食色慾七情の內、欲をうすくし、起居動靜の形氣をつゝしみ、風寒暑濕の外邪をふせぎ、生命を養ひて、病なく、長壽を得んことをねがふを云ふ。生を養はざれば、必病生じて、身をくるしめ、又むまれつきたる天年をたもちがたし。是又人のよく務むべきことなり。三には行レ義は、身をさめて人倫の道をあつく行ひ、道理にか

ざる者有れば皆諸を己に反求す其身正しうして天下之に歸す

善は小なりとて云々—蜀志劉先主傳の註に、先主遺詔して後主を勅めて曰く悪小なるを以て之を爲す勿れ善小なるを以て爲さざる勿れ

忠臣は云々

身の行をかへりみて言ふべし。事を行ふには、己が言をかへりみて行ふべし。言ふ事はやすく、行ふ事はかたし。故に言はひかへていひ、行は言より過すべし。如此すれば、言と行と相違なし。口にいふ事あまり有りて、身に行ふ事足らざるは、是言行のそむけるなり。恥づべし。

一善も悪も、かならず小をつみて大にいたる。故に善は小なりとて棄つべからず、悪は小なりとて行ふべからず。

一古語に、忠臣は二君につかへず、烈女は兩夫に更めずといへり。君子の道、節義を守るをおもしとす。節義とは、臣の君につかへ、婦の夫につかふるに、一すぢに忠節義理ありて二心なく、二君につかへず、兩夫にあらためず。もし不幸にして、わが身艱難にくるしむとも、君をすて、夫にそむきて、身命ををしむべからず。命を失ふとも、忠貞の志を改めざるを、節義と云ふ。萬の事いみじく、才能ありてうるはしき人も、節義をうしなひて、君にそむきて難をのがれ、夫をすてゝ人にしたがはゞ、其餘は見るにたらず。一たび節義をうしなひて、利ある方につき、害ある方をのがれ、或は死ぬべき時に死なざれば、一生の名をけがすのみならず、後代までも、ながき悪

自反ー孟子離婁上に、人を愛して親まずんば其仁に反れ人を治めて治まらずんば其智に反れ人を禮して答へずんば其敬に反れ行うて得

とて毀りうらむ。臣として君をいさむれば、おごれり、無禮なりとて、いかり遠ざく。こゝを以て、人ごとに世の俗になれ、人の欲にしたがひ、へつらひて諫めず。此風若し世に行はれ、風俗となりなば、善は日々にすたり、悪は日々にさかんになりて、道行はるべからず。かなしむべし。およそ諫を言ふ人、有りがたし。古來唐も大和も、諫をよろこぶ人は尤有りがたし。故にいさむる人もまれなり。

一人に對して道を行ふに、人我にしたがはずば、人を責むべからず。たゞわが身に立ちかへりて求むべし。是を自反と云ふ。此工夫かんえうなり。人を愛して、人われを親しまずば、わが愛のいまだ至らざる故とおもふべし。人を禮して、人われに無禮ならば、わが禮いまだ至らざるゆゑと思ふべし。人を治めてをさまらずんば、わか智の至らざる故とおもふべし。是人を責めずして、わが身にかへり求むる工夫なり。かくの如くすれば、人したがひやすし。したがはざるは、猶わが誠の至らざるとおもひ、其實をつとむべし。われに誠あれど、人そむくは、道理もなき妄人なり。禽獸にちかき人なれば、其人と是非をあらそふべからず。

一中庸曰、言顧行、行顧言。言ふ意は、言と行とは相違なかるべし。言を出すに、わが

老子の云々―此語老子第二十七章に出づ

や。唯過つてよく改むるを、君子とすべし。

一人の善を見ては、我もまた此善あらんことを思ひ、是を學び行ふべし。人の不善を見ては、我もまた此不善ありやと、身をかへりみおそれて、もしあらば改むべし。如此すれば、見聞する所の善惡、皆わが助となる。老子の、善人は不善人の師、不善人は善人の資といへるも、此意なり。

一いにしへの賢者は、わが過を聞くことを好み、人の諫をよろこべり。諫を聞きて、過を改め善にうつれば、道にすゝむことはきはまりなし。善なること、これより大なるはなし。又古の賢者は、人に譽めらるゝをよろこばず、わが善を聞くことを好まず。わが善を聞きては、益なきのみならず、もし少しもわが身にほこる心いできて、善をなすに怠らば、大なる害あり。今の人は、わが過を聞くことを好まず、人の我をほむるを悦び、わが善を聞くことを好む。世にへつらへる小人多き故、ほむる者多し。それを誠ぞと心得て、身にほこり、善を行ふに怠るは、愚なり。末の世の人は、唐も大和も、すべて人の諫を好まず。故に人を諫むるを、ひとへに世なれぬ頑なる人とおもへり。父として子をいさむれば、我が父は老耄せりと言ひ、また老人は今の風を知らず

云々ー周子の言に、今人過有りて人の規すを喜ばざるは疾を護りて醫を忌むが如し寧ろ其身を滅して悟る無し噫

論語に云々ー二語共に子張篇に出づ

をふせぎて、人の正すことをきらふは、病をそだてゝ醫をきらふが如し。其身を失へどもかへりみず。かなしむべし。

一顏子は過をまたせず。言ふこゝろは、一度あやまちと知れることは、ふたゝび行はず。又顏子は、不善あれば未嘗不知、知之未嘗復行と、易に見えたり。いふ意は、わが身に過あれば必知る。是知ることの明なるなり。過を知れば、必行はず。是行ふことのつよきなり。

一論語に、君子のあやまちは日月の食のごとし、あやまてば人皆是をみる、更むれば人皆仰之といへり。君子の心は靑天白日のごとく、洒落にして一點のおほひなし。故に過をおほひかくさずして、はやく改む。日食月食をば、天が下の人たれもあふぎ見て、かくれなし。しばし光かくれども、やがて元の如く明かになれば、日月の光明に少しもきずなし。君子の過かくの如し。又論語に、小人過必文といへり。小人は過を恥ぢてかざり、其過をおほひかくせば、正直の道理をうしなひ、是非をいひまげ、いつはりてつひに過を改めず、甚見ぐるし。是小人の心ならひなり、いやしと云ふべし。尚書に、過をはぢて、非をなす事なかれといへり。賢人すら過あり。況や凡人を

一わが身聖人にあらず、過多きはむべなりとて、過を知りながら改めざる人は、無下に道に志なき人なり。自暴自棄と云ふべし。かやうの志なき人にならひて、わが過をゆるすべからず。

一人の目は百里の遠きを見れども、其背を見ず。明鏡といへども、其うらを照さず。離婁が明目なるも、其まつげを見ることなし。こゝを以て、人知ありといへども、わが身のあやまりを知りがたし。故に君子の學は、專らわが身をかへりみ、人の諫を聞用ひ、あやまちを知りて改むるを宗とす。子路は、我が過を人の告ぐるをよろこべり。故に百世の師なりと程子もいへり。人を知ることまことに難しといへど、わが身の惡しきを知るは、又人を知るよりも猶かたし。こゝを以て、わが過をつけ知らする人あらば、まことによろこぶべし。人わづかなる財をおくり、或は酒肴をおくるも、うくる人これをよろこぶ。いはんや言ひがたき諫をいひ、みづから知りがたき過を聞くをや。わが身において、かゝる大なる益なし。諫を聞くこと、あに幸ならずや。子路のよろこべる事むべなるかな。過を聞くことをきらひ、諫をふせぐは、惡しきの至なり。諫を聞きて過を改むるは、醫を招きて病をいやすが如し。もし過あれども、諫

離婁が明目―孟子離婁上篇に離婁の明公輸子の巧も云々と見え、三善清行の文に離朱の眼も睫上の塵を見ずといへり

過あれども

過を改めて吝ならず—書經仲虺之誥

過つては云云—論語學而篇

過多し。何ぞ今の世に過なき人あらんや。人のいさめを聞きても用ひず、われに過あれども知らずして、あやまち無きと思ふ人あり。是自ら修むるに志なき故なり。もし自ら修むる人は、過多きことを知るべし。自ら省みて我が過を知り、人の諫を聞きて我が過をあらため、善にうつるべし。

一 常に我が身をかへりみて、先我が過を知るべし。すでに過を知りなば、速かにあらたむべし。尙書に、過を改めて吝ならずといへり。吝とはをしむなり。あやまちを惜まずして、早く改むるを云ふ。孔子も、過つては則改むるに憚ることなかれとのたまへり。わが身の過を知らざるは愚なり。過を知りて改めざるは、卽惡なり。知らずして過つより、猶その罪おもし。

一 過は必氣質の偏よりおこる。剛なる人は、心つよき所より過おこり、柔なる人は、心よわき所より過おこる。氣質の偏なる所に克ちて、過なからん事を求むべし。學者つねに我が氣質の偏を察し、其過をかへりみて改むべし。かくの如くせざれば、學問の益なし。是學者の專らつとめ行ふべき所なり。過を改むるは、氣質の偏に克つ道なり。氣質の偏なる所には克ちがたし。常につとめて、十分の力を用ふべし。

つゆばかりも一小しばかりにてもの意

公をつとめて、つゆばかりも、君の恩寵を得んためにつとむる心あらば、是利をはかるなり。義にあらず。凡義とは、爲すべき事をなして、わが身の利の爲にする私なきを云ふ。されども、義理にかなへば人よろこびしたがひ、事とゝのひ行はるゝ故、利は求めずして自ら來る。自ら來る利は、義に害なし。利を求むるは、義に害あり。たとへば天下に聞ゆるほどの善を行ひても、身のためにするに志あるは、利なり。義にあらず。義と利とをわかつこと、第一つとむべき心術なり。

一善を行ふとは、天性に生れつきたる仁義禮智の本心にしたがひて、孝弟、忠信、慈愛、恭敬、温和、辭讓、剛勇、廉恥などを、時に隨ひ、事に隨つて行ふを云ふ。さばかりの善を行ひても、名利をねがふ心ありて行ふは、誠の善にあらず。善を行ふには、ただ一すぢに義理に專らにして、名利の心なかるべし。

一衆人の行、萬事につきて、過と惡とあり。過とは、心に惡なけれども、知らずして理にたがひ、或は心つかずして理にちがふを云ふ。惡とは、善惡は知りながら、慾にひかれて理にたがふを云ふ。是自欺なり。身ををさむるには、過惡をあらためて、善にうつるをつとめとすべし。聖人は過なし。賢者以下は過なきことなし。殊に凡人は

すみかね―墨矩にて工匠の用ふる墨縄と規矩とを謂へる也

所の定れる法あり、是を禮といふ。禮にしたがひて、視聽言動をなすべし。四の事のなすまじき事をなすは、非禮なり。禮は、たとへば工のすみかねの如し。すみかねを用ひざれば、材木あれども用にたゝず。禮を用ひざれば、視聽言動皆道にかなはず。およそ人の人たる所は禮なり。禮なければ、禽獸にちかし。故に禮は身をおさめ、道を行ふ則なり。君子は常に禮を守り行ふ。小人はつねに禮にそむく。是君子と小人のわかるゝ所なり。

一視聽言動は、人の身の四のわざなり。思は又心の動にして、其本なり。善を好み、惡をきらふ事を誠にするは、思をつゝしむの道なり。

一善を行ふに、其心に、義と利とのわかちあり。義とは我が行ふべき公の理なり。私なくして、我が爲にせざるなり。わが身のためにするは義にあらず。利とはわが身のためにする私の心なり。公ならざるをいふ。萬の事を行ふに、先義か不義かをかへりみて、義にしたがひ行ふべし。其行ふこと善なりとも、其心義にしたがはずして、わが身の利分のためにせば、是私なり。君に仕ふる一事を以ていはゞ、奉公をよくつとむるは善なり。眞實に忠をなして、わが身を忘るゝは、義を正しくするなり。もし奉

らふ事、まことならざれば、萬の行みないつはりとなりて、道おこなはるべからず。たとへば草木の根なきが如く、家をつくるにもとゐ無きがごとし。おこなひの本たゝず。こゝを以て、道をおこなはんと思はゞ、先此こゝろざしを立つるを、はじめとすべし。

一力行の道は、其大綱は、身ををさめて、五倫をあつくするにあり。身ををさむるは、道を行ふ本なり。身修らざれば、五倫の道行はれず。身ををさむる條目は、言を忠信にし、行をあつくつゝしみ、怒を懲しおさへ、慾をこらへふさぎ、見聞する所の善に早くうつりて、つとめ行ひ、我が過を知りて、すみやかに改むるにあり。其上、人に對して道を行へども、人したがはずして行はれざる事あらば、人を責めずして、自らかへりみ求めて、わが善のいたらざる事をせむべし。

一およそ人の身のわざ多けれど、つめていへば、言と行との二に過ぎず。言をつゝしみて信にし、行をつとめて篤くつゝしめば、身修る。故に言行をつゝしみ篤くするは身を修むるの道なり。

一言行をわかてば、人の身のわざ四となる。視聴言動なり。此四のわざに、皆なすべき

大學の誠意ー大學に、所謂其意を誠にすとは自ら欺く毋き也惡臭を惡むが如し此れ之を自ら謙すと謂ふ故に君子は必ず其獨を愼む

大和俗訓卷之六

○躬行 上

一善を好み、惡をきらふことの誠なるは、大學の誠意の事にて、身を修め、道を行ふ初なり。善を好み、惡をきらはざれば、道の行はるべきやうなし。學者の最初よりつとむべきこと、是より急なるはなし。善を好むことは、たとへば好き色を好むが如く、惡をきらふ事は、惡しき臭をきらふが如くすべし。是誠に好みきらふなり。諸人のきらふ事多けれど、惡臭ほどいむべき物なし。好むこと多けれど、好色に過ぎたるものなし。是皆諸人の眞實に好みきらふものなれば、善を好み、惡をきらふことも、また如ㇾ此眞實なるべしとなり。是誠によく人をさとすべき譬なり。もし心の内に、すでに善惡を知れども、好みきらふ事實ならずして、善を行はず、惡を去らざるは、これを自欺と云ふ。自欺とは、わが心の内、實ならざるを云ふ。善を好み、惡をき

かに無禮なる意

古語に云々―荀子大略篇に見ゆ、甌臾共に瓦器。地のえぐれ凹みたるをたとへ云へる也

なり。いはんや我より上なる人をや。

一人のいふ言をば聞入れずして、たゞ我が道理のみを云ひたてんとするは、甚無禮なり。人にも道理をいはせて聞きて後、わが思ふ處をのぶべし。

一古語に、流丸は甌臾にとゞまり、流言は知者にとゞまるといへり。甌臾とは、くぼき所なり。丸き玉をなぐれば、轉じて止まず。されどもくぼき所にとゞまる。流言は根なしごととよむ。實もなきあだなる雜説なり。愚者は、是を誠ぞと心得て、信じてかたり傳ふれば、世にあまねく流布して止まず。知者は不實なる事を信ぜずして、耳に聞けども口にいはず、其耳にとゞまりて言ひちらさず。是流言は知者にとゞまるなり。

一止むことを得ずんば人をそしり、人を譽むる事なくんばあるべからず。されども、妄に好んで人をほめ毀りて、口に是非おほき人は、古人のいましむる所なり。止むことを得ば、妄に人をほめ毀るべからず。あやまる事多し。

李杜蘇黃—李白、杜甫、蘇東坡、黃山谷

なめげ—疎

て、聖賢のごとく言ひなし、或は智仁勇の三德そなはれりなど云ひ、武略をほめては、孫呉にもおとらずと云ひ、手跡をほむるとては、王羲之にも及ぶべしと云ひ、詩文をほむるとて、李杜蘇黃に同じかるべしと云ひ、和歌は貫之、躬恒にもおとらず、和文は、紫式部、清少納言が如しと云ふの類多し。さほどに無きとは、心の内に知りながら、風俗の惡しきにしたがひて、いつはり諂ひとなる事を知らず。かゝる惡しき習はしにしたがひて、正直の道理を失ふべからず。

一君子は、人の善をあげて、人の惡を隱し、人の長ずる所をとりて、短なる所をゆるす。厚しと云ふべし。小人は、人の善あるをば譽めずして、其過をあげてそしり、人の才の長じたる所をばあげずして隱し、其才の不得手にして短なる所をあらはしてそしる。薄きことの至なり。人の不得手なる所を言ひあらはせば、恨を取る。

一主君は言ふに及ばず、父母兄夫の、われに物いひかけたるに、その答明かに聞えざるはうらめし。甚無禮なり。父兄夫など、我に問ふことあらば、ことわりの正しく聞ゆるやうに答ふべし。おや兄夫は、いづれも親しければ、其親しきをたのみて、答のなめげなるは惡しゝ。よき人は、われより下ざまなる人に對しても侮らず。故に答明

徐偉長—名は幹、支那三國時代の北海の人、文章を好くし所謂建安七子の一也中論を著はし世に行はる

とごとく言ひ顯し、はげしく爭ひぬれば、人怒りて受用ひず。是人をいさむる道にあらず。温厚にして理明なるが、還てよく人を感ぜしむ。是はげしく責むるにまされり。

一 徐偉長曰、君子非其人、則弗與之言。其人にあらずとは、道理を教へつけても、よく其理をきゝわかつべき智なく、聞きて信じ用ふべき誠なき人を云ふ。かやうの人に、善言をつけても、益なし。凡善言を聞きても、さとらず、信ぜざるは、其人愚なればなり。

一 人の惡しきをいさむるに、はじめより、うちつけに、其事を直にさして言へば、おほやうは聞入れず、かへりて怒をもよほす。唯其事となくかすめなして、人の心に惡からず感じて、聞入るゝこそよろしかるべけれ。

一 よろこぶ時の言は、誠すくなし。いかる時の言は、敬すくなし。喜び怒るとき、殊に言語をつゝしみて、喜怒のために、心をやぶらるゝ事なかれ。

一 末の世には、風俗うすくなりて、からやまとの文をつくるにも、へつらひ飾りて僞多し。政のよきをほむるとて、堯舜の御世にも越えつべしと云ひ、人の善をほむると

易曰云々ー
坎下坎上の
卦の六四也

は、直諫によろしき人は稀なり。よのつねの人ならば、諷諫すべし。諷諫をよくして、人のよく聞入れたるためし多し。是いさめのよき手立なり。いさめの道を知らで、辭をあらくして人にさからひ、妄にいへば、人怒りて、必聞きいれず。人に益なくして、我が身のわざはひとなる。ことに我が親に直諫して腹だたしめ、親よろこびざれば、親子の中うとくなる。大なる不孝なり。親をいさむるには法あり。

一易曰、納約自牖。などは明なる所なり。たとへば家の内にある人に、外より物を言入るゝに、壁越にいへば聞えず。牖よりいへば聞ゆ。諫を言ふも、亦かくの如し。いかなる愚なる人も、必いづくにぞ、片はしに道理開けて、明なる所あり。或は好む所の欲あり。其所をよく見つけて言入るれば、聞入れやすし。此諫めやうのよきこと、古もさるためし多し。ふさがりたる處を知らずして、いかに忠をつくして諫むとも、聞用ひざれば益なし。

一人の過をいさむるには、誠あまりありて、言たらざるがよし。心を内にふくみて、言すくなく言ひ殘して、餘味深かるべし。人の惡しき事を言ひつくさず、人の耳にさからはずして、人にひとり其あやまりを悟らしむるをよしとす。人のあしき事を、こ

法語の言、巽與の言―共に子罕篇同一章中の語、集註に法語は之を正言する也巽與は婉にして之を導く也といへり

心に服せず、かへつて其諫にそむきて從はず。こゝを以て、人を諫むるには、心を平和にし、ことばを順にし、道理を正しくいさむべし。まづ人のよきことを擧めて、人の心を悦ばしむべし。怒りて悅ばざれば、いさめても受用ひがたし。これ人を諫むるてだてなり。およそ人を諫むるには、人の氣質によりて、直諫、諷諫の二の法あり。知らずんばあるべからず。其心和順にて、義理明なる人ならば、直諫すべし。直諫とは、過を言ひあらはし、理を直にのべて、是非をまげず、つよく諫むるなり。かくの如くなれば、聞く人おそれて從ふ。孔子の、法語の言とのたまふ、是なり。又氣質和順ならず、義理くらき人ならば、諷諫すべし。諷諫とは、直に其人の過惡をさしあらはして言はず、まづ其人のよき所をあげて擧め、其人を喜ばしめ、其人の心に從ひてさからはず、たゞ其事の損あると、益あるとを說きて、得心せしむべし。或は他事によそへて、善惡得失を述ぶべし。かくの如くすれば、聞く人はらたゝずして、よろこびて諫を聞きしたがふ。孔子の、巽與の言とのたまへる、是なり。人をいさむる法は、此二なり。其人の氣質によりて、いさめの法かはるべし。直諫することこそ本意なれども、正直に強く諫めても、聞く人の耳にさからひて、受用ひざれば益なし。明君賢者ならで

論語に云々—同書子張篇の末節に出づ

一凡ほめ毀ること、あやまりて理にたがへば、わが人を知らざる不智の程あらはれて恥づかし。つゝしんで妄に人を譽めそしるべからず。

一人をほめ毀ること、つゝしんで過不及なかるべし。人の小惡を大惡に言ひなし、小過を大過に言ひなし、虚なることを實に言ひなすは、讒言なり。又左程なきことを、甚しく人をほめ過すも、正直の道にあらず。へつらひて其人に私するなり。譽めそしること、かる〲しくすべからず。たとへば權量を以て、物の輕重をはかるが如くなるべし。一毫もかろくし重くして、過不及あるべからず。譽むべからざる人をほめ、毀るべからざる人をそしり、或はほめ過し、そしり過すは、ともに不智なり。論語に子貢曰、君子は一言以て智とし、一言以て不智とす。言愼まずんばあるべからずといへり。よき人は、許可をつゝしむとて、人をみだりにゆるしほめず。されども、小善をもすてず、一藝をも用ふるは、君子のする所なり。人の善をばもてはやして、稱譽すべし。惡をかくして、善をあぐるは、聖人の行なり。まなぶべし。

一およそ人を諫むるには法あり。たとひ我が子我が弟をいさむるにも、聲をいらゝげ、言をあらくして、惡口し、はづかしむるは惡しゝ。如レ此すれば、聞く者腹立ちうらみて、

帝堯は云々―淮南子に堯敢諫の鼓を置き舜誹謗の木を立つと見え本文と事實やや相違せり

てそしり多し。そしらすれば、後はそしり無し。此こと、古人の教明白なり。川の水は、下をほり流せば、水のうれひなし。下をせき止むれば、ふさがりて横流のわざはひとなる。人の口をとむるも、またかくの如し。故に明君は、人の口をとぢずして人にいはせ、下のそしりを聞くことを好めり。帝堯は、諫の鼓を置ていさめを聞き給ひ、殷の湯王は、誹謗の木を立てゝ政のあやまりを謗らしめ給ひしとかや。

一およそ人を知ることは、いたりて難きことなれば、人の口と、わが目きゝにまかせて、みだりに人の善惡を決すべからず。然るゆゑに、譽むるもそしるも、かるがるしく妄にすべからず。歲月を待つべし。卽時にはやく人を譽め毀れば、必あやまりて、後悔あり。われ人を惡しきと思へど、さもなくて、却て善きことあり。善きとおもへど、又惡しき人あり。人のほめそしりも、妄に信じがたし。人の口と我が心を以て、善惡を定むべからず。人の口わが口、二ながら證としがたし。

一面前に人をほむるは、諂にちかし。もし譽むべきことあらば、其人に對せずして、他人に對して譽むべし。其人の感もまた深し。面前に人の過を正すはよし、退きて陰にてそしるべからず。

て曖昧の義にもいふ

其位にあらずんば云々―論語泰伯篇に、子曰く其位に在らざれば其政を謀らず

を信じやすし。すべてあやしき事は、語るべからず。たしかに見たる事にも、心目の病によりて、あやしき事見ゆ。又あやしと見ゆる事も、ゆゑありてあやしからざる事おほし。

一人のあやまちを正して、言ひきかせ、改めんことを敎へすゝむるは、善事なり。既に過去りたる過を、かへすがへす言出し、とがむべからず。凡人のあやまりて爲つる事か、又知らずしてしそんじたる事は、力及ばず。其あやまりをば告聞すべし。しばしば言出してせむべからず。其人我が身をば責めずして、うらみ怒りてそむく。

一古語に、其國に居ては、其大夫をそしらずといへり。いはんや君をそしるは、大なるとがなり。古語に、臣の不忠、君をそしるより大なるはなしといへり。たとひ君にひが事ありとも、臣たるものは隱して語るべからず。又我が身其位に居らずんば、國政の是非を評議すべからず。下として上をそしるは、不忠不敬なり。つゝしむべし。上をそしる人ありとて、それに雷同すべからず。口をとぢて語ることなかれ。上たる人は、わが行のあやまりを、下なるものに言はせそしらせて、ひろく聞くべし。下のそしりを聞くは、是上たる人の幸なり。人の口をとづるは悪し。口をとづれば、却

と清音にいふべき也、猶一層の意

そゞろなる―漫然たる、根據もなき等の意

胡亂―ウロンは唐音也、胡説亂道といふ中華の俗語より出でたるものか、亂りがはしき意より轉じ

に、殊につゝしみて、いかりの内に書くべからず。

一世俗のかたり傳ふること、そらごと多し。こと〴〵く信ずべからず。ことに、あやしき事、多くはいつはりなり。神佛の奇特も、俗人のかたり傳ふることは、そらごと多し。凡正法には奇怪なし。きくわいあるは正法にあらず。奇怪なりとて貴ぶべからず。神佛をほめんとて、なき事をつくり出し、或は似たる事をまことに言ひなし、奇異なることを言ひつけて、かへつて神佛の徳をけがすことを知らず。鬼魅狐狸のしわざには奇怪なることもあり。それも多くはそらごとあり。こと〴〵く信ずべからず。おろかなる人は、そゞろなるそらごとを信じて、まよひやすし。そらごとを作りてかたり傳ふること、世におほし。信ずべからず。妄に人のことばにまかせて、かたり傳ふべからず。人の胡亂なる言を信じて、又人にかたれば、我が亦虚言をいふの罪あり。つゝしんで人にかたるべからず。

一あやしき事を耳に聞くとも、目に見ざる事の、たしかならざるをば、口にいふべからず。必虚説多し。人のみだりにかたりつたふる神變奇怪なることを、我も亦語れば、世に傳はりて、人をまよはす事多し。おろかなる人は、聞く事にまよひて、いつはり

げに―けに

行、さきに大なる過ありしものあり。或は親先祖いやしかりしものあり。此たぐひ、言ひいだせば、聞く人きらひて、うらみ怒る。是世俗のいはゆるさしあひなり。心を用ひて言ふべからず。

一ことば多く、無用の枝葉しげければ、相對する人勞る。同じ事をくりかへせば、聞く人厭く。如此なれば、さし立ちたる用ある道理は聞えず。言すくなく、用あることを言ひて、道理明かに詳なるべし。辭は簡要をたつとぶと、古人もいへり。無用の言を出さず、有用の事をいふべしとなり。

一人のしわざ、我が心にかなはずとも、なだめ許して、左こそありなんと思ひて、いかり恨むべからず。もし心の中に怒甚しくとも、いかり止みて本心になるまでは、こらへて言を口に出すべからず。いかりのさかんなる時、はやく口にいだせば、必過言いでて、後悔あり。心をやはらげ、氣を平かにし、怒止みて後、言ふべき事はいひ、なすべき事はなすべし。酒に醉ひたる時も、尤言をつゝしみて、いふべからず。酒さめて後、ことばを出すべし。人にふみを送るも同じ。いかり止み、酒さめて後、文をかくべし。是皆後悔なき道なり。言よりもげに、文はあとに殘るものなり。文を書く

に好事門を出でず惡事千里に行くと見え、博聞錄に壁に耳有り墻に縫有りと見ゆ

子に、人の不善をいふは、後の患をいかんすべきといへり。

一言を出すにも、わが身をかへりみて、分に過ぎたる事をばいふべからず。分に過ぎたることをいへば、人にそしりわらはる。恥づべし。また人聞きて信ずべからざることは、實事なりとも言ふべからず。此心づかひあるべきことなり。

一わが善をば隱して、みづから譽むべからず。人の善をばあらはして譽むべし。わがあやまりをば飾るべからず。あらはして改むべし。人の過をばあらはすべからず。おほひかくすべし。

一わが身にいかなる才能善行ありとも、口に出してほこるべからず。其才能にほこれば、其才能をうしなひ、其善行にほこれば、其善行を失ふ。をしむべし。

一我が身をほめざれども、わがよきも惡しきも、人の心に知るものなり。たとひ我が才行あらはれずして、人知らずとも、わが身の徳に害なし。わが身の才能いみじくとも、みづからあらはし譽むるは、自ら媒すと云ふ。いやしむべし。其不徳の程あらはれて、むげに人に見おとさるゝわざなり。

一凡人のいみきらふこと、言ふべからず。人の生れつき、不具かたはなる者あり。又其

言さかりて云々—此語大學に出づ

俗語に云々—北夢瑣言

そしるは、厚くおとなしき道にあらず。況や凡夫の人をそしるは、多くは理にあらず。つゝしむべし。

一人をそしれば、人また我をそしる。人をそしるは、即我をそしるなり。たとへば天にむかつて唾を吐くが如し。そのむくい甚はやし。言さかりて出づれば、又さかりて入る。我に出づる罪は、やがて我にかへること、車の輪の如し。おそるべきかな。人を一分そしれば、人より三分そしりかへさる。其上、人に見おとされ、いやしめらる。益なくして損あり。愚なりといふべし。

一人をそしるは、是不仁なるのみならず、必身のわざはひとなる事を知らず。是不智なり。人をそしる一事にして、仁智の大徳を失ふ。殊に我が同官同藝の人をそしるは、人をおさへて我が身をたてんとするなり。又不義無禮と云ふべし。卑狹の甚しきなり。是小人のわざなり。みづから恥ぢて戒むべし。

一人をそしるは、其人に對せず、かげにてひそかに言ふことなれば、其人知るべからず、何の害かあらんと思ふは愚なり。そしりは必もれやすし。俗語に、惡事千里を行くといひ、又壁に耳ありと云ふが如し。人の知らんことをおそれば、言ふべからず。孟

ど、こゝは後暗しの義に用ひたりと見ゆ

古語に云々―傅玄口銘に出で陔餘叢考には當時の諺なるべしといへり

なり。晉の世の崔浩と云ひし人は、目前に人の過をいさめ、かげにて其人をそしらず。故に人これを重んじけるとかや。宋の劉貢父と云ひし人も、亦かくの如くなりしなり。

一一言のあやまちにて莫大の禍となり、一事のあやまちにて一生の憂となる。愼むべし。平生つゝしみある人も、事により時によりて、怠りたゆみぬれば、一言一事のあやまちによりて、思ひの外に大なるわざはひとなる事あり。一言一事も、つゝしまずんばあるべからず。

一古語に、病は口より入り、禍は口より出づといへり。言をつゝしみて、みだりに口より出さゞれば、災なし。飲食をつゝしみて、みだりに口に入れざれば、病なし。病と災との出くることは、天より降るにあらず、皆口よりおこると、古人いへり。口の出入つゝしむべし。

一人のあしき事は、わが心の中に知りわきまへて、口には出すべからず。

一人をそしり、人を言ひおとすこと、不仁の甚しきなり。其上わが身において、つゆばかりも益なし。其人もし聞けば、甚害あり。其そしる所、其實たがはずとも、人を

と思ふべし。若其契約義にかなはざる事か、又力の及びがたき事にて、後に約を守りがたからんと思はゞ、かねて約をなすべからず。かるぐ\しくうけあへば、其約たがふ。つゝしむべし。論語に、信近於義、則言可復也といへり。人と約束したる事、首尾ちがはざるやうにせんと思はゞ、約する事義理にかなへば、うけ合ひたる言のごとく行ひとげられて、いつはりなくして首尾相違せずとなり。

一あやまちを恥ぢて、いつはり飾るべからず。是心をあざむき、人をあざむくなり。既にわが過あらんは、すべきやうなし。あやまらば直に言ひあらはすべし。隱していつはり飾るべからず。あやまりて又人をあざむくは、あやまりを重ぬるなり。いよいよ罪深くなる。

一言を出すに、其言さわがしからず、おだやかなるは、其心のやしなひあるなり。もし言を出すに、騷しくけはしきは、心のやしなひ無しと知るべし。

一人あやまちありて、もし諫むべき人ならば、目前にて其あやまちを諫め、かげにては其過をいふべからず。目前にて諫めず、かげにてそしるは、うしろめたし。もれ聞えては、其人のうらみも深し。面前にてしたがひ、退きて後言するは、聖人の誡

論語に云々—學而篇に出でたる有子の言

うしろめたし—氣に掛るの意なれ

易に云々―繋辭下傳に君子は其身を安うして後に動き其心を易うして後に語る

一易に、心を易んじて後かたるといへり。人に物いはんと思はゞ、先わが心をやすくしづかにし、思案していひ出すべし。かくの如くせば、言のあやまちとがめ少なかるべし。

一人に對して言を出すに、事によりて道理をいひつくさず、意を内にふくみ、言をのこせば、言に餘味ありて、人感服してしたがひやすし。人をいさむるにも、辭はげしからず、氣象和順にして、かすめなして言ひて、其人の過惡をさしあらはさず。是かへつて人の心を感ぜしむ。

一言をつゝしみて、一言を出すにも、よく思案して物をいへば、言語はおのづから少なし。むりに口をとぢて言はざるにはあらず。

一ことばをば必信にすべし。かりそめの少なる事にも、いつはるべからず。其事は少なりとも、心を害する咎は大なり。まことの道を失へばなり。故に萬の事うるはしくとも、いつはりをいふは人にあらず。我が心の神は、則天地の神なり。おそるべし。心にいつはりと知らば言ふべからず。僞と知りてわが心をあざむくは、罪ふかし。

一人と約をなさば、必其信をかたく守るべし。一度約したる事をたがへば、人にあらず

はざるは身のわざはひとなる。此ためし世に多きことなり。いましむべし。國語曰、服心之文也。心の好むことを、身にも、必服する故に、衣服は心の外にあらはるゝ文なり。正しからざる服著たるは、心の内見えてはづかし。つゝしんでえらび用ふべし。

一衣服は、常に用ひて、いつもよき製法染色あり。時の好にしたがひて、世のあしき俗にうつるべからず。

○言語

一言は心の聲なりと、古人いへり。人の心の内にあること、言によりて外にいづ。一言みだりに發すれば、駟馬も追ひがたし。よき事もあしき事も、皆口よりいづ。口をつゝしめば、あやまちすくなく、恥辱なく、わざはひなし。故に人の身のつゝしみは、口をつゝしむを第一のつとめとす。言おほければ、口のあやまち多く、人に悪まれ、わざはひおこる。つゝしみて多くいふべからず。殊に人をそしるは、莫大の悪事なり。いましめて人の非をいふべからず。

駟馬も云々—論語顔淵篇に駟も舌に及ばずと見ゆ、子貢の言也

なるをいふ

間色―原色に對し二種以上の色の配合より成れるをいふ

褻の服―平服、常服の義

り。かやうの衣きたる人は、位高き人も、いやしく見ぐるしくして下部の如し。是を好むは何のためぞや。大かたに、衣服にても人の心はおしはからるゝものなり。位なくても、みづからおもんずる人は、下著にもすべからず。凡人の目たつべからざるは相應なるべし、目にたつは、相應せざる故なり。帶も、いにしへは男女共にちひさかりしが、今やうは廣くして見ぐるし。何の益ありや知らず。

一衣服は儉素にかざりすくなく、よの常にして賤しからざるがよし。又まどしき人も、つとめて潔くあかづき穢れざるを用ふべし。富める人も、美麗をこのみ、無用の服多くすべからず。又甚質朴に過ぎて、けがらはしく鄙野なるもあしゝ。染色は正色を用ふべし、紫もえぎなどの間色、すべて女子の服にちかきを用ふべからず。紅紫をば、褻の服、衾褥にもすべからず。

一身のかざりに心を用ひ過すべからず。ひまつひえて益なし。俗人奴婢のともがらに譽められんとて、衣服をかざれば、識者にいやしめらる。何の益もなく、はかなき事なり。

一左傳に、服の不衷身の災なりといへり。著る物のたゞしからずして、其身に似合

けざやか―色合の鮮明に派手やか

大和俗訓巻之五

○衣服

一衣服は身のおもてなり。人に對すればまづ見ゆ。此故に、古人身をつゝしむの名目をつらぬるに、まづ衣服、次に言語、次に行と、ついでをなせり。言行と同じく相ならべるほどの事なれば、衣服をもつゝしみて、身に相應せる、正しきをえらび用ふべし。相應せざるは、正しからざるなり。相應とは、年と位と時と處とに似合たるを云ふ。染色繪樣、わかき人も、其年のほどよりは、すこしくすみて老いらかなるは、人の目にたゝずして宜し。かくの如くなるは、わかきも老いたるも、たかきも賤しきも、むかしも今も、似合はざることなし。年と位より、若やかにざればみたるはいやし。大なるかた、大もん、大すぢ、すべて人の目にたちてけざやかに、又あやしく異樣なる染色の服著たるは、たれも其身に似げなくして、むげに人に見おとさるゝものな

一不意なる禍にあひて、すべきやうなくとも、心を苦めて、樂を失ふべからず。心しづかに思慮すれば、其禍をのがるゝ慮もいでくることあり。行きつまり、心せはしかるべからず、心ひろくして、よく思を延ぶべし。

或は生れつきて定まり、或は時により不慮に命くだりて、偶然として福にあひ、わざはひにあふ。求めても命なければ得がたく、求めざれども命あれば得やすし。唯人の法を行ひて、天命をまつべし。善を行ひて福來るは常の理なれども、もし禍あるは、是また天命の變なれば、うれふべからず。およそ人天命を知りて、命にまかせ、うれひなき工夫をなすべし。天命を知らざれば、命のさだまりありて、福の求めがたく、禍の去りがたき事を知らず。利につき、害をさけんとし、人にへつらひ、神にへつらふは見ぐるし。愚なりといふべし。故に論語に、「不㆑知㆑命無㆔以爲㆓君子㆒也」といへり。

論語に云々―堯曰篇に出づ論語最末の一節也

一人の心、平生無事なる時、つねに樂おほければ、いかなるわざはひ出來ても、苦まず。たとへば富める人は凶年にあひても飢ゑず、血氣つよき人は、はげしき寒氣にあたりても感ぜざるが如し。

一もし無事なるとき樂なければ、にはかに事いでき、わざはひ來るとき、うれひ苦み、心をうごかし亂して取失ふ。つねの時よく工夫して、心を養ひて、樂を深くすべし。心は天君なり。つねに樂ましむべし。外事にわづらはされて、苦むべからず。

—論語衛靈公篇に見えたる孔子の言

うつはもの—器量の意

自ら用ふれば云々—前註、三六頁參照

といへり。

一 心のうつはものせばき人は、わが智ひとつを用ひて、萬の事に通ずとおもひ、人の智を用ひず。古語に、自ら用ふれば小なりといへり。わが智ひとつをたのみて、人の智を用ひざれば、世間の萬事、わが一人にて知りがたし。知らざること多ければ、小智といふべし。心のうつはものひろき人は、わが一人の智を用ひず、ひろく人に問ひて聞き、其よきをとり用ふる故、もろ人の知を合せて、わが智とす。是大知とすべし。凡人は、各得たる所あり、慣れたる事あり。十人には十人の知あり、百人には百人の知あり。各其人の長ぜる所を取用ふべし。さばかり才ある人も、天下古今、もろもろの事、われ一人の知にては知りがたし。一人の智は限あり、衆人の智はきはまりなしといへり。

一 天命は天のくだす所、人のうくる所なり。命は猶令のごとしとて、下知の意なり。天よりくだる故に天命といふ。天命に常あり變あり。善を行へば福あり、惡をすれば禍あるは常なり。善人に禍あり、惡人に福あるは變なり。人の吉凶、禍福、壽夭、富貴、貧賤、萬の幸不幸、皆天の命ずる所なり。人間の萬事、天命にあらざる事なし。

人倫—人間といふに同じ、倫は類の意

杈首—柱上に叉ありて横木を架すべきもの

君子は云々

一人倫にまじはり、萬事を行ふに、心平かに、氣和して、靜なるべし。靜ならざれば、氣騷しくあらくして、道理明ならず、道を行ふことかたし。故にまづ心氣ををさめ、和平にして靜なるべし。血氣さかんなる時は、氣さかのぼりて、心もともに定まらず。たとへば氣の上る病あれば心氣をさまらず。酒に醉ひたる時は、氣のぼりて心みだる。家を新に作りて、棟杈首梁柱など未だおちつかざる時、大風にあへば、倒れやすし。材木をりあひて後は、大風ふきてもたふれがたし。人も血氣をさまらざれば、人に對するにも心さだかならず。浮氣にておちつかざれば、言も行も、理にあたらず。戰場にて敵と戰ふにも、氣上りて心しづかならざれば、動きさわぎて、敵にかちがたく、退きやすし。文字をかくにも、字ごとに其所におちつきて、ゆたかに見ゆるは能書なり。文字おちつかざるは、惡筆なり。萬の事皆氣の下にをりあひて靜なる時ならでは、道理にかなひがたし。

一心氣和平にして人をとがめず、わが身にかへり求め、己をせむれば、身をさまり樂多し。此工夫甚益あり。常にこれを以てわが心ををさむべし。もし此工夫を忘れば、必道をうしなひ、樂をうしなふ。古語に曰、君子は己にもとむ、小人は人に求む

ずと見えたり

頑なるを云云―前註、一一六頁參照

内、人のいさめをふせぎ怒るより大なる惡なしと、古人いへり。からやまと、昔より、人の行あしくて、身をうしなひ、家をほろぼすも、皆諫をふせぐよりおこれり。深くいましむべし。

一 世に居るには、人を惡みせむる心かろかるべし。重くすべからず。いかんとなれば、およその人、書をよみ古を學んでも、道にそむく人おほし。況や學ばざれば、世のことわりの善きも惡しきも知らず。知らずしてなせるひが事なれば、惡むべからず、あはれむべし。頑なるを怒りにくむ事なかれと、尙書にも見えたり。

一 我が身すら、わが心にかなはず、自らせじと思ひし事をも、あやまりする事多し。いはんや人のわざ、わが思ふ如くなるべきやうなし。其上、人心の同じからざること、其面のごとし。人のわが心にかなはざるを恨むべからず。

一 人の心は時によりかはりやすし。人の心も、わが心も、皆たのむべからず。是後悔なき道なり。

一 樂を知る人は、天をうらみず、人をとがめず、世に求めなくして、其分を安んず。樂を知らざるものは是に反す。

して忠肅と謚せり

一指云々—鶡冠子の語に一葉目を蔽へば太山を見ず兩豆耳を塞げば雷霆を聞か

ことをにくむは、天の御心なり。天の物をあはれみ給へる御心をうけて、人の心とする所、卽仁なり。不仁の人は、人をめぐみ、物をあはれむに心なくして、殺すことを好む。かくの如く不仁ならば、他の才多しといへども、天道にそむき、人道にかけて、見るに足らず。

一利は天地より生じて、天下の人にあたへ養ひ給ふ理なれば、天下の公物なり。われ一人の私ものにすべからず。人とともに同じく利を得れば、人々各其所を得て害なし。身に私して、我一人利を得んとすれば、爭出來て、かへつて我が身の害となる。義を行ひて自ら來る利は、眞の利なり。わが益となる。むさぼり求むる利は、眞の利にあらず。必身の禍となる。是利を求むるには非ず、害を求むるなり。

一一指目をおほへば太山不レ見と、古語にいへり。人の心は、もと明なる物なりといへども、私欲のおほひありて心體をふさげば、くらくして道理に通ぜず。故に心を明かにして是非にまよはざらんことを思はゞ、私欲を去るべし。欲去れば心明なり。本心如二日月一、嗜欲食レ之旣と、山谷が詩にも見えたり。

一いにしへより無道の人、其惡行まことに一事にとゞまらず、その品多し。されども其

貧しきに同じ

徐孝節—名は度、支那南北時代の安陸の人、夙に驍勇を以て聞ゆ卒

みて、わが心を苦めそこなふべからず。人の無禮にして、我ををかしあなどるとも、おろかなる故と思ひ、いかり惡むべからず。子弟のともがら、我におろそかなりとも道を知らざる故と思ひ、いかるべからず。心をくるしめて益なし。下部などは、ことに習はし惡しければ、おろかにしてさとしがたし。その惡しきを、いましめ教ふるはよし、怒りせめて、言と色とをはげしくすべからず。我が心の和樂をやぶり、人のうらみをとる。言と顏色とはげしからざれども、わが行正しく、言にたはぶれなければ人自らおそれて侮らず。

一心に主なければ、事をつとむる時早過ぎてさわがしく、又おそ過ぎて怠となり、或は事に先だちてあやまち、或は事におくれて間にあはず。主あれば心つねに定りて、遲速なく、よきほどなる故、あやまち少なし。

一徐孝節といふ人、幼少より物を殺すことをいましめ、蟻のあつまり居る處をも、ふみころさんことをおそれ、よぎて道をゆけり。其心善なりといふべし。此心をおしひろめて、まづ父母兄弟を愛し人倫に及ぼし、次に萬物に及ぼさば、仁愛の道ひろく行はるべし。善心をおしひろむる工夫、常にかくの如くすべし。夫生すことを好み、殺す

心は天君—前註、一四九頁參照
まどしき—

天地の樂なり。此樂たゞ人にあるのみにあらず、鳶のとび、魚のをどるも、凡禽獸のさへづり鳴くも、草木のさかえ、花さき實のるも、みな是天機の發生する所、萬物自然の樂なり。これを以て、人の心にもとより樂あることを知るべし。もし欲にひかれて、此樂をうしなふは、天地の道にそむけり。いかなる横逆にあひ、不幸にあふとも、常に此樂を失ふべからず。聖人やゝもすれば、此樂を說き給ふ。此樂の人に切なることを知るべし。仲尼顏子の樂は、我輩愚者の知るべきことにあらず。ただ愚人にも、各生れつきたる樂あることを知りて、樂を失はざる工夫あるべし。われも人も、人欲さかんなれば、此樂を知らず。樂と欲と兩立せず。樂めば欲なし、欲あれば樂なし。此理をよく思ひて、わきまへ知るべし。樂は常人の事にあらずといふべからず。

一心は天君にて、身の主なり。つねに樂ましむべし、くるしむべからず。わが身貧賤にして、或は不意の禍ありとも、これ天命なれば、うれふべからず。樂を失ふべからず。又人の我に惡しきをば、忍びてゆるすべし。うれふべからず。かくの如くすれば、心のくるしみなく、樂多し。身のまどしきをうれひ、又みだりに人をいかり惡

生けるばかりを云々｜新古今集後惠法師、歎きつゝ今年も暮れぬ露の命生けるばかりを思出にして

禮記に云々｜禮記の樂記に、君子は其道を得るを樂み小人は其欲を得るを樂む

し。是樂まざればなり。かくのごとくなれば、人となれるかひなし。生けるばかりを思出にす。生を得たりといひがたし。飲食聲色を樂むといへども、欲多く節なくして、かへりて身をそこなひ、樂いまだつきざる内に、憂はやく來る。愚者のしわざかくのごとし。禮記に、君子は道を得ることをたのしみ、小人は欲を得ることを樂む。道を以て欲を制すれば、たのしみて迷はず、欲を以て道を失へば、迷ひて樂まずといへり。君子は常にたのしみて日をおくり、小人は常にうれひて日をおくる。衰老の身は、殊に餘日すくなければ、一日を以て一月とし、一月を以て一年とする工夫をなすべし、一日一時も樂まずして、あだに時日をおくるは、愚なりといふべし。

一　樂は人の心に生れつきたる天機にして、本自これあり。されども私欲あれば、耳目口體の欲にそこなはれ、喜怒哀懼の情におほはれて、此樂を失ふ。君子は情慾にやぶられずして、常に此樂を失はず。いかなる患難の事にあひても、此天然自有の樂を改めず。又風花雪月の外境にふるれば、心の内にある本然の樂、外物と相和して、彌樂む。是外物を以て、はじめて樂とするにはあらず、外物來りて、本然の樂をたすくるなり。天地の道、陰陽の化、四時のめぐりは、つねに和氣あり。是

> 妍媸—美醜といふに同じ。妍は麗也美好也、媸は醜也淫也癡也。陸機文賦に妍蚩好惡の句見ゆ

はず。

一我が身に才ありても、ほこるべからず。才にほこれば、必あやまる。其上人心信服せず。小才ありとても、聖賢の書をあまねく讀まず、歴代の史にひろく通ぜずんば、古今天下の是非をわきまへがたし。經書にくらくして道を知らず、古今に通ぜずしてふるき迹を考へず、小才をたのみ、あながちに世の理をわかたんとすれば、あやまり多し。たとへば星なき量を以て、物の輕重をはかり、くもれる鏡を以て、物の妍媸をわかたんとするが如し。唯へりくだりて、人にとひ、古を考へて、義理を明むべし。愚なるわが心を以て、人をほめそしり、わづかなる才をたのみて、みづから是非を決すべからず。

一人生此日の再び得がたき事を知りて、時々其事をつとめて怠らず、日々此生を樂みてうれへず、よくつとめ、よくたのしむ人は、一日を以て一月とし、一月を以て十年とし、十年を以て百年とす。つとめとたのしみとを以て身を終る。智者のしわざ斯のごとし。勤とたのしみを知らざる人は、たとひ百歳の長壽をたもつとも、常に怠りて、一生の間、何のなし出せる善事なし。是つとめざればなり。常にうれひくるしみ多

抱朴子―内外二篇八巻晉の葛洪の撰にて主に神仙道術の事を論ず、ハウボクシと讀むが普通なれど原本往々ハウハクシと訓ぜる所あり暫くこれに從ふ

しむ。たのしむ者は常にあきたる。慾多くして、足る事を知らざるものは、富貴にしても、分限を知らずして、あきたらず。あきたらざる者は、樂むことを知らずして、外に求めて止まず。つひにわざはひとなる事、亦多し。

一抱朴子といへる書に、玄蟬潔饑、不羨蜣蜋穢飽といへり。言ふ意は、蟬はきよき露を飲み、うゑて腹空しけれど、蜣蜋の糞土をくらひて、常に飽けるをうらやまずとなり。しかれば、廉潔にして貧賤ならんは、不義にして富貴なるにまされり。不義の富貴うらやむべからず。世にへつらひ、人をむさぼりて富を得るは、樂むべき理にあらず。貧賤なるは、かへつて富貴にまさる道理もあり。よく思ひて知るべし。

一萬の事、正あり、中あり。正とは邪ならざるを云ふ。是善なり。中とは過不及なくして、よきほどなるを云ふ。是至善なり。のどかわく時湯水をのみ、うゑて食するは是正なり。よこしまにはあらず。かわくとて飲過し、うゑたるとて食過すは、中にあらず。よきほどに飲み食ふは中なり。是を以て萬事をおして知るべし。正なれども、中ならざれは、至善ならず。凡萬のわざ、過不及なく、よき程なるは、中なり。是即道のある所なり。過不及ありて、よき程ならざれば、善事なりとても、道にかな

燕人韓嬰の著にして故事故語を雑引し之を證するに詩經の詞を以てせるもの也

子曰云々―論語學而篇

福は禍の先とす。求めざるに自然に福來るはよし。われより求むべからず。我より求めたる福は、必禍となる。唯わが身をつゝしみ、分を安んじ、わが職分をつとめて、天命にまかすべし。利とは財利のみにあらず、一切わが身のために便よきことは、皆利なり。我が爲に便よきことを計るは、皆人に害あり。故にわが利は人の害なり。人の害は又わが害となる。たとへば環のはしなくして、めぐりて又かへるが如し。よく此理を知りて、利をむさぼるべからず。

一子曰、不患人之不己知、患不知人也。人の我を知らざるは、人の愚なるなり。我がとがにはあらず。憂とすべからず。人の善惡を知らざるは、我が愚なるなり。自らはづべし。又我がよき事を人に知られんと求むるは、小人の心なり。賤むべし。

一人の過をそしり、不善あるを甚しくせめ恥しむべからず。必人のうらみとなる。或はとがある人をうちたゝきて、一旦心に快くすといへども、其人もし堪忍せずして報いば、大なるわざはひとなる。怒をおさへて、後のわざはひを能くかんがへ、わが心に十分快きを求むべからず。いやしき下部に對しても、此心づかひあるべし。

一慾すくなくして、わが身の足る事を知るものは、分限を安んじて、貧賤にしても亦樂

自らなせるわざはひ云云—書經太甲中に天の作せる孼は猶ほ違る可し自ら作せる孼は逭る可からずといへる思想也

韓詩外傳—

あり。

一 怒と慾とによりて、少の間、少の事を堪忍せずして、莫大のあやまりとなり、一生のわざはひとなる。はては身をうしなふにいたる事あり。つゝしむべし。すこしの間、つつしまずして、災にいたるは、いたりて愚なり。

一 人の身のわざはひある事、多くは私欲よりおこる。私欲を恣にせざれば、わざはひなし。凡人のわざはひは、思はざるに、不幸にして、天よりたま〳〵降るは稀なり。もしあれども、事によつて遁れやすし。私欲を行ひ、罪をかして、自らなせるわざはひは、天よりくだる禍より多くして、遁れがたし。それわが身を利せんとすれば必人に妨あり。人を妨げたるむくいは、必わが身の害となる。人を妨げて、たとひ一日幸にして利を得、人のせめを免るゝといへども、必天のせめ身にむくいて、わざはひ來る。凡とがを犯して公につみせらるゝは、目に見えて明なり。天のせめは、目に見えずして、いつとなく降れるゆゑ、人知らず。其わざはひ來れば、唯不意にふり來るやうに思ふは、ひが事なり。

一 利を求むれば必害あり。福を求むれば必禍あり。故に韓詩外傳に曰、利は害の本

一事韓非子に見え、二人の傳は共に萬世統譜に出づ

董安宇といひし人は性緩し。常に弓の弦をおびて戒とす。弦は急なるものなり。かやうにわが惡しきを改むるに志あらば、いかに偏性なりとも、などか氣質を變ぜざるべき。學問は氣質のあしき所を知りて、克つを要とす。是あやまりを少なくする道なり。かくの如くならざれば、學問の益なし。

一事急にして多しといへども、心はせはらしく、忙しかるべからず。心せまり忙しければ、和樂を失ひて、心を苦むるのみならず、思案も詳ならずして、あやまり多し。

一君子は、人をせむる心つねにすくなく、己をせむる心常に多し。人をうらみ惡む心常にすくなく、人をゆるし堪忍する心つねに多し。小人は此うらなり。この故に、君子の心は、常にたひらかにして、樂多し。小人の心は、常にけはしくして、憂おほし。

一萬の事、つら〳〵思案して、後のあやまりなく、悔なからん事をはかるべし。思案なくして、いかりと慾を去らざれば、後の災となる。是智者のしわざにあらず。事を思案せずして、かる〴〵しく行へば、必あやまりあり。後悔あり。もし急なる事あらば、ことさらよく思案して、詳かに行ふべし。此の如くせば、後のあやまりなかるべし。いそぎて心さわがしく、靜ならざれば、思案なくして、必あやまりあり。悔

するどに｜敏捷にの意、するどくといふに同じ
西門豹云々

諫を聞きながら、其言を信ぜず、唯益もなきあだごとのやうに思ふは、其心くらくして、善言を聞きわけざればなり。心明なれば、よく其言の道理あることを聞きわけて信ず。又世俗の才辨ありて、言たくみなる者のいふことは、理もなき事をも聞きて信ず。其言貌ふつゝかなれば、其言に道理あれども信ぜず。是聞く人のくらき故なり。

一わが身の飲食色欲財利などの慾に克つには、たとへば強敵に對して、我が十分の力をつくして、ふせぎ戰ふが如くすべし。かくのごとくせざれば、私慾にかちがたし。是欲にかつ良法なり。もしすこしも弱げなれば、欲にかちがたく、つひに欲かちて防ぎがたし。人欲は人のため大敵なり。油斷すべからず。いかにもして克つべし。

一人のあやまちは、氣質の偏なる所よりおこる。我が氣質の惡しきを變ずるみちは、己が過ぎたるをおさへて、足らざる所をつとむべし。強すぎたる人は、やはらかなるべし。よわき人は、つとめてはげむべし。はや過ぎたる人は、ゆるやかなるべし。にぶき人は、つとめてするどに行ふべし。其餘も、みなかくの如くすべし。むかし西門豹といひし人は、性急なり。つねに韋をおびて戒とす。韋はやはらかなるものなり。

一禮記祭義に、君子曰く禮樂は斯須も身を去る可からず

らずといへり。

一富貴をきはむといふとも、人欲だにあらば、其願つくる事なくて、貧賤にして慾すくなきに劣るべし。理義の樂は、位なくして貴く、祿なくして富めり。其樂きはまりなし。いかんとなれば、内に樂ありて、外に願なければなり。

一我が愚を知らず、我があやまりを知らずして、自ら是とし、自ら知とすると、吾が藝能のつたなきを知らずして、みづからほこるは、皆心明ならざる故なり。人を知るはまことにかたし。人の胸中に、善惡かくれて見えざればなり。わが心中にある善惡は、わが身のことなれば、知りやすかるべくして、かへつて人を知るよりもかたし。いかんとなれば、わが身に私して、其惡しきを知らざればなり。故に古語に曰、知人之謂知、自知之謂明。人を知るは誠にかたしといへど、わが身を知るは人を知るよりもかたければ、是を明と云ふ。明は知より猶まされり。吾が心明なれば、わが身の惡しきを知るものなり。故にわが身に自滿して人にほこる者は、其心くらきゆゑ、わが惡しきを知らざるなり。

一言を聞きて信ぜざるは、聞くことあきらかならざるなりと、易にいへり。人の善言と

前事を云々―史記始皇本紀に野諺に曰く前事の忘れざるは後事の師也と見ゆ、賈誼の言とにはあらずその書に見えたりといふ迄也

禮經に云々

苦みて、樂を失ふ。人となるものは、此樂を知るを貴しとす。是を知らずんは、人となれるかひなかるべし。此樂を知らんとならば、まことの學問をよくつとめて其理を知るべし。

一後悔は、前にこりて、後のあやまりを戒むる益あれば、誠にこれ善事なり。されば賈誼も、前事をわすれざるは、後事の師なりといへり。然れども、ながく心の内にとゞめて苦めば、滯りて必心の病となり、和樂をやぶる。一旦いましめて後、其事をすて、かさねて、しば〳〵後悔して、心を苦むべからず。たゞ後日をいましめて、かゝるあやまり無らんことを思ふべし。

一人の心の内は、常に恭敬和樂なるべし。恭敬はつゝしみうやまふなり。恭敬ならざれば、心ほしいまゝにして、惡き方にながれて、禮の本たゝず。和樂はやはらぎたのしむなり。和樂ならざれは、心うれひくるしみ、道理にしたがはずして、樂のもとたゝず。此二は、車の兩輪、鳥の兩翼のごとし。ならび行はれて、そむかざるべし。いかなる惡しき俗人に交るとも、ながれて恭敬を失ふべからず。いかなる不幸なる事にあふとも、心をくるしめて、和樂を失ふべからず。禮經に、禮樂はしばらくも身を離るべか

最普通に稱せらるゝ所也

人と、ともに同じく利するを云ふなり。公にして私なければ、道理にかなひ、天意にかなひ、人心にかなふ。故に其心の誠おのづからあらはれて、人の譽も喜もあつく、人のうたがひ惡むことなく、求めずして、天道のめぐみも、人の愛敬もこれあり。又一言にして、上天道にそむき、下人心にちがひ、中大道にかなはざる事あり。私の一字なり。たとひ天下に聞ゆるほどの善事を行ふとも、心に私あらば、まことの道にあらず。凡私を行ひて、たとひ一旦利を得て、災なくとも、天のいかり、人のうらみ惡み、身にむくいて、かならず災にあひ、身はづかしめられ、名をけがす。天道は誠におそるべきかな。是たゞ道理を知らざるのみならず、おろかにしてわが身の損得を知らず、私を行ひて福祿を得、身をたてんと思へど、かへりて災にあひ、身をほろぼすは、わが身の損得をも知らざるなり。いたりて愚なりといふべし。

一人の心の内、道德の至りて尊く、至りて樂むべき理あり。君子はこれを知りて、尊びたのしみて、外に求めず。小人はこれを知らず、德をそこなひ、道を失ひて、これを尊びたのしまず。たゞ俗樂の賤しきわざをのみ樂とし、利欲を專らとし、長くうれひ

春は生じ云云—周禮春官宗伯疏に春は萬物を出生すといひ、釋名に萬物を寬假し生長せしむる也といひ、爾雅釋天の註に氣白うして收め藏する也といへる類にて、古來

善にうつり、過を改むべし。かやうのわが心術をつとむべき折節を、あだに思ひて、いたづらに過すべからず。かく心にかなはざる所を、よくこらへ勤めてこそ、わが心の德も、學問も、すゝむべき理なり。かゝる事にあはざれば、心をさめ、欲をしのぶ工夫すゝまず。

一天道は、春は生じ、夏は長じ、秋はをさむ。三時は皆事あり。冬はたゞ生氣のかくれしづまるまでにて、しわざなし。夜ふけて人のねいりたる時、無事にしてやすむが如し。冬の氣閉藏するは、卽是、來春發生の本なり。冬寒氣はげしくして、陽氣をさまりかくるれば、來春の陽氣さかんなり。故に冬あたゝかに雷なりて、陽氣動きもるれば、來春の發生の氣よわく、秋穀の實のりもうすし。人夜半の後いねざれば、血氣しづまらずして、明日力よわし。人心も靜なる時に養ひて、動く時の本とすべし。心しづかならず、動きさわげば、わざをつとむるに力なく、まよひてあやまり多し。

一劉行簡曰、天下の事、下人心に合ひ、上天意に合ひ、中大道に合ふ。唯一言あり。曰公のみ。公とは私なきを云ふ。私とは、ひたすらわが身を利せんことを好みて、人のためをかへりみざるを云ふ。是人我をへだつるなり。公とは人我のへだてなく、我と

一上代よりこのかた、誠は日々におとろへ、飾は日々にさかんなり。侈は彌まさり、儉約は彌すたる。質朴をばいやしみ、華美をば擧む。今の世に道を行はゞ、僞り飾をやめて、古風に立ちかへり、すなほにして眞實なるをたつとびつとむべし。眞實なれば、人も感じてしたがひやすし、時俗にうつり行くべからず。

一我が身不幸にて、災にあひ、讒言にあひ、或は主君父母兄弟朋友の不仁無禮にあふとも、古來和漢の内、なほそれよりも甚しき災にあへる人を思ひくらべて、みづから心をなぐさめ安んじて、うれふべからず。是古人の説なり。君子の天命をやすんずる工夫は、別に有るべし。されど是は一のやすき手だてなり。知るべし。

一およそ世間の、はからざる不意の災出來るとも、是古今の人間にあるならひぞと思ひて、心をくるしめ憂ふべからず。兼好が歌に、

ならひぞと思ひなしてやなぐさまむ、わが身ひとつのうき世ならねば。

一人の我に對して無禮横逆あり、又事不順ありて、わが心にかなはざる事あらば、是すなはち善心をおこし、私欲をこらふる學問のつとめ、德をすゝむ所なりと思ひ、人の不順なるを堪忍し、わが身をかへりみ、心をせめおさへて、怒をこらし、欲をふさぎ、

有れ、如何あらうともまゝよの意

人の毀らざるやうに心がけつとむべし。名ををしむも、義において害なし。此二のこと缺けなば、其餘は見るに足らず。

一善をなすに、人の誹をおそれて止むるは、善を好むこと誠あらざるなり。小人財と色とを好むには、人のそしりをかへりみず。是好むこと誠あればなり。學者の善をなすことも、亦かくの如くなるべし。

一凡わが身にある事をたのめば、必身の禍となる。才をたのめば、人をないがしろにして、人にやぶらる。勇をたのめば、人をあなどりて、人にほろぼさる。氣力をたのめば、慾をほしいまゝにして、病おこり、命をうしなふ。勢をたのめば、おごりて亡ぶ。智をたのめば、身にほこりてあやまる。

一心も事も、天理に專一にして、人欲をすこしも交ふべからず。是を至善と云ふ。君子の心事、必かくの如くなるべし。もし十分の天理に、一分の人欲あひまじはらば、たとへば、黒白のあひまじはり、香臭の一器にあるが如し。十分の白き物に、一分の黒き物まじはれば、白きとはいひがたし。香ばしき物も、少し惡しき臭をくはふれば、にほひよからざるが如し。

を云々―劉向の說苑に衣成れば則ち衽を缺き宮成れば則ち隅を缺くといへる類也

かれ―矩也標準の意

さもあらばあれ―さうあるならば

缺くも此意なりと、古人いへり。

一　世は海なり、身は船なり、志は楫なり。楫を悪しくとれば行くべき方に行かず。風波にあへば船くつがへるが如し。志のもちやう肝要なり。悪しく志をもてば、身をくつがへす。楫のとりやう悪しくして、船をくつがへすが如し。

一　わが身に、事足ることを知れば、貧賤にしても、亦たのしむ。足ることを知らざれば、富貴なりといへども樂まず。

一　我が身の行の善悪は、世人の譽毀をあながちにかねにして、喜び懼るべからず。たゞ道理を以て法とすべし。わが行道理にかなはゞ、世こぞりて毀るともおそるべからず。わが行道理にそむかば、世こぞりて譽るとも喜ぶべからず。よき人に譽られ、あしき人に毀らるゝこそ、君子とはいふべけれ。人ごとにほむる者は、かへりてうたがはし。おほくは巧にして飾る人なるべし。

一　わが身を修むるには、譽られんとすべからず。たゞ過なからん事を思ふべし。我が身だに道理にかなはゞ、人の毀譽は、さもあらばあれ、喜憂とするにたらず。但士の節義武勇の道と、又利欲のけがれなく、廉潔にしてむさぼらざる、此二は、なべて

の禍となる事をかへりみず、ひが事をなして身を立てんと思ひ、かへりて身をほろぼし、家をやぶるにいたる。かなしむべし。これわが身の惡をやめずして、天の責をまつものなり。わが身を利せんとて惡しきことを行ひ、人をくるしめて身をたのしむ。是みなわが身の害となる事を知らず。

一道を主とせざれば、わが心の、怒り、喜び、好み、惡むにまかせ、わが私欲にしたがひ、利欲損得にかゝはり、或は人のひが事いふにまよひて、惡を善とし、善を惡とす。親類朋友に私し、或は人の請託をうけて私する故に、道にかなひ、公にしたがふことなし。是無學にして道を知らざる故、何をより所として、理非をわきまふべきやうなし。たゞわが身の私意を主として、わがまゝに行ふ。或は書を讀めども、私多き人は、道を主とせずして欲にしたがふ故、まなべども益なし。

一家の內妻子家人の、われにつかふる勤、十分にわが心にあはざるとて、せめ怒るべからず。人にまじはるには、恕を以て人の非をゆるすべし。又わが衣食、家居、器物、財用など、事ごとに、わが心に十分に足りなんことを求むべからず。常に不足の事あるがよし。十分心にかなへば禍あり。家のいらかをふきて三瓦をおほさず、衣のえりを

陰徳—前に既に解説あり又註を加ふ、一三五頁参照

て我儘なるを云ふ。目に非禮をみて色にそみ、耳に非禮をきゝて淫聲にまよひ、口に非禮をいひ、飲食をほしいまゝにむさぼり、鼻は香をめで、形はおこたり、或はなすまじきわざをなすは、皆是人欲なり。又天理と云ふも他にあらず、五官のなすこと、よきほどの道理にあたるを云ふ。心は天君なれば、耳目口鼻形の五官をつかふは、君として臣をつかふが如く順なり。もし心の役を失ひ、思案なくして、五官にまかせしたがへば、かへりて形より心をつかふ。たとへば君として臣につかはるゝが如し。是逆なり。

一人のためにはかりて心をつくし、或は其才能を君相にすゝめ、人のため害をのぞき、貧困をめぐみ救ひ、人に恩をほどこす事、唯ひとすぢに仁心より行ふべし。人の悦びて其返報せん事をのぞむべからず。我が名聞のためにすべからず。是陰徳なり。若し名聞のために善を行ひ、又人にほどこして、其報をのぞめば、仁心むなしくなる。如此すれば、力を用ひて善を行へども、其事は是にして、其心は非なること、をしむべし。誠の道にあらざればなり。

一不知の人は、義理をわきまへざるのみにあらず、又利害損得をも知らずして、わが身

大和俗訓巻之四

天君—荀子天論篇に、耳目鼻口形能く各接する有りて相能くせず夫是を之れ天官と謂ふ。心中虚に居り以て五官を治む夫是を之れ天君と謂ふ

○心術下

一心は天君と云ふ。身の主なり、思ふを以て職分とす。耳目口鼻形は五官と云ふ。官はつかさどるなり。役をつとむるを云ふ。耳は聞ことをつかさどり、目は見ることをつかさどり、口は物くひものいひ、鼻は香をかぎ、手足の形は動くことをつかさどる。此五官は、各一づつの役ありて、他事に通ぜず。心は天君なれば、五官をさしつかふ主なり。五官のしわざ、見ること、聴くこと、言ふこと、嗅ぐこと、動くことにつきて、心によく思案して、義理に當るか、あたらざるかを考へ行へば、五官のしわざ、あやまりなく、後悔なし。もし心其職分をうしなひて、思案もなく、耳目鼻口形の欲にまかせて、義理の當否を察せざれば、人欲ほしいまゝにして、天理ほろぶ。是心の官をうしなひて、よく思はざるによれり。人欲とは他にあらず、五官のしわざにまかせ

ちを改むれは、わが幸甚し。怒るべからず。孔子曰、丘幸あり。もし過あれば、人必知之。わが過を人に知られて咎めらるゝは、わが幸なりとのたまへり。聖人の言たふとぶべし。

一ちかき頃の俗語に、用心は臆病にせよといふ事、まことに道理によくかなへり。是はどの小事は、何のうれひかあらんと思ひて、けなげにして懼れざるは、過のはじめわざはひの本なり。莫大の過わざはひは、必しばしの間少なることをおそれずして、つゝしまざるより起るゆゑ、小事をおそれつゝしみて、けなげならざるが、わざはひなき道なり。武王の銘に、勿言何害、其禍將至とのたまひしも此意なり。

孔子曰云々―論語述而篇

用心は臆病にせよ―和漢古諺に見え、下に油断強敵となるといへり

何其久也――詩經邶風旄丘の章の一句也
はやく――もはやゝ、もうすぐになど云ふ意

ぞ人の方より、我が心にかなふやうに、我がために道をつくさんや。又世には、いかなる障もありて、心にまかせざる事も有りぬべし。何事も、さだめて故あらんとおもひやりて、人をたやすく恨みとがむべからず。我が心にかなはざるとて、あやまりなき人を恨み誹るは、いと罪深し。かくの如くおもひはかりて、人を恨みそしらざる人は、世變と人情をよく知れる人なるべし。詩經に曰、何其久也、必有以也。いふ意は、人の、わがもとに、何しに久しく來らざるや、必ひまなきか、病あるか、ゆゑありて來らざるなるべしとなり。是人の久しくおとづれざるを恨みずして、いかさまにも障ありて來らざるなるべしと、思ひなだめしなり。朱子の詩傳にも、此詩は人情をよく知れりとて、ほめ給ふ。心せばく、智あさき人は、人情事變を知らで、少し我が心にかなはざる事あれば、はやく人を恨みいかりて、心を苦むるは、心せばく世なれぬ人といふべし。

一人われをそしらば、わが身の悪しきを顧みとがめて、人を恨むべからず。もし我が身にあやまりなければ、謗ありても我が徳に害なし。もしわが身に過あらば、そしらるゝは元より其理なれば、うらむべからず。いはんやそしりを聞きて、身のあやま

日和―ヒヨリと讀むが普通なれど暫く原本に従ふ

一むかし二人同じ船にのりて行くに、一人は性急なり。日和あしく、舟のおそきを苦みて、晝夜心をなやまし、形かじけたり。一人は性おだやかなり。舟のおそきを苦まず、よく食し、やすくいねて、顔色うるはし。其所につきしかば、二人一時に陸にあがる。此間、船おそきとて心をくるしめし者、何の益あるや。唯みづから苦めるのみ。是心みじかき人のいましめとすべし。天下の事、我が力になしがたきことは、唯天に任せ置くべし。心をくるしむるは愚なり。

一世に交るに、言すくなく、わざをよく勤め、へりくだりて我が才にほこらず、人を敬ひてあなどらず、人をそしらず、人情を知りて人をうらみとがめず、世變を知りて時宜に應じ、信義をかたく守りて約を變ぜず、身をいさぎよくして財利のけがれなし。かくの如くなれば、過すくなくして、いづくにても人の惡みそしるべきやうなし。詩に曰、かしこにあつても惡まるゝ事なく、こゝにあつても厭はるゝ事なしとは、是を云ふなり。厭ふは厭なり。

一人の我にうときを恨むるは、人情を知らず、又は世になれぬ人といふべし。我が身はわがまゝなれど、それだに心に任せざる事多くして、わが道をつくしがたし。いかん

尚書云々―書經君陳篇

堪忍しすませば―堪忍しおほすればの意也

海濶從魚躍―古今詩話に出づ、又大歷の元覽の句に、大海魚の躍るに從せ長空鳥の飛ぶに任す。

是非をあらそふべけんや。唯我が身をかへりみて、我が不義不禮なるを自ら責むべし。人をとがむ可らず。我が身をかへりみ修むれば、人の上をとがむるにいとまなし。

一尚書曰、必有レ忍、其乃有レ濟、有レ容德乃大。忍ぶとは堪忍するなり。堪忍すれば怒をおさへ、事をやぶらずして禍なし。人我の間和平にして、萬事とゝのふ。故に有レ濟と云ふ。古語に、忍過ぎて事堪レ喜といへり。堪忍しすませば、必よろこびありとなり。人の惡しきを堪忍せざれば、怒起り、人にあらそひて、人我の間和順ならず、世に立ちがたし。堪忍すればあらそひ出來ず、口論にも及ばずして恥辱なし。心中平かにして樂多し。有レ容とは、心廣くして、人の善をば取りて用ひ、人の過あるをばゆるすを云ふ。容るゝ事あれば、其德の器大なり。たとへば大なる器の、其量ひろければ、物を入るゝ事多きが如し。古人の詩に、海濶從二魚躍一天空任二鳥飛一といへるがごとし。忍は力を用ひて堪ふるなり。容は其德ひろくして大なれば、忍ぶはいふに及ばず。まづ務めて忍びて、其工夫熟して後、有レ容にいたるべし。忍は生しきなり。有レ容は熟するなり。されど初より、容の工夫もあるべし。人の善を取り、人の過をゆるす事、はじめより無くんばあるべからず。

克己―論語顔淵篇に顔淵仁を問ふ子曰く己に克ちて禮に復るを仁と爲す云々とあるより出づ

漸につとむれば、久しく勤めてもつかれず。怠なく、たゆみなければ、しづかにしても、はか行くものなり。

一色慾名利の念、皆是人情なれば、時としておこりやすし。其まゝおきては德を害ふ。其おこる時にいましむるには、克己の工夫を用ふべし。己に克つこと、尤かたし。十分の力を用ふべし。おろそかにすべからず。但はじめて慾のおこるきざしに克つこと甚やすし。是克己の要法なり。平生學問し、道義を好む志ふかくば、おのづから名利色貨の念はうすくなるべし。天理すゝめば人欲しりぞく。人欲すゝめば天理しりぞく。凡物は二ながら一時に立たざる理なり。

一心の中は灑落にして、青天白日の如く明白なるべし。心の中に物をたくはへ、おほひくらますべからず。思慮は深く精しくすべし、淺くあらくすべからず。事をなすにはふかく思案を好みて、かる〲しく早く決定すべからず。思案は靜かにして急がざるをよしとす。はやく決定すれば、必あやまりあり。

一人の我に不義無禮なるをば、いかり恨むべからず。それは人のあやまりなれば、我が心にあづからず。是小人の常情なれば、責むるにたらず。なんぞ怒りうらみて、彼と其

むつかしく—面倒臭くの意

るしめ、樂を失ふべからず。是不智といふべし。心のかろく速きをおさへ、又おこたりをいましめ、つねに心を定め、早からず遲からず、よき程なるが、心ををさむる法なり。心は身の主にて、萬事の本なれば、つねに靜かにやすらかにして、妄に動くべからず。心みだりに動けば、亂れて明ならず、萬事に應じて過多し。事いそがはしき時は、手足のうごき、口の物いふ事は、早からざれば事に及ばず。心はいそがはしかるべからず。手足と目口耳鼻は、たとへば下人のごとし。心は身の主にて、目口耳鼻手足の事のよしあしを正す役なり。故に心は靜ならでは、思案は爲しがたし。およそ事をなすに、ゆだんにならざる事は、緩の字を用ひて、みだりにいそがず、よく思案して、詳かに事の是非をわかちて行ふべし。古人これを待と云ふ。待とは事をいそかずして時をまち、詳かに思案して、道理を求め行ふことなり。ゆだんするにはあらず。みだりに早く決定すれば、必其事をしそんじ、後悔あるものなり。

一 凡つとめに退屈し、久しく勤めがたきは、おほかたは、精力のよわきにはあらず。氣ずるにして、事を勤むるをきらひ、心いそがはしくて、みじかき故、むつかしく思ひて、はやく退屈するものなり。心しづかにして事をきらはず、次第に隨ひて、一づつ

し。

一子弟及奴僕に對して、其過をたゞさば、敎を本とすべし。いかりを先だつべからず。如斯なれば、子弟奴僕の心を得て、恨なく、したがひやすし。是子弟奴僕をいましむるの要法なり。

一智はさとるとよむ。心の明なるなり。心あきらかにして曇なければ、萬の道理によく通じ、是非善惡をわきまへて、迷はず。たとへば燈明かにして、よく物を照すが如し。智なければ、善を好めどもくらく、迷ひて行ふべき道を知らず、あやまりて僻事多し。又智なければ人を知らず、君子をすてゝ小人を用ふれば禍多し。智あればよく道理の是非をわきまへ、非義を行はずして身をたもつ。よく人の善惡を知りて、君子を近づけ小人を退ぞく。是身をさめ、人をさむるに、益ありて害なし。此故に智は人身の大寶なり。心明なるは智なり。心明なれば、よく人の善惡を知る。樊遲問知、子曰知人。これ人を知るは、知の明なる所なり。

一平生の氣象は、從容としづかに和樂なるべし。輕卒急迫るべからず。和樂は人心に生れつきたる天機なり。つねに和樂を失ふべからず。又益なきことを思ひて、心をく

樊遲問知―
論語顏淵篇

責めはたれば—責め促せばの意

心の官は則思ふ—孟子告子下に出で其語の下に、思へば則ち之を得、思はざれば則ち得ずといへり

ひなして、責めはたれば、其人うらみそむく。是皆情の過ぎたるなり。又あはれむべきを憐まざるは不仁なり。是尤不善なり。哀しむべきをかなしまず、樂しむべきをたのしまざるは、ひたすら情なしといふべし。是等は皆情の不及なり。七情おこれども過不及なくして、禮義にとゞまるべし。是古人の、發二乎情一止二于禮義一と云へるなり。およそ天下の道理は、過不及なき中にいたるが至善にして、是道のある所なり。食する一事を以ていはゞ、過不及なく、よき程くらへば、身をやしなふ。是中なり。是道のある所なり。過れば脾胃をやぶり、不及なれば身の養たらず。是皆中にあらず。

一人の血氣めぐらざれば病とす。人の心めぐらざれば愚なり。是古語なり。心めぐるとは、事に當りて心を用ひ、思案するを云ふ。運動するなり。孟子に、心の官は則思ふといへるが如し。思案せざれば、心めぐらずして、是非をわかつことなく愚なり。事に當りて、心をめぐらし、よく思案すれば、是非をわかつ故愚ならず。人の善惡をわきまへずして愚なるは、思案せざればなり。

一欲を忍ぶこと、つとむべし。忍ぶとは、こらふるなり。學者もし欲をこらふるに力を用ひずんば、學べる甲斐なし。力なしといふべし。平生の學力、こゝにおいて用ふべ

七情…喜、怒、哀、樂、愛、惡、慾

さぐとは、慾心おこらば、はやく其慾をおさふるを云ふ。すでに慾さかんになりぬれば、心まよひて慾にかちがたし。慾のはじめておこる時、早くふさげば、力を用ふる事すこしにして、其しるし多し。慾は陰に屬す。たとへば水の人をおぼらすが如く、おぼれやすし。およそ萬の惡は、多くは怒と慾よりおこる。七情の内の二の者、尤害多し。我が身をそこなひ、人をそこなふ。おそるべし。又怒と慾との二は、養生の道に甚害あり。

一七情は、皆是人情なれば、なくてかなはず、過不及なく、よき程なるは中なり。過ぎたるは尤害多し。不及も亦理に合はず。人をあはれむは誠に善なり。されど我が心にあへりとて、妻子從妾などをひたすらに愛し過し、あくまで恩をほどこすは、道より出でたる愛にあらず。是私の心の甚しきなり。愛におぼれては、其人の惡しきを知らず、愛すぐれば其人必おごりて道にそむく故、かへつて其人のわざはひとなり、又わが禍となる。怒るべきを怒るは、人の不善をいましむるの道なり。怒るまじきに怒り、或は怒るべき事にも、いかり過ぎては、人をそこなひ、我が心をそこなふ。にくむ事過ぎぬれば、其人の善あるを知らずして用ひず、小のあやまりを大に言

秦宓の語也

易に云々ー易の下象傳に、山下に澤有るは損、君子以て忿を懲し欲を窒ぐ

し。天を欺き、人をあざむくは、共に我が心を欺くによれり。我が心に不善と知りながら、これを行ふ、是自欺なり。我が心あざむくべからず。およそ、天と人と我が心と、皆あざむくべからず。唯一すぢに誠あるべし。こゝを以て、君子の心は、つねに青天白日の如くなり。小人の心は、常に陰暗くしてはかりがたし。

一易に、懲ㇾ忿窒ㇾ慾といへり。忿をこらすとは、いかりをおさふるなり。怒は陽に屬して、火の物をやくが如し。おこりやすくして人を害し、我が心の徳をそこなふこと甚し。いかる時、先いかりをわすれ、心を和平にして、後理の是非を見るべし。又いかる時、言をいだすべからず。いかる時言を出す詞は、必ひが事ありて後悔多し。つゝしみこらへて、言ふべからず。人のいふこと、行ふこと、悪しき事あらば、怒らずして彌氣を平かにし、心を和かにして、其是非を詳かに述ぶべし。人隨はずともいかりて心を動かし、氣をあらくすべからず。心氣和平ならざれば、たとひ其いふこと理に當るとも、其心はまづ非なり。いはんや怒りて心をうごかせば、其いふこと理にあたらざるをや。慾とは、唯財寶をむさぼるのみにあらず、名利、酒食、好色、或は、淫樂、器物、酒宴、佚遊を好みおぼれて、我が私をなすは、皆慾なり。慾をふ

吉田兼好―徒然草の著者也、本文に出でたる語の上に、狂人のまねとて大路を走らば則ち狂人也惡人のまねとて人を殺さば惡人也驥を學ぶは驥の類舜を學ぶは舜の徒也といへり

天は云々―三國志の蜀志に見ゆ、

盃の底なきが如くなるべし。吉田の兼好が、僞りても賢をまなばんを賢といふべしと云ふ。此のことば、甚教に害あり。およそ人道は唯忠信にあり。すでに僞あらば、其餘は見るにたらず。僞りて賢をまなぶ、是を小人と云ふ。なんぞ賢といはんや。漢の王莽、宋の王荊公など、いつはりて賢を學びし故、はじめは君子の名を得るといへども、つひに天下をうばひ、天下を亂れり。是を賢といはんや。君子の道は純一にして僞なかるべし。かりそめにも、いつはれる念を心にさしはさむべからず。たとひ外に善を行ふとも、内に誠なくば君子の道にあらず。故に身ををさむるには、唯一すぢに誠の道を行ふべし。もし凡夫のためにいはゞ、僞りてするも、誠にするも、力を用ふる其勞は同じければ、とてものことに、唯まことを行ふべし。僞りて善を行ふは、あらはれて惡をするにまされども、誠あらざれば天道人道にそむきて、其つみふかし。誠いたれば、天地をうごかし、鬼神を感ぜしめ、人心を和らぐ。

一およそ人の一念の不善も、かならず天に通ずる理あり。天は高きに居て、ひきゝに聞くといへり。上天を欺くべからず。おそるべし。人をあざむけば、つひに其僞あらはる。内に誠あれば、必外にあらはるといへり。下人をあざむくべからず。恥づべ

孔子も云々ー論語學而篇に忠信を主とし己に如かざる者を友とすること無れと有るをいふ

一凡平生の心法は、眞實にして僞なかるべし。中庸に、誠者天之道也、誠之者人之道也といへり。誠は天之道也とは、陰陽のしわざ、日月のめぐり、春夏秋冬の次第、いにしへ今かはらず、草木の、春生じ、夏長じ、秋みのり、冬をさまりて、年々にかはりなきも、皆是天道の誠なり。誠之とは、人の力にて、つとめて誠にするを云ふ。人は天地の子なれば、天道の誠を法とし、したがひて行ふべし。是誠之は人之道なり。孔子も主忠信とのたまへり。此意は、誠を以て人の心の主とすべしとなり。忠信は卽人の誠なり。誠といはずして、忠信とのたまへるは、心にいつはりなくするは忠なり。言と事とにいつはりなくするは信なり。誠は天理の自然を云ふ。忠信は人のつとめ行へる誠を云ふ。理は一にして、おのづからなると、つとむるとの別あり。程子も、人道は唯忠信にあり、誠ならざれば物なしといへり。君父につかふるにも、誠なければ忠孝にあらず、萬の事、誠なければ、さばかりの善事をなすといへど、僞となれば實事にあらず。つとめ行ふもあだごとなり。是無物なり。善事をつとめ行はば、名利のためにせずして、誠を以て行ふべし。是誠の善なり。

一言と行ふと、心と言と、表裏なかるべし。よろづの事いみじくとも、誠なくんば玉の

し、今吾が作す所吾子皆知る何の陰徳か之れ有らんと見えたり

陰徳を行へば云々―淮南子人間訓に、夫れ陰徳有る者は必ず陽報有り、陰行有る者は必ず昭名あり

天道の、善にさいはひし、悪にわざはひし給ふ理は、古今和漢、明白なりといへども、凡人は是を知らずして、善を好まず、悪を行ひ、ひが事をなしてさいはひを求め、我が身の祭るまじき淫祠にへつらひ祈る。いにしへを考ふるに力なくば、せめて近き古と、今の世の中を廣く考へ見て、善を行ひて益あると、みだりに神と人とにへつらひて、益なきを知るべし。されども君子の心は、福をもとめんために陰徳を行ふにはあらず、陰徳をおこなへば、求めずして福は其中にあり。

一よく後來のことをかねて知るを先見の明と云ふ。是知者の知る所、たつとぶべし。我輩の愚者は、先見の明なくして、やゝもすれば過多く、後悔多し。愚なりとも、心しづかによく思案せば、此うれひ少なかるべし。後悔すくなからん事を思はゞ、常に思案を好みて、みだりに事を好まざるべし。事を好めば事多くなりて、あやまち多く、悔多し。

一我が身の慾を恣にするより大なる禍なし。人の非をそしるより大なる悪なしと、古人いへり。此二は、義理に乖くのみならず、身を亡す道なり。常に心にかけて戒むべし。

陰徳は云々 ―此語隋書李士謙の傳に見ゆ、又事文類纂にも出でて、ある人士謙に謂ふ子陰徳多しと、答へて曰く夫れ陰徳を言へば其猶ほ耳の鳴るがごとし己獨之を知りて人知る無

にしたがひて、心を用ひて人を救ふこと、日々に多かるべし。然れば仁愛は、いやしき人も心にかけて勤め行ふべきことなり。是即天地の御心にうけしたがひて、天地につかへ奉る道なり。

一陰徳とは、善を行ひて人に知られん事を求めず、唯心の内に、ひそかに仁愛をたもち行ふをいふ。古人の曰、陰徳は耳のなるが如し。我ひとり知りて人知らず。およそ人の患をうれひ、人のよろこびを喜び、人をあはれみ惠むに、鰥寡孤獨の、たよりなき人を先にし、人の飢ゑたるをすくひ、こゞえたる人に衣をあたへ、つかれたるをたすけ、病者をすくひ、道橋を修理し、人に害あるを除き、人に利益ある事をなし、人の中を和げ、人の善あるを譽め、人の過を隱し、人の小過をゆるし、人の才藝を用ひすゝめ、みだりに人に怒らず、人をうらみず、人のいかり爭ひを止め、かりにも人をそしらず、人を侮らず、人を奪はず、人を妨げず、人の善をすゝめ、人の惡をいさめ、禽獸蟲魚をくるしめず、妄にころさず、草木をみだりに切らざる、皆是陰徳なり。凡陰徳は、人知らざれども、天道にかなふ。故に後は必わが身のさいはひとなり、子孫の繁榮を得る道理あり。かるがゆゑに、さいはひを求むるに、是にまされる祈禱なし。

鰥寡孤獨―孟子に見え又禮記王制に出づ、前註、三九頁參照

める鰥寡孤獨の類をば、我が力を以て救ふべし。鰥寡孤獨とは、老いて妻なきを鰥と云ひ、老いて夫なきを寡といひ、いとけなうして父なきを孤と云ひ、老いて子なきを獨と云ふ。此四の者は、世の中の困窮せる民にて、人のめぐみを受くべきたよりなく、飢ゑこゞえする人なり、いとあはれむべし。いにしへの聖人の政は、まづかやうのふびんなる民は、早くめぐみ給ふ。かへす〴〵我が身ひとつを愛して、人を愛せず、多くの人を苦むべからず。かりにも人に妨なく、害なからん事を思ふべし　人のうれひ苦みを救ひ、人のためにはかりて忠あるべし。疎略にすべからず。位ひきゝ人も、我に財ありて施す力あらば、貧窮をすくひ、鰥寡孤獨の、たよりなく苦める人を、分限にしたがひて憐みたすくべし。財ををしむべからず。次には禽獸蟲魚草木に至るまで、ひろくあはれむべし。是等は天地の内にて、我が兄弟の列にはあらざれども、同じく天地の内に生ずる物にして、もとは一氣なれば、同類の思をなして、みだりにそこなふべからず。但人に妨ある禽獸をば除くべし。是皆仁を行ふ工夫なり。下にある賤しき匹夫のともがら、諸人の補にならん事は、もとより力に及ばざる所なり。されども、賤しくして下にある者も、仁愛の心だにあらば、其分に應じ、其力

中に出で、邵堯夫の詩句にも美酒飲む微醉せしむるの後好花看る半開に到る時といへり

民と共に樂む─孟子梁惠王下に、古の人は民と偕に樂む故に能く樂むなり

天より授け給ふ事を知りて、天道にしたがひ、民をくるしましむべからず。我一人の樂をきはめんとて、おほくの人を苦むるは、天道の御心にそむけり。◯天道おそるべし。すべて人は高きもひきゝも同じ人なれば、民の樂み苦みも、我と同じ。我が心を以て民の心をおしはかるに違はず。民のうれひ苦みを思ひはかりて、憐むべし。不仁なる人は、民をあはれまずして、民を愛すれば奢りて上をあなどるとて、民をあはれまず。是不仁の人のいふ詞なり。すべて民はすなほなる天性あり。上なる人、誠を以て民を愛すれば、民も亦必感悦してわだかまらず、誠を以て上につかふ。上より、不仁にしていつはりを行へば、民も亦必いつはる。此感應の理、からもやまとも、古も今もかはらず。うたがふべからず。民をいつくしみ、其上に法を厳にして、民のひが事を禁ずれば、上を侮らず、おごるべきやうなし。

一民の司となる人、我一人のたのしみを好むべからず。民と共に樂しむべし。是まことの樂なり。天下の人は、たかきもひきゝも、皆我が兄弟の理ありて、本は一體なることを知り、我が心を以て人の心をおしはかり、聊人のうれひ苦む事をなすべからず。貧窮にしてうゑこゞゆるもの、病者、かたはなる者、世をわたりかねて憂ひくるし

るをあげていへば、酒食と、色慾と、財利とを好みて止まざれば、徳を損ひて、後は身をうしなふ。其餘の事を好むも亦しかり。凡好むことは多きをいむ。少なけれども過ぎてふかく好めば、又わざはひとなる。古人の言に、好むことを見て其人の善悪を知るといへり。好む事つゝしむべし。

一方孝孺が、「樂未既、而憂繼之者、人之欲也」といへる事、あに然らずや。酒食好色などをむさぼり樂みて、其樂いまだつきざるに、はや其わざはひ憂忽出來て、酒色にやぶられ、色欲にそこなはる。皆是人欲よりおこる。欲をすくなくするの工夫は、欲をこらへて、好む所十分にいたるべからず、唯六七分、或は七八分に至らば、早くやむべし。十分にいたれば、必わざはひ出來て、後悔すれども益なし。古語に、酒は微醉に飲み、花は半開に見るといへるが如くなるべし。善誘文にも、一時我が心に快きこと過れば、必身にわざはひとなるといへり。

一民を司どる人は、民の父母なれば、民をあはれむ心を本とすべし。民の心を以て心として、民の好む事を好みてほどこし、民のきらふ事をきらひてほどこさず、父母の子を思ふが如くする故、是を民の父母と云ふ。民の上に立つ人は、民をやしなふ職分を

方孝孺―字は希直また希古、明の寧海侯城の人、成祖命じて登極の詔を書かしむるや罵りて燕賊簒位の四字を大書し終に磔せらる年四十六

酒は云々―胡廬山の文

古語に云々―左傳に出づ

によつて立ち、五倫の道是によつて行はる。こゝを以て、聖學は敬を以て要とす。故に聖學の始終、皆敬を以て宗とす。古來聖賢の心法、皆敬の一字を要とす。學者の尤つとむべき所なり。又よくつゝしめば福あり。つゝしまざれば禍あり。白樂天も、禍與福在愼與不愼といへり。身のわざはひは、皆つゝしまざるによれり。故につゝしみは禍にかつといへり。

一 古語に、人聖人にあらず、誰か過なからん。過まつてよく改む、善これより大なるはなしといへり。程子も、學問の道無他、其不善を知れば、速かに改めて善にしたがふのみといへり。不善とは卽過なり。過を知りて改むるは學問の要なり。されども我が過を知る人すくなし。すべて凡人は我が身に私して、其身の過と惡とを知らず、よろづの外の事は、事ごとに知らずとも、さほどのうれひにあらず。我が身の惡と過を知らざるは、はなはだ愚なるかな。是何よりも憂ふべき事ならずや。身をかへりみ、人の諫を聞きて我が過を知るべし。

一 何事も、すき好む事をつゝしむべし。このみて止まざれば、道の志をうばはれ、財をつひやし、ひまをつひやす。此故に、すぐれてすきこのむ事は、禍の基なり。其大な

るまで之を行ふ可き者有りや子曰く其れ恕か己の欲せざる所は人に施す勿れ

つゝむ―包むの意より出でたるなるべしといふ、愼むの義也

と何ぞことならんや。不仁なれば人心を失ふ故、其餘の才能のよき事は見るにたらず。

一我が身をへりくだり、人にたかぶらざるを謙といふ。謙なれば我が身にほこらず、人にくだりて問ふ事を好み、人のいさめを聞きて我が過を改むる故、智をひらき善にうつる事きはまりなし。此故に、古人謙を以て天下の美德とす。謙のうらは矜なり。矜はほこるとよむ。ほこるとは我が身に自滿するを云ふ。ほこれば自ら是として人に求めず。かくの如くなれば、惡にうつる事きはまりなし。此故に、古人矜を以て天下の惡事とす。謙と矜との善惡の事、前に旣に說けりといへども、繰返して初學の人に知らしめんが爲なり。

一敬はつゝしむと訓ず。つゝしむとは、心に戒めおそるゝを云ふ。和語の意はつゝむなり。しはやすめ字なり。內につゝんで、みだりに外に出さざるなり。敬めば本心をたもちて失はず、行ひなす事理にかなひてあやまりなし。こゝを以て、敬は一心のまもり、萬善の根本なり。故に敬めば身修り、敬まざれば亂る。萬のこと、敬まざることなかれ。萬善皆つゝしみによつて行はれ、萬惡皆不敬よりおこる。故に五常の德是

恕の一字は云々―論語衛靈公篇に、子貢問うて曰く一言にして以て身を終ふ

ふ事は人にほどこさず、我が身を立てんとして、又人を立つ。かくの如く人我を忘れてわかたざるを、公と云ふ。公とは私なきなり。仁者の心、つとめずして自らかくの如し。學者はいまだ仁にいたらず、つとめて仁を行ふべし。我が心を以て人の心をおしはかるに、人の心も亦我が心にかはらず。我が好むことは人も好み、わが嫌ふことは人もきらふ。こゝを以て、仁を人に施し行はんとせば、まづ我が心を以て人の心をおしはかり、我が好む事は人にほどこし與へ、我がきらふ事は人に施さず。かくの如くすれば、人の心にかなはざる事なくして、人々各其所を得てやすんず。是仁の行はるゝなり。是を推レ己及レ人と云ふ。恕なり。恕は仁にいたらんとする人の行ふべき工夫なり。仁者はつとめずして、おのづから人を愛す。恕はつとめて仁を行ふ。是仁恕のわかちなり。恕の一字は人の身終る迄つとめて行ふべき道なりと、聖人のたまへり。

一 人となる者は、天地の心に隨ひ、仁愛を以て心とし行ふべし。己を愛する心を以て人を愛す、是仁なり、人の心なり。禽獸は、おのが身を愛する事のみ知りて、物を愛せず。人もし不仁にして、唯我が身を愛して人を愛せずんば、人の心にあらず。禽獸

墨子が兼愛—墨子名は翟、周代の宋人にして禹の道を宗として極力儒教の差別説に反對し兼愛博愛の説を主張す、其説墨子十五卷に明か也

故に人倫はいふに及ばず、物として愛せざることなし。孔子も、一樹をきり、一獸をころすに、其時を以てせざるは孝にあらずとのたまへり。されば禽獸も、草木も、皆天地の生ずるものなれば、みだりに是をそこなふは、天地に對し不孝なりと知るべし。人物を愛するに、親しきよりうときに及び、重きより輕きにいたるべし。輕重親疎の差別なく、平等に愛するは義にあらず。墨子が兼愛とて、天下の人を一樣に愛するは、父母をも路人と同じくするなり。是仁の道を知らずして、義にかなはざるなり。

一人は、天地の子なり。天地を法として行ふべし。天地は別に心なし、萬物をあはれむを以て心とせり。別にしわざなし、萬物を產み出し養ふを以てわざとせり。人も亦この心をうけて、常に人に惠みあはれむを以て心とすべし。別の念あるべからず。人をたすけ救ふを以てわざとすべし。別のわざあるべからず。故に天下の人、王公より以下庶人にいたる迄、日々行ふべき善事あり。善を行ふべき位にあり、時にあたらば、むなしく過ぐべからず。是天につかへ奉りて、天職をつとむるなり。

一仁者は人を愛す。人我のへだてなし。人を愛せずして、ひとへに我を愛するは、人我のへだてなり。是私なり。仁者は私なし。我を愛する心を以て人を愛し、わが嫌

ふろに足らずとあるをいふ

天地の大德を生と云ふ—易の上彖傳に大なる哉乾元萬物資て始む、又、至れる哉坤元物資て生ずといひ、繫辭傳にも同義の句散見せり本文の句は程氏の言也

易に天地の大德を生と云ふ。此理よく味ひて知るべし。生とは生きて死なず、生かして殺さず、生々してやまず。此故に、天地は萬物をうみて育て給ふ。萬物の父母なり。物をあはれみて、生かすことを好み、殺すことをきらひ給ふ。是天地の大德なり。生の理なり。人は天地の子なれば、其心に、天地の大德、生の理そなはりて、天地のめぐみの心を生れつきたり。是を仁といふ。仁は人物をあはれみ愛するの心にして、是卽天地の生物の心なり。萬物は皆天地の產める所なり。其中に、取分人倫は、尤天地のめぐみ厚し。萬物の內にて、いと貴くして、天地の子とする所なり。此故に、天地の御心にしたがひ、仁心を以て物を愛するには、人倫において殊更あつくすべし。人倫をあつくするは、是天地の御心に順ふなり。人倫を愛するにも次第あり。まづ父母兄弟を愛するは、仁を行ふ本なり。主君は父母にひとし。次に親類、臣下、朋友、次に萬民を愛すべし。又其次に、鳥けだもの蟲魚を愛して、みだりに殺さず。次に草木を愛してみだりにきらず。是人をあはれみ、物を愛する次第なり。されど又悪人をころすも、是義にして仁にかなへり。又樹木も時を以てきり、鳥獸も道理を以て殺すは義なり。鳥獸草木なりとて、みだりに殺しきるは不仁なり。仁者は萬物を一體とす。

は仁の端也羞惡の心は義の端也辭讓の心は禮の端なりといひ、更に凡そ我に四端有る者皆擴して之を充つるを知れば火の始めて燃え泉の始めて達するが若く苟も能く之を充つれば以て四海を保つに足り苟も之を充てざれば以て父母に事

だて養ひ、さかんならしめ、其分量を十分にみてゝ、いづくにも行きわたらしむるを云ふ。たとへば水のはじめて流れ出づるを、せき止めずして流し、火のはじめてもえ出づるを打消さずして、さかんにおこらしむるが如くすべし。此良心をおしひろめば、遠き四海ををさめて餘あり。おしひろめざれば、近き父母に事ふるだにも足らず。これ孟子の說、殊に親切なる教なり。學者必服膺して、つとめ行ふべし。

一仁は人をあはれみ、物をそだつる善心なり。是天地のめぐみの心をうけて、人の心とする所なり。故に孟子に、仁は人の心なりといへり。人ごとに生れつきたる本心なり。君子は此本心を失はず、おのれを愛する心を以て人を愛し、人我のへだてなし。小人はひとへに我が身を愛して人を愛せず、人我のへだて深し。是私欲あればなり。是を不仁と云ふ。人たるものは仁を以て心とすべし。不仁の人は、本心を失ひ、人道をほろぼし、天道にそむく。此故に、人の尤いましむべき事、不仁より先なるはなし。不仁は天地人のにくむ所なり。故につひに天罰をかうぶりて、わざはひあり。其上子孫までも報ふものなり。天道おそるべし。此道理、古今からやまと、ためし多し。違ふことなし、疑ふべからず。

は、過をしみて改めかぬるを云ふ。凡私慾邪念と、氣質の偏と、過と、此三の者ありては心術を害す。心を正しくし、道を行はんとすれども、是等の過惡ありて去らざれば、徳にすゝむべきやうなし。たとへば田を作るに莠を去らざれば、水をそゝぎ、こやしても、莠のみ茂りて、苗に益なし。まづ莠をさりて、水と肥を用ふるが如し。又身の病を去りて後、補養するが如し。

一人にまじはるに愛敬の二を心法とす。是簡要のことなり。誰も知らずんばあるべからず。愛とは人をあはれむを云ふ。悪まざるなり。敬とは人をうやまふを云ふ。侮らざるなり。人をあはれむは仁なり。人を敬ふは禮なり。仁禮を心の内にたもちて、人をあはれみ、人をうやまふ事、わするべからず。是人に對して行ふべき善なり。父母をあはれみ、主君をうやまふは、いふに及ばず、うとき人、いやしき人に對すとも、其位にしたがひて、よきほどに愛敬すべし。侮りおろそかにすべからず。是人にまじはる道なり。

簡要―肝要とあるべきか、原本前後に此例少なからず

一およそ人の心、必仁義禮智の性あるゆゑに、良心時におこる。其良心をむなしくせずして、擴充つべし。おしひろめみつとは、善心の僅におこるをそこなはずして、そ

およそ人の心云々―孟子公孫丑篇に惻隱の心

つゆばかり　も一少しばかりもの意

學者は常に天道をおそるゝを以て心とすべし。人道はかならず斯くの如くなるべし。

一つねに心の内をかへりみて、一點の私欲邪念あらば早く去るべし。私欲とは、名利色貨の欲とて、名聞を好み、利分を好み、色を好み、貨を好むの類、並に耳目口體の好む所の、身に私する慾をいふ。邪念とは、人をしへたけ、人と怒りあらそひ、我が身にほこり、人をあなどり、人をそねみそしり、人にへつらひ、人をあざむき僞るのたぐひをいふ。皆是邪惡の心なり。もし是等の事つゆばかりもあらば、速かに去るべし。心を害する事甚しければなり。又氣質の偏あらば勝つべし。氣質の偏とは、生れつきに片落ちたる所あるをいふ。氣のあらきと騒がしきと、又やはらかすぎて弱きと、或ははやすぎると鈍くゆる過ぎたるのたぐひ、或は生れつきて怒おほく、慾おほきのたぐひをいふ。是皆氣質の偏なり、心を害す。凡氣質のあしき所を變化する事、きはめてかたし。平生心を用ひて、是に勝たずんばあるべからず。又過あらば速かに改むべし。過とは巧みて惡をするにはあらず、是非を知らずして、不意に道理にそむくをいふ。氣質の偏により、私慾の妨によりて、過をなすこと多し。人聖人にあらず、誰も過多し。過と知らば、速かに改めて善にうつるべし。吝なるべからず。吝なりと

ふ。天下の人、たかきもひきゝも、一人も其めぐみを受けざる人なし。其恩の深く高き事、海山にもくらべがたく、言語にも述べがたし。又薬物を生じて病を救ふ。凡世にあらゆるよろづの物、人の身を養ひ助くる品々、多き事あげて數ふべからず。是皆天地の、人をあつくめぐみ給ふ所なり。天地の、禽獸を養ふ事は、人を養ひたまふ百分が一にもあらず。其上、禽獸は人にころされて食と成り、草木はきられて用となる。然れば、人の、萬物より貴くして、天地の厚きめぐみをうくる事、思ひ知るべし。かくの如く天地の恩をあつくかうぶりても、愚なる人は知らず。平生一の善事をもなさずして、天地につかへ奉り、恩を報ずる道を行はず。いはんや不仁にして、天地のうみ養ひ給ふ人物をそこなひ惱まして、天地の生理を妨げ、天地の物をつひやし、天地の御心にそむくをや。是天地の恩を知らず、天地に不孝にして、人道を失へりと云ふべし。天道おそるべし。我が輩愚にして、天地の大恩の萬一を報ずるほどの力こそなくとも、せめて天地の道にそむかず、天地の生じ給ふ物をそこなはざるべし。古人は、天道の眼前にある事を知りて、朝夕おそれをなしてそむかず。今の世の人も、亦かくの如くなるべし。詩曰、天の威をおぢて、こゝにこれを保つといへり。

此十六字—前に出でたる人心惟危道心惟微惟精惟一允執厥中の十六字をいふ

して、あらはれがたし。是道心惟微なるなり。かくの如くに、酒食を好む心にまかせ、おそるゝ心かすかなれば、たちまち酒食を恣にすごし、おそるゝ心は無くなり、つひに人欲にかたず。然るに、人心のわがまゝなると、道心のつゝしみあるとの二を明かに知りて迷はざるは、惟精なり。すでに酒食の過ぎて損あり、節にして益あることをくはしく知れらば、專一につゝしみて、道心を主とし、人心のむさぼり好む欲をいましめおさへて、おのづから過不及のあやまり無からしむべし。すべて論ずるに、人心惟危、道心惟微は人心道心二の者の有さまなり。惟精惟一は、心をあきらめ、道心を主とする工夫なり。允執厥中は、中は過不及なき至極の道理なり。必惟精惟一の工夫ありて、過不及の過なき道理を失はざるべしとの意なり。是大聖人の、天下をゆづり給ふ時傳へ給へる大事の心法なれば、道理至極せるなるべし。此十六字は、萬世心學の敎の根源なり。王公より以下庶人にいたるまで、皆たつとんでよく心得、受用あるべき事なるべし。

一　天地の、人をあはれみ惠み給ふ事かぎりなし。食物、衣服、居所、器物、もろ／＼の、人の身を養ふ物を生じて與へ給ふ。もろ／＼の人、是をとりて用ひ、我が身をやしな

[illegible]ざれ天下汝と功を争ふ莫し云々といへり

あらはれ動きて、其勢さかんになり易し。道心は心底にかくれ、微にしてあらはれがたし。故に道心は惟微とのたまふ。人心は盛になりやすく、道心はかくれやすし。二ッの者胸中に相まじりて、其治めやうを知らざれば、人心はいよ〳〵危くして、人欲にながれ、道心は彌かすかにして、つひに人心におほはれて亡ぶ。こゝにおいて、人心をおさへ、道心をたもつ道なくんばあるべからず。惟精とは、人心道心二ッの間をわかちて、明かにくはしく知るなり。惟一とは、すでに人心道心をわかち知れば、専一に道心を主として、人心の危き方に任せざるを云ふ。かくの如くなれば、一心のしわざ皆道心より出で、人心は道心の下知にしたがふ。允執厥中。中とは、人心のなす所、耳目口體七情のわざ、皆過不及のあやまりなきを云ふ。是道理の至極にて、目あてにする所なり。惟精惟一なれば、萬の身のわざ、皆過不及のあやまりなくして、よきほどの中にかなふなり。飲食ふわざを以ていはゞ、酒食を好むは人心なり。酒食を過すべからずと思ふは道心なり。酒食を好む心にまかせぬれば、たちまち威儀を失ひ、脾胃をそこなふにいたらんとす。是人心は危きなり。酒食を過せば、身の害にならん事をおそるゝ道心はありといへども、人心さかんなれば、おそるゝ心は自らかすかに

ど皆く原本に從ふ

人心惟危云云—此語書經大禹謨に出で、上に帝曰く來れ禹洚水予を儆む允を成し功を成す惟れ汝の賢克く邦に勤め克く家に儉にして自ら滿假せざれ惟れ汝の賢汝惟れ矜らざれ天下汝と能を爭

過すべからず。自餘も亦かくの如くなるべし。七情過不及なくして、片落ちざれば、心の內とゞこほりなくして、常に和平なり。是心正しきなり。

一尙書曰、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中。是いにしへの大聖虞舜の帝の、天下を禹王と申せし聖人にゆづらせ給ふ時、天下を治め給ふ心法を傳へ給ふ御敎なり。人心とは人の身の耳目口體の形氣の好む所によつて起るを云ふ。形氣の好む所とは、目に色を好み、耳に聲をこのみ、口に味を好み、形には安かなる事を好むを云ふ。又よろこび、いかり、かなしみ、たのしみ、このみ、にくみ、ねがふの七情も、是形氣よりおこる人心なり。うゑて食を好み、寒くして衣を求め、つかれて形をやすむるの類。又七情も、皆是人情の、なくて叶はざる事なれば、聖人といへども、人心なき事あたはず。然れども、衆人は耳目口體の好むにまかせ、七情のおこるにまかせぬれば、ほどよき事をわすれ、たちまちに私欲にながれ、惡におちいる。故に人心はこれ危しとのたまふ。あやふしとは、たとへば小兒を火のはたに置きたるが如く、醉へる人の涯濠におち入らんとするが如し。道心とは仁義禮智の本性よりおこる善心なり。道心惟微とは、微は少しきにしてかくるゝなり。人心は形氣よりおこる故、外に

大和俗訓巻之三

○心術上

まめやか―眞實、正實、忠實等の意

愛―此字に對すべき訓として次頁にはこのみと有り前後一致せざれ

一心は身の主にて、萬事の本根なり。此故に、心正しからざれば身をさまらずして、家をとゝのへ、人をさめがたし。たとへば草木の根堅からざれば、枝葉さかえず、家の主不徳なれば、家をさまらざるが如し。心を正しくする道は、まづ善をこのみ、惡を嫌ふこと眞實なるを本とすべし。心の内に善をこのむ誠なく、惡をきらふ事まめやかならずんば、猶惡人の境界をまぬかれがたきゆゑ、心を正しくすべきやうなかるべし。是大學の道、心を正しくせんと欲しては、先其意を誠にするにあり。既に善をこのみ惡をきらふこと誠あらば、心を正しくする事やすかるべし。心を正しくすとは、心よりおこる所の喜怒哀樂愛惡慾の七情、よきほどに過不及なくして、片落ちざるを云ふ。喜ぶべくして喜び、其喜すごすべからず。怒るべくして怒り、其怒

陳繼儒―字は仲醇、眉公とも麋公とも稱す、年二十九、儒衣冠を取りて之を焚き崑山に隱れ崇禎十二年（我紀元二二九九年）卒す、經史百子に通じ又詩文繪畫を能くせり

の誠すくなし。位も德もなくして、我が身を自ら置くこと甚高く、賢人君子の模樣をなし、其身に應ぜぬ言を出し、ふるまひをなせり。みづから其分量を知らずして、古今をそしり、人の小過をとがめ、不能をせめ、刻薄なること無學の人より甚しく、人をあはれむ心うすし。不仁と云ふべし。人情時變を知らずして、古禮を當世に直に行はんとす。不智といふべし。もしかくの如くならば、時俗の耳目を驚して道學の名を得ても、益なかるべし。無學なる人、かゝる學者を見ては、儒者は一向に偏にして、國俗と人情にそむき、時宜を知らざる無用の者と思へり。是道學の益すたれる所なり。明の陳繼儒が、僧は眞ならんことを要む、高からんことも要めずといへり。儒者も亦然り。儒者は唯道を信じて、直實なるを貴しとす。人に高ぶりて誠少なきは賤むべし。

一本朝の儒術古來二千歲、寥々たりといへども、太平日久しければ、世の人文もいよいよやうやく開けぬべし。しからば今より百年の後は、文字の習も拙からず、義理の學も大に明かになるべし。文明の國となりて、誠に君子國の名にかなふべし。唯今より後、學術の正しくして賤しからず、學者の志眞實にして、聖人の道をあつくたふとび信ぜむ事をこひねがふのみ。

ば即小なり

―此語書經仲虺之誥に出づ、前註三六頁參照

誠意の章―大學章句に右傳の六章意を誠にすることを釋くと有る章をいふ

われ一人の智を用ふるは小なり。我が學才にほこり、人をあなどるは、是才學のためにわが德をそこなはるゝなり。かゝる惡德あらんよりは、才學なきが遙かにまされり。聖賢の書を多く讀んでも、道に志なくして不德なるは、無學なる者の、心あしく道にそむくよりも、其つみ猶ふかし。學者如此なれば、學をきらふ俗人の言に、學問は益なし、かへりて害ありと言ふ、其證據になりて、學問の道の害となる。つゝしみて學をそしる俗人の證據にならん事をうれふべし。

一學者はまづ孝弟忠信を先として、常に善を好み、人を愛するを以て志として、日々につとめて善を行ふべし。書をよむをば第二義とすべし。第一、善を好まざれば、書を讀んでも、道を行ふべき基なし。萬卷の書を讀むとも、無用の事なるべし。大學誠意の章をよく味ひて、善を好み惡を嫌ふに誠あるべし。

一學者志を立つる事眞實なるを以て本とす。唯道學の實をつとめて、道學の名を好むべからず。名聞のため煩はさるゝはいやし。天地の間に我が身ほど親しき物なし。學問せば唯身のためにすべし、名の爲にすべからず。然れども、からやまと、いにしへ今、道學の名をむさぼる人多し。名を好む學者は、形は善人に似たれども、善を好む

む人これを聞きて、いかり爭ひ、口論となり、たゝかひに及ぶ事、其ためしあり。凡人は、人の我に同じきをよろこび、我に異なるをにくみ、わが知らざるを以て、人の知るをそしる。是凡人のつねの心なり。かゝるひがごとを聞きて怒りあらそふは、われも亦彼の愚なる人と同じくなるは口をし。書を讀み學問するは、かゝる愚なる人になるまじきが爲なり。愚人の學問をそしり、我ををかすをば、不智なる故なりと思ひて、あはれみ許すべし。いかるべき理にはあらず。又愚人のあだ事を云ふとて、我が心にかけて與るべからず。聖人はかゝる頑なる人をあはれみて、いかり惡み給はず。是を以て則とすべし。

聖人は云々―書經君陳篇に爾頑なるを忿り疾むこと無れ備るを一夫に求むること無れと有るをいふ

一俗人の學問をそしるは、學者書を讀んでも道を行はずして、かへりて高慢にして自らほこり、人をあなどりて心ざま惡しくなり行き、學びたる益なきが故なり。學者つゝしみて身をかへりみるべし。書を讀むによつて、却てかくの如くなる小人となるはくちをし。

一我が才にほこり、自ら是として人をあなどり、人の才智あるを取用ひず、唯我が才智のみを用ふ。古語にも、自ら用ふれば卽小なりといへり。諸人の智を用ふるは大なり、

自ら用ふれ

論語里仁篇に、子曰く朝に道を聞けば夕に死すとも可なり

うつけてぬるくなり—茫然として遲鈍になりといふ程の意

長そで—長袖、公卿貴族をいふ

でに道を聞きなば、夕に死ぬとも更にうらみ有るべからず。貧賤にして時にあはざるは、憂ふるに足らざるべし。もし聖人の道を學ばずして、道を知らずんば、此世に生ける時は禽獸と同じくして、人と生れたるかひなく、死して後は草木とおなじく朽ちはてゝ、人のほむべき佳名を殘す事なく、後世にいたりて知る人なかるべし。われも人も皆かくの如くなれど、人と斯く生れし身を、とりけだもの草木に同じくせん事、本意なきことならずや。これを口をしと思はゞ、あに此うれひを免かるべき道なかるべきや。人の身は再び得がたし。むなしく此世を過すべからず。

一書を讀み學問せんとする人あれば、彼きらふ人、色々いひ妨げて、學問する事をそしる。誠ぞと心得て、學問を止むる人多し。又我が子に書を讀ませんとするに、かのきらふもの、書を讀めば病者になり、氣へり命みじかくなるなど言ひておどせば、親は子をいつくしむ心ふかくして、もし左もあるべきかと思ひて、書を讀ませざるゆゑ、其子は一生文盲に愚かにて身ををはる。あはれむべし。

一書を讀まざる人は、書をよむ人をきらひ惡みて、書をよめば氣へり、病者になり、心うつけてぬるくなり、出家長そでの如く、武道もよわくなると言ひてそしる。書をよ

口に掛けて云はんは畏多しと也、かけまくはかけむの延

朝に云々―

る者は初より的に志し、道行く者は初より家に志すがごとし。聖人をめあてとして、其志を立つる事は高くすべし。然るに、千里の道も出でたつ足もとの一歩よりはじむる。理なれば、道を行ふ事は、まづ日用の近くひきゝ所より行ひて、やうやく經登りて高きにいたるべし。初より品を越えて高くいたらんとするは、翼なくして天に上らんとするに同じ。必此理なき事を知るべし。たとへば高山にのぼるにも、先ふもとの一足より始むるが如し。一とびに山上には上りがたし。萬事は次第にしたがはざれば成就しがたし。近道なる事は、口にいふ所は快しといへども、道理のなき事は成らざるものなれば、虚妄の説、無用の辯は、いたづらごとなり。

一ふたゝび生れ來るべき頼なき此世の間なるに、天地人のいたれる道を學んで樂しまんこそ、生けるかひありて、身終る時もうらみ無かるべけれ。我が身の私慾にくるしめられ、世俗のいやしき習はしに迷ひて、人の道を知らずして一世を終らん事、かへすがへす口をしと思ひ、かねて心を用ふべし。

一聖人の書を讀み、道を好みて日を送る人は、誠に諸人にすぐれ、一生の間常に樂みて、思出おほき世なるべし。かくの如くならば、人とむまれたるかひありて、朝にす

く、へりくだりて自ら是とせざる人あらば、これ道にちかき生質なり。かゝる人、志專一にしてよく學ばゝ、此道をやうやく晩年にして知るべし。

一世の人、多くは藝を好みて、學問を好まず。藝はたとへば木の枝葉なり。學問はたとへば木の根本なり。根本をつとめずして枝葉をつとめ、本をすてゝ末に專なるは、ひが事なり、道學なければ、藝多くしても根本たゝず、君子とすべからず。又技藝なければ事に通ぜずして、其徳の助なし。野人といふべし。

一わかき時は、經學を本としてひろく群書に通じ、且又有用の諸藝を習ふべし。中年以後は博覽をやめて、經傳の要文をつゞまやかに味ひ、道理をくはしくし、心に自得せんことを求むべし。

一いまだ道を知らざれば、夢見てさめざるが如し。故に大學の致知を夢覺の關と云ふ。ゆめみると、さむるとのさかひなり。善を好むこと誠ならざれば、惡人の境界をまぬかれず。故に大學の誠意を善惡の關と云ふ。善人と惡人とのさかひなり。關とは内外のさかひなり。

口に云々—

一聖人は人倫の至なり。吾がともがらの口にかけまくは、いともかしこし。されど弓い

心に求むる學―王陽明陸象山等の學派をいふ

訓詁の學なる事を知らず。又道學の名をむさぼり好みて、其實なき人あり。唯道學の實をこのむべし。道學の名を好むは、不實にして益なし。又古訓を學ばず、聖人の法にしたがはずして、ひとへに我が心に求むる學あり。是無學にまされりといへども、聖學にあらず。師傳ありといふとも私の學なり。眞の學問をせんと思はゞ、道に志し、徳を尊びて、孔孟の教を本とし、程朱の說を階梯とすべし。是すぢめよき眞の學なり。末世にいたりてあしき學術多し。えらぶべし、迷ふべからず。

一學者、文學言句に求むるつとめは常に多く、日用徳行に心を用ふるつとめは常にすくなし。是學問の本意を失へり。もし徳行をつとめずして文學を好むは、たとへば酒をすてゝ糟をくらふが如し。よき所をば取りて用ひずして、よからざる所を好むなり。

一道を知る事至りてかたし。よのつねの俗學の習にては、身を終るまでつとめ學びても道を知りがたし。まづ學を好むに誠の志ありて、明師良友にしたがひ、古の學のすぢを尋ねもとめ、心を用ふること久しくば、其功あるべし。利口にして我が才にほこり、好んで我が智をたのみ用ふる人は、道に遠き生れつきなり。身をはるまで、此道を知る事かたかるべし。唯生れつき質實にして飾なく、其心しづかに、義理にさと

人の神智云々—魏主博士李先に問ひて曰く、天下何物か以て人の神智を益すべき、對へて曰く書籍に若くは莫し云々

其樂ふかし。山林ならずして其樂しづかなり。古語に、書を讀むこと一巻なれば一巻の益あり。書を讀むこと一日なれば一日の益ありといへり。又人の神智をます事書を讀むにしくは無しといへり。富貴にして書を好む人は其樂ひろし。貧賤にして書をこのむ人は其樂ふかし。次に子ををしへて、我が志をつがしむべし。是肝要のことなり。子を教へずして、道を知らしめざるは、父のあやまりなり。不仁といふべし。

一うたがひを人に問ふは、智を求むる道なり。みづから心に道理を思ふは、智をひらく本なり。問ふは智を人に求むる也、思ふは智をわれに求むる也。人に問はざれば、知る事せばくして心に迷とけず。みづから思はざれば、見きく事ひろしといへども、道理をわが心にふかく自得せず。此故に、問ふと思ふとの二は、理をきはめ、智を明かにする道にして、學の要なり。

一道に志なき人はいふにたらず。たとひ道に志ありて廣く學ぶとも、學びやう惡しければ一生道を知らず。或は道學をこのめども、文句にかゝはりて義理に通ぜず。是を訓詁の學と云ふ。其人は、みづから道學をすと思ひ、自ら是とし人にほこれども、

つきの偏なる癖よりおこる。こゝを以て、學者は必氣質を變化して、過を改むべし。是學問の要なり。我が氣質の偏惡と、我が過をみづから知る人まれなり。かへりみて察し知るべし。正直にして、過をつぐる益友を求め、忠臣を近づけて諫を聞用ふべし。碁をうつ人は手見えず、傍より見る人は眼よく見ゆるが如し。

一君子は氣質の偏惡なし。無病の人なり。衆人は皆氣質の偏なる病ある故、過のみ多し。皆病人なり。其病を去りて、君子にいたるべし。病を其まゝおきて、其惡を長ずべからず。病を去らんと思はゞ、明師良友にあひて其敎をうけ、其氣質の惡しきを改むべし。たとへば病人の、良醫にあひて其病をいやすが如し。病人は、醫を招きて藥を服せざれば、無病の人となりがたし。衆人に氣質の病あるも亦しかり。良友にあひ、又みづからせめて、其氣質を改め去らずんば、君子とはなりがたかるべし。朋友の、我が過を正すをきらひ、臣下の諫をふせぐは、病人の、醫をきらひて、藥を用ひず、病死すれども悟らざるが如し。かなしむべし。

一古語曰、人生至樂、無レ如レ讀レ書、至要無レ如レ敎レ子。又古人の詩曰、至哉天下樂、終日在二几案一。書をよむの樂至れるかな。富貴ならずして其樂大なり。酒色ならずして

志あるものは—後漢書に出づ、光武帝の語

君子となるとは人となるなり。學ばざる人は云ふにたらず。學んでも君子とならずんば、學ばざるに同じくして、人と生れたるかひなし。君子となる事容易からず。しかれども、志を立ておこたらずんば、必其功あるべし。古語にも、志あるものは其事つひに成るといへり。學は終身のことなり。一息もいまだ殘れる内は、此志怠るべからず。是人の一生の間のつとめなり。

一 およそ人聖人にあらざれば、必あしき生れつきの癖あり。是氣質の偏なり。故に身ををさむる道は他なし、たゞ我が氣質の惡しき所をみづから察し、人にいはせて聞き、其偏なる惡しき所にかちて、改め去るべし。かくの如くせずして、生れつきて偏なる所にまかせぬれば、心正しからずして身をさまらず。書をよみ學問し、道を好み行ふと思ふも、皆我が氣質の偏なることを行ふ故に、いたづら事となる。氣質の偏の害となる事、たとへば田を作るに莠あるがごとし。苗を植ゑて、水をそゝぎ肥しても、莠を去らざれば苗長ぜず。水と肥との養も、皆莠のためになりて、いたづら事なり。故にわが氣質の惡しき所を知りて改むる事、これ學問する人の、專つとむべき事なり。學者必こゝに常に心を用ふべし。およそ人のあやまり惡しき事は、皆その生れ

に、子子夏に謂つて曰く女君子の儒となれ小人の儒となる無れ

一學問に、有用の學あり、無用の學あり。我が儒の學は有用の學なり。有用の學とは、學問をすれば、我がため人のため、益となるを云ふ。此故に學問の道は有用の學をすべし、無用の學をすべからず。有用の學は、身ををさめて、人倫の道をあつく行ひ、ことに忠孝をつとめ、善をなして人を助け救ふにあり。貧賤なる者も、善を行ふ志だにあれば、人を救ふこと多し。いはんや富貴の人は、その力によりて、其施ひろし。故に富貴の人の學は、我が身を修むるのみならず、仁愛の心を本とし、人を助け救ふことを專つとめ行ふべし。是皆有用の學なり。もし口に高き事を說き、心にいさぎよき事を好み、身に艱苦なる事を行ふとも、仁義の心を求めず、人倫の道を行はず、善をなして人に益ある事なくば、無用の學なるべし。又詩文を作り、心をくるしめ、多く隙をつひやし、巧にかざりて、人にほめられん事を求めて、日用人倫の道に志なきは、益もなきいたづらごとなり。皆是無用の學なり。

一楊子曰學者所以求爲君子也。言ふ意は、學問をするは何の爲ぞや。君子とならんが爲なり。君子とは有德人を云ふ。君子の字義は、易の正義に、人の君となりて萬民を子のごとくする德ある人をいへり。賤くして下にありても、其德あれば君子と稱す

己がために云々—前註、三頁參照

君子儒—論語雍也篇

く行ふ。知りても行はざるは、いまだ眞に知らざるなり。故に學者は、聞見の知を初として、後には眞智を求むべし、聞見の學に止まるべからず。

一書を讀み學問すれば、聞見の智は日々にすゝむ。されども知れる事を行はざれば、德行は日々におくれて進まず。行はざれば、其知れる所眞智にあらず。故に今の學者は其まなぶ所と行ふ所と大にそむけり。是己がために學ばざればなり。學者まづ誠の志を本とし、聞見の智より入りて、知れる事を行ひ、眞智にいたるべし。

一學問の道は、心をむなしくし、へりくだり、よく知れる事をも知らざるが如くにし、能く行ふ事をも行はざるが如くにし、我が才と行とにほこらず、わが智を先だてずして、人に問ひ、人のいさめを聞用ひ、我が過を改めて、善にうつるべし。かくの如くすれば、學問の益あり。善にすゝむ事きはまりなし。もし自らほこり、我を是とし、人を非とし、人の諫を拒ぎ、我が過をきく事をきらはゞ、才學の長ずるにしたがひて、その心あしくなりて、學問の益なきのみにあらず、かへりて害となるべし。是己が爲にせずして、人のためにする故、君子儒とならずして、小人儒となるなり。かくの如くならんは、學ばざるにおとれり。

ひ誹る。天地の道にそむき、人の道を失ひ、一生の間迷ひてさとらず。悲むべし。學問せんと思はゞ、必まづ明師良友にしたがひて、學術をえらぶべし。是始をつゝしむなり。易緯に、君子愼始、もし差ふこと毫釐なれば、あやまるに千里を以てすといへり。はじめのたがひは少しなれど、後のあやまりは千里の遠きにいたる。其はじめ學術をえらぶ事、あに愼まざらんや。

一千里の道も一歩よりはじまる。たとへば遠き所に行くに、出でたつ足もとよりはじまりて、つとめ行きて止まざれば、とゞかざる事なし。學んで道にいたるも亦かくの如くなるべし。志を立てゝ道をまなび、つとめ行ひて止まず、久しく年をつまば、などか其功を成して、遠大にいたらざらん。たとへば商人の一錢ををしみ、つみかさねて久しく年ふれば、大なる富人となるが如し。

一聞見の智あり、眞智あり。聞見の智は、書を讀み人に聞きて知るを云ふ。是知る事あさし。眞智とは、聞見の智によりて、わが心に道理を眞に知るをいふ。是知る事ふかし。學問はまづ聞見の智より入るべし。書を讀み道を聞かざれば、眞に知るべきやうなし。聞見たるまでに止まりて、眞に知らざるは、道を知るにあらず。眞に知ればよ

易緯―清の鍾謙鈞の輯に係る古經解彙函中にあり、但本文の語は易に曰くとして禮記に引用せるもの也

千里の道も―老子に千里の行も足下より始まると云へり

すに至るは、何にかよれるや。知なければなり。又善を行ひて、家をおこし、身をたもち、ほまれを得るは、何の故ぞや。知あればなり。知あればよく善惡を知る。善のなすべき事を知りて行ひ、惡のなすまじき事を知りて行はず。此故に知は身の内の大なる寶なり。學者道に志さば、知を求むるを第一とすべし。知をひらく事は、學問の功にあらずんば成りがたし。

一程子の曰、人の不善をするは、唯知らずとす。言ふ意は、世人の惡をするは、惡のすまじき理を知らざればなり。よく知れらば、などか人の爲わがため惡しきひが事をば行ふべき。たとへば赤子のはらばひて井に入らんとするは、赤子のとがにあらず。いまだ知あらずして、井に入れば死ぬる事を知らざればなり。世の人の惡をするも亦かくのごとし。あはれむべし。故に學問して知をひらき、道を知る事をつとむるは、人間の一大事なり。

一學問は其はじめを愼んで、其術をえらぶべし。もし其はじめ、學術正しからず、一たびあやまりて、あしき方にふみ迷へば、其あやまりに習ひて、改めて善き道に立ちかへりがたく、身を終るまで、ひが事に迷へることを知らず。かへりて正しき道をきら

孔子曰云々―此語漢書賈誼傳に出で幼成を少成に作る

性は相近し―論語陽貨篇

といひがたし。學純一なれば、其心法も邪なくして正し。心法正しければ、行事にあらはし發するも皆正し。たとへば道を行く人の、まづ道のすぢを尋ね知るが如し。道のすぢを知らずして、たゞに行く事をのみつとめば、たとへば都にある人、奥州に行かんとて、まづ淀山崎へむかひ行くが如し。いよ／＼つとめ行くほど、いよいよ奥州には遠ざかるべし。是唯道をいそぐ事を知りて、道をあやまる事を知らざるなり。

一孔子曰、幼成如天性、習慣如自然とは、幼少より習ひて成就したる事は、天性に生れつきたるが如くなり。又久しく習ひなれて染みぬる事は、善きも惡しきも、つとめずして自然によくするが如しとなり。善惡ともに、性に出でたるも、習より出づること多し。然れば習ひなるゝ事、善惡をえらび愼むべし。習ひて慣れぬる事は、生れつきたる自然の如し。學問をするも、善に習ひなるゝわざなり。人の惡をするも、必生れつきてするのみにはあらず、惡人に習ひてする事多し。故に孔子も、性は相近し、習へば相遠しとのたまへり。

一およそ人の不孝不忠、もろ／＼の惡を行ひ、慾を恣にし、身をほろぼし家をほろぼ

あらはし給ふ。天下の事、大小精粗萬事の道理、一として聖賢の書に明かに備はらざる事なし。たとへば日月の天に中して、萬物のかたち分明なるは、凡目あるもの、是を見ざる事なきが如し。其書を讀むものは、必其道をあきらめ、其理を我が心にたもち、身に行ひて、人倫にまじはり、萬事をつとめ、人民ををさむ。斯の如くにして、人の職分をつくして天地の間に立つべし。若如此ならざれば、人たるの道をうしなひ、人の職分かけ、天地の理にそむけり。凡物皆職分あり。天地は物を生じ養ふを心とし給ひ、天はおほひ、地はのする、これ天地の職分なり。萬物の微細なるも、皆各職分あり。雞の晨をつくり、犬の夜を守るの類、みな其物に生れ得たるわざをつとむるを以て、其物の職分を行ふとす。人は萬物の靈なり。その心本明かに、萬理備はれり。若人として身に備りたる理を行はずば、人の職分を空しうすといふべし。人を以て鳥獸にだもしかざるべけんや。

一書をよむ人は、まづ其學問のすぢを正しくし、又心術を正しくすべし。學問も心法も一すぢに天地聖人の道にしたがひて、一點も邪をまじへずして純一なるべし。聖人の道を好むとも、其間に、又少しにても聖人の道に似ざる所あらば、純一なり

學問の道は云々―此事禮記の學記中に出でたり

み、古今天下の事に通ずとも、もし我が身のあやまちを改めず、善を行はずばいたづら事なり。しかれば學問は、まづ志を立て、身に行ふを第一とすべし。書を讀むは、これ第二義なり。

一學問の道は、師を尊ぶにあり。師尊くして道尊ぶべし。道尊くして民道をうやまふ。故に君として位高しといへども、師をば臣として賤しめず。いにしへ大學にしては、天子にをしふるにも北面せず。師をたつとべばなり。

一此道理の天下にある處は、まづ吾が心を本とす。人にまじはれば、君臣、父子、兄弟夫婦、朋友の間、行ふべき道あり。又我が身の、萬のわざに、皆一定の道理ありて、暫時も此道をはなれがたし。凡夫といへど、此行ふべき道理のそなはる事、聖賢とかはらず。又いかなる愚人も、善をこのみ、惡をにくむ心あり、生れつきたる良智ありて、此道のかたはしを、少しは知りて日々用ひ行ふ。然らざれば、一日も世にたつ事かたし。君父にそむき、亂逆をなし、人とあらそひ、人を犯しかすめ、非法を行ひては、しばらくも世に立つべからず。されども凡夫は、此道を能く知り、能く行ふ事かたし。故に古の聖人世に出で給ひて、敎をたてゝ、道理を明かにして、これを書に

朝は師にまなびー國語に、士朝にして業を受け晝にして講習し夕にして復習し夜にして過を計る憾み無くして後安きに卽く

これを飲みくらはざれば、食にもあく事なく、酒にゑふ事もなきが如し。書を讀んで行あしき人あるをうたがふ人あり。これを以て疑をはらすべし。書をよみても道に志なくば、文字を知れるのみにて、心において益なし。是無用の學なり。こゝを以て、學をするにはまづ志を本とすべし。

一朝は師にまなび、晝は朝まなびたる事をつとめ習ひ、夕はこれをいよ〳〵重ね、夜は一日の間のあやまりを考へて、過なければ夜をやすくいぬべし。もし過あらば、悔いはぢて、來日の戒とすべし。是國語にいへる所、學問の法とすべし。

一いまだ書を讀まざる人の爲にいはゞ、此道を行はんと志を立つる事は、まことに第一なるべし。されど經書をはじめとして、ひろく古の書を讀まざれば、聖人の敎を知らで道にくらく、言ふ事行ふ事、ひが事のみぞあるべき。又古來歷代の事を知らでは、今日の鑑とすべきやうなし。こゝを以て、つとめて朝夕書を讀み、古をかんがふべし。いかに生れつきたる才ありとも、稽古なくては、おのれと道を知り、古今天下の變を知るべからず。もし又すでに書を讀める人の爲にいはゞ、學問は、たゞわが身のあやまりを改め、善にうつりて身ををさむる工夫を專一にすべし。書をひろく讀

行はれず、惡去らずして、生れつきたる良智のちからも、學問して知れる所も、皆無用となりぬ。此故に學者道を行はんと思はゞ、まづ善を好み惡をきらふに誠あるべし。故に誠意の工夫尤切なり。

一學問の要二あり。いまだ知らざる時は知らん事を求め、既に知れらば行ふべし。知らざれば行ひがたし。行はれざれば知らざるに同じく、無用の事となりぬ。こゝを以て、學問の道は唯知と行との二にあり。又萬巻の書を讀んでも、道を知らず行はれざれば、讀まざるに同じ。是道に志なければなり。こゝを以て、大學の道、まづ格物致知して、事物の理をきはめ、わが知をひらき、さて知れる所の善をこのみ惡をきらふ心實にして、知れる所を行ふ、是誠意なり。知る事いたらざれば、萬事の善惡わきまへがたし。意誠ならざれば、善をなし惡をさる事實ならずして、道行はれず。此二は大學の道の要にして、知行の工夫なり。

一博學にして經書に通じ、義理を説く人も、其心術行迹あしくして、俗人におとれるもあり。是道に志なくして、道を我が心に得ざればなり。口に讀みならひ、目に見おぼえても、其理を心に得ざれば益なし。たとへば美食芳樽前に多くつらなれども、

良智―良知と書くが普通也、前註、七八頁參照

惡いまだあらはれず。其初てうごく時、善も惡もあらはる。意のおこる時に、このむと惡むとの二あり。惡むとはきらふなり。此時善をこのみ惡をきらふ事、眞實にしていつはりなきを、誠意といふ。たとへば善を好む事は、好色を好むが如くにし、惡をにくむことは、惡臭をきらふがごとくに眞實なるべし。是つとめ行ふ初なり。善をこのみ、惡をきらふ事、眞實ならざれば、本たゝずして萬の道行はれず。故に此後正心修身齊家治國平天下の工夫も、皆是を以て初とす。されば大學の八條目は、格物と誠意を以て要とす。格物は知のはじめなり。誠意は行のはじめなり。格物なくして萬の理をきはめざれば、智明ならずして善惡をわかちがたければ、迷ひてさとらず。夢のいまださめざるが如し。誠意なくして、善をこのみ惡をきらふ意、誠ならざれば、道を行ふべき基なくして、いまだ善人とはいひがたし。故に此二を以て、致知力行のはじめとする事むべならずや。

一　凡人には必生れつきたる良智ありて、いかなる愚者も、善惡をすこしはわきまへ知れり。其上學問して理をきはめ、其智やうやく開けぬれば、善を善とし、惡を惡とする心いよ／＼明かになりぬ。されども、善をこのみ惡をきらふに誠なければ、善

明徳を云々―此以下大學の書の所説を解説せる也、三綱領、八條目、格物致知等皆同書に出づ

あらたにするは、人をさむるなり。至善に止まるは、明徳をあきらかにし、民をあらたにするに、皆至極の善にいたりて止るべしとなり。故に明徳新民の外に、至善にとゞまる道あるにはあらず。右の三綱領は大學の大要なり。此三にいたる工夫の條目八あり。八條目は三綱領の内のこまかなる工夫なり。格物致知は、事物の理をきはめ知りて、知を開く道なり。誠意より以下は、皆力行の道なり。就中誠意、正心、修身は、ともに身をさむる道なり。齊家、治國、平天下は、人をさむるの道なり。凡大學は理を敎ふるなり。

一大學に、格物致知を以て道理を明かに知るを、身をさめ人をさむる勤のはじめとす。格物とは萬事萬物の道理にきはめ至るを云ひ、致知とはわが心の知をきはめて明かにするなり。格物の次第は、まづ五常五倫の道、身を治め家をとゝのふるまぢかき事よりして、次第を以て、やうやく國天下をさむる理にきはめ至る。是格物なり。かくのごとく萬事萬物につきて理をきはむれば、わが心の知おのづから明かになる。是致知なり。故に格物の外に致知の工夫なし。是大學のつとめのはじめなり。其次は誠意にあり。意とは心のはじめておこる所の苗なり。心の體はしづかにして、善

大和俗訓巻之二

○爲學下

一小學の教は小子のまなぶ所、少なる學問なり。いにしへ八歳になれば、たかき賤しき、凡天下の、人の子となり弟となれる者、師の教をうけて學べり。これ小學なり。其をしへは、父母に孝し、兄長をうやまひ、君上につかへ、賓客に對する道、或は座敷をはゝき、飲食をそなへ、尊者の前に進み退き、應對をする禮をしへ、又日用の禮樂射御書數の六藝のわざをも教へ、是を以て、いとけなき時より其心をやしなひ、年長じて大學の道をまなぶ基とせり。凡小學はわざを教ふるなり。

一大學とは十五歳以上成人のまなぶ所、身を治め人をさむる大なる道理の學問なり。天下ひろしといへども、己と人より外なる物なし。己をさめ人をさむる道をまなぶは大なる學問なれば、大學といふ。明德を明かにするは、おのれを治むるなり。民を

常はむまれつきたる性なり。三徳は學問をする心法なり。五常をつゞめていへり。

一孔子曰、學而不止、闔棺而止。人と生れては人の道を知り、此身をよくをさめて、君子となる事をつとめとすべし。是人と生れたるかひあらんとなり。しかれば人となるべき道を學ぶ事、おこたるべからず。一息も猶のこれる内は、學ぶことやむべからず。死して後やむべし。

少壯不努力―文選二十七に出でたる長歌行の一節

く、記憶つよく、一たび見きゝて覺えしこと、身を終ふるまでわすれず。此時つとめまなべば、其功多し。故に書をよむ事は、少年の氣力つよく、いとまある時、よくつとむれば、大にすゝみて益あり。三十歳以後は、よろづつとめ多くなりて、いとますくなく、精力やう〳〵よわくなるにしたがひて、其覺えおとろへぬれば、力を多く用ひてもわすれやすく、勞すれども功すくなし。年少なる人は、これをよく心得て、わかき時隙ををしみ、學問をつとむべし。誠に一生の寶となるべし。淵明が詩に曰、盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歳月不待人。又古詩に、少壯不努力、老大徒傷悲といへり。わかき時是をよく考へ、後悔なからんことを思ひて、時日をゝしみてつとむべし。又よくつとむれども、學問の術をえらばざれば、一生益なきことにまよひ、心を用ひくるしみて、よき道を知らず。是亦おろかなりといふべし。

一　凡君子の學問は、知仁勇の三德を本とし、五倫をあつくするを道とす。知仁勇は五倫の道を行ふ心の德なり。知は五倫の道をしり、仁は五倫の道を身にたもち行ひ、勇はつとめて知り、つとめて行ふ。知るも行ふも、勇を以てつとむ。君子の學問をするに、其心法とするは三德なり。行ふべき道とするは五倫なり。三德と五常とは理同じ。五

まどし—貧しに同じ

聖人は云々—此語淮南子に出づ、五頁參照

くすし—醫師也

必人にすぐれて、其家富みて、衣食ともしからず。古人も人生はつとめにあり。つとむれば則まどしからずといへり。國家の政をくはしくつとむれば、其國家必治まる。學問をくはしくつとむれば、必諸人にすぐれて、其才すゝむ。萬の事皆しかり。隙ををしみて久しくつとむれば、成就せざることなし。それ人の寳は、いとまに過ぎたるはなし。いかんとなれば、君子の學問をつとめ、國家の政を行ひ、父母主君に仕へ、諸藝をまなび、農の田を作り、商人のひさぎ、百工の器物を作り、婦女の布帛をおりぬふも、皆いとまを用ひてなし出すわざなれば、人の尤おもんじをしむべき事、いとまに過ぎたるはなし。故に其をしむべきこと、金玉にも過ぎたり。古語にも、聖人は尺璧を貴ばずして、寸陰を貴ぶといへり。隙ををしまざる人は、まなぶ事もつとむる事もなければ、必才智も徳行も藝能もなきものなり。いとまををしまざれば、君子は身ををさめ、家をとゝのふる事あたはず。農工商は其家業を失ひて、貧窮飢寒をまぬかれず。學者は、必粗學にして不才なり。くすしは必賤工なり。よろづの道々のたくみも、いとまををしまざれば必つたなし。是いとまは人生の寳にして、をしむべき故なり。就中年少の時は事すくなく、いとま多し。精力つよ

いにしへの禹王は云々―陶侃の言に、大禹は聖者、乃ち寸陰を惜む、衆人は當に分陰を惜むべし

古人も云々―此語劉向の說苑に出づ

智をおさへずして、人の善言を取りもちふべし。位たかく年たけたる人、或は才學の名ある人も、其位と年と才とにほこるべからず。唯人にへりくだりて尋ね問ふは、知者のます／＼智をます道なり。

一凡幼よりつとめまなぶに、ひまを惜むべし。いにしへの禹王は、聖人なりしだに、猶寸陰ををしみ給ふ。いはんや今の凡人をや。いたづらに悠々として、むなしく時日をつひやすべからず。光陰箭のごとく、時節は流るゝがごとくなれば、年わかきをたのんで、時をうしなふべからず。人の世にあるは、老幼の時と、やまひする時は學びがたし。又四民ともに、其家のことわざしげくして、もの學ぶひまはすくなし。其すくなき隙ををしまず、怠りてむなしく過ぎ、或は無益の事をなして、時を費し、一生をはかなくをはらん事、いと愚なりといふべし。今年の今日、ふたゝび得がたきことを思ひて、かりにも徒に時をわたるべからず。是一生の間、心を用ふべきことなり。古人も、常にしておかず、つねに行ひてやまざる者には及びがたしといへり。又いたづらに爲すことなく、常に隙多き人は、人にすぐるゝ事はなきものなりといへり。たとへば農人商人の、つとめていとまをしみ、朝夕田を作り、あきなふ者は、

を知らざるべし。かくのごとく進み行かば、君子となること必期すべし。若けふは昨日にかはらず、今月は前月にことならず、ことしは去年に同じくば、日に新にする力なくして、いつまでも愚者にて世を終らんこと口をし。

一文學をつとむるも、亦同じ。日々につとめてやまざれば、文學日々にすゝむ。數年の後は、經傳の義理に通じて、樂となる。十年の功は、甚大なり、文學半ば成就す。

一萬の事、はじめに苦勞せずして忘れば、後に功ならずして、樂なし。たとへばおつき灸をこらへ、苦き藥をのめば、後に無病の人となるが如し。學問において、尤此しるしあり。わかき時辛勞する人は、老いて後樂多し。

一書をよむには、まづ四書五經などを熟讀し、文字を多くおぼえて、訓詁に通ずべし。訓詁とは字義をいふ。文字訓詁を知らざれば、書を見わけがたく、力なくして書を讀むにはか行かず。文學のすゝまざるは、字を知らざればなり。されども文字訓詁にかはり止まりて、義理を自得せざるは、君子の學にあらず。

一學問は智惠をひらく道なれば、廣く聞き、多く見て、義理に通じ、我が心に智惠のおのづから開くるを待つべし。聰明をたのみ、我が才智を先だて用ふべからず。人の才

日新―湯の盤の銘に苟も日に新に日に新に又日に新にと云へるもの是也

し。博ければ、義理詳かにして備らずといふことなし。約なれば義理精しくして明ならずといふことなし。博く學ぶにいとまなく、又中年以後はじめて學ぶ人は、約にすべし。古人も、博くして雜なるは、約にしてくはしきに如かずといへり。およそ書をよみ、學問するは、道を知らんがためなり。道を知らざれば、廣く古今の書をよみ、詩文章をよく作りても要用なし。學問の本意にあらず。又四書五經等の文義に通じて、古今の書をひろく見ても、一生義理を知らざる人多し。道に志なければなり。又志ありても、まなびやう悪しければ、一生道を知らず。或は聰明の足らざる故にもよれり。知をひらくことを勤むべし。

一　心學に志す人は、日新の工夫を用ふべし。日に新にすとは、昨日のふるき悪をあらためて、今日あたらしく善にうつり、けふは昨日にまさりて新しくなるを、日に新にすといふ。如此なれば、今日は是にして、きのふは非なることを覺ゆべし。かやうに勤めて止まざれば、日々に工夫進み、月々に異にして、年々に同じからず。一日は一日の功あり、一月には三十日の功あり、一年には三百六十日の功あり、三年には千日の功ありて、德にすゝみ善にうつりゆかば、其樂極りなくして、手の舞ひ足の踏むこと

淮南子―エナンジと讀むが普通なれど暫く原本に從ふ、二十一卷あり漢の淮南王劉安の撰にして道德仁義を講論し其旨老子に近し

いふ事なかるべし。聖人の書を經と云ふ。經とは常なり。聖人の書は萬世の常道なり。賢人の書を傳といふ。傳とは聖人の道を述べ、後代に傳ふるなり。四書五經は經なり。其註疏に周程張朱の書は傳なり。歷代の事をしるせる書を史と云ふ。記錄のことなり。子は荀子、楊子、淮南子、說苑、文中子等の諸氏の書を云ふ。是は程朱の書のごとく、道理精明なるにはあらざれども、經書の義理を助くる益あり、見るべし。集は諸家の文章等の書なり。是又義理を說明せり。此經史子集の四の書は、本末輕重あれども、皆學問のため用ある書なり。道を知らんとならば、經學を專らとして、一生つとむべし。次に史學、是も其益大なり。次に諸子諸集を見るべし。朱子綱目、尤好書なり。古代の治亂盛衰の事跡をしるのみにあらず、義理の學にも、亦大に助あり。殊に國土ををさむる人の明なる鏡なり。又軍の勝敗の道を記して、兵術を學ぶ人にも甚益あり。古來要用の故事も、亦此内に多し。彼是尤益多し。つとめて數遍見るべし。誠に經世の大典とすべし。其外、和漢の記錄、力にまかせて見るべし。又いとまあらば、諸子百家の書を見て經說を發明し、義理の趣をひろむべし。しかれども、もはら博覽をつとめて、雜學にうつり、志をうしなふべからず。學問は博くして、又約にすべ

へて―論語學而篇に出でたる子夏の言

口耳の學―荀子勸學篇に小人の學は耳に入て口に出づ口耳の間則ち四寸のみ曷ぞ以て七尺の軀を美するに足らんとある是也

周程張朱―周茂叔、程顥、程頤、張横渠、朱熹

てよく其力をつくし、君につかへて、能く其身をゆだぬとあるを見ては、其ごとく親につかへて、我が身の力も、財の力もをしまずして、孝をつくすべし。臣としては、我が身を我がものにせずして、わたくしをわすれ、專ら君に忠をつくすべし。自餘も皆かくのごとくすべし。是を書をよんで受用すると云ふ。もし書をよんでも受用せざるは、口耳の學といひて、耳にきゝて頓て口に言ひたるまでにて、心にまもり身に行はざるは無用の學なり。

一初學の人書をよむには、まづ四書を熟讀し、又五經をよく讀むべし。五經は上代の聖人の教なり。文字の祖、義理の宗といひて、文字のはじめ、義理のをしへの本なり。四書は孔門のをしへなり。是をよむは、まのあたり聖賢の教をきくが如し、尊ぶべし。文義やうやく通ぜば、四書の註、大學中庸の或門を見て、後五經の註を見るべし。次に周程張朱四家の書を見るべし。中につきて、程朱の書尤よく讀むべし。ことに小學の書は、身をさむる大法をしるせり。人倫の道ほゞ備れり。はやく讀んで、其義を習ひ知るべし。又歷代の史、左傳、史記、朱子通鑑綱目を見るべし。是道を知り、古今に通ずる學問の法なり。經傳及歷代の史に通ぜば、天下古今の事理、明ならずと

子夏に云々―論語雍也篇

父母につか

我が食したるを人に知らせんと願ふ心なし。學問はたゞ我が身ををさめんためにすべし。聊人に知られん爲にすべからず。又聖人の子夏に女爲二君子儒一、無レ爲二小人儒一との給へり。此意は、君子儒は唯己が身ををさめんために學べり。實學なり。小人儒は、唯人に知らしめんためにまなべり。是名利をねがふ心のみにて、我が身ををさむるに志なし。僞學なり。こゝを以て、君子の心は日々に善にすゝみて上達し、小人の心は日々に惡におちいりて下達す。同じく力を用ひて學問せば、君子儒となるべし。小人儒となるべからず。つとめまなんで小人儒となるは口をし。學者まづ幼より己が爲にする志を立つべし。是學問する人の、第一に心得べきことなり。しからざれば、博く書をよみ學問しても、益なくして却て害あり。

一書をよまば、我が身に受用する事を專一に志すべし。受用とは、書にしるせる聖人の敎を、我が身にうけ用ひて、まもり行ひ、用にたつるを云ふ。もし書をよみ義理をききても、身にうけ用ひずして行はざれば、何の益もなきいたづらごとなり。大學をよんで、如レ惡二惡臭一如レ好二好色一とあるを見ては、我が心にこれをうけ用ひて、實に惡をきらふ事惡臭の如く、善を好むこと好色のごとくすべし。論語をよんで父母につかへ

くひぜを守る—一事を墨守して時勢に應ずるの才なきをいふ、韓非子に出でたる宋人の故事

古之學者—論語憲問篇

問する者、まづ第一これをいましむべし。文盲なる人のことばに、學問すれば人品あしくなる、益なくして害ありといふは、世上にかやうの人あるを見て、其くひぜを守り、其上其人もとより學問をきらふ故に、妄にかくいふなるべし。もし己が身ををさめんために、實にまなばゞ、なんぞ益なからんや、害なからん事はいふに及ばず。

一理をきはむるも、事を知るも、一重に物を思ふべからず。浦のはまゆふの百重なる事を思ひて、幾重にも理をきはむべし。心あさき人は、一重を知りて、はやことわり至極して、此上なしと思ふは、はかなきことなり。今日一重をさりて、明日又一重をさり、日々かくのごとくすべし。皮をつくして肉を見、肉をつくして骨を見、骨をつくして髓を見るべし。凡理をきはむる學問は、心あらくかろき人は、なし得べからず。心くはしく靜かにすべし。

一孔子曰、古之學者爲レ己、今之學者爲レ人。爲レ己とは、我が身を修めん爲にする實學なり。爲レ人とは、人に知られんがためにする名利の學なり。學問の本意は、己が身ををさめんためなれば、人の知と不レ知とにかゝはらず。たとへば食する者の、我が飢をやめ身を養はんためにするが如し。唯我が腹にみちなん事をのみ思ひて、さらに

守之以愚―家語に、孔子曰く聰明睿智之を守るに愚を以てし功天下に被りて之を守るに讓を以てす

技藝ありとも、我を知ありとし、我が才にほこる心あるべからず。人各知あり、又長ずる所あり。人をおろかにし侮るべからず。諫をふせぎ、我を是とすべからず。己が不善をすてゝ人の善にしたがひ、人の善を用ひて我が身に行ふべし。我を知ありとするものは惡德なり、いましむべし。其愚を知るものは大愚にあらず。其過を知るものは大なる過なし、故に高慢にして己をゆるすものは、必愚人なり。いかんとなれば、自ら知るの明なく、知をひらき善にすゝむの基なくして、終に愚にてをはる。人をあなどる者は、必天のとがめあり、人のせめあり、人をそしる者は、必人にそしらる。古の君子は、聰明睿知なれども、守之以愚。いはんや末世の凡夫、わづかなる智惠才能にほこるは、甚おろかなりといふべし。尚書にも、其善にほこれば其善をうしなひ、其能にほこれば其能を失ふといへり。我が身にほこれば、みづから是として、吾に過惡あることを知らざる故に、過を改め善にうつる事あたはず。惡日々に長じ善日日に消えぬ。しかれば、たとひ聖人と同じく居て、朝夕をしへを受くとも益なかるべし。つとめて書をよみ學問すとも、其身に益なきのみならず、却て邪智をまし、才能にほこりて害あり。こゝを以て、矜は天下の惡德の由、古人のいましめ明なり。學

人聖人にあらず─左傳に、人聖人にあらず誰か過なからん

子も、此五のもの一を缺けば學にあらずといへり。

一 常に我が身をかへりみ、又人のいさめをきゝて、我が不善なると、我があやまちを知りて、善にうつり、あやまちをあらたむべし。知ありて忠直にして、我が過を正す良友を求めて、交り親みて、いさめをきゝ、教を求むべし。學問は我が身の惡しきをあらためて、よきにうつる道なれば、我を知ありとし、我をよしと思はゞ、學ぶとも益なくして、かへりて邪氣を長ずべし。人聖人にあらず、なんぞ事ごとに善をつくさんや。自ら是とし、自ら足れりとすべからず。聖人すら學問をこのみて、自ら是とし給はず。今の凡夫、いかでか過なかるべき。

一 凡致知の法は、五常五倫の道を知るを以て先とし、家をとゝのへて、民ををさむる理にいたるべし。次に萬事萬物の道理をも知りきはむべし。天地の内にあらゆる萬事萬物は、皆我が心の分内の事なれば、其理を知らずんばあるべからず。天下の理をきはめ知るの道は、本と近きとを先とし、末と遠きとを後にして、前後緩急の次第を失ふべからず。

一 學ぶ人は、唯我が知のくらく、我が德のすゝまざる事をうれふべし。われに學問才智

言を忠信―論語衛靈公篇に、子張行はれんことを問ふ子曰く言忠信行篤敬なれば蠻貊の邦と雖ども行はれん

一篤く行ふとは、すでにまなび問ひ、思ひわきまへて、其道理を知らば、即吾が身に其知れる道理をあつく行ふべし。行ふ事あつからざれば、道立ちがたし。篤く行ふの道は、言を忠信にしていつはりなく、行をつゝしみてあやまちを少なくす。人の身のわざ多けれど、言と行との二には出でず。故に言をまことにし、行をつゝしめば、身修まる。また心のおこる處の用七あり。七情と云ふ。喜怒哀樂愛惡欲なり。人の身のわざは、此七よりおこる。是をつゝしみて、過不及なくして、道理にかなふべし。中につきて、七情の内、いかりと欲との二、尤我が心を害し、身をそこなひ、人をそこなふものなる故に、いかりをこらしやめ、欲をふさぎ去りて、其はじめておこる處のきざしに克つべし。又善にうつりて、我が善より猶よき事あらば、己が善をすてゝ、まされる方にしたがふべし。身に過あらば、はやく改むべし。我が身に執著して、改むるにはゞかるべからず。又人に對して行ふに、人われにしたがはざる事あらば、人を責めずして、我が身をかへりみ咎むべし。是皆あつく行ふ道なり。學び問ふにあらざれば、道明ならず。思ひ辨ふるにあらざれば、道をわが心に得がたし。篤く行ふにあらざれば、知りても實なし。右五のものは、中庸にしるせる所、學の工夫なり。程

物の上にあるなれば、まづわが一心の道理をきはめ、次には萬事につきて、ひろく道理をつとめて、わが心中に自得すべし。是ひろく學ぶなり。博く學ぶの道多けれど、書を讀むほど益あるはなし。古人も、人の知惠をますは書に如くは無しといへり。されど文字をのみ好みて義理を求めざるは、博く學ぶにはあらず。

一審に問ふとは、すでに學べる事の、わが心にうたがはしき事を、明師良友にちかづきて、つまびらかに問うて、其理を明かにし、うたがひを解くべし。

一愼んで思ふとは、すでに學び問ひたる事の、うたがはしき事は、心をしづかにし、つつしんで思ひて、よくがてんすべし。まなび問ひても、よくがてんせざれば我が物にならず。故にわが心に道理をもとめて、其理を會得すべし。是よく思案して道理に通ずるなり。愼んで思ふにあらざれば、道理に通じがたし。學問は自得をたふとぶ。自得とは愼んでよく思ひて、心中に道理をがてんして、わが物にし得たるものなり。

一明かに辨ふとは、すでに愼んで思案して、猶善惡のまぎらはしき事あらば、あきらかに其是非をきはめて、善惡をわかつを云ふ。以上の四は、皆知の工夫にして、道をあきらかにするなり。

に相須つべし目の足無くして行かず足の目無くして見ざるが如し先後を論ずれば知を先と爲し輕重を論ずれば行を重しと爲す

目くらければ、行くべき道見えず。足立たざれば、行くことかなはず、目足ともにそなはらざれば、道を行きがたきが如し。知を先とし、行を後とす。萬のこと、先知らざれば行ひがたし。故に前後をいへば、知るを先とす。知るは行はんため也。知りても行はざれば用なし。故に輕重をいへば、行ふをおもしとす。知ると行ふとの二は、一をかくべからざること、鳥の兩翼のごとく、車の兩輪のごとし。學問は知と行と竝進むをよしとす。竝進むとは、知れることは即必行ふを云ふ。知と行と少しの前後はあれど、さきだちおくれず、一度につれだちて行くを、ならび進むといふ。知れるばかりにて行はざるは、ならび進むにあらず。

一知行の二の工夫を、こまかにわかてば五あり。中庸曰、博く學び、審かに問ひ、愼んで思ひ、明かに辨へ、篤く行ふ。是道を知りて行ふの工夫にして、學問の法なり。

一博く學ぶの道は、見ると聞くとの二をつとむ。聖賢の書をよみ、人に道をきゝて、古今を考へて、道理を求むるなり。人倫の道は、載せて聖賢の書にあり。よく讀まん人は、白日に黑白をわかつが如くなるべし。天下の道理はきはまりなし。其道理を知らざれば、行ふべきすべを知らで、あやまり多し。道理はわが一心にそなはり、其用は萬

聖人の云々—論語に我に數年を假し以て易を學ばしめば以て大過なかるべしと見え、抱朴子に孔子易を讀み章編三たび絶ゆとある類也

知行の二—朱子の言葉に大抵學問只兩途有り致知力行のみ、又曰く、知と行と當

後、天地の道を學ぶべし。聖人の易を學び給ふも此故ならずや。されども天地の道は、猶容易知りがたし。

一志を立つる事は、大にして高くすべし。小にしてひきければ、小成に安んじて成就しがたし。天下第一等の人とならんと、平生志すべし。世俗と同じく、賤しくひきくすべからず。かく志をたてゝ、日々月々につとめ行はゞ、久しくして其功つもりて、必人にまさるべし。上をまなべば中にいたり、中を學べば下にいたる。下を學べば功をなさず。又心は小にしてひきくすべし。人にへりくだり、日用常行のひきゝあしもとより行ふべし。心大なれば、おごりてつゝしみなく、細行をつとめず。高ければ、人にたかぶりて謙德を失ふ。

一學問の法は知行の二ツを要とす。此二ツをつとむるを、致知力行とす。致知とは知ることをきはむるなり。力行とは行ふことをつとむるなり。道を知ること明ならざれば行はれず。たとへば目なきものゝ、足すくやかなれど、行くべき道を知らで行きがたきが如し。行ふ事するどならざれば、知りても用なし。たとへば目明なりといへども、足たゝざれば行く事かなはざるが如し。知と行とは、目に見て、足にて行くがごとし。

一學問にすぢ多し、訓詁の學あり、記誦の學あり、詞章の學あり、儒者の學あり。訓詁の學とは、聖人の書の文義をくはしく知る事をつとむるを云ふ。記誦の學とは、廣く古の書をよみ故事事迹を覺ゆるを云ふ。詞章の學とは、詩文を作ることを學ぶを云ふ。儒者の學は、天地人の道に通じて、身ををさめ人ををさむる道を知るを云ふ。學問をせば儒者の學をすべし。訓詁の學は、四書六經等の文義に通じても、義理を知らざれば用ひがたし。いはんや記誦詞章の學は、いよいよ道に遠し。儒者の學とすべからず。儒者の學に專一ならば訓詁記誦の習も、略其内にかねてよし。此外に又小說の學あり。是は經史文章の學をこのまず、たゞもろもろの雜細の事、又あやしき事などを記せる事をめでて、多く見おぼえ樂とする學なり。又小說の學は、訓詁詞章記誦などにならべて、學術の條理を立つるには足らず。しかれども末世には又此學あり。學術の最下品なり。

一或人の曰、儒者の學は、唯人道を知らば可ならん。天地の道を知るに及ぶべからずと。予答へて曰、天地の道は人道の本なり。天地の道を知らざれば、道理のよつて出づる所の根本を知らず。根本を知らざれば、天理の人にそなはり、人の天地にうけたる、天人合一のすぢめを知らずして、人道明ならず。故にまづ日用人倫の道を學んで

盡心上に、人の學ばずして知る所の者は良知也

斧の柄をきるに—詩經豳風に柯を伐り柯を伐る其則遠からずとあるに因る

皆仁心あり、孺子の井におち入るを見てはあはれむ。人皆義理あり、節にあたつては、おろかなる下部も命ををしまず。乞食にも食をけちらして與ふれば喰はず。是人の性の善なる證なり。聖人の敎は、天下の人の生れつかざる事を、知らしめんとにはあらず。生れつかざる事は、をしへてもなしがたし。其人にもとより生れつきたる善心あるを本として、導きひらきて是をおしひろめさせんとなり。天下の人其性皆善なり。其の善なるに本づきて、その生れつきたる善を行へと、みちびき給へるなり。故に其敎行はれやすし。たとへば山人が斧の柄をきるに、我が手に持ちたる斧の柄を以て、新しく作らんとする斧の柄になるべき木の枝に、おしならべ較ぶれば、大小長短少しもたがはず。まぢかき手本になる事、是に過ぎたる事なし。しかれども我が手にもてる斧と、新しく斧に作らんとする木の枝とは、別の物なれば、猶以て遠しとす。聖人の敎は然らず。卽其人に生れつきたる善心を本として、是をそだて養ふ道なれば、敎をつくりいだし、別の道をもち來りて、其人に敎ふるにはあらず。然れば、天下の人おしなべて、此道を以ていざなひ導かば、およそ血氣ある人類は、唐もやまとも、西戎南蠻も、此道を尊信して、したがはずといふ事なかるべし。

學の進む事きはまりなし。又禁戒を守るべし。禁戒とは戒めて行はざるを云ふ。學問する人は、まづ矜の字を禁戒とす。矜はほこるとよむ。ほこるとは、我が身に自慢して、人にへりくだらざるを云ふ。いまだ知らざるを、すでに知れりとし、よからざるをよしとす。もはら我が知を用ひて、人に問はず、人のいさめを用ひず、身を責めずして人を責む。かくの如くなれば惡日々に長ず。初學の人は、先此禁戒を守り、又此基を立つべし。然らざれば、學んでも益なきのみにあらず、かへつて害あり。是善をよみ學問する人が、第一心得べき事なり。

一人の性は本善なれども、凡人は氣質と人欲に妨げられて善を失ふ。氣質とは生れつきを云ふ。人欲とは、人の身の耳目口體に好むことの、よき程に過るを云ふ。生れつき惡しければ人欲行はれやすし。さればすべて人たる者は、古のひじりの教を學んで、人となれる道を知り、氣質の惡しきくせを改め、人欲の妨を去りて、本性の善にかへるべし。是學問の道なり。故にいにしへの聖人、をしへを立て、天下の人に學ばしめ給ふは、人の性皆善なる故、學んで善にかへる道あればなり。

良知—孟子

一人皆良知あり、をしへざれども幼よりおやを愛し、少し長じては兄をうやまふ。人

つとめ學ぶべし。されども藝は末なり、道義の學は本なり。藝をひたすら好めば、必學の志をうばはれて失ふものなり。いはんや私欲のなぐさみ好みにまかするをや。いましむべし。志を立つれば、たとへば西國の人のあづまへ行かんとおもひ立ちて、日々に行くに、其間晝夜あづまへ行かんと思ふ心は、念々つねにやまず。是あづまへ行く志たつなり。かくの如くなれば、つひに志す所に行きとゞかずといふ事なし。道に志すも亦かくの如くなるべし。

一凡學をするには、教をうくる基を立て、又禁戒を守るべし。基とは家をつくる土臺なり。學問する人は謙を以て基となす。謙とはへりくだるなり。我が身にほこらず、人に高ぶらずして、心をむなしくし、人に問ふ事をこのみ、我が才をたのまず、師友をうやまひ、我が身に才力有りても、無きが如くし、教をよくきゝ、人のいさめを悦び、すでに知れることも、知らざるが如くにして、我が知を先だてず、すでによく行ふ事も、いまだ行はざるが如く思ひ、人をせめずして我が身をせむるを、へりくだると云ふ。是學問をつとめ、教をうくる基なり。たとへば家を作るに、先基を立つるが如し。此基あれば日々に善言をきゝ、我が過を知りて、知明かになり、善日々に長ず。

志ある者は——後漢書光武帝の言に志有る者は其事竟に成ると見ゆ

物を翫べば云々——書經周書旅獒に、人を玩べば德を喪ひ物を玩べば志を喪ふ

ざれば學ぶこと成就せず。故に古人も、志ある者は其事つひになるといひ、又志たつは學の半なりといへり。たとへば弓いる者の、的に志し、道ゆく者の、宿に志すが如し。よろづの事、まづ本をつとむべし。志を立つるは學問の本なり。志を立つるには勇猛なるべし。柔弱にして怠るべからず。おこたれば驗なくしてはかゆかず。道を求むるにせちなる志は、たとへば飢ゑて食を求め、渇きて湯水を求むるが如くなるべし。わづかに悠々としておこたれば、志すたる。唯此道に心を一すぢにすべし。外物に心をうばはるべからず。物を翫べば志をうしなふと、尚書にもいへり。言ふ意は、耳目口體にこのむ所の外欲に耽り、外物をこのみ、或は無益の雜藝を一向にすきこのみて、心をかたぶくるの類は、皆是物をもてあそぶなり。かくのごとく外物に心をうつせば、道を學び君子となる志をうしなふ。萬の外物の翫び、このみ、皆志をそこなふものなり。程子曰、專一ならざれば直に遂ぐることあたはず。言ふ意は、一すぢになさざれば、行ひとぐる事成りがたし。專一とは、たとへば猫の鼠をねらふが如く、雞の卵をあたゝむるが如く、他念なかるべし。心あなたこなたに分るれば、學問道義の志はおとろへすたる。文藝武藝は、誠に士たる者の習ふべきことなれば、

志なく、師傳あしく、學術のすぢ違へば、一生精力を用ひ、つとめ學んでも驗なし。故に道を學ばんと思はゞ、初學より道にふかく志をたてゝ、明師にしたがひ、良友にまじはり、學術をえらぶを宗とすべし。學術とは學びやうのすぢを云ふ、學のすぢあしければ、一生つとめても道を知らず。一たび迷ひぬれば、よき道に立ちかへりがたし。故にまづ學術をえらぶべし。

一學問の道は、極めて廣大高妙にして深奥なり。しかれども其近き所は孝弟忠信の日用常行にあり。故にいかなる愚なる者も、此道をまなびやすく、知りやすく、行ひやすし。高遠にして、あやしく異なる道にはあらず。

一古の聖人すら、猶師にしたがひて學び給ふ。況や今時の凡人、學ばずしては道を知りがたし。小藝だにも、師なく習なくしてはなしがたし。況や人の道は即天地の道にて、極めて大なるをや。學んでも、まなびやう惡しければ、道を知らず。學ばずして道を得んことは、萬々此理なし。

一學問はまづ志を立つるを以て本とす。志とは心のゆく所なり。道を知り行ひて、君子に至らんと思ふ心常におこたりなく、念々やまざるを、志を立つると云ふ。志たゝ

食にあき云云—孟子滕文公上に、人の道あるや飽食暖衣逸居して教無きは則ち禽獸に近し聖人之を憂ふる有り契をして司徒たらしめ教ふるに人倫を以てす

倫の道は天性に生れつきたれども、其道に志なくして、食にあき、衣をあたゝかに著、居所をやすくしたるまでにて、聖人の教を學ばざれば、人の道なくして鳥けだものに近し。かくの如くなれば、人と生れたるかひなし。萬物の靈とすべからず。此ゆゑに聖人是をうれひ、賢臣を以て萬民の師として、人倫の道を教へさせ給ふ。是人となるものは、必道を學ばずんば有べからざればなり。愚おもへらく、人と生れて學びざれば、生れざると同じ、まなんでも道を知らざれば、學びざると同じ。道を知りても行はざれば知らざるに同じ。其故いかんとなれば、人と生れて學びざれば、人の道を知らずして、人と生れたるかひなし。是人とむまれて學びざれば、生れざると同じきなり。學ぶは道を知らんが爲なり。もし學びやうあしくて道を知らずんば、學びざると同じきなり。又道を知るは、行はんがためなり。まなんで道を知りても、行はざれば知らざるに同じ。故に人とむまれては、必學びずんばあるべからず。學ぶ者は、必道を知らずんばあるべからず。道を知れば必行はずんばあるべからず。道を知れば必よく行ふ。行はざるは未だ道を知らざるなり。道を知らんと思はゞ、聖人の教をあふぎ、賢人の說を階梯として、其法に隨ふべし。是道を知るべき學問のすぢなり。道に

推に作るべき也

わくらはに―稀に、たまく

は萬物にすぐれて、天地のめぐみをうくること厚し、かく貴き人身なれば萬物の內人と生るゝ事、きはめてかたき事なるを、幸に人と生れたる我が身を持ちながら、學ばずして天地の道にそむき、人の道を知らずして行はず、人と斯く生れぬるたのしみを忘れ、いたづらに一生をむなしく過して、鳥獸と同じく生き、身死して後はよき名をのこす事なく、草木と同じく朽ちなん事、豈うらみ多き事ならずや。

一人と生るゝは、きはめてかたき事なれば、わくらはに得がたき人の身を得たる事をたのしみて、忘るべからず。又人と生れて人の道を知らで、むなしく此世を過ぎなん事うれふべし。此樂と憂との二ッを、身を終ふるまで忘るべからず。

一およそ人となる者は、人の道を知らずんばあるべからず。人の道を知らんとならば、聖人の敎をたふとびて、其道を學ぶべし。いかんとなれば、聖人は人の至極なり。天地の道にしたがひて、人の道を敎へ給へる萬世の師なり。後代にのこしおき給ふ四書五經の敎は、萬世の鑑なり。其道理明なること、日月の天にかゝれるが如く、天下ひろしといへども、照らざる所なし。よく讀まん人は、天下の道理を知らん事、白日に黑白をわかつが如くなるべし。あに是を學ばざるべけんや。しかるに人となる者、人

顏子推—字は子介、瑯琊臨沂の人、隋の開皇中（我國紀元一千二百五十年代）歿す、文集三十卷、家訓二十篇共に有名也子推の字之

一天地の中に萬物あり。萬物の內、人ばかりたふとき物なし。かるがゆゑに萬物の靈といふ。其靈たるゆゑに、心に五性あり、身に五倫あり、目に五色をわかち、口に五味をおぼえ、耳に五音をわきまへ、鼻に五臭を知る。鳥けだものには、此あまたの事一もなし。人となりて、かゝるたふとき身を得たる事、まことに天地の間の大なる幸を得たるなり。しかるに人となれる道を知らず、禽獸に近くして、空しく此世を過し、人と生れたる身をいたづらになす事、くやしからずや。

一顏子推は、人身得がたし、空しく過ぐることなかれといへり。萬物にすぐれて、人と斯く生れたるは、誠に幸の至りなれば、人身得がたしといへり。人たる者、もし再び此世に生れば、たとひ此たび怠りて、人の道を知らずとも、かさねて又人とむまれ來ん時をたのむべき事もありなん。此身再び人となることを得ざれば、道を學び、此身をよくをさめ、人となりて終るべし。むなしく此世を過すべからず。もし人の道を知らで、空しく此世を過しなば、人と生れたるかひなかるべし。をしむべきかな。

一萬物の內、人と生るゝ事甚かたし。如何となれば、鳥獸蟲魚は年々に多く生る事、其數かぎりなし。人の數は、鳥獸蟲魚の萬が一もなくして、きはめて少なし。其上、人

謂ひ知者は之を見て知と謂ふ百姓日に用ひて知らず

し。

一およそ天は人の始なり、父母は人の本なり。人は天地を以て大父母とし、父母を以て小天地とす。天地父母其恩ひとし。故に天地につかへて仁を行ふ事、父母につかへて孝を行ふが如くすべし。こゝを以て禮經にも、仁人の天につかふるは、親につかふるが如くし、疎なるべからず。親につかふる事、天につかふるが如くすべし。畏愼むべしといへり。おろそかなるは愛なきなり。おそれざるは敬なきなり。天地につかへ奉るも、父母につかうまつるも、同じく愛敬をいたして、疎ならず、あなどるべからず。天地によくつかふるは仁人なり。仁心をたもつ人なり。父母によくつかふるは孝子なり。孝養をよくつとむる子なり。天地につかへ父母につかふるの道同じ。しかれば、天地につかへ奉るは人間の大事にて、しばしも忘るべからず。常人は近き父母につかふる道をだに知らずして心を用ひず。況や天地は極なき大恩あることを辨へずして、天地につかへ奉るは身にあづからざる事とおもへり。夫天地の恩は父母の恩にひとし。こゝを以て身ををはるまで、常に愼んでつかへ奉り、力をつくすべき事、是人の職分にて、至りて重き大事なり。人たる者この理を知らずんばあるべからず。

百姓は云々―易繫辭上傳に、一陰一陽之を道と謂ふ之に繼ぐ者は善也之を成す者は性也仁者は之を見て之を仁と

り、如何にもして天地の恩をむくいん事を思ふべし。是天地につかふる孝なり。人たる者は、つねに是を心にかけて忘る可からず。天地につかへ奉る道は別にあらず。天地の御心にしたがふを以て道とす。天地の御心にしたがふとは、我に天地より生れつきたる仁愛の徳を失はずして、天地の生める所の人倫を、厚くあはれみ敬ふをいふ。是則人の行ふべき所にして、人の道なり。人の道とする所、さらに此外にある可からず。夫人は天地のめぐみによりて生れ、天地の心をうけて心とし、天地の内にすみ、天地のやしなひを受けたり。かくのごとく極りなき大恩をうけたれども、凡人は知らず。所謂百姓は日々に用ひて知らざるなり。然るに、天地につかへ奉らずして、人欲にしたがひ、天理にしたがはざるは、天地の大恩をかうぶりて、天地にそむく故、天地の子として大不孝なり。人の子として、其親を愛せずして他人を愛し、父母にそむきて不孝を行ふが如し。不孝の子は其身を天地の内に立てがたし。いはんや天地の子として、天地にそむき不孝なるをや。幸にしてわざはひなしといへども、天地にそむける科おそるべし。天地をたふとびつかへ奉るべき事、前にもすでにいへれど、返す返すよく人につげん爲に、同じ事をいくたびも繰返していふなり。猶此後にもいふべ

といへり

義禮も智なければ行ふすべを知らず。義禮智は皆仁より出で、仁をたすくる理なり。信はまことなり。仁義禮智の心信にして偽なきを云ふ。まことなければ仁義禮智にあらず。凡此五常の性にしたがひて、人倫に對してなさけふかく、あつく行ふを人の道とす。人倫とは君臣父子夫婦長幼朋友の五ッなり。是を五倫といふ。又五品とも云ふ。天下に人多しといへど、その品をわかてば、此五品の外にはいでず。五倫にまじはる道は、君は臣をあはれみ、臣は君に忠をつくすべし。父は子をいつくしみ、子は親に孝をつくすべし。夫は婦に禮義あり、婦は夫をうやまひて、和順なるべし。長者は幼をめぐみ、幼きは長者をうやまふべし。兄弟も長幼の内にあり。朋友は互にまことありてたのもしく表裏なかるべし。此五倫の道は、仁義禮智信の五常の性にしたがひて、人倫にまじはる時に行ひ出せるなり。わが本性の外に求むる道にあらず。

一人となるものは、天地を以て大父母とする故、父母の恩をうくるが如く、きはまりなき天地の恩を受けたり。天地のめぐみにて生れたる恩のみならず、身を終るまで天地のやしなひをうくる事、たとへば人の身の、父母より生れて後も、父母のやしなひによりて、ひととなるが如し。こゝを以て、此世に生れては、つねに天地につかへ奉

五常—白虎通に、五常とは何ぞ仁義禮智信を謂ふ也と見え、董仲舒の言に仁義禮智信五常の道は王者の當に修飾すべき所也

に常に天地につかへ奉るを以て人の道とす。天地につかへ奉る道はいかんぞや。およそ人は天地の萬物をうみそだて給ふ御めぐみの心を以て心とす。此心を名づけて仁と云ふ。仁は人の心に天より生れつきたる本性なり。仁の理は、人をめぐみ物をあはれむを徳とす。此仁の徳をたもち失はずして、天地のうみ給へる人倫をあつく愛し、次に鳥獸草木をあはれみて、天地の人と萬物を愛し給ふ御心にしたがひ、天地の御めぐみの力を助くるを以て、天地につかへ奉る道とす。これすなはち人の道とする所にして仁なり。仁の理をわかてば仁義となり、仁義をわかてば禮智信となる。五の性をすべて五常といふ。たとへば、一年をわかてば陰陽となり、又わかてば春夏秋冬の四時となるが如し。仁は五常をすべて其惣名なり。五常は人に生れつきたる理なれば、五性といふ。性とは人の心に生れつきたる理をいふ、此五性は、いにしへ今天下の人、高き賤しきも、さかし愚なるも、おしなべて天地より生れつきて、萬世迄も相かはることなき故に、五常といふ。常とは變らざるなり。中につきて、仁はあはれみの心なり。是を以て四徳をかねたり。義は宜しきなり。行ふ所各其物に相應するを云ふ。禮はうやまふ心、つゝしみて侮らざるを云ふ。智は明かにさとる心、道理に通ずるなり。仁

天地は云々—君子訓の初に註したり

大和俗訓

貝原益軒著

巻之一

○爲學上

一天地は萬物の父母、人は萬物の靈なりと、尙書に聖人說き給へり。言ふ意は、天地は萬物をうみ給ふ根本にして、大父母なり。人は天地の正氣をうけて生るゝ故に、萬物にすぐれて其心明かにして、五常の性をうけ、天地の心を以て心として、萬物の內にて、其品いとたふとければ、萬物の靈とはのたまへるなるべし。靈とは心に明なるたましひあるを云ふ。天地は萬物をうみ養ひ給ふ中にも、人をあつくあはれみ給ふ事、鳥獸草木にことなり。こゝを以て、萬物のうちにて、もはら人を以て天地の子とせり。されば人は天を父とし、地を母として、かぎりなき天地の大恩を受けたり。故

世の中に、われと志を同じくする人もありて、此書のあやまりおほくしてひが〳〵しきことをよく改めつくりて、世をさとし給はゞ、まことにねがはしきほいにかなへるなるべし。

寶永五年立冬日

益軒貝原篤信書
時年七十有九

なる事をつくりて、もしくは世の中の無學なる人、小兒の輩、しづのを、しづのめをさとして、民用の小補にもなりなば、わが此世に生れ、食にあき、衣をあたゝかにき、居り所をやすくして、天地のたからを多くつひやせる素餐の罪を、すこしまぬかるよすがともなりぬべし。こゝを以て、人の誹をうれひざるなるべし。今われ犬馬のとしすでにやそぢにせまり、なす事なくて此世くれ行くなべに、こよみのぢくあらはれたるごとくなれば、やがて草木と同じく、はかなくくちはてなんとうらめしくて、わが身のざえのつたなきをわすれ、みだりにつとめて筆をおこし侍る。老らくの身は、心も目もたどたどしければ、いかなるひが事を書きけんもうしろめたし。

がりしらしめ、兒女のいとけなくて菽麥をわきまへざるをもさとさむ事をこひねがふのみ。わが材器もとより拙なければ、身にも應ぜぬ道學を以て名を立てん事を好まず。此故に、此書にかぎらず、いにし年より、かゝる鄙俚なるからやまとの小文字を多くつくり、瑣細なる事をも、何くれとしるせし事、世の道學の名を立つる君子のわらひ草とならんことも思ひかけぬれど、わが志したるすぢもあれば、世のそしりをもあながちにおそるべきにあらず。つら〳〵思ふに、わが輩天地のきはまりなき御めぐみをかうむりて、人と生れたる幸は、おろかなる身にては、其大なる德の萬一を、幾世をふともむくい奉らん事かたかるべし。せめてかゝるあさはか

はれるをや。漢字をしれる人はよんでしるべければ、今更贅言を用ふべからず。夫聖人の道の、至りて高大にしてふかくおくまりたるは、此國のをんなもじを以て、其かたはしをもまなびて說かんことおほけなくて、管にて天をうかゞひ、蠡にて海をはかるが如くなれば、つたなき筆にてしるさん事、飛鳥川のふかき淵の變じてあさき瀬となり行きなんうれひに、猶まされりといへども、高きにのぼるには、必まづふもとよりし、遠きにゆくには、必近きよりはじむる理あれば、世の不幸にして漢字をしらざる人の爲に、いさゝかむかし聞ける所のことわりを、今の俗語を以てかきあつめて八巻とし、名づけて大和俗訓といふ。世の中の夫婦の愚なるもあづ

も、おほくは聖學にうとし。又窮鄕の晩進は、句讀をならひうべき師友にともしく、高貴の家の子弟は、たはぶれあそびをたのしみ、安逸にならひて、學問などに身をくるしめん事いと遠ければ、稼穡の艱難を、すべてしらざるのみならず、五帝三王をも、是何物ぞと思へる疑をまぬかれがたし。こゝを以て、わが國聖學の寥々たる事、古よりすでに久し。うらみても猶うらめしきかな。しかれども、今まさに　聖明の御世にあたりぬれば、人文やうやく開けて、聖學の世に明かになりなん事たのもし。今の世の俗をさとさんため、からの文字を作りて、聖の道をとかんことは、わが輩のちからになしうべからず。況やもろこしのもろ〳〵の先正の說、すでに明かに備

大和俗訓自序

あめつちのことわり、人の道は、古の聖人これを經典にじるし給ひ、其明かなる事、日月の天にかゝれるが如くなれば、天下の目ある者は見ざる事なし。いにしへの人、天もし仲尼を生ぜずんば萬世長夜の如くならんといへりしもむべなり。後世の諸賢、又よく其志をつぎ、其事を述べ、經義を傳へて來裔をさとし給ふ。かれこれまことに天下後世の大なる幸なるべし。よくよまん人は、其理をしれらん事、たとへば日中に黑白をわかつが如くならん。あに世こぞりてこれをたふとび、身ををはるまで誦せざるべけんや。うらむらくは、わが日の本の俗のならひ、文字にかたくなにて、さばかり聰明の人

千言萬語、朝誦暮讀、亦所謂雖多亦何爲。與其務於博而不知要、孰若得一言而行之於躬哉。此編也、其言雖近、其爲教親切著明、可以起懦夫、廉頑夫矣。卷帙雖不多、其爲川廣博周詳、自爲學之道、心術之要、以至衣服言行應事接人之法、無不畢備矣。夫言近者誦之易感、旨遠者用之不盡。學者遜志、務讀會之於心、實之於身、則其益亦不尠矣。孟子曰、服堯之服、誦堯之言、行堯之行、是堯而已矣。苟讀此編、實之於身、則所謂堯之徒而已。豈復憂不至君子之域耶。然則此編豈獨爲武人俗吏而已哉。讀者不可以其近而忽之也。

寶永丁亥初冬日　筑州後生竹田定直書

大和俗訓序

古之教者、必本ニ於躬行一。不則受レ教之人弗レ能化也。其躬行者、必推而教レ人。不則體レ仁之分未レ能盡也。益軒先生學極ニ該博一、行致ニ敦厚一。其教レ人者、皆出ニ於躬行之餘一、而孳々思ニ人之爲レ善。然其秉心恭謙、不下敢以ニ道學之名一自處上之也。先生著レ書也夥矣。蓋謂志ニ聖學一者、宜下上誦ニ洙泗之訓一、下讀ニ濂洛之遺書一而足上焉。後輩妄添ニ隻言一者、所レ謂畫ニ蛇足一也。故其所ニ著述一、唯勤レ要爲ニ民俗之益一、而不ニ敢好ニ夸高耀一レ人也。此先生之志也。先生嘗憂下世俗不レ能讀ニ聖賢之書一者、無上レ知ニ日用彝倫之道一。於レ此作ニ爲喩俗之書一。乃書以ニ國字一、名以ニ大和俗訓一。唯欲ニ庸輩之易ニ讀、而不レ厭ニ其言之鄙近一矣。先生愛レ人之誠意、可レ謂レ厚也。定直竊謂、學者貴ニ自得一。苟不ニ自會ニ於心一、則不レ能レ發ニ於行一。歷ニ陳聖賢

大なるはなし。此思ふと思はざるとの二は、國家の治亂存亡の機なり。諸侯の子孫たる人、此二の機を察して、常に愼みて德を修め孝を行ひ給はゞ、其後榮永く傳はりて、令名限りなかるべし。

はかりなし
―無限なり
非常なり等
の意

時に生れて、家を興し國を得たまふ人は、安樂なる暇なし。風に櫛り雨に沐ひ、朝夕戰鬪を事とし、自ら敵に臨みて、鋒鏑を冒し、萬死を出でて一生を得、常に心を勞し身を苦め、大艱難大辛勞を經て、終に大國を得、大祿を受け給へり。唯時の幸にて、故もなくたやすく國を得給ふにはあらず。又既に國を得ては、城郭を築き、法制を定め給ふ辛勞も、亦はかりなし。其大勳勞をなし給ふことは、本より忠義の心に出で、唯我一代の榮華を受けん爲にはあらず。代々賢子孫おはしまして、能く其志を繼ぎ、其法を守りて、人民を保ち國土を失はず、長久にして榮え樂しまんことを願ひたまふ。是始て國を得給ふ先公の心にて、君子創業垂統爲レ可レ繼の意なり。其子孫たる人は、其先祖の大なる勳勞を以て國を得給ふことの難きをおもひ、其先祖を尊び、其志を繼ぎ、其法を守りて永く國土を保ち、人民を治め給はゞ、是其先祖の志にかなひて、諸侯の孝行是より大なるはなし。もし先祖の國を得給ふことの難き事を思はず、我が身何の辛勞もなく、居ながら國を領して、其富貴安樂を受け、恣に驕り、酒宴遊樂を事とし、剰へ我が才智に誇り、先祖を侮り、其定め置き給ひし家法を破り、又國民を苦め、政法を猥にして、終に其臣民に背かれ、國土を失ふに至るは、諸侯の不孝是より

て樂む故なり。下を治むるには、唯法度を嚴しくして下を制すれば、民上を犯さずして亂起らずと言へり。是秦の天下を失へるゆゑんなり。秦より以下、天下を治むることと能はずして、天下を失ひ、身を亡ぼせる人多きは、皆此ゆゑなり。天下を有ちては、唯善を行ひて、廣く民を憐み惠みて、萬民各其所を得るを以て、樂とすべし。

一臣下に祿を與へ過して富貴になるれば、奢りて使ひ難く、用に立たず。臣下貧究に迫れば、必恥を知らず、僞り邪になりて忠なし。

一凡高官の前にありては、いかなる小人も愼み隱す故に、姦惡ありといへども知れず。民に臨んで愼まざる故に、其行ふ所、善惡まぎれなし。故に吏の善惡は、下より告ぐる所を聞きて、其上にて其善惡を糺すべし。訟ふる者を咎めず、民の口を塞ぐべからず。

一或明君の言にいふ、神の罰君の罰、誠に畏るべし。然れども我が臣下の罰百姓の罰、尤恐るべし。如何となれば、神の罰はいのりて免るべし。君の罰はわびごとを以て遁るべし。唯民と臣との心を失ひて背かれぬれば、其災遁るべきやうなし。

一漢土も大和も、王公の國土を得給ふことは、其始は極めて難き事なり。中にも戰國の

太公望—呂尚をいふ、傳史記周紀に詳也

李昉—字は明遠、後宋に歸して太宗の朝相に拜せり謚を文正といふ

はんや。藏の米を出して、價高くとも臣の粃を買ひて鳥に飼ふべし、藏の米を臣に與ふるは、則我が倉に在ると同じと言へり。

一太公望曰、以二不仁一得レ之、以二不仁一守レ之、必及二其亡一也。言ふこゝろは、不仁にして國を得たる人、不仁を以て其國を守れば、かならず其一代にて亡ぶ。大和唐土其ためし多し。國の長久するは、其君仁なればなり。亡ぶるは不仁なればなり。桀紂以下歷代不仁の君亡びざるはなし。堯舜湯武はいふも更なり、漢の高祖文帝、後漢の光武、唐の太宗、其餘歷代の賢君は、皆仁心ありし故、國長久せり。凡國家の興亡、身の安危、皆仁と不仁とによれり。禹湯は己が身をせむ、故に榮え給ふ。桀紂は人をせむ、故に亡びたり。己を責むるは仁なり、人を責むるは不仁なり。仁の道豈勤めざるべけんや。

一唐の李昉といひし人宰相となれり。客來れば必三事を問ふ。一には、民間に何の憂苦かある。二には、今の世政を行はんに、いかなる善道かあるべき。三には今の政にいかなる悪しき過やある。此三の事聞きたしと言はれしなり。是世間諸人の公論を聞きたく思ひ、又下情の上に達せざらんことを歎きてなり。宰臣の法とすべし。

一秦始皇の子二世皇帝の曰、凡天下を有つを貴しとするは、唯意を恣にし、慾を極め

盡さしめ、物の言ひよきやうにすべし。唐の太宗と、延喜の帝の、我が威の強くして下の物言ひ難きを恐れて、顔色を和げて其臣下に對し給ふは、此故なり。凡政をなするには、下情に通ずるをよしとす。王公大人といへども、自ら聞かず、自ら見ざれば、萬事昧くして明ならず、人民の愁ひ悦び、苦み樂み、姦惡私曲を知る事なり難し。善惡利害を知らず、國の豐饒凶荒、家の費侈を知らず、祿位の高く多きにほこりて下情に通ぜず。如斯にしては、臣民いかやうの惡を行ひ、善を行ひても知らず。自ら聞かず見ざれば、下情に通じ知るべきやうなし。昧しといふべし。

一人を讒言する人は、人の小さき過をかざりて、大に言ひなすものなり。或は過なき人をもあやまりありと云ひ、君たる人能く察せずして其言を信ずるは、迷の甚しきなり。讒を聞きて善人を退くるは、其善人の災のみならず、萬民の災なり。

一鄒の穆公といふ君、下に命じて鳧と雁とを飼ふに、米を飼はず、唯粃を以て餌となす。或時食に粃なし。民に買へば、折節粃少くして、米の價より高し。依て其司米をはましめんといふ。君用ひずして曰、汝小利を知りて大損を知らず。百姓朝夕寒暑を厭はずして稻を作り出すは、鳥獸の爲に非ず。且米は人の上食なり。何ぞ是を以て鳥を養

暮佛法を勸むる程にこそなるまじけれ、せめて其所の司時々來りて、耕作を勸め、父母を養ひ、君長をうやまひ、法令を守り、廉潔をはげまし、正直にして僞なく、人と爭ふ事なきやうに教へ戒めば、風俗正しく、萬民和順にして、使ひ易かるべし。殊に農人は、世事になれず、惡習に染まず、其心朴なり。道理を以て教へ導かば、善に遷り易くして、古の淳朴なる風にも立歸るべし。

一士の節義あるを上より賞美すれば、士の風俗強くして忠臣勇士多く出づ。もし柔惰にして從ひやすき者を悅び、剛直なる士をきらへば、士の風俗弱くなりて恥を知らず、佞諛の人多く出づ。故に忠信を重んじ、節義を貴ぶは、士を教ふるの道なり。

一天に怪異あらはれ、地に妖祥起るは、皆是天の人に變を示し、告げ戒め給ふなり。譬へば親の子を憐みて、其惡を止め善をなさしめんとて、せつかんするが如し。國家の主は、天の警を恐れ愼んで、我が身を顧み、其政を正しくして、國家を保つべし。若是自然に出來たる事と思へるは、大なる不敬なり。天變恐るゝに足らずといへる事は、國家を亡す基なり。人の君となり奉行職となる人は、いやしき人恐れて上下の間遠く隔りて、下の心上に通ぜずして、下の憂ひ苦みを知らず。故に顏色を和げて下の情を

儀禮―古來周公の作と傳ふ士の禮大夫の禮諸侯の禮朝覲の禮等委曲を盡せり

五刑の屬云云―孝經に出でたる孔子の言

べし。其上に罰を犯す者は、止事を得ずして刑を用ふ。敎へずして人を罪にいるゝは仁にあらず。古の聖王は、一人を刑して千萬人恐れ愼む。故に刑は無刑を期すといへり。

一儀禮曰、父者子之天也、夫者妻之天也。是を以て推すに、君は臣の天なり。凡君父と夫に背くは、則天に背くなり。其咎大なり。此三は天下の大倫にて、五倫の内にて尤重し。故に君父と夫とは、我に對して無道なる事ありとも、恐れて背くべからず。もし背く者あらば、罪に行ひて許すべからず。然らざれば、天地の間人倫の道立たず、法度紀綱敗る。

一或處に頑民あり、しば〳〵其父を打つ。奉行聞きて其罪を糺し、君に告げて是を刑戮す。頑民殺さるゝ時まで尙其罪に服せずしていふ、我もし他人の父を打ち候はゞこそ罪せらるべけれ、我が父をこそ打ち候へ、左程罪とは覺え候はず。かゝる無理なる刑にあふ事、不幸の至りなりとて、上を怨みけるとなん。或士是を聞きて、彼の民の言ひしも一理ありといへり。此の士不學にして、孝の道の重きを知らず、五刑の屬三千にして、罪不孝より大なるはなしといふ事を聞かずして、かくは言ひけるならし。然れば、四民ともに人倫の敎なくんばあるべからず。村里に佛堂を建て、僧法師の輩、朝

れど暫く原本に從ふ

法曹至要抄―三卷、明法博士坂上兼明撰

淡海公―藤原不比等

といふ。亂世に及んで兵火にかゝり、律と格とは亡び失せて、今少し殘れり。令と式とは今も全本あり。律とは罪を正す定法なり。いかやうの科はいかやうに行ふといふ定法を記せり。此定に從ひて行へば、刑罰に誤なし。後代は此定法なくして、其所々の奉行職の人、我が心にまかせて行ふことになりぬ。もろこしには、唐の代に限らず、昔より律の書あり。近代も、明律あり、淸律あり。本朝にも、古律亡びて後、法曹至要抄と云ふ書あり。貞永の式目も律の類なり。令は下知をなす法なり。本朝には淡海公の作り給へる令あり。淸原夏野是を注せり、義解といふ。又令の集解といふ書あり。格は古來行はれし政を書きつけたり。今の留書といふものなり。某の年いかなる事ありしを、いかやうに行ひしといふ記錄なり。式は式法なり。延喜式今もあり。此律令格式の四書は、古朝廷政務の軌範なり。昔の明法の學者は、此四書を習ひしとかや。今も古の道に本づきて、時宜に從ひ律令の書を作りて、明法の學を講すべきことなり。

一後漢の崔寔が言に、刑罰者治亂之藥石也、德敎者興平之粱肉也といへり。言は政をするに刑罰を用ふるは、病おこりて後藥を用ふるが如し。五常五倫の敎は、平生無病の時、米肉を食して身を養ふが如し。故に上たる人、德を修め敎を立て、民を導く

年八十以上―禮記曲書に、八十九十を耄と曰ひ七年を悼と曰ふ悼と耄とは罪有りと雖も刑を加へず

格式―キャクシキと讀むが普通な

は民恐れず。國郡を治むる人は、兼てかやうの禁制を嚴しく立て、月々に讀みきかせ、民をして深く法令を恐れしむべし。法令ゆるがせなれば、惰りて罪を犯す者多し。民の父母として、我が國郡に死罪多きは、豈心に快からんや。是不仁にして民を愛するに心を用ひざればなり。

一年八十以上、七歳以下、死罪あれども刑せず。是古法なり。八十に至れば老いて智昏くなる。七歳以下は智未だ開けず。故に是を刑せず。

一一人禁獄せられては、其家の父母兄弟妻子一族憂ひ苦み、家業を止めて勤めず。且獄中一日の苦いはん樣なし。政をする人は、其苦、其家の患をも思ふべし。

一凡罪を犯して、未だ顯はれざる内に白狀する者は赦す。これ古法なり。又知らずして科を犯す者は赦すべし。再びに至るとも、大惡にあらずば懲さしめて赦すべし。三度に至らば赦すべからず。是齊の桓公の言なり。

一官ある人、公の法度を假りて、私の恩に報ゆべからず。

一漢土唐の世に、律令格式の四法を立てたり。我國にも古朝廷に律令格式の書を作りて、其法備はれり。是を官人に教へ學ばしむるを、明法の學といふ。其師を明法博士

令出づれば云々—書經周官に、令出でて惟れ行へ惟れ反せざれ

方に意を移すべからず。我が事しげく閙はしとて、夫によりて訟の事をあらく決斷して過ぐべからず。

一賞罰は君子其臣民を御する大權なり。賞罰妄なれば、臣下の心服せずして、上の威輕くなる。功ある者を賞し、罪ある者を罰せんと下知を立つるは、法令なり。もし功あれども賞せず、罪あれども罰せざる時は、是賞罰信なきなり。如斯なれば、法不立して、民信ぜず。善をするに惰りてつとめず、惡をする事を恐れずして、罪を犯す者多し。尙書に、令出づれば惟を行はしめ反かざれといへり。此意は、法令を出さば、初よく思案し僉議して、後まで破れざるやうに法を立つべし。一度下知を出しては、後まで其法を用ひ、背くものあらば罪に行ふべし。如斯なれば、法立ちて破れず、民信じて能く守る。後まで立ちがたき法ならば、始に能く評議して是を止むべし。是始を愼むなり。もし朝に令して夕に改むる時は、民惑ひて上を輕んず。

一人を殺し、家に火をつけ、公の財を盜む、大罪なればかならず刑に行はるゝこと、いかなる愚民も知れり。父母尊長をないがしろにし、人を打擲し、いつはりを行ひ、人の財を盜み、人の妻を犯すたぐひも、また國の大禁なり。されど右の三ヶ條の如くに

—卑猥なるの意
左道—邪道をいふ
目安—箇條書きにせる訴訟の文書

どにて人を惑はし、鬼神左道を以て人を誑し、錢財を貪り取るは、皆姦民の所爲なり。古の明君政をするに、是等の事を堅く禁じて、背く者あれば重刑に行ひ給へり。

一公事訴訟を聞くに、まづ我が心を平かにし、氣を和げ、各其人の心底を、思ふやうに言に盡させ、目安などをも思ふやうに書かせて、其心を察し、證人を立てさせ、證文を出させ、我が私の贔屓偏頗なく、親戚朋友の毀譽、賴み、助を聞入れず、扨兩方いふの所理のつゞまりたる所をくらべて、其曲直是非を決すべし。もし片口を聞き、或は傍より助け譽むる者の言を信じ、夫に惑ひ移りなば、聞誤まる事多かるべし。凡訴を聽くに、先入の言を主とすべからず。先入の言とは、先早く言入れたる方の詞なり。夫を信とし善と思へば、後に聞く方の言理あれども、皆僻事に聞きなすものなり。

一訴訟する者、正直なるは、我に理あるを賴み、奉行に賂を送らず。故に奉行の助なし。不直なる者は、我が非を掩はんとて、奉行に賂ひ、手立を廻らすにより、是を助くる者多し。如斯なれば理は僻事になり、僻事は理となりて、刑罰あたらず。

一訟を聞くに、其言の無禮なるを怒り惡むべからず。其言のうやまへるに悅ぶべからず。訟を聞くに喜怒起れば、それによりて私出來るものなり。又人の賴むによりて、其

たはれたる

地隔懸といふべし。
一風俗の惡しきわざを、世の成行にまかせぬれば、諸人のわざはひとなる。其所を司どる人、是を戒めて行はしむべからず。女子を嫁せしむるに、衣服器物など、分限にすぎ、甚奢りて費多し。是世のならはしとなれり。如ㇾ斯なれば、其産をうしなひ、人のたからを借りてつぐのはず。是唯人の目を輝したるのみにて、益なくして害多し。男子は又、學問すれば氣へり病者となる抔いひて、人の親をおどしいましめ、我が子にもいましめ防ぎて、學問せしめず、一生子を愚かにす。是皆愚俗の惡しく心得たるが、風俗となれるなり。又前の年妻を娶りし者あれば、睦月の始に其友となる者つどひて、其人をとらへ、水をかけてくみあひ戲れ、酒を飲み、肴を喰ひ、醉ひくるひて、後はいさかひ罵り、禍を生ずること多し。又正月十日など、女子の道を行くを、童ども松の枝にて打ち、衣に墨などをぬり附ることあり。凡かやうのいやしくて人を害する戲の習はしは、其所の長となるもの、堅くいましめて其風俗を改むべし。其風俗に任せて禁ぜざれば、長となる職を虚しくして、智なく力なしといふべし。
一凡たはれたる音樂を作り出して人心を蕩し、怪しく珍らしき衣服器玩又はからくりな

俗に立歸るべし。唐の太宗天下を治むるに、奢を去り、費を省き、公役を輕くし、年貢を少くし、正直にして無欲なる者を民のつかさとす。數年の後、民衣食餘ありて、路に落ちたるを拾はず、商人野に宿しても盜の患なし。奢靡の俗をひるがへして、淳朴の風に歸せしは、唯上の政其道を得たればなり。

一君子たる人、領內にある大社名山大川などは祭るべし。縱ひ正しき神にても、祭るまじきを祭るを淫祀といふ。淫祀は福なし。是を祭るは諂へるなり。惑といふべし。富貴の人、我が身の榮華を祈らんとて、神社佛堂を建て、萬僧を供養し、萬灯をともす事あり。其費は多けれども、民のためには露程も補なし。其財の費を以て、貧苦なるものを救ひ助けなば、いかばかりか功德となりて、天の惠もふかゝるべきに、我一人の心を慰めんとて、多くの人をなやまし、かゝるはかなき事をするは、愚なりといふべし。昔梁の武帝、堂塔伽藍を多く立て、大功德なるべしとおもひ、達摩に問ひしに、達摩無功德といへり。武帝仁政を行はずして下を苦め、民の貨をしへたげ取りて、無用の營作をなし、終には人怨み天怒りて、身も國も亡びたり。達摩無功德と答へたる事、宜なるかな。達摩は佛法中の人なれども、其言斯のごとし。後世の多欲なる僧と、天

淫祀—禮記曲禮に、其祭る可きに非ずして之を祭る名けて淫祀といふ淫祀は福なし

ゐ疲れて弱き者を集めての意に解すべし、本文或は書寫の誤ならんか

一貧賤なる者、或は獨身なる者、老人小兒など、人に言ひかすめられ、或は飢ゑ凍えて苦しむを、上に訟ふれども、奉行人取擧げざれば、其奉行人を罪に行ふ。是周禮の法なり。

一五穀と木の實と、未だ實のらざるを取らず。又市に賣らず。小なる木を伐らず。小さき魚を取らず。凡萬物の成就せざるをそこなはざるは、仁愛の一ッなり。其上、物の長大になりて取用ふれば、民用國用のためになるなり。

一漢の宣帝、諸國に倉を建て、米やすき時は價を増して高く買ひて入れ置き、米貴き時には價を減じて賤く賣る。名づけて常平倉といふ。夫、米甚やすければ、士農の爲あしく、甚貴ければ工商くるしむ。貴きと賤きとは其害同じ。此ゆゑに、常平倉の法を行へば、此害なくして四民ともに困窮に至らず。我が邦にも、古は是に效ひて常平倉あり。義倉あり。義倉は水旱等の災ある時、飢民を救はんために設く。これ良法なり。但し此法、上に財乏しくては行はれず。

一和漢ともに、世末になりては、虚文多くして忠實少なし。誠は日々に衰へ、僞は月々に盛也。道を行はんとならば、當世の飾りて奢りたる風俗を改め、古人の質素淳朴の風

ものは、倶に人民を殺すに至らずして活す道あり。まづ刑を以て云はゞ、民を恵んで衣食を足らしむれば、民盗をせず、科人少し。其上に訴を能く聞分け、理非直曲を明かにすれば、罪なき人を殺さず。兵を以て云はゞ、仁義を行へば、人怨み背く者なくして兵亂起らず。我が身兵亂を起さざるは言ふに及ばず。歳を以ていはゞ、民の土貢を輕く取り、民を多く使はず、三年耕して一年の食あらしめ、飢うる者を助け救へば、凶年に逢ひても餓死の愁なし。病を以ていはゞ、民に情ありて飢寒の愁なからしめ、病の本を防ぎ、醫藥を施して病ある者を救へば、病死の災少し。是人に係るもの〻憂を去るのみならず、天に係るものといへども、人力を以てうれひを防ぐなり。

一 民の飢を救ふに、早く救はゞ費少くして施廣し。遅ければ費多くして施狹し。又飢人を救ふに、朝夕兩食の内一食を與ふれば死なず。其飢の甚敷と甚しからざるを選びなくして、妄に多く與ふべからず。一日に一食を與ふれば、米多からずして人を救ふ事多し。一處には飢ゑ疲れて弱き者には、わきて朝夕薄き粥を與ふべし。食に飽かしむれば死す。氣力出來て後は食を與ふべし。一處には未だ疲れざる者を集めて、一日に一度食をあたふべし。

一處には飢ゑ疲れて弱き者には―
一處には飢

君子訓卷之下

一君子は國土の利を取り盡さずして民に與へ、運上課役をかけて民を苦めず。然れども民の利を恣にする事を禁ず。且仕へて君の祿を得る者は、商をなし利を求むべからず。故に古語にも、大を受くる者は小を取らずといへり。天道の物を生ずる、二ながら全き事なし、牙ある獸には角なし、角ある獸には上齒なし、翼あるものには手なし、花よきものは實あしく、實よきものは花あしゝ。士として君の祿を得る者、民と利を爭ひ、民の財を奪ふは、天道に背けり。

一世間に多くの人を殺すこと四あり。刑兵歳病なり。一には、刑を誤りて科なき者と科輕き者とを殺す。二には、わが身亂をおこして科なき敵味方を多く殺し、又我が不仁無禮なるによりて、人に兵亂を起さしむるなり。三には、水旱風蟲の災にあひ民多く餓死す。四には、民諸の病にかゝり、殊に疫病はやりて人多く死するなり。此四の物は皆よく人を殺す。此內、刑と兵とは人に係り、歳と病とは天にかゝる。されど、四の

法度—法律禁制をいふ

一聖人民の力は國の基なる事を知り給へり。故に公役をば省き、民の隙を惜み給ふ。周禮には、民を使ふこと豐年には一夫三日、中年には二日、凶年には一日、至りて年惡しく民痛めば一日も使はずといへり。

一民豐なれば奢りて法に背くといふ人あり。是政を爲る道を知らざるなり。民貧しければ盜む心を生ず。民を憐みて衣食乏しからず、困究せしめざるは、盜を止むる基なり。法度を明かにして、民に分限を守らしむれば、豐なれども奢る事なし。如斯にして民其分を踰えて奢り怠り、或は盜する者あらば、罪に行ひて許すべからず。民は愚なる者なれば、まかせ置きては治るべきやうなし。衣食不足なきやうにして、其奢怠を戒め、罪に陷らしめぬは、政をするの道なり。

農は國の本―帝範に、夫れ食は人の天たり農は政の本たりと云へり

め、鰥寡孤獨疾病ありて、自ら存し難き者をば、惠み救ひたまひし事、舊記に多く見えたり。又大風に逢ひて百姓の廬舍破壞したるは、其年の田租を免されし事あり。

一農は國の本なり。一年の間隙なく耕作を務め、米穀を作り出して、上に貢し、萬民を養ふものなり。最憐みて飢寒の憂なからしむべし。農の時を奪はざるは、農の爲のみにあらず、國の爲なり。農民は日夜勤勞すれども、やゝもすれば水旱風蟲の災ありて、其利少し。歳凶して土貢を納むることを缺けば、妻子を賣り身を賣るに至る。年豐なれば、米穀價やすくして困究をまぬかれず。利少き故なり。工人は其勤農に及ばざれども、其利多し。商人の利は工に倍す。故に農人漸々に減じ、工商は年々に增す。田を作る者は少くして、器を造り、貨物を商ふ者多し。布を織るもの少くして、綾錦を製し繡染を事とする者多きは、世間困究の本なり。是を以て、古の明王は農を重んじて工商を抑へ、五穀を貴んで金玉を賤み給へり。儉約を行ひて華美を禁ずるは、本を重んじ末を抑ふるの道にして、國を治め民を安んずるの政なり。

一農の田を賴むは、魚の水に住み、木の土に生ずるが如し。魚水無ければ死し、木は土なければ枯る。民に田なければ業を失ふ故、農の田に離るゝは憐むべし。

婁下

鰥寡孤獨―孟子梁惠王下に出づ、禮記王制には矜寡孤獨と云へり

國の興るは民を視ること傷むが如し、其亡ぶるは民をみる事土芥の如しといへり。是國の治亂興亡の分るゝ所なり。

一凡民は素直なるものなれども、上より下を欺けば、下も上にならひて詐多くなる。是上より下に僞を敎ふるなり。民の性もと僞多きにあらず、上下の勢異なるゆゑ、上より下を欺きても、民すべきやうなくして、暫しは上に從ふものなれば、上より下を欺くこと多し。

一幼くして父なきを孤といひ老いて子なきを獨といひ、老いて妻なきを鰥といひ、老いて夫なきを寡といふ。是を四窮民といふ。天下の内にて、いと不幸にして便なき者なり。此四の者世に多けれども、其親類の財力ありて養ふ者は飢寒に及ばず。其餘の飢寒に及ぶものは、大村といふとも二三人に過ぐべからず。是を養ふに、其費多からず。其所の奉行司より常に扶助をなして、飢寒せしむべからず。是奉行たる人の職分なり。民の飢寒するは、其所の政苛ければなり。故に乞人の多きは司の恥なり。

一我朝にても、上代の帝王の政には、老人を憐み給ひ、年八十以上の民には位一階を授け、絁綿布粟をたまはり、孝子順孫義夫節婦をば、其門閭に表して終身事なからし

一家を治め民を治むるには、嚴なるを善とす。嚴とはまづ我が身を正しくし、輕々しからず、法を立つるにゆるがせならず、民の僻事を制して赦さざるをいふ。嚴なれば人恐るゝ故に、法立ちて破れず、民悪をなさず、罪に陷るもの稀なり。嚴ならずしてゆるがせなれば、初は民も家人も悦んで譽むれども、後には怠りおそれず、法ゆるまりて立たず、罪を犯す者多し。始嚴なれば後に事なし。始緩なれば後に事多くなる。嚴はきびしきなり、不仁なるにあらず。民を悪に入れぬため、きびしくするなり。譬へば水は柔かなるゆゑ、人侮りて溺死する者多し。火は嚴なるゆゑ、人恐れて近づかず、燒死する者少し。法も亦如斯。

一人君の臣下を治め、萬民を服せしむるは威なり。威とは怒を起し、氣を烈しくするにはあらず。其威權を下に借さずして、臣下萬民の奢を抑へ、悪を警むるをいふ。もし權臣に威を奪はるれば、上の威輕くなりて法制立たず、諸臣萬民法を畏れずして下知行はれず。故に威は唯上にあるべし、下に移すべからず。

民を視ること傷むが如し

一文王は、民を視ること傷むが如しとて、民を治めて既に安けれども、猶も傷み苦める事あらんかと憂ひ給ふ。是二者のこゝろ、國家を治むる第一の用心なり。左傳にも、

四皓—東園公、綺里季、夏黄公、用里先生
良藥は云々—此語家語第四に出づ

め、自らさとらしむる事なり。張良が四皓を呼出して太子を易へしめず、穎考叔が莊公をさとして母と和睦せしめ、魏文公の臣任座が文侯を譽めて翟璜が直臣なる事をさとらしめ、狄仁傑が武后を諫めて唐を亡ぼさゞるの類なり。唯諫を聞く人は、直諫を好むべし、諷諫を好むべからず。孔子の宣く、良藥は口に苦けれども病に利あり、忠言耳に逆へども行に利あり。湯武は諫を用ひて天下を保ち、桀紂は諫を拒みて身を失ふ。凡歴代の君の善惡と、國の治亂興亡は、ひとへに諫を用ふると拒むとの二にあり。

一東坡が曰、治亂は下情の通塞に出づ。凡國家の治亂は、譬へば人身の無病なると病あるが如し。血氣流通すれば無病の人となり、血氣めぐらざれば病人となる。下の言ふ所上に通じ、下の諫を上に用ふれば治する、是を言路通ずといふ。下の人の詞を取擧げざれば亂る、是を言路塞るといふ。言路通すれば國家治まること、血氣運りて無病なるが如し。言路塞れば國家亂るゝこと、血氣運らずして病起るが如し。古語に、上たる人下の諫を聽入れざれば、譬へば聾の如し。如斯なれば、臣下たる者は上を恐れて口を閉づ。譬へば瘖の如し。君は聾となり、臣は瘖となりては、國家の治らんことを願ふとも得べからず。

自ら用ふれば―書經商書仲虺之誥に、問ふことを好めば則ち裕かなり自ら用ふれば則ち小きなり

湯王の德を譽めて、過を改めて吝ならずといへり。仲虺湯王を戒めて、自ら用ふれば小しきなりといへり。自ら用ふるとは、我が才を自慢して、人の言を用ひざるをいふ。古の聖王すら、過を改め人の諫を聞き用ひ給ふ事かくの如し。況や聖人ならざる人、諫を受けて過を改めずんばあるべからず。諫を聞くに、たとひ人我が過を告げたるは、其言當らずとも、皆受入るべし。如斯なれば、人諫を言ひ易くして、我が過を聞くこと多し。もし我が過なきを言立て、逆らひ爭へば、重ねて告げ聞する人なし。

一臣下として其職分に當らば、君の過惡を諫めずんばあるべからず。漢土の忠臣は、身を捨てゝ君を諫め、殺さるゝことを知れども顧みず。凡君の爲に身を捨つること、戰陣に限るべからず。身をかばひ命を惜みて、君の惡を知れども諫めざるは、不忠なり。況や官祿を惜みて默すは言ふもさらなり。我が邦の人は、戰場に出でては勇なれども、諫爭の一事は漢土の人に及ばず。是國の習はしなるか、無學にして諫の術を知らざるか。

一諫の術二あり。直諫と諷諫となり。直諫は明君に施す。明君はいかなる強き諫をも用ひて怒らず。諷諫は貞直に嚴しく諫めず、よそへごとにて氣に障らぬやうに和かに諫

進善の旗—旌旄五達の道に設けたる也、事史記孝文紀等に出づ

行も國の仕置も、惡しき事を聞かず、其心日々に驕りて、過惡増長するゆゑ、國の危き事是より甚しきはなしといへり。

一君たる人、我は諫を好めども、人我を諫めずといふは僻事なり。譬へば酒食は人の好むものなり。故に辭すれども人必しひて侑む。然れば忠言の出でざるは、聽く事を好まざればなり。

一管仲曰、明君は我が智を用ひずして衆人の智に任す。我が力を用ひずして諸人の力を用ふ。衆人の智を用ひて思慮すれば、明かにして知らざる所なし。諸人の力を用ふれば、成就せざる事なし。人の目は天際の遠き所を見れども、我が背を見る事能はず。心も亦然り。いかに聰明の人も、我が過失を知る事は明かならず。故に人の諫と世の誹を聞きて、我が過を改むべし。昔堯の時、進善の旗あり、善事を君に奏せんと思ふ者は其下に立つ。又誹謗の木あり。大なる木を削り、都門の外に建て置き、何者にても政の誤を思ひ寄たるまゝに書かしめて、善言あれば取りて用ひ給ふ。舜の時、敢諫の鼓あり。君を諫めんと思ふ者、其鼓を打てば、官人出合ひて是を聞きて、帝に奏聞す。此事大戴禮に見えたり。殷の湯王は聖人なり。然るに其賢臣仲虺と言ひし人、

司を統べて其成功を責め、廣く人才を求めて他日の用に備ふ。細務を自らせず、有司に打まかせ置きて、年限を以て其功過を察し、君に告げて是を進退すべし。有司の勤を一々上より指圖すれば、いかなる良有司にても、其才能を盡す事を得ず。上の意をうかゞひ、上にかゝりて身がまへし、其職にはまる事なし。斯の如くなれば、事立たずして功ならず。初に精しく人を擇び、是に職を授けて後は、打任せ置きて小過をゆるし、年限を以て考察すれば、其能不能明かに知るゝなり。

一凡國を亡す君も、其君一人の仕業にあらず。一人不德なれば、其臣下諂ひて、惡を勸め導くゆゑ、國亡ぶるにいたる。上より下をうたがへば、下も亦上を疑ひて、其心を盡さず。上誠を以て下を使へば、下も亦誠を以て上に應ず。自然のことわりなり。或は人を信じて欺かるゝ事あるは、上の心不明にして、佞諛を好み、偏愛に溺るゝ故なり。

一晉の平公、其臣叔向に、國家の患何れか大なるやと問はれしに、叔向對へて曰、大臣は祿を失はん事を恐れて君の過を諫めず、小臣は罪を恐れて敢て言はず。如此なれば、下情塞りて上に通ぜず。是國の大なる患なりと。上下の情通ぜざれば、上の人、身の

役料—俸祿といふに同じく役目につきて與ふる祿也

民のため惡しく、萬事治まらず。是災の本なり。然るに後代は事しげくして、官職年々に增し、其祿を世々にし、後は君の倉入の財盡き虛しくなる。爰を以て、唐虞の世に官に勸むれば、其官につきたる祿を與へ、其官に任ぜざれば其祿を與へず。是今の役料といふものなり。是萬世に行はれて害なき良法なるべし。官職を授かりし人、其人老死して、其子の才なき者に其祿を其儘與ふれば、君の財祿盡きて國用足らず。

一賢者といへども過失なきこと能はず。小過を赦さざれば其功を成しがたし。

一凡人の譽め誹り、必みだりに信ずべからず。善人にも人を知ること昧き人ありて、譽め誹りに誤あり。又小人婦女奴婢は、知なく私ありて、人の善惡邪正を知らず。我が心に合へば惡人をも譽めあげ、心に合はざれば善人をも誹りおとす。善行をも惡といひ、惡行をもよしといふ。小なる事を大に言ひなし、大なるひが事をも咎めず。時の勢に徇ひて、ほめそしること定まらず。道理に違ひ、正直ならず。愚なる人は、かかるひがことを信じて、君子を退け、小人を親みて、小人にたぶらかされ、名を汚し、身を亡すに至る。つゝしむべし。

一宰臣の職は、君を輔佐して其過失を正し救ひ、政の善惡を論じ、賞罰を正し、諸有

らんことを求む―論語に備るを一人に求むること無れといひ、書經にも備るを一夫に求むること無れと云へり

天下に取るべき人なし。人々の得たる所を知りて、其人の能すべき職に居らしめば、果して其職を能く勤めて功ある時は、賞を與へて久しく其職に任ずべし。其職に久しく居れば、其事に熟して功多し。堯舜の時、賢臣皐陶稷契の如き、皆一生官を遷し給はずして、功庸多かりしなり。後世の君は、臣下の微勞を賞してたやすく官を遷すゆゑ、皆其職に熟せず、或は不得手なる事にかゝりて迷惑し、國政に益なく害多し。但人を用ふる始めに、官に任じ其能を試みて後、擧げ用ふるは、左もあるべし。其得たる所を知らずして官を遷すは、人を用ふる道にあらず。

一萬の事は、勤むるによりて成り、惰るによりてすたる。各其位にありては、其職分を愼むべし。一念愼まざれば衆人の患となり、一日愼まざれば永き患となる事なり。

一位は座席なり、祿は食邑なり、官は職事なり。古は、職を勤めて功あれば、位を進め、祿を增し、金帛など賜はる。官を以て賞とせず。官は能に授くるものなり。褒美の具にあらず。周の世の法は、士の子、其才德なければ父の官を繼がず、是を世々にせずといふ。大臣の子といへども、必其才智勝れざれば、其父の祿を與へ繼がしめて、其父の官職をば繼がしめず。大臣の子なればとて、其人の其職にかなはずば、君のため

其言を聞て云々—論語公冶長に、始め吾れ人に於けるや其言を聽て其行を信じぬ今吾れ人に於けるや其言を聽て其行を觀る

一人に備は

れて退くに至る。人を知る事、古人も是を難しといへり。人の言語容貌を見て、其心底を知ることは、至明の人といへども必としがたし。孔子も其言を聞て其行を觀ると宣へり。觀とは、心を用ひて察するなり。古人は、人のすき好む事と、其人の親しき友の善惡を以て察し、又其平生行ふ所の善惡を見て、其人の賢不肖を知り、事を問ひ業を試みて、其材能の長短を知る。是古人人を知るの法なり。人を知り、時を以て君に告げて擧げ用ふるは、宰臣の職なり。

一凡の人は、忠信ありて後、才力を用ふべし。忠信は貞實にして僞なきなり。不實にして材能あるは盜人なり。近づくべからず。忠信ならば、才力少し鈍くとも、學問し物馴れたらんは世用に達すべし。才能ありとても忠信ならぬ者を用ひて、後悔したる君、古今に多し。

一古は、才德ある人なれば、家筋にもかゝはらず、賤しき者にても、擧げ用ひて職を授く。材能なき人は、貴族にても、其父祖の祿ばかりを其儘あたへて、官職に任ぜず。政に益なきゆゑなり。

一凡人に能あり不能あり。賢者といへども、亦然り。一人に備はらんことを求むれば、

尚書に云々—虞書皐陶謨に、都（ああ）人を知るにあり民を安ずるにあり

一古の聖主賢君は、必賢者を求めて職に任じ、政を佐けしむ。故に國よく治りて、其功大なり。君たる人は、先、我が心を正し、知を明かにして、人を能く知り、宰臣を選び、次に諸有司を選ぶべし。宰臣は家老なり。諸有司は諸役人なり。今時の取次役、目附役、郡町の奉行、勘定の司の如きは、政事に係りて重き有司なり。宰臣有司其人にあらざれば、政亂れて國治まらず。宰臣は、才徳有りて大量なる人を擇び用ふべし。取次は上の詞を下に通じ、下の言を上に達す。其人悪しければ、上の恵下にくだらず、下の苦み上に聞えず、上下の情通ぜずして、君徳昏くなる。目附役は、臣民の善悪を糺して直言する職なれば、君の耳目なり。郡町の司は、殊に仁愛深き人を用ふべし。君と宰臣と賢なれども、此役人不仁なれば、民を安んずること能はず。勘定の司は、廉直にして算數に達したる人を擇び用ふべし。其餘は、是を推して其職に宜しき材を選みて任ずべし。如此なれば、官其人を得て、國治り民安し。尚書に政在レ知レ人在レ安レ民といへり。

一君子と小人とは、譬へば水と火との如く、香と臭とのごとし。一時に相竝びては用ひがたし。小人用ひらるれば、君子の道は行はれずして、君子は終に小人の爲に讒せら

伊訓―書經商書中の一篇。同書には上に居て克く明かに、下と爲て克く忠と見えたり

君子訓卷之中

一 伊訓に、爲君克明爲臣克忠といへり。此意は、君の德は明かなるを主とす。明かなれば、人を能く知りて、善き人を用ひ、惡しき人を退けて用ひず。故に國能く治る。臣下の德は忠を主とす。忠とは、君の爲に心を盡して誠あるなり。忠なれば、官職を勤め、善人を擧げ進め、君の過を諫めて善にうつらしめ、我が身の利害を顧みず、唯偏に君の爲に心を盡すゆゑに、忠臣は國の至寶とすべし。不忠なれば、君の惡しき事を知れども諫めず、君の爲よき事あれども言はず、唯君の寵を願ひ、官祿をのみ心に懸くるゆゑ、其實は盜賊に異ならず。

一 堯舜の聖といへども、一人にて衆事を治むること能はず。賢者を選みて職を分ち、是に任じて疑はず。賢者職にありといへども、一時に功を立てず、久しく其職を勤め、其事に熟して後、其功成就す。政を爲すに、小利を見て速ならんことを好むは、聖人の誡なり。

大道を聞くことを得ずして、世俗のいやしき論に従ひ易くして、義理の言入り難し。然れば學は君臣の要務ならずや。

也、其效驗の顯著なるを云ふ

にして近きと思へる事に、却て驗なくして害になることあり。道を行ひ、儉約を守り、與ふべきを與へ、取るまじきを取らず、廉直なれば富む。儉約ならず、與ふべき物をも與へず、財を用ふべきにも用ひざれば、道に背きて財たらず。國郡を治むるに、民の年貢工役を輕くして民を愛すれば、國郡の財滿て餘あり。君の國用も不足なく、凶年もまれなり。もしかく有れば、廻り遠くて今の世には用ひ難しといひて、法をするどにして民をきびしく使ひ、年貢を過分に取れば、民貧しく力盡きて、國の財足らず。然れば廻り遠きが、するどなるより其益大なり。

一士民に、常に奢らず高ぶらず儉約すべしと教ふれども、從はざるは、上を信ぜぬ故なり。上より儉約を行ひ、禮義を重んじて、下に示せば、臣民おのづから謙りて、儉約を守りて奢らず。是身を以てをしふるなり。下は上の詞に從はずして、行に從ふものなり。桀紂の惡王といへども、其臣に惡をせよとは教へず。唯其好む所、行ふ事惡しき故、天下の惡人其朝に集り、善人は日々に遠ざかりぬ。是を其言に從はずして、其行に從ふといふ。

一古人の曰、天下の患は、在位の人學なきより甚敷はなし。在位の人學を知らざれば、君

するど｜銳

衣服たらずして、飢寒を免れ難き者の財を貪るは、天道の萬民を養ひ惠み給ふ心に叶ふべからず。國郡の主といへど、其喰ふ所は匹夫より多きこと能はず、著る所も匹夫より長きこと能はず。居る所は一屋に過ぎず。然れば國郡の主といへども、財多きことを求むべからず。其領地に生ずる財を用ひて餘あり。然るにもし領地の財用にてたらざるは、是侈をなし、費多くして、其財を失ひ、儉約を行はざればなり。

一國土に一年生ずる所の五穀の惣數をかぞへ、國土の人民一年の間食する所の粮の數をかぞへくらぶるに、一年生ずる所の五穀にては、一年の糧足らず。是貧民は雜穀菜根を食して、飢を助くる故なり。商人の酒を造り、菓子を拵へ、士の奢侈をなして、朝夕定まれる食の外に穀食を費すは、皆是民の食を奪ひてなせるなり。

一貧賤なる人、富貴なる人の財を貪るにすら、猶いやしむべし。少しく義理を忘れる者は、是を恥とせず。況や富貴にして郡邑を領する程の人、貧民の財を貪り取ること、いと不仁にして、其心尤悪むべし。人の財を貪らざれども、わが財を濫りに費さず、奢らず、我が欲を忍びて人に借らざれば、財延びて不足なし。

一世俗の廻り遠しとて行はざる事は、却て其驗近くして、其益大なる事あり。其驗するど

也

露臺―屋なき高樓、本文の事實は漢書文帝紀に詳也

立針の地―針を立つる程の僅少なる地面

に命じて、其費を積らせたまひしに、百金を用ふべきよし奏せしかば、百金は中人十家の産なりとて、其作事を止め給ひしとなり。上一人かくのごとく、少しの費を惜みて、聊の奢なく、下を厚く惠み給ひしかば、群臣以下其德に化して、儉約を守り、富み足らする事、宜なるかな。

一君子の財を費して、貧を救ひ、人をたすけ、善を行ふは、其財を惜まざるにはあらず。其財を惜むこと甚しくて、善事に財を用ふるなり。故に人を救ひ惠む事を好む人の、常の財の用ひやうは、儉約にして妄に費さず、愚なる人の目には、財を惜めると思へり。又常に奢り、財を亂りにし、惜まざる人は、必人に施し救ふ事は、惜みてせざるものなり。凡我が身の爲に財を惜みて、人に施すに惜まざるは、君子の財を用ふる道なり。我が身のため小財を惜まずして、人に施す事を惜むは、小人の財を用ふるなり。

一匹夫立針の地を持たず、衣薄く食足らざる者多し。されど是また天地の子なり。國郡の主も亦天地の子なり。國を保つ人は、其財祿の多きこと、匹夫と幾萬倍といふ事を知らず。同じく天地の子にして、其財祿の多少天地懸隔なること斯のごとし。然るに國郡を保つ人は、其國郡の寶を用ひ、身を養ひて足らず。下にある匹夫の、常にさへ

皂綈―黒色の平紬にて粗朴なる布

が本心に省み求めば、誰とてもこゝろよからざるべし。人の君として民を憐むは、誰もあるべき所の本心なり。君たる人は、此本心を保ちて、心よからん事を求むべし。人を苦めしへたげて、我獨慰み樂むこと、誰も心よからざる事なれど、私欲に迷ひて、其快からざる事を、反て心樂とする、是民を憐むの本心を失ひて、斯の如し。譬へば傷寒を煩ひ、大熱病をうけては、平生食する所の飯も味噌も魚鳥の肉も、味あしく苦くして喰はれず、喉かわきて、平生の好める旨き味をきらひ、冷水を頻に飲めば、反て快きが如し。國土あれば、米穀金銀の財は、おのづから生ずるゆゑ、上より儉約を行へば、土貢を輕く取り、運上をもとめざれども、國の財豐かにして缺くる事なし。昔漢の文帝、天下の民貧しとて、一年或は半年の貢を度し免し給ひ、運上など求めざりしかば、天下の藏入の財少く、國用たらずして、困究し給ふべき事なれども、在位二十三年の間、國豐かに民富みて、天下太平なり。天子の倉には、米多くして腐り、錢繩朽ちてきれ〴〵になりぬるよし、漢史に記し置けり。是儉約を行ひ、諸(の)費を省き給ひし故なり。帝の儉約を史に記し侍るは、身に皂綈を著給ひ、幸する所の愼夫人、衣裳を地にひかず、殿上の帷帳、文繡の飾なし。嘗て露臺を作らんとて、工人

三年耕して云々－禮記王制に、三年耕して必ず一年の食あり九年耕して必ず三年の食有り三十年の通を以て凶旱水溢有りと雖も民菜色無し云々

なせば、財を用ひ盡して年々に足らず。況や歳の豐凶ひとしからざれば、財用の積も同じからず。上の財乏しければ、禮義を行ひ、變に備へ、貧窮を惠む事もならず、果は下を虐げ取り、債を負ひて約束を失ひ、國危亡に至る。何ぞ仁政を行ふに暇あらんや。古より、明君賢主みな儉約ならぬはなし。儉は誠に君の美德なり。

一 古の法は、三年耕して一年の食あり。農を以て立てば、田を四町作る者は、年貢の外、其得分を四に分ち、三町の穀を其一年につかひ用ひて、一町の穀は其儘殘しおく。毎年かくの如くすれば、三年には三町分の穀を餘す。是を三年耕して一年の食ありといふ。君と臣は、我が祿を四に割りて、其三を一年の用とし、其一を餘して貯とす。三年積れば一年の祿をあます。九年にして三年の貯あり。三十年にして十年の貯あり。昔帝堯の時九年の洪水あり。殷の湯王の時、七年の旱ありしかども、民の飢餓なかりしは、常に儉約行はれて、上下共に其備ありつればなり。後世は華美の風俗盛になり、費用歳々に廣くして、常年にも財穀足らず、僅に一年穀熟せざれば、上下共に困究す。儉約行はれずして、其備なき故なり。

一 君一人の私欲を恣にし、我が身一人を樂まんために、多くの人民を苦むること、我

する能はず今仁心仁聞有れども民其澤を被らず云々とあるをいふ。

親親而仁民—孟子盡心上

とて受けず。又或國の宰臣、貧人に物を施すことを好みて、外に出る毎に、必錢袋を持たせ行けるに、乞丐其恵を得んとて、いつも街にみてり。或者諫曰、賢人を舉げ用ひて貧民を救はしめば、萬人其所を得て飢寒に及ぶまじ、何ぞ小惠をなすやといへり。仁心ありといへども、仁政を行はざれば、民を救ふ功なくして、國の治に益なし。

一孟子曰、親レ親而仁レ民、仁レ民而愛レ物と言へり。君子の道は、仁を專らとして、人を慈しみ、物を憐むなり。其内に天然の次第あり。まづ親を親むとは、父母兄弟親類縁者を厚くするをいへり。次には民を仁す。民を仁すとは、臣下萬民を廣く慈しみ、各其所を得せしむるをいふ。もし一人も其所を得ざれば、仁するにあらず。其餘は物を愛するにあり。物を愛すとは、禽獸虫魚艸木をみだりに殺さず、みだりに伐らざるをいふ。其内、親疎貴賤有情無情大小の次第によりて、仁を施すに厚薄の替りあれば、かく三の品をわけ、教を立て給へり。すべて言へば、親しむも愛するも、皆仁なり。

一仁政を行はんとならば、まづ儉約を守るべし。儉約は奢縱ならざるなり。衣服居宅、よろづ内の事につきて、華美を好まず、みだりに費さざる是なり。國大なりといへども、土地より生ずる米穀、其外の財は限りあるなれば、上の物好にまかせて無用の費を

送の物品等に課する租税

仁心云々―孟子離婁上に仁政を以てせざれば天下を平治

四民ともに其分を安んじ、其業を勤め、衣食足りて困窮に到らしめず。是民を養ふ政なり。上徳行を勤めて下の手本となり、學校を建て、師を立て、士民に人倫の道を教へて、士は禮義を知り、庶民ともに善に移り、罪に遠ざからしむ。是教なり。如斯して民政に從はず、教に入らず、人の害となる者あれば、其罪を正して是を懲す、是刑なり。此三の考は、國を治むるの要なり。後世にも此事なきにはあらず、唯其法古に及ばず、且行ふもの其人にあらざれば、其具ありといへども、其道行はれずして國治まらず。

一人の身のはたらきは、一心を主とし、兩手兩足を使ひものとす。身の内少しにても痛む所かゆき所あれば、手行きて是をさすりかく。是我が心吾が身を愛すること切にして、心と身と一體にして通ずる故なり。君の心に仁愛厚くして、萬民を憐む心深ければ、民の愁ひ苦みを知りて、惠を施さざる事なかるべし。

一孟子に、仁心ありといへども、仁政を行はざれば、民其澤を被らずといへり。國を治むる人、何程慈愛の心ありても、善政を行ふ道を知らざれば、唯目前の小惠を行ふまでにて、國民の心を心服する程のことは是なし。昔齊の桓公、老人の飢ゑたるを見て食を賜る。老人辭して云、願はくは國中の飢ゑたる者に食を賜らば、我も飢ゑまじき

上の好む事は云々―孟子滕文公上に、上好む者有るや下必ず焉より甚しき者有り

運上―商人の營業、運

をわするゝは私なり。私心深ければ、いかなる非義をもなすものなり。故に人の善惡は、公私の二を以て分ち知るべし。君に私あれば、民を愛する心眞實ならずして、人民信服せず。臣下に私あれば、君に忠なく、民に愛なし。才能も見るに足らず。其餘は皆是にならへ。

一身を修むるには、天理と人欲との勝負を試むべし。身を養ふも亦然り。民を治むるには、君子と小人の進むと退くとを以て、治亂を知るべし。

一上より利欲を行ひて、下に見せしむれば、臣下も民も皆小人となる。上より禮を好みて下に交れば、臣下も民も君子となる。凡風俗は、皆上よりおこる。上の好む事は、必下にも好んで風俗となる。風とは導き行ふ所なり、俗とは下に習ひて行ふ所なり。

一古の聖人、國を治め民を安ずるの道、其要三あり、政教刑なり。士には祿食を與へて、義を守り利欲に遠ざからしむ。農には公役を省きて年貢を輕くし、力を耕作に盡さしむ。桑麻をうゑ、布帛を織らしむ。工人を惠みて、其利用を貴し、無用の華美の物を作ることを禁ず。商賈を通じて運上を輕くし、市の價を平かにして、奇巧無益の物を賣り、姦利をなす事をいましむ。此上に、遊惰を警め、奢侈を禁じ、儉約を行はしめて、

大學を以て云々—程子曰く、大學は孔子の遺書にして初學德に入るの門也

六經—詩、書、易、春秋、禮、樂を云ふ、樂經亡びて後禮記を分ちて周禮、禮記の二として猶之を六經と稱せり

る、是則君子の學なり。先大學を以て道に入るの門とす。次に論語孟子尙書及大學衍義を考へ知り給ふべし。是身を修め人を治むるに益あり。又通鑑は漢土歷代の記錄にして、古人の行ひし善惡の跡を記し、評論を載せたれば、尤政治の道、倫理綱常の敎に益ある事、四書六經に次げり。古人のなせる善惡の跡を考へて、今日行ふ所の是非を辨ふべし。聖人の經は萬世の則なり、通鑑は萬世の鏡なり。聖人の書は、譬へば醫書の病論のごとし。病の因緣を知り、療治の法を知る。通鑑は、古人の療治せし醫案を考へ、其藥法を知るが如し。古人のなせる跡を考へ、今の病人に對して療治するは今日に於て甚切要なり。通鑑を考へて今の鏡とするは、端的にして切なる事なり。政事を執行ふ人は、是を考へずんばあるべからず。

一上天道にかなひ、下義理にかなひ、中義理にかなふ道一ツあり。其名いかん、公と言ふ。公とは私なきをいふ。又上天道に背き、下人心に背き、中義理に背く道一ツあり、其名いかん、私といふ。私とは公ならざるなり。人我を忘れて、身に私せざるを公と言ふ。人我を立て、人の事をすてゝ、專ら我が身の爲のみをするを私といふ。君に事ふる道を以ていはゞ、我が身を忘れて、ひとへに君に忠するは公なり。專ら我を利して、君

中庸の九經—凡そ天下國家を爲むる九經有り云々、中庸第二十章に出づ

字を知るを以て學問とおもひ、多く聞き多く見るに博學多識なりとも、何の益もなき無用の學なるべし。故に唯有用の學を務むべし、無用の學をなすべからず。

一眞西山曰、人の君たるもの、大學を知らずんばあるべからず。人の臣たるもの、大學を知らずんばあるべからずと言へり。君も臣も、身を修め國家天下を治むる道、大學の書にそなはれり。是を讀みて受用せずんばあるべからず。又中庸の九經に、身を修め人を治むる道備れり、考ふべし。此二書を能く讀みて、受用し行はゞ、外に求めずとも、其要は此うちにあるべし。

一世を治むるに大道二あり、文と武となり。文は德を專らとし、武は威を專らとす。威と德と二ながら備りて治道なれり。德なければ人なつかず、威なければ人恐れず。文武の德なくして、人なつかず、人恐れざれば、怨み、背き、侮り、をかして、世治まらず。仁にして人を愛するは文德なり。義ありて人を正しくするは武德なり。もし古事を覺え、詩歌を作るを以て文とし、騎射を習ひ、劒戟をふるを以て武とするは、甚小にして末なり。人の上たる人の學問は、詩を作り文を書き、大和もろこしの故事來歷を多く覺え知る事にはあらず。たゞ古聖賢の教をうけて、身を修め人を治むる道を知

古之人云々
―孟子巻一
梁恵王上

いみじき面目なるべし。豈眞の樂にあらずや。

一生を好み死をおそるゝ事、人と我と同じ。身の艱難をきらひ安樂を願ふ事、人と我と同じ。父母妻子一處に在るを悦ぶ事、人と我と同じ。飢寒を苦み溫飽を樂む事、人と我と同じ。然らば、我が悦び苦む心を以て、人の心を推はかりて、人にも悦び樂ましむべし。是を恕といふ。是仁を行ふ術なり。されば人に悦び樂ましめてこそ、我が心も樂むべけれ。人の憂を顧ずして、我獨樂む事は有るべからず。譬へば一座にみちみちたる數十人、みな酒を飮みて樂む中に、唯一人隅に向ひて泣くものあらば、一座の人みな興さめぬべし。孟子にも、古之人與レ民偕樂、故能樂也といへり。人の司となる人は、此道理を能くさとり給ふべし。

一智者は心明かにして、民の憂へ苦みをよく知りて施さず。民の樂み願ふ事を能く知りて施す。愚者は心昧くして、民の憂へ苦みを知らず、我一人の私のみに徇ひて、民をめぐむ事を好まず。是を以て、智者は必仁あり、愚者はかならず不仁なり。故によく學問し、道理に明かならば、などか仁心もおこらざるべき。

一學問は、身を修め人を治むるを有用の學とす。是眞の學問なり。もし左もなくて、文

東平王―東平は漢の國名也、名は蒼、光武の第三子、本文の事迹は後漢書に詳

よび一郡一鄕の司まで、其任大小異なれども、皆君子にして、天職を分ち任ずる人なり。夫國郡の君は、天より其人に私して、富貴にし給ふにはあらず、其人に威權を借して、治めやすくせしめんためなれば、天道に受從ひて、民を子の如くする事、其職分なり。

一古語に、君を立つるは民の爲にすと言へり。凡國君を立つるは、其民を治めしめんためなり。國民を以て其君一人を養ひて、富貴ならしめん爲にはあらず。然れば國郡の主となる人は、我一人の樂を好まずして、民を安くし國を治むること、我が職分なる理を辨へ知りて、日夜朝暮、偏に仁愛の心を先とすべし。この理を知る時は、其職分を勤めて、民を安くし國を治むるを樂とし、世俗の好む淫樂漁獵男女の慾等は、自ら薄くなるべし。昔漢の東平王京都に參觀せられしに、其時の天子明帝、汝國に在るに何を以て樂とするやと問ひ給ひしに、東平王善をすること最樂しと答へられき。されば善政を行ひ、國民を安くする程の樂はなかるべし。凡國郡以下小鄕邑を治むる人も、其德聖賢に及ばずとも、古の道を學び、人を治むる古法を手本として行はゞ、などか民安く國治らざる事なかるべき。然らば其身尊榮して、世の譽、後の名まで、

天地は云々―書經泰誓に、惟れ天地は萬物の父母、惟れ人は萬物の靈

君子訓

貝原益軒著

巻之上

一天地は萬物の父母なり。其德廣大にして限りなく、萬物を生育してやむ事なし。人は殊に天地の正氣をうけて生れ、仁義の性をそなへたれば、萬物の靈にして、貴き賤しき、みな天地の御子なり。なかについて、國土を治め給ふ君子は、天より專らこの人を厚くかしづきて、人民のつかさとし、下を治めしめ給ふ。そのゆゑは、天地は人を生じ出し、養ひ惠むを以て心とし給へども、天もの言ざれば、自ら命令を下して人を治むる事あたはず、君子を取立て、官祿をあたへ、其地の人民を預け給ふなり。然れば、凡國土人民を司どり治むる人は、各其主君より命を受れども、其實は天より立て給へる代官なり。故に天職といふ。君子と稱するは、國に君として民を子とすといふ義なり。天職とは、天に代りて民を治むることを司どるなり。凡國天下の君、其宰臣お

が如く、今の民治世に樂めること此の如くなるや。此大なる御惠を報い奉らんことは、誠に昊天のきはまり無きが如くなるべし。凡民を治むるには、古の聖の道を法とする事は、言ふもさらなれど、今の世の人、多くは經史に昧く、又官職に居る人は、學ぶに暇なくして、古の經濟の道にうとし。爰に我が愚昧をわすれて、かつて聞ける所を述べて、いさゝか古の道の片はしをあらはす。ひたすら無學の人のため、國字をもてしるし侍る。僭卒の罪のがれ難しと雖も、公侯大人の見聞に富める人のために記すにはあらず。唯一村を治むる小吏、一郡を預る代官のうちに、古の道に志ありて、經史を見聞するに便なき人のため、もしくは小補にもなりぬべく思ひてなり。是我がこの治まれる世の樂をうけたる大なる御惠を報い奉るかたはしになんありける。

君子訓序

昔の人太平の世に生るゝを以て樂とせり。もし亂世に生れなば、憂ひにしづみて身を終りなん。豈不幸にあらずや。上世の事は遠ければ、治亂の跡もさだかならず。中頃より、或は治まり或は亂れ、終に足利氏の世となり、十三世の間兵亂止まず、天下の人民手足をおく處なくして、ひさしく愁ひ苦めり。其後英武の君一人二人相繼ぎて興りたまひしかど、德足らずして久しく生を保つことあたはざりき。いまゝ此御世となりて、筑波山のしげき御惠により、飛鳥川の淵瀨になるうらみなく、四つの海波靜かに、七つの道おだやかなり。かゝる太平の時に生れあへる事、昔の人の樂とする所にして、今の人の幸はなはだし。いかなれば、昔の民亂世に苦みたる彼

五に及ばば、此法を相傳すべし。若幼にして父を喪ふものあらば、其兄及一族の内の長者、其孤を教へて、此法を傳ふべし。常にふかく祕して、他人に聞かしむべからず。各其子もまた其子に傳へて、萬世に至る迄永く廢すべからず。若斯法に背く者あらば、大不幸におちて、我等泉下に朽ぬるとも、恨み惡むべき者なり。

貞享三年甲子八月　貝原篤信書

を吝嗇とす。倹約は善にして、吝嗇は悪なり。これ天地懸隔ならずや。愚なる人は、必此二のものを辨へず、大様同じ事のやうにおもへり。

一四民の内、士を以て長とす。故に士となるは大なるさいはひ也。文武の道をまなび、身をたて、道を行ひ、その家を興し、先祖よりの家業を彌保ち守るべし、若艱厄に値ひ、貧窮になり、或は多病にして、君に仕ふる事なりがたくて、農工商とならん事は、口惜けれど、義によつて業を改むるは苦しからず。但利の爲に父祖の家を捨て、庶民となるべからず。我が子孫是をいましむべし。

一凡身を立つるの道は、忠孝勤倹の四字に在り。君に仕へて心をつくすを忠とし、能く親に事ふるを孝とし、學問家業に不レ怠を勤といふ。約にして不レ奢を倹と云ふ。忠孝は其分なり、勤倹は家をおこすの法なり。又身を保つ道は、智恵を内に含み、人にへりくだり、言少なく、身を顧みて過をあらため、己を責めて人をそしらざるにあり。上を誚らざるはいふにおよばず。是皆殃を遁れ身を保つの道なり。

一右の三條は、我が愚蒙の言にあらず、古人意又如レ斯。我が子孫たらん人、必厚く信じ、慎んでおもひ、常に心に保ちて守り行ふべし。違背すべからず。各其子のとし十

穿窬の盗ー牆を穿ちて這入る盗人、論語に見えたる句也

三年耕作してー禮記王制に、三年耕して必ず一年の食有り九年耕して必ず三年の食有り

く、武備なくしては、武士の業を本末とも失ひ、君をあざむき忠を忘れ、君の祿を食んで其職に怠るものは、穿窬の盗にひとしくして、大なる恥なるべし。武備は平生無事の時心を用ひ、其分限に隨ひて、不足なきやうに用意すべし。

一平生財用の節なく、侈り費す事多ければ、財不足する故に、貧窮を救はずして不仁に流る。廉恥の心も自ら薄く成て、義理を失ひ、親戚朋友の交簡略にして禮に背き、人の財物を借りても、償ふ事ならずして信を失ひ、軍用乏しくしては不忠となる。財を用ふる事宜にかなはざれば、財不足して悪しきこと如斯多し。常に身に奉ずる事儉約にして、財を用ひ過さず、奢を抑へ、費を省き、入る事を量りて出す事をなし、餘財を存じて困窮を救ひ、不虞に備へ、軍用を助くべし。古人三年耕作して一年の食あり。其祿を四に分ちて、三を以て一を殘す。是古財を制するの法なり。又變災なくば人の財を借らざれ。借らば強く儉約を行ひ、常に心にかけて早く返すべし。疎かにすべからず。人の財物を借りて返さざるは、至て不義なれば、我が子孫かならず是を誡むべし。此義を能々まもるべし。また財多くば人に施すべし。吝嗇なれば仁義の道行はれず、不仁不義になるなり。夫身に奉ずる事薄きを儉約として、人に施す事薄き

士の字云々—説文に、士は事也、數一に始まり十に終る一十に从ふ孔子曰く、十を推し一を合するを士と爲す云云

候する意なり。故に和俗には侍の字をも用ふ。されども四民の名の時は、士の字を用ふるなり。漢土には、學以居レ位曰レ士。六書精蘊には學レ古入レ官者とあり。されども、文武の道を學んで官位に居る者を士とす。文武の道を知らずしては、士の職分反せる故に、士の名有つて實なし。士の字从レ十从レ一。農工商は家業一筋にて事少なし。士は事多き者にて、宇宙の間の事、皆わが職分の事なれば、その勤むる事の多きを以て貫く故に、一を下にせりと古書に見えたり。士の字の義をかく顧みて、身を守るべし。士の家業本分をよく勤めて、其外を願ふべからず。我が身を忘れて人を誹るべからず。專ら我が惡を責めて人を責むべからず。我に背き我を誹る者あらば、我が身を省みるべし、人を咎むべからず。我が子孫たる者は、文武の家業をよくわが身に勤め、其子孫にも必教ふべし。人生の至要は無レ如レ教レ子と古き文にも見えたり。凡武士となるものは、忠孝義理の志なくしては、武勇缺け、君の爲に忠義なりがたし。又武士の家に生れ、武藝を知らず、武具を不レ備、軍用乏しくしては、心猛くとも備なくして、武勇の勤なり難し。故に武士の道、內には忠孝義理を以て本とし、外には武藝を習ひ、武備乏しからざるを以て勤とす。武士として忠孝義理の道を不レ知、武藝にうと

其名を揚げ—孝經開宗明誼章第一に身を立て道を行ひ名を後世に揚げ以て父母を顯はすは孝の終也と見ゆ、孝經の首章といへるは此章の謂也

業を勤めて、其名を揚げ、父母先祖の名をあらはすを以て、孝行の道とすべし。孝經の首章を、よく體認すべし。

一先祖は子孫の根本なり。年季隔り遠しといへども、おもひ慕ひて尊敬すべし。時節の祭愼み厚うすべし。但國法に背くべからず。

一夫子孫は先祖の枝葉也。嫡庶の分を正しくし、疎遠といへども本族を尤厚く親むべし。貧賤なりとも捨つべからず。本族とは父族也。父族は遠しといへども我と同氣なり。三族の次第は、第一父族、第二母族、第三妻族也。故に母族は妻族より厚くし、父族は母族より厚くすべし。一々次第輕重ある事を知るべし。先祖より代々系譜を記しつたへ、その名と一生の履歴行實を、詳かに僞なく實錄すべし、私して稱譽を過すべからず。子孫名系譜を記し置きて、先祖よりの統紀を永く斷絶すべからず。功德ある人は、行狀を書かせ、墓表を立つべし。

○士業勿ㇾ怠

一士はさむらひと訓ず。君に仕へて近くさぶらふ故なり。さぶらふとは侍るに同じ、伺

大學―四書中の一也、程氏が孔子の遺書にして初學德に入るの門といへるもの是也

とすべし。就中忠孝を重んずべし。君父の恩を忘るべからず。

一學問の大綱は、大學の經の文、朱子の學規を以て法則とす。必天地聖人の道に背きて、佛氏の敎に從ふべからず。若佛氏に從ふ者あらば、父祖の遺訓に背き、不孝の罪に陷るのみならず、天地神明の道に背く。故に天地神明の罪人なるべし。天道は至公にして、其咎なしといへども、恐るべき事なり。但不仁は天の責を身にうけ、子孫に報ふ事影響の如し、畏るべき事の甚しきなり。

一凡我子孫たらんもの、一生の心法眞實にして私曲なく、人に愛敬有て、忿を懲し慾を窒ぎ、善に移り過を改め、常に天道を恐れ敬ふべし。必おろそかに侮る事なかれ。人の一生の勤は、唯天道に仕へ奉るべきなり。天理は學問して知るべし。又正敷神明を敬ふべし。神に諂ひ瀆して、猥に幸福を求むる事なかれ。神は非禮をうけ給はねば、道なくて幸を祈るに、必驗なし。人の義を務めずして神に求むるは、神の御心に違ひ、助なくて責あり。いたつて愚なるなり。或云、

心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん。

一凡先祖父母に孝するの道は、奉養祭禮に限らず、聖學を知り、仁義の道を行ひ、其家

貴ばずして寸の陰を重んず

六紀―諸父兄弟、族人、諸舅、師長、朋友也、白虎通に出づ

小學―六巻朱熹の編にして古來の嘉言善行を錄す

一六歳の正月、始て數の名と、我が邦の假名を習はしむべし。伊呂波は益少し。あいうえおの五十字を教ふべし。和語に通ずるに利あり。七歳の時始て孝經を讀ましめ、孝弟忠信禮儀廉恥の義を教へ、又五常五倫三綱六紀四端七情六藝四民等の名目、多く教へ知らしむべし。一時に多く教ふべからず。少し教へてよく覺えさすべし。都て小兒に書を讀ましむるは、皆此法也。

一八歳は古人小學に入りし年なり。初て論語を讀ましむべし。幼者に相應せる禮義を教へ、辭讓を知らしむべし。又和禮を教へ、漢字の草書を習はしむべし。

一十歳小學の書をよませ、略其義理のさとしやすく、簡要なる所を說聞すべし。又眞字を習はしむべし。

一十一歳、是れより漸く四書五經等を讀ましめ、また文武の藝能をも習はしむべし。

一十五歳は古人大學に入りし年なり。これより專ら義理を學び、己を修め人を治る道を知るべし。生質遲鈍なりとも、是より二十歳迄の間に、小學四書等の大義に通ずべし。若聰明ならば、博く學び多く知らすべし。

一凡君子の學問は、智仁勇の三德を本とし、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の五倫を道

古の聖人は云々—淮南子に、聖人は尺の璧を

を長ずべからず。

一凡書を習ふに、和字眞草共に、幼より必古の書法正しき能書を以て手本とすべし。手本惡しければ癖附きて、一生手跡拙し。よく選むべし。

一士は事繁き者なれば、一藝一材に長ぜるのみにては用に立たず、次第を以て博く文の藝を學ぶべし。文藝は和禮（書禮茶禮共此内にあり）書法文字の學算數等也。餘力あらば、和歌の道、本朝の古實典故、又醫藥養生の術をも兼て學ぶべし。詩は日本の風にあらず、故に勝れたる天才なき者は作るべからず。學問の功を費し、心を苦め、拙けれども自ら其拙きを知らず、人の誚を得て益なし。武藝は劔術鑓騎射鳥銃拳法等なり。戰法は將と士と位によりて學ぶ所、大小の器殊也。其位に切なる事を先とし習ふべし。書を讀み藝を習ふに、日を惜みて、時を失はずして、勤め習ふべし。年若く氣憶も強き時、物を能く覺え習ひ置きて、一生の身の寶とすべし。後に悔ゆべからず。古の聖人は寸陰を惜み給ひしとなり。

一學問をするに、明師良友を選び事ふべし。師友惡しければ、學びても後惡しく、一生道を知らず。よく是を選ぶべし。諸藝も亦然り。

おどしいる—原本には嚇の字を傍注しあれど思ふに嚇し恐れしむる意ならん

母乳母傅き馴るゝ人の、教の道知らで、其子の本性をそこなへる故なり。啼號聲を止めんとて、此を得さすべし、彼を與ふべしなどと賺して、誠なき事なれば、即是僞を教ふるなり。又恐しき事どもにて、より／＼おどしいるれば、後には臆病の癖となる。武士の子は殊に是を誡むべし。又小兒の才行藝能を譽むれば、驕慢の心出來、屢々誹れば退屈して不レ進。能く教ふる者は、進めて矜らしめず、教の道を知らざる人は、萬ほしきまゝにして、可レ誡事を却て進め、可レ咎事を却て笑ひ悅び、さま／＼悪しき事を見聞せ、言ひ習はせ仕習はせて、漸く其悪しきならはし年と共に長ずるに至て、俄に誡むれども、久敷習ひ染て、本性のごとくなりたれば聽かず。是において、本性惡敷生れつきたるとのみ思ふ事、いと愚なる事ならずや。

一　幼き時の教は、事繁くすべからず。事繁くして煩勞なれば、學問を疎んずるもの也。むづかしくして其氣を屈すべからず。年數と性質と應ぜざる事を、強て責むべからず。年比に隨ひ應じて教ふべし。又生附を見て、其過ぎたるを抑へ、不レ足を補ひて、中に叶はしむべし。性質の悪しき所を、常に誡め匡すべし。凡小兒を育つるに、義方の訓をなすべし。姑息の愛をなすべからず。怠るをゆるす事なかれ。氣隨をゆるし、私欲

字正しくは音ヒョク、剛戻自ら用ひて屈せざる意

我身の爲にして｜論語憲問篇に子曰く古の學者は己が爲めにし今の學者は人の爲めにすと見え、同語荀子勸學篇にも出づ

也。又我が身をへりくだり、高ぶらざるを謙といふ。謙なれば我が身の愚なる事を知り、足らざるを知りて從ひ、才智徳行あれども人に矜らず、智を以て愚に問ひ、多を以て少に問ひ、好んで人の諫を聽て、我が過を改むる故に、智を開き善に進む事極なし。此故に古人謙をもつて天下の美德とす。學問をせば、まづ矜を去り謙を用ひ、志を内に厚くし、外を勤めず、眞實に我が身の爲にして、人の爲にせざるを以て、教を受くる基とすべし。

○幼兒須レ教

一凡小兒を教へ育つるに、始て飯を食ひ、初てものいひ、扨人の面を見て悦び怒る色を知る程より、常に絶間なく教ふれば、やゝおとなしくなりて、誡むる事なくやすし。故に小兒は早く教ふべし。教へ誡むる事遲くして、惡、癖に成ては、改むる事なり難し。惡事多く聞馴れぬれば、後には善事を教へても移らず、僞れる事、驕り肆なる事を早くいましめて、必ゆるすべからず。幼より人を欺きいつはる事を、つよく咎むべし。又幼子をあざむきて、僞を教ふべからず。大やう小兒の惡しくなりぬるは、父

かた腹いたき—傍痛の意にて傍の見る目も笑止なりとの義なるを、早くよりかた腹と誤り來れり

剛愎—愎の

たはず。故に愚人の言をも理あるは取用ふべし。われを智ありとする者は必愚人なり。我を善なりとする者はかならず惡人なり。惡を知るものは大惡にあらず。人を侮るものは、必天の咎あり、人のうらみあり。我に學問知惠藝能ありとも、是皆わが分内の事なれば、矜べき事にあらず。かならず是を自慢し、人を侮るべからず。古の君子は、聰明叡智なれども、これを守るに愚を以てす。況や末世の凡人、僅なる才能にほこるは、かた腹いたき事なり。甚卑し。我に善あり能ありとも、自ら衒ひ、みづから褒むべからず。其善に矜ればその善を喪ふ、其能にほこれば其能をうしなふ。自慢するをほこるといふは、矜はほこるとよめり。矜なれば其心自ら是として、過を改め、善にうつる事あたはず。自ら智ありとして人の諫を用ひず。故に惡日々に長じ、善日日に消る。故にたとひ聖人と同居し、朝夕教を受るとも、其身に益なし。或は萬卷の書を讀み、學問する共、其身に益なきのみにあらず、驕慢の心を助けて自ら高大にし、才をたのみて人を侮る助とするゆゑに、却て大なる害となる。是を以て矜は天下の惡德なりと、古人の誡明なり。學問する者、第一是をいましむべし。又矜なれば必剛愎也、剛愎とは性剛き事なり。剛愎なれば諫をふせぎ、非を遂て身を亡す、愚人

家訓

貝原益軒著

君子之過、小人之過―共に子貢の言にして論語子張篇に出づ

○聖學須ㇾ勤

一凡人たるものは、聖人の教を貴び受け、強く志を立て、人の道を學び知り、勤め行ひて、君子とならん事を思ひ、常に心にかけて怠るべからず。これ聖學に志すの道なり。其學問の法は、書を讀み古を考へ、人に問ひ己におもひ、人の諫いましめを聽用ひ、常に我が身を顧て、我が愚なる事を知り、わが不善なる事を知り、わが過を改めて善にうつるべし。君子之過也如ニ日月之食一焉、過也人皆見ㇾ之、更也人皆仰ㇾ之。また小人之過也、かならず文。過をはぢて蔽ひかくすは小人の心なり、甚卑し。古語に云、人非ニ聖人一、誰能無ㇾ過、過而能改善莫ㇾ大ㇾ焉といへり。仮にも我を智ありとし、善也と思ふべからず。わが身のちからをたのみて、人を愚なりとし、侮るべからず。諫を拒ぎ、我を是とすべからず。人至て愚なりといへども、一事の善なきことあ

五常訓

益軒十訓上卷 目録

和俗童子訓　五卷　寶永七年　八十一歲
五常訓　五卷　正德元年　八十二歲

以上の諸書、何れも初版若しくは再刻の木版本により、本叢書復刻の一般方針にもとづきて、假名遣を一定し、振假名を補ひ、句讀點を施したる外、原本の語法及振假名等は、成べく改竄を加へざる事となしたり。

明治四十四年二月

校訂者　塚本哲三

緒言

本書の著者貝原益軒は、筑前福岡の人、寛永七年に生れ、正德四年に沒す。彼は、當時山崎闇齋、松永尺五、木下順庵等儒學の材能輩出せる間に在りて、覇を一方に唱へたる一代の碩儒たりしのみならず、忠誠篤實の社會教育家なりき。本書收むる所の諸篇は、何れも彼が晩年の述作に係り、所說堅實丁寧、千古の下よく世道人心を維持するに足る者あり、文章亦穩健にして、一種の氣品を具ふ。

上卷收むる者六種、其著作の年代次の如し。

家訓	一卷	貞享四年	五十八歲
君子訓	三卷	元祿十六年	七十四歲
大和俗訓	八卷	寶永五年	七十九歲
樂訓	三卷	寶永七年	八十一歲

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

益軒十訓

上卷

